



Title	内部移動を基盤とする日本語複合動詞の多義性とその認知的メカニズム：「V1+入れる/込む/詰める」の場合
Author(s)	蘇, 晓笛
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度博士学位申請論文

内部移動を基盤とする日本語複合動詞の
多義性とその認知的メカニズム：
「V1 + 入れる/込む/詰める」の場合

大阪大学大学院言語文化研究科

言語文化専攻

蘇曉笛

目次

<u>第1章 序論</u>	1
1.1. はじめに.....	1
1.2. 日本語複合動詞一般	3
1.3. 研究対象.....	10
1.4. 分析対象のデータ	14
1.5. 本稿の構成.....	16
<u>第2章 日本語の複合動詞に関する先行研究と課題提示</u>	19
2.1. 「V1+入れる/込む」に関する先行研究.....	19
2.1.1. 森田 (1979): 自他用法の意味分類.....	19
2.1.2. 姫野 (1978, 1999): 日本語学の視点からの詳細な意味分析	22
2.1.3. 由本(2013): 生成語彙論的アプローチによる考察	29
2.1.4. 松田 (2004): コア図式による多義性分析.....	32
2.1.5. 金 (2010): 「～込む」の意味に関わる身体的・経験的動機づけの提示	40
2.2. 「V1+詰める」に関する先行研究.....	42
2.3. 課題提示.....	46
2.3.1. 「V1+入れる/込む/詰める」の多義性に纏わる課題	47
2.3.2. 「V1+入れる/込む/詰める」の類義性に纏わる課題	48
2.3.3. 「V1+入れる/込む/詰める」の創造性に纏わる課題	51
2.4. 第2章のまとめ	53
<u>第3章 理論的枠組み</u>	55
3.1. イメージ・スキーマ (IMAGE SCHEMA)	56
3.1.1. <容器>のイメージ・スキーマの両側面.....	58
3.1.2. イメージ・スキーマと認知操作.....	62
3.1.3. 「内部移動」に関わるイメージ・スキーマのネットワーク	65

3.2. コンストラクション形態論 (CONSTRUCTION MORPHOLOGY)	74
3.2.1. コンストラクション形態論に基づく構文的多義ネットワーク	74
3.2.2. 使用基盤モデル (USAGE-BASED MODEL)	79
3.3. 第3章のまとめ	84

第4章 「V1+入れる/込む/詰める」の多義性 85

4.1. 「V1+入れる」の多義性	85
4.1.1. 本動詞「入れる」の意味特徴	86
4.1.2. 「V1+入れる」の多義性メカニズム	91
4.1.3. イメージ図式および構文的多義ネットワーク	94
4.2. 「V1+込む」の多義性	97
4.2.1. 本動詞「こむ」の意味特徴	98
4.2.2. 「V1+込む」の多義性メカニズム	100
4.2.3. 「V1+込む」の構文的多義ネットワーク	133
4.3. 「V1+詰める」の多義性	137
4.3.1. 本動詞「詰める」の意味特徴	137
4.3.2. 「V1+詰める」の多義性メカニズム	143
4.3.3. 「V1+詰める」の構文的多義ネットワーク	152
4.4. 第4章のまとめ	156

第5章 「V1-入れる/込む/詰める」の類義性 165

5.1. [+内部移動]: [V1-入れる] 、 [V1-込む] 、 [V1-詰める] の比較	167
5.1.1. 「+内部移動」の内実: 共通点と相違点	168
5.1.2. [V1-入れる/込む/詰める] における V1 の比較	172
5.1.3. まとめ	185
5.2. [-内部移動]: [V1-込む] と [V1-詰める] の拡張義の比較	186
5.2.1. 「-内部移動」の内実: 共通点と相違点	187
5.2.2. [V1-込む] と [V1-詰める] における V1 の比較	190

5.2.3. まとめ	198
5.3. 第5章のまとめ	199
<u>第6章 「V1+入れる/込む/詰める」の創造性</u>	<u>200</u>
6.1. フレーム・コンストラクション的なアプローチ: 陳・松本 (2018).....	201
6.2. 言語調査の概要	204
6.3. 慣習化されていない用例の分析: コンテクストによるイメージ・スキーマの不整合性解消	206
6.3.1. ランドマーク (LM) の性質の不整合性の解消	206
6.3.2. <容器>の<内部>の有り様の不整合性の解消	208
6.3.3. <特性尺度>の不整合性の解消	211
6.4. 第6章のまとめ	214
<u>第7章 総括</u>	<u>216</u>
<u>参考文献</u>	<u>222</u>
<u>付録資料</u>	<u>230</u>
<u>謝辞</u>	<u>252</u>

第1章 序論

1.1. はじめに

『日本語語彙大系』には2353語の単純動詞がリストされているのに対し、国立国語研究所の『複合動詞資料集』(野村・石井 1987)には7400語もの複合動詞が収録されており、その数は単純動詞の約3倍に達している。近年、複合動詞全体に関する体系的な研究や、個々の複合動詞を取り上げた個別研究、さらには他の言語との対照研究など、数多くの研究成果が蓄積されている(姫野 1978, 1999; 寺村 1984; 影山 1993, 1996, 2013; 影山・由本 1997; 松本 1998; 由本 1996, 2005, 2008, 2013; 陳・松本 2018; など)。

複合動詞は、日本語の表現力を支える重要な要素の一つであり、「現実に行われつつある一つの運動を、異なる運動を表す二つの要素を用いて表すもので…単純動詞では持ち得ない豊かな表現力を有している…」と指摘されている(石井 1983: 45)。日本語母語話者にとって、複合動詞は2つの構成要素の組み合わせとして認識されることは少なく、むしろ一つの定着した表現として用いられる傾向が強い。特に、日本語の語彙的複合動詞¹では、前項動詞と後項動詞の意味が単純に足し合わされるだけでは説明できず、全体として意味の変容が生じることが多い。このような特性により、複合動詞は単純動詞とは異なる独自の機能を果たし、日本語の語彙システムに豊かな表現力と深みをもたらしている。しかし一方で、複合動詞の意味を推測することが難しいため、外国人学習者にとっては複合動詞の学習が大きな障壁となり、学習者の日本語運用能力のさらなる向上を妨げる要因ともなり得る。

国立国語研究所の『複合動詞資料集』(野村・石井 1987)によると、本稿で扱う研究対象の1つである「～込む」と結合する前項動詞の数は231語に達し、語彙的複合動詞の中では最も多いとされている。また、「～込む」は物理的な「内部移動」から、抽象的な「程度進行」²まで幅広い意味を持ち、相対的に高い意味的生産性を示している。このように、前項動詞の数が多くや意味の多様性を背景に、「～込む」に関する研究は多くの成果を上げており(森田 1979; 影山 1993; 姫野 1978, 1999; 甲斐 1998, 2000; 松田 2004; 由本 2005, 2013; 松本 2009; 金 2010, 2016; 山口 2013; など)、複合動詞の中の多義語³としての重要性は極めて

1 影山 (1993, 1996) は「概念意味論 (Conceptual Semantics)」の立場から日本語の複合動詞を大きく「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の2種類に分類している。これについての詳細は、1.2節で述べる。

2 ここでの「内部移動」と「程度進行」は姫野 (1999) における意味分類である。詳細は本稿の第2章で述べる。

3 国広 (1982: 97) によると、多義語 (polysemic word) とは、「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つ二つ以上の意味が結びついている語」である。

高いと思われている。

- (1) a. 作業員は型にセメントを注ぎ込んだ。⁴ (cf. 注ぎ入れる)(下線は筆者による)。
b. 彼はボールをゴールに蹴り込んだ。 (cf. 蹴り入れる)
c. 空欄に住所を書き込んでください。 (cf. 書き入れる)
- (2) a. 部屋の隅々まで床暖房パネルを敷き込むことができます。 (cf. 敷き詰める)
b. 教育とは人を自殺に追い込むためになされるものなのかと驚いてしまう。
(cf. 追い詰める)
c. 彼はスープを一晩煮込んだ。 (cf. 煮詰める)

このような多様な意味を持つ「～込む」と同様に、前項動詞と結合し、全体として類似する意味を表す後項動詞として、「～入れる」、「～詰める」が挙げられる。

(1a-c) における「V1+込む」を「V1+入れる」に、(2a-c) における「V1+込む」を「V1+詰める」に書き換えた場合でも、多くの日本人母語話者によって容認されると判断されている。

しかし一方で、(3a-d)、(4a-d)における「V1+込む」をそれぞれ、「V1+入れる」、「V1+詰める」に書き換えることは容認されないと判断される。

- (3) a. 彼は敵地にスパイを送り込んだ。 (cf. #*送り入れる)
b. 私は黒いビニールで箱を覆い込んだ。 (cf. #*覆い入れる)
c. 私は、たくさんの候補を二人に絞り込んだ。 (cf. *絞り入れる)
d. 柔らかい布で鏡を拭き込んだ。 (cf. #*拭き入れる)
- (4) a. 看護婦は傷口に薬を塗り込んだ。 (cf. #*塗り詰める)
b. 作業員は杭を地面に突き込んだ。 (cf. *突き詰める)
c. 彼は、自分の靴を磨き込んで、ピカピカにした。 (cf. #*磨き詰める)

⁴ 本稿で取り上げる例文は、特に記載されない限り、すべて Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）(<https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php>)、または国立国語研究所の『複合動詞レキシコン』(<https://vlexicon.ninjal.ac.jp/>) から引用したものである。

⁵ (1-4) の例文における「V1+入れる」、「V1+詰める」への書き換えの容認性は、日本人母語話者 10 名による判断結果に基づくものである。「容認されない」と判断された語彙項目には、「絞り入れる」や「突き詰める」のように、動詞の組み合わせ 자체は容認されるものの、文脈にそぐわない意味になるものと、「覆い入れる」、「拭き入れる」、「信じ詰める」のように、動詞の組み合わせ 자체に違和感があり、容認されにくいものが含まれる。

d. 子供たちはその話をすっかり信じ込んだ。(cf. #*信じ詰める)

本稿では、(1-4) で示した共通点と相違点に着目し、内部移動を基本義とする複合動詞「V1 + 入れる/込む/詰める」の多義性形成のプロセス、意味合成のメカニズムの異同が生じる認知的動機づけを体系的な枠組みの中で統一的に説明することを目的とする。特に、これらの意味合成の根底に働いている身体的・経験的基盤などの認知的動機づけを明らかにすることで、それぞれの前項にくる動詞としては何が許容され、何が許容されないかを解明することができるだろう。最終的には、日本語母語話者が「内部移動」という事象をどのように認知し、捉えているのかを理解することを目指す。

次節からは、まず日本語の複合動詞に関する一般的な定義、体系的分類および結合制約に関する代表的な研究を概観する (1.2 節)。次に、本稿が扱う研究対象である「V1 + 入れる」⁶、「V1 + 込む」、「V1 + 詰める」の複合動詞における位置づけとこれら 3 つを研究対象として選定した理由について述べる (1.3 節)。その後、本稿が分析する複合動詞の 2 つの出典データベースの特徴を紹介し (1.4 節)、最後に、本稿の全体的な構成について述べる (1.5 節)。

1.2. 日本語複合動詞一般

「国立国語研究所『語彙の研究と教育（上）』（1984）によれば、広義の日本語の複合動詞には、以下の 6 つの構成パターンが観察される。

(5) • 動詞 + 動詞

呼び寄せる、聞きとがめる、吐き出す、飛び回る、申し込む、受け付ける、
降り始める、書き終わる

• 形容詞、形容動詞語幹 + 動詞

近寄る、若返る、多すぎる、長引き、高鳴る、遠のく、暑がる、元気づく、
正直ぶる

• 名詞 + 動詞

名指す、泡立つ、色づく、習慣づける、手がける、目指す、基づく、外泊する、勉強する

⁶ 本稿では、複合動詞全体、複合動詞の後項動詞、後項動詞に対応する本動詞をそれぞれ、「V1 + 入れる/込む/詰める」、「～入れる/込む/詰める」、「入れる/こむ/詰める」と表記する。

- ・副詞+動詞

パカピカする、ほんやりする、しみじみする、ニコニコする

- ・音象徵語+接尾辞(派生語)

ざわめく、びくつく、うろつく、はためく、しょぼくれる

- ・名詞+接尾辞(派生語)

色めく、艶めく、汗ばむ、時めかす

本稿では、これらの中でも最も注目されてきた狭義の【動詞連用形+動詞型】パターンの複合動詞のみを対象としている。通常、前に位置する動詞は前項動詞 (V1)、後に位置する動詞は後項動詞 (V2) と呼ばれる。以下、混乱を避けるために、考察の際に使用する複合動詞に関するいくつかの用語の定義を確認しておく。

(6) 本稿における「前項動詞」、「後項動詞」、「単純動詞」、「本動詞」の定義：

a. 「前項動詞」(V1 と表記する)

複合動詞において、前に位置する動詞。V1 と表記される場合がある。

(例えば、「書き入れる」、「投げ込む」、「敷き詰める」における「書く」、「投げる」、「敷く」がそれにあたる。)

b. 「後項動詞」(「～入れる」、「～込む」、「～詰める」と表記する)

複合動詞において、後に位置する動詞。V2 と表記される場合がある。

(例えば、例え、「書き入れる」、「投げ込む」、「敷き詰める」における「～入れる」、「～込む」、「～詰める」がそれにあたる。)

c. 「単純動詞」

複合動詞が複数の語基が結びついたものであるのに対し、「書く」、「投げる」、「敷く」のような動詞は、意味的に 1 つの語基から成り立つ単純な構造を持ち、一般的に「単純動詞」と呼ばれる(森田 2008)。

d. 「本動詞」(「入れる」、「こむ」、「詰める」と表記する)

日本語の複合動詞の構成要素である後項動詞は通常、付加的な意味を表し、「補助動詞」としての機能を果たすことが多い。それに対し、後項動詞本来の実質的な意味を表すものが「本動詞」と呼ばれる。本稿の考察対象である「V1+入れる」、「V1+込む」、「V1+詰める」に対応する本動詞は、そ

それぞれ「入れる」、「こむ」、「詰める」である。

日本語複合動詞に関する先行研究は、分類基準や 2 つの動詞の組み合わせに関するなどに纏わる問題が議論の中心となってきた。以下では、代表的な研究、寺村 (1978, 1984) 、影山 (1993, 1996, 2013) 、由本 (1996, 2005) 、松本 (1998) 、陳・松本 (2018) の研究を見ておく。

● 寺村 (1984)

寺村 (1984) は、動詞の連用形に後続する補助動詞を三次的アスペクトの形式とみなしており、体系的に整理している。寺村 (1984) は、構成要素である前項と後項の独立性、つまり、それが単独で用いられるときの意味、文法的特徴が複合体の中でも保持されているか否か (V は保持されているものを指し、v は保持されていないものを指す) に基づき、複合動詞を以下の 4 つのタイプに分類している。

(7) 寺村 (1984) の複合動詞の 4 分類

- (イ) V-V: 呼び入れる、握り潰す、殴り殺す、ねじ伏せる、出迎える…
- (ロ) V-v: 降り始める、呼びかける、思い切る、泣き出す…
- (ハ) v-V: 差し出す、振り向く、打ち立てる、引き返す…
- (二) v-v: 払い下げる、(話を) 切り上げる、(仲を) 取り持つ、(芸) を仕込む、取りなす…

(寺村 1984: 167)

さらに、(ロ) における v の種類に関して、寺村は以下の「時間的相」、「空間的相」、「密度、強度の相」の 3 種類があると指摘している。

(8) a. 時間的相:

- (開始) ~始める、~出す、(継続) ~続ける、~続く
- (終了) ~終わる、~終える、~止む

b. 空間的相:

- (上と下への動きの方向) ~上げる、~上がる、~降ろす、~下す、~下が

る、～下げる、～落ちる
(内と外、周囲への方向) ～込む、～込める、～出す、～回す
(ある目標に向かっての動き) ～かける、～かかる、～つける、～つく、～
返す、～合う

c. 密度、強度の相 (心理的相) :

(程度、密度、強さ、完成など) ～抜く、～切る、～込む、～通す、～詰め
る、～尽くす

(寺村 1984: 171)

寺村 (1984) の分類に基づくと、「～入れる」は(イ) V-V に分類され、「～込む」と「～詰める」は V-v に分類されている。「～込む」には、「空間的相(内への方向)」、「密度、強度の相(心理的相)」両方表すものがあるのに対し、「～詰める」は「密度、強度の相(心理的相)」のみを表す。

● 影山 (1993, 1996)

影山 (1993, 1996) は「概念意味論 (Conceptual Semantics)」の立場から日本語の複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の 2 種類があると指摘している。この分類法はそれ以降の多くの研究者に援用され、複合動詞に関する研究を行う際に、不可欠な基盤とされている。一般的に、「統語的複合動詞」と比べると、「語彙的複合動詞」における V1 と V2 は意味的緊密性がより強く、2 つの動詞の組み合わせに課される制約がより厳しいと考えられている。ここで、「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の特徴について簡単に触れておく。

(9) a. 統語的複合動詞 :

調べ終える、しゃべりまくる、食べ過ぎる、出し忘れる、
歌い始める、乗り損ねる、見続ける、調べ尽くす、など

b. 語彙的複合動詞 :

投げ込む、押し開ける、仕舞い込む、泣き叫ぶ、見落とす、
追い払う、受け取る、吸い取る、貼り付ける、など

「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」はそれぞれ異なる語形成をとる。簡単に言えば、統語的複合動詞とは後項動詞が前項動詞を補文にとる補文構造を持つものである。例えば、(10) 「調べ終える」の場合、前項動詞「調べる」が後項動詞「終わる」の補語となり、「調べることを終える」という意味を表す。

(10) 「調べ終える」 → 調べることを終える

一方で、語彙的複合動詞とは、統語構造上 1 つの語として存在し、前項動詞と後項動詞が特定の意味関係にあるものである。例 (11) のように、V1 「投げる」が V2 「込む」の表す目的を達成する手段を示す。

(11) 「投げ込む」 → 投げることによってこむ⁷

また、影山 (2013: 11) では、V1 と V2 との意味関係と項関係に基づき、語彙的複合動詞をさらに「主題関係複合動詞」 (thematic compound verbs) と「アスペクト複合動詞」 (aspectual compound verbs) の 2 つに下位分類を行い、語彙的複合動詞の新体系を提示している。そのうち、「アスペクト複合動詞」は、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の中間に位置するものであるとされており、かなり稀な存在であるため、日本語独特の特徴ではないかと指摘されている (影山 2013)。

(12) a. 主題関係複合動詞 (thematic compound verbs)

例: V1、V2 ともに主題関係 (項関係) を持ち、V1 は V2 を様々な意味関係で修飾する。

突き落とす、踏みつぶす、転げ落ちる、歩き疲れる、慣れ親しむ、など

b. アスペクト複合動詞 (aspectual compound verbs)

文の項関係は基本的に、V1 によって決まる。V2 は広い意味で語彙的アスペクトを表し、V1 が表す事象の展開について述べる。

⁷ ここでの「こむ」は、他動詞的用法を持つ古語の「こむ」である。「V1+込む」に対応する本動詞が古語の「こむ」であることについては、第 4 章で詳しく論じる。

例: 見逃す、死に急ぐ、晴れ渡る、居合わせる、歌い上げる、響き渡る、など

語彙的複合動詞の2つの動詞の組み合わせに課される制約に関して、影山(1996)は「他動性調和の原則」という項構造上の制約を提案している。「他動性の調和の原則」とは、日本語の語彙的複合動詞の結合には「外項」⁸をとる動詞同士、または「外項」をとらない動詞同士によって作られるという原則を指す。

例(13)のように、影山の定義⁹によれば、「割る」、「走る」、「割れる」はそれぞれ他動詞、非能格動詞、非対格動詞である。項構造から考えると、例(13a)の「割る」は「子供」という「外項」と「花瓶」という「内項」をとる。それに対し、例(13b)の「走る」は「子供」という「外項」、例(13c)の「割れる」は「花瓶」という「内項」のみをとる。

- (13) a. 子供が花瓶を割った。 (他動詞)
- b. 子供が走っている。 (非能格動詞)
- c. 花瓶が割れた。 (非対格動詞)

「他動性の調和の原則」を表にまとめると、以下のようになる。表1-1(Xは「外項」を指す)が示すように、他動詞と非能格動詞は両方とも「外項」をとる動詞であるため、「奪い取る」、「泣きはらす」、「探し回す」、「言い寄る」のような結合が容認される。一方で、非対格動詞は「外項」をとらない動詞であるため、「滑り落ちる」のような結合しか認められない。これ以外の組み合わせをとる語彙的複合動詞は容認されないということである。

8 概念意味論では、「主語」、「目的語」という用語ではなく、「外項」、「内項」という用語で動詞の項構造を表す。つまり、「外項」は動作をする側で、「内項」は動作を受ける側である。

9 非能格動詞は主語の意図的な動作・行為を意味する動詞と、人間の生理的な活動を意味する動詞である。他方、非対格動詞は主として状態や位置が変化するものー対象物と呼ばれるーを主語に取る動詞であり、これらの主語は自分の意志で動作するのではなく、自然に何らかの変化を被るものを感じている(影山1996: 21)。

表 1-1: 「他動性の調和の原則」 (松田 2004: 19)

V2		他動詞	非能格自動詞	非対格自動詞
V1		+X	-X	
他動詞	+X	(○) (奪い取る)	(○) (探し回す)	(×) (洗い落ちる)
		(○) (泣きはらす)	(○) (言い寄る)	(×) (走り転ぶ)
非対格自動詞	-X	(×) (揺れ落とす)	(×) (崩れ臥す)	(○) (滑り落ちる)

- 由本 (1996, 2005)、松本 (1998)、影山(1999)

V1 と V2 の意味関係により、語彙的複合動詞は少なくとも以下の 5 種類に分類される (由本 1996, 2005; 松本 1998; 影山 1999)。

- (14) a. 手段: V1 が V2 の手段を表すもの。[V1 することによって、V2]

押し倒す、踏みつぶす、押し開ける、切り分ける、(ボールを) 打ち上げる、押し出す、掃き集める、投げ飛ばす、切り抜く、取り除く、踏み固める、殴り殺す…

- b. 様態・付帯状況: V1 が V2 の様態・付帯状況を表すもの。

[V1 しながら V2]

怒鳴り込む、訪ね歩く、転げ落ちる、遊び暮らす、舞い上がる、持ち去る、探し回す、這い出る、駆け登る、滑り落ちる…

- c. 原因: V1 が V2 の原因を表すもの。[V1 した結果、V2]

歩き疲れる、食いつぶれる、泣き沈む、降り積もる、抜け落ちる、おぼれ死ぬ、寝違える、聞き知る…

- d. 並列: V1 が表す出来事と V2 が表す出来事が対等な重さを持つ。

[V1 かつ V2]

泣きわめく、泣き叫ぶ、忌み嫌う、恐れおののく、恋慕う、慣れ親しむ…

- e. 補文関係: V1 が意味的主要部であり、V2 が V1 の意味の中に要素を付け

加える。[V1 という行為/出来事を (が) V2]

聞き落とす、見逃す、読みさす、呼び交わす、使いこなす、聞き漏らす、晴れ渡る…

(由本 (1996, 2005); 松本 (1998); 影山(1999) を参照)

また、由本 (1996, 2005) 、松本 (1998) では、影山の「他動性調和の原則」の限界を指摘し、意味構造の合成という観点から、「主語一致の原則」というより緩い結合制約を提案している。

- (15) 主語(卓立項)一致の原則:二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者 (通例、主語として実現する意味的項)
同士が同一物を指さなければならない

(松本 1998: 72)

つまり、複合動詞を構成する 2 つの動詞の主語が同じでなければならない、という制約が存在すると主張している。

「V1+込む」の動詞と動詞の組み合わせに関する制約について留意すべき点は、単純動詞としての「こむ」には非対格自動詞の用法しかないため、「V1+込む」が一見「他動性調和の原則」や「主語一致の原則」に反しているように見えることである。しかし、歴史を遡ると、古語における「こむ」には他動詞としての用法も存在していた¹⁰。つまり、複合語の構成要素としての「こむ」は現代語の非対格自動詞としての「こむ」ではなく、自動詞的意味と他動詞的意味の両方を根底に持っていることが挙げられる (姫野 1999; 松田 2004; 松本 2009; 由本 2013)。したがって、「V1+込む」の動詞と動詞の組み合わせは「他動性調和の原則」および「主語一致の原則」に従っていると考えても相違ないであろう。

1.3. 研究対象

本節では、先行研究の知見に基づき、本稿が扱う複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」が日本語の移動事象表現としての位置づけを確認する。

¹⁰ 「山中にて鉄炮二つ玉をこみ、十二・三間隔て情なく打申候」〔信長公記・六〕(『角川古語大辞典 (ジャパンナレッジ版)』)

移動事象の言語表現は言語間に興味深い差異が存在するが、大まかに分けると、(16) が示すように、「主体移動表現」、「客体移動表現」(使役移動表現)、「抽象的放射表現」という3種類の移動事象表現タイプが存在すると考えられる(松本 2017)。

- (16) a. John walked into the house. (主体移動表現)

「ジョンは家に歩いて入った。」

- b. Susan threw the ball into the room. (客体移動表現)

「スザンはボールを部屋の中に投げ入れた。」

- c. Bill looked into the hole. (抽象的放射表現)

訳：ビルは穴を覗き込んだ。

(松本 2017:1, 和訳は筆者による)

(16) からわかるように、英語の移動事象表現における<経路>(Path)は“into”という前置詞によって表されているのに対し、日本語の移動事象表現における<経路> (Path) は「入る/入れる/込む」といった動詞によって表されている。実際、日本語において、このように移動の経路位置関係を含む移動動詞や使役移動動詞が比較的数多く存在する(松本 1997)。

- (17) 移動動詞：上がる、下がる、越える、通る、回る、入る、出る、離れる…

使役移動動詞：上げる、下げる、進める、入れる、出す、抜く、通す…

松本(1997: 169-179)によると、日本語の使役移動動詞は移動を構成する諸要素の違いに基づき、4つの語彙化パターンに分類される。(18)の「経路位置関係を包入した使役移動動詞」のほか、「使役の手段の包入」、「移動の様態の包入」、「移動の付帯変化の包入」も挙げられる。

- (18) 日本語の使役移動動詞の4つの語彙化パターン

- a. 「経路位置関係の包入」

(使役による移動物の経路や位置関係が語の意味に含まれているもの)

上げる、下げる、入れる、出す、抜く、回す、進める、降ろす、通す…

- b. 「使役の手段の包入」

(使役者の行為が移動を引き起こすことが語彙化されたもの)

投げる、蹴る、打つ、かける、送る、押す、運ぶ、取る、誘う、呼ぶ…

c. 「移動の様態の包入」

(移動するものの移動様態が語彙化されたもの)

飛ばす、転がす、流す、駆ける、舞う、這う、跳ねる…

d. 「移動の付帯変化の包入」

(動作主の行為と移動が同時に起こるが、移動物の空間移動より状態変化が重要な場合である)

取る、除く、抜く、貼る、積む、詰める、刺す、塗る、満たす、飾る…

(松本 1997: 169-179)

我々人間の外界認識は、物理的な空間関係を基礎として、そこから抽象的な状態把握へと拡張していることがよく知られている。影山・由本 (1997: 129) で述べられているように、「移動を表す動詞は、おそらくどの言語においても最も基礎的語彙に含まれ、より複雑な事象や抽象的な状態を表現するための土台になる」という点で重要な意義を持っている。これらの動詞を構成要素とする複合動詞は、より複雑な移動事象を表現することができる。特に、(19) に挙げられているように、前項動詞に「使役の手段を表す使役移動動詞」をとり、後項動詞にほかの語彙化パターンに属する使役移動動詞をとる和語複合使役移動動詞が多く観察される。

(19) • 「使役の手段を表す使役動詞 + 経路位置関係/方向性を包入した使役移動動詞」

押し入れる、吸い込む、取り込む、持ち出す、取り戻す、打ち上げる、引き降ろす、吊り下げる…

• 「使役の手段を表す使役動詞 + 様態を包入した動詞」

投げ飛ばす、蹴り飛ばす、打ち飛ばす、蹴り転がす、押し流す、吹き飛ばす、叩き飛ばす…

• 「使役の手段を表す使役動詞 + 付帯変化を包入した動詞」

押し付ける、塗り付ける、焼き付ける、切り取る、ちぎり取る、拭き取る、奪い取る、吸い取る…

(松本 1997: 173-175)

「V1+入れる/込む/詰める」においては、それぞれ対応する本動詞、つまり、「入れる/こむ/詰める」の3つとも、「ある内部領域へ移動させる、または移動する¹¹」ことを表し、「ある領域の内部へ」という方向性を持つ使役移動動詞/移動動詞である。そのうち、「入れる」、「こむ」は経路位置関係/方向性を包入した使役移動動詞/移動動詞に属し、「詰める」は「付帯変化を包入した使役移動動詞」に属すると考えられる。

前述した影山(2013)の語彙的複合動詞の2分類に基づき、これらの動詞が複合動詞の後項動詞となる場合の意味機能について確認しておく。

(20) a. 透明なグラスがあり、そこに水を注ぎ入れる。【主題関係の複合動詞】

b. その国は外国の文化をどんどん取り入れた。【主題関係の複合動詞】

(21) a. デモ隊が建物に {*なだれた/なだれ込んだ} (なだれるように中に入る)

【主題関係の複合動詞】

b. 父は急に {老けた/老け込んだ} (すっかり老けてしまう)

【アスペクト複合動詞】(影山2021:163)

(22) a. 上司は彼に欠勤の理由を問い合わせた。【アスペクト複合動詞】

b. 普通ならばそこまで思い詰めることはないでしよう。【アスペクト複合動詞】

つまり、「～入れる」は複合動詞の後項動詞として用いられる場合、常に複合動詞の主要部として機能し、実質的な意味を担っている。そのため、「V1+入れる」には「主題関係の複合動詞」しか見られない。一方で、「～詰める」は前項動詞が表す行為・状態に、何らかの附加的な意味を付与するタイプであり、「V1+詰める」には、「アスペクト複合動詞」しか見られない。また、「～込む」は「～入れる」と同様に、主要部として機能し、実質的な意味を保持する場合もあれば、「～詰める」のように、前項動詞を副詞的に修飾し、補助動詞的な役割を担う場合もある。

以上から、「入れる/こむ/詰める」は、複合動詞の後項動詞として用いられる際に、物理的な内部空間への移動を基本義としながらも、意味機能において互いに異なることがわかる。

¹¹ 1.2節で述べたように、「V1+込む」の本動詞「こむ」は自他両用の働きをしているため、ここで「ある内部領域へ移動させる、または移動する」と記述している。

1.4. 分析対象のデータ

本稿で分析する複合動詞は基本的に、『Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)(2013/7/4 ver.1.3)』(以降『複合動詞用例データベース』)、国立国語研究所の『複合動詞レキシコン』(2018/8/1 国際版 ver.1.11 公開)に収録されている語彙項目を対象にしている。(「V1+入れる」74語、「V1+込む」255語、「V1+詰める」16語¹²)。また、本稿で提示する用例の出典は明記しない限り、この2つのデータベースから引用したものである。この2つのデータベースとも語彙的複合動詞のみを収録対象としているが、以下の項目において異なる。

表 1-2: 本稿が使用する2つのデータベースの比較

	『Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)』	『複合動詞レキシコン』(国立国語研究所)
収集元	ウェブのデータ 一定量以上の用例(今回は100例以上)のみを収録対象	辞書と研究文献 古語・古典語、あるいは現代語でも特殊な専門分野や文学作品に限られ一般性がない語彙は除外
収録語数	3514語	2759語
付与情報	格要素情報、重複度、出現ページ数	意味定義、用例、英語/中国語/韓国語訳、基本文型(格パターン)、語構造

以下は、「注ぎ込む」を例にした場合の Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)における付与情報の表示方法である。

「注ぎ込む(そそぎこむ)」

重複度/格パターン

	ヲ	ニ	修飾	ガ	カラ	ヘ	デ	時間	マデ	総ページ数
注ぎ込む	675 p	330 p	152 p	127 p	30 p	27 p	5 p	9 p	3 p	1341 p
注ぐ	62%	74%	80%	87%	10%	70%	100%	100%	0%	3345 p
込む	0%	12%	48%	30%	0%	0%	0%	67%	0%	711 p

¹² 「押し詰める」は、『Web データに基づく複合動詞用例データベース(開発版)(2013/7/4 ver.1.3)』、国立国語研究所の『複合動詞レキシコン』(2018/8/1 国際版 ver.1.11 公開)には収録されてないが、『日本語複合動詞活用辞典』(姫野 2023: 201-201))には収録されているため、本稿の考察対象に含めることとする。したがって、本稿では、「V+詰める」のタイプ頻度を16とする。

格要素一覧 (重複: v1 ■ v2 ■ v1,2 ■ off)

ヲ	ニ	修飾	ガ	カラ	△	△	時間	マデ
金	60 川	41 ため	23 光	38 窓	17 海	11 虫	5 年	6 限界
情熱	37 虫	29 たっぷり	14 川	28 間仕切り	4 虫	5 ここ	3 時期	3
水	36 海	27 そして	11 水	16 吹き抜け	3 港	4 こと	3	
エネルギー	34 港	21 一気に	9 陽光	9 上	3 川	4		
力	34 湖	19 すべて	8 河川	8 山	3 琵琶湖	3		
資金	29 そこ	16 円	7 日差し	8				
時間	27 こと	15 的に	7 人	6				
全て	21 事業	9 そのまま	7 雨水	5				
すべて	20 それ	9 直接	6 湯	3				
愛情	18 仕事	8 また	5 流れ	3				
魂	17 太平洋	7 %	5 政府	3				
技術	16 子宮	7 大量に	4					
ノウハウ	15 開発	7 静かに	4					
税金	15 型	6 さらに	4					

図 1-1: 『複合動詞用例データベース (開発版)』に基づく「注ぎ込む」の検索結果

この 2 つのデータベースを同時に参照する主な理由は、複合動詞の使用実態と研究者の判断の両方を重視する点にある。『複合動詞用例データベース』は、ウェブ上のデータを機械的に構築したもので、客観的な方法でデータを収集している。そのため、日本人母語話者が実際にどのような複合動詞を使っているか、またどのように使用しているかといった、複合動詞の使用実態に近いデータが収録されている。一方、『複合動詞レキシコン』は、研究者による精査のもとで選別されたデータが収録されており、誤用の可能性がある一時的な用例や、母語話者以外による不自然な使用例が除外されているため、信頼性の高い情報が提供されている。以下に、2 つのデータベースの収録データにおける「V1+入れる/込む/詰める」のタイプ頻度を示す。

表 1-3: 「V1+入れる/込む/詰める」のタイプ頻度

	『Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)』	『複合動詞レキシコン』(国立国語研究所)
「V1+入れる」	64 例	74 例
「V1+込む」	253 語	255 語
「V1+詰める」	16 例 ¹³	15 例

¹³ ここで示す 16 例は、漢字表記に基づくタイプ頻度である。『複合動詞レキシコン』では、「のぼり詰める」の漢字表記として「上り詰める」のみが収録されているのに対し、『複合動詞用例データベース』には、「登

この2つのデータベースには多くの重複する語彙項目が含まれているが、(23) のように、片方のデータベースにのみ収録されている語彙項目も存在する。多様で豊富なデータを網羅するために、本稿ではこの2つのデータベースを併用することにする。

- (23) a. 『複合動詞用例データベース』にはあるが、『複合動詞レキシコン』にはない語彙項目：

戻し入れる、回し入れる、やり込む、焼き込む…

- b. 『複合動詞レキシコン』にはあるが、『Web データに基づく複合動詞用例データベース』にはない語彙項目：

揉み入れる、寄せ入れる、弱り込む、よろけ込む、凍り詰める

1.5. 本稿の構成

本稿は、本章を含めて7章から構成される。第1章の序論では、研究対象、研究目的、考察する際に使用するデータについて述べた。第2章以降の論文の構成は下記の通りである。

第2章では、先行研究の概観と課題提示を行う。2.1節では、森田(1979)、姫野(1978, 1999)の記述的な研究や、由本(2013)、松田(2004)、金(2010)といった先行研究を整理し、それらの研究で得られた成果をと残された課題を明確にする。2.2節では、先行研究の残された課題を基に、「V1+入れる/込む/詰める」の意味に関する研究課題を、「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)の3つの視点から提示する。

第3章では、本研究が依拠する理論的枠組みを導入する。3.1節では、言語表現の多義性や意味拡張のプロセス、異なる語同士の意味的類似性を体系的に説明するために不可欠とされる身体的・経験的基盤である概念構造—「イメージ・スキーマ」(image schema)を取り上げる。具体的に、「V1+入れる/込む/詰める」の意味分析に主に関わる<容器>のイメージ・スキーマが「空間的側面」と「機能的側面」の2つの側面を持っていることを示したうえで、言語表現の意味拡張を動機づけるメタファー的写像、イメージ・スキーマの背景化、イメージ・スキーマ変換といった認知的操作を概観する(3.1.2節)。最後に、<容器>のイメージ・スキーマに関連する、<中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>、<起点-経路-着点>、<尺度>といったイメージ・スキーマを取り上げ、これらのイメージ・ス

り詰める」「上り詰める」「昇り詰める」の3種類が収録され、それぞれがトークン頻度として計上されている。

キーマはイメージスキーマ変換や同一の身体経験に対する異なる主体的な視点が介在することで互いに関連し合い、1つのネットワークを形成できることを示す。それに基づき、「内部移動」という事象におけるイメージ・スキーマの相互関係をネットワークという形で表示する。3.2節では、語レベルの意味と形式のペアリングをコンストラクションとして捉える理論、「コンストラクション形態論」(Construction Morphology) (Booij2010) の基本的考え方を概説する。それに基づき、「V1+入れる/込む/詰める」もコンストラクションの一種として捉えられることを示し、「V1+入れる/込む/詰める」の意味カテゴリーの階層的構造を可視化する構文的多義ネットワークを提案する。続いて、コンストラクション形態論の使用基盤(usage-based)的言語観を取り上げ、構文的多義ネットワークにおける構文スキーマの特徴を確認する。「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成と言語使用の創造性を反映するカテゴリー化の動的な側面は、頻度や構文スキーマの定着度といった要因との関連から説明できることを示す。

第4章から第6章では、第2章で提示した「V1+入れる/込む/詰める」の「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)をめぐる課題を順に取り上げていく。

第4章では、「V1+入れる/込む/詰める」の多義性について、それぞれの複合動詞ごとに詳細に検討し、4.1節、4.2節、4.3節では、「V1+入れる」、「V1+込む」、「V1+詰める」それぞれの多義構造を検討する。具体的な手順として、まず、結合する前項動詞の意味的特徴に基づき、「V1+入れる/込む/詰める」の意味分類を行う。また、「内部移動」事象に関わるイメージ・スキーマとの関わりから、各意味グループ間の水平的な関連性や意味拡張の認知的マカニズムを明らかにする。さらに、各複合動詞の本動詞と後項動詞との間の意味関係をもとに、各意味に共通するスキーマ的な意味を認定する。最後に、「V1+入れる/込む/詰める」それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」および「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示する。

第5章では、「V1+入れる/込む/詰める」の「類義性」に関する諸問題を取り上げる。これらの複合動詞は、いずれも「内部移動」を基盤としているが、各々の多義性形成のプロセスにおいてどのような特徴を示しているのかを明らかにする。具体的には、「内部移動」という基本義を表す場合と派生義を表す場合に分けて、同じ前項動詞と結合する際に生じる意味的な類似点や相違点を詳細に分析する。そのうえで、これらの意味形成に働く認知的動機づけを、第4章で解明したイメージ・スキーマの前景化・背景化を用いて説明することを

試みる。

第6章では、「V1+入れる/込む/詰める」の「創造性」について論じる。まず、Google検索のヒット数や日本語母語話者への言語調査を通じて、辞書に掲載されていないが実際には使用されている新規複合動詞を収集し、ヒット数が多い語例から少ない語例、さらには実例が確認されない語例を比較する。新規複合動詞の使用を可能にするため、談話上のコンテキストがどのような役割を果たしているのかを明らかにし、「V1+入れる／込む／詰める」の容認性が段階的であることを示す。量的・質的データを用いて、新規表現がどのように創造され、使用され、そして慣習化されていくのかを実証的に検討することで、意味形成と創造性を反映するカテゴリー化の動的側面が浮き彫りになることが期待される。

第7章では、前章までの考察内容を総括し、結論と残された課題について述べる。

第2章 日本語の複合動詞に関する先行研究と課題提示

序章の1.2節では、日本語の複合動詞に関する一般的な定義や分類、そして語彙的複合動詞の結合制約に関する代表的な研究を概観した。本章では、まず本稿の研究対象「V1+入れる/込む/詰める」に関連する先行研究について検討し、これらの研究の成果と残された課題について整理する(2.1-2.2節)。次に、その課題を踏まえて、本稿が取り組む研究課題を提示する(2.3節)。最後に、本章のまとめとする(2.4節)。

2.1. 「V1+入れる/込む」に関する先行研究

序章で述べたように、「V1+込む」は語彙的複合動詞において相対的に高い意味的生産性を持ち、多くの研究成果が蓄積されている(森田 1979; 影山 1993; 姫野 1978, 1999; 甲斐 1998, 2000; 松田 2004; 由本 2005; 松本 2009; 金 2010; 山口 2013; など)。そのうち、「～込む」の多様な意味に関する記述的研究として、森田(1979)、姫野(1978, 1999)が挙げられる。特に、姫野(1978, 1999)は「～込む」の意味を詳細に記述し、類義語の関係にある「～入れる」、「～める」との意味的異同にも触れた点で優れた成果を示している。また、影山(1993)や由本(2005)、松本(2009)は、それぞれ、「語彙概念構造」(Lexical Conceptual Structure)と語彙機能文法の枠組みを用い、「～込む」の構造を記述している。一方、認知言語学的な意味観を採用した研究として、松田(2004)や金(2010)が挙げられる。これらの研究では、「～込む」の各意味間の関連性および意味拡張のプロセスが説明されている。

本節では、森田(1979)、姫野(1978, 1999)の記述的な研究や、由本(2013)、松田(2004)、金(2010)など、「～込む」に関連する先行研究を中心に紹介し、残された課題を提示する。

2.1.1. 森田(1979): 自他用法の意味分類

森田(1979: 203-204)によれば、「～込む」が表す意味は、「先行動詞の表す動作や状態をとることによって、ある状況へと入っていく意味である」とされている。例えば、「プールに飛び込む」のようなある空間領域へと入って行く場合もあれば、「じっと考え込む」のような動作・状態をより深い抽象的な領域に進める場合も挙げられる。

さらに、森田(1979: 204-205)は、「～込む」を他動詞的な用法と自動詞的な用法に大別して、他動詞的な用法を4つ、自動詞的な用法を2つに分けている。

・他動詞的な用法①

例 (1) にあるように、この種の「～込む」は「…ヲ…ニ～込む」という統語構造をとり、人や事物のある場所・状況へと入っていくようとするという意味である。この意味に属する複合動詞には他に「撃ち込む」、「押し込む」、「折り込む」、「書き込む」、「吹き込む」などがある。

(1) a. 相手を窮地に追い込む。

b. 新手を前線に送り込む。

(森田 1979: 204)

・他動詞的な用法②

例 (2) にあるように、「…ヲ～込む」という統語構造をとるものである。対象「遺産」、「食糧」に対して、「当てる」、「買う」のような動作や行為が深く入っていく。つまり、「その対象を十分に行う」ことを表す。他に、「抱え込む」、「しょい込む」、「刈り込む」などもこれに当たる語例である。

(2) a. 遺産を当て込む。

b. 食糧を買い込む。

(森田 1979: 204)

・他動詞的な用法③

例 (3) のように、この種の「～込む」は「…ニ…ヲ～込む」という統語構造をとり、「犬」、「女中」のような特定の相手に対してある行為を十分に行うことを表す。つまり、「徹底的に…する」行為である。この意味に属する複合動詞には他に「叩き込む」、「頼み込む」、「注ぎ込む」などがある。

(3) a. 犬に芸を教え込む。

b. 女中に儀作法を仕込む。

(森田 1979: 204)

・他動詞的な用法④

例 (4) のように、「…ヲ…ト～込む」という統語構造で、「その対象を…であると完全に…する」という精神的判断を表す。この意味に属する複合動詞としては、「思い込む」、「見込む」などが見られる。

(4) 息子を不良少年と決め込む。

(森田 1979: 205)

・自動詞的な用法①

例 (5) のように、「…ガ…ニ～込む」という統語構造をとり、「その場所や事柄の中に入つていく」という具体的な行為・作用を表す。

(5) a. 貧窮のどん底に落ち込んだ。

b. 人の弱身に付け込むのはよくない。

c. 人のノートが鞄の中に紛れ込んでいた。

(森田 1979: 205)

他に、「食い込む」、「射し込む」、「転がり込む」、「駆け込む」、「斬り込む」「乗り込む」、「踏み込む」、「舞い込む」などが挙げられている。この種類には、意志的、無意志的自然現象などの語例が見られると述べている。

・自動詞的な用法②

この用法は「…ガ～込む」という統語構造をとる。前項する動詞は基本的状態性の動詞、または動きを伴わない動作性動詞がくる。例 (6) のように、「老いる」、「立てる」、「咳く」のような状態や行為がより深まっていくさまを表す。「ひどく…だ」の強調となる意である。その他、「切れ込む」、「ふさぎ込む」、「取り込む」、「眠り込む」、「寝込む」、「冷え込む」、などの語例もこの種に当たる。

(6) a. めつきり老い込んだ。

b. 仕事が立て込んでいる。

c. 激しく咳き込む。

(森田 1979: 205)

以上、森田（1979）は「～込む」の意味を6つに細かく分類している。しかしながら、この分類は辞典的な記述に留まり、各意味の間の関連性やそれを統合する枠組みについては十分に言及されていない。そのため、「～込む」の多義性の全体像や、それぞれの意味がどのように形成され、つながり合っているのかを明らかにするためには、さらなる分析が必要である。

2.1.2. 姫野（1978, 1999）：日本語学の視点からの詳細な意味分析

森田（1979）は「～込む」の統語的構造に焦点を当てた分類であるのに対し、姫野（1978, 1999）は「～込む」¹⁴の意味に焦点を当て、「内部移動」と「程度進行」の2種類に大別している。姫野（1999: 62）によると、「内部移動」は、主体あるいは対象が何らかの枠組みの「かこむ」領域の中へと移動していくことを表す。この場合、内部移動の移動対象には、物理的なものだけではなく、例えば、情報や技や依頼事項のような抽象的なものもあると述べている（例：触れ込む、教え込む、せがみ込む、など）。

姫野は内部移動の移動先の領域の形態的特徴から、「内部移動」をさらに、以下の7種類に分けている。

(7) ① 「閉じた空間」を領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

上がり込む、落ち込む、駆け込む、転がり込む、滑り込む、飛び込む、
走り込む、舞い込む、迷い込む、踏み込む、押し込む、割り込む、泣き
込む、住み込む、座り込む、注ぎ込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

運び込む、投げ込む、打ち込む、積み込む、詰め込む、飲み込む、吸い
込む、買い込む、呼び込む、売り込む、教え込む、頼み込む、刻み込む、
絞り込む…

② 「固体」を領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

¹⁴ 姫野（1978, 1999）では、「～こむ」と表記されているが、ここでは、本稿の表記法に従い、「～込む」とする。

食べ込む、のめり込む、めり込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

こすり込む、擦り込む、塗り込む、はたき込む、揉み込む、植え込む、

埋め込む、打ち込む、彫り込む、書き込む、写し込む、鋳込む…

③ 「流動体」を領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

漬かり込む、溶け込む、浸り込む、沈み込む、潜り込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

漬け込む、溶かし込む、溶き込む、浸し込む、沈めこむ…

④ 「間隙のある集合体または組織体」を領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

染み込む、混じり込む、埋まり込む、埋もれ込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

混ぜ込む、編み込む、織り込む、縫い込む、組み込む、炊き込む、歌い

込む…

⑤ 「動く取り囲み体」を領域とするもの

(a) 【[対象]を[取り囲み体]に/で「～込む】

握り込む、丸め込む、包み込む、抱き込む、抱え込む、くるみ込む、囲
み込む、覆い込む、敷き込む、巻き込む、挟み込む、綴じ込む、くわえ
込む…

(b) 【[対象]に[取り囲み体]を「～込む】

着込む、かぶり込む、履き込む、背負い込む、しょい込む…

⑥ 「自己の内部(自己凝縮体)」を領域とするもの

(a) 【主体の一部が自己の内部に向かって陥没する】

(自動詞): 窪み込む、引っ込む、くびれ込む、めり込む、へこむ

(b) 【主体あるいは対象の一部が基底部に向かって沈下する】

(自動詞): 落ち込む、崩れ込む、沈み込む、かがみ込む、しゃがみ込む、

へたり込む

(他動詞): かがめ込む、押さえ込む

(c) 【主体あるいは対象の一部同士が重なり合い、形態が縮小する】

(自動詞): まくれ込む、めくれ込む、折れ込む、曲がり込む

(他動詞): まくり込む、折り込む、曲げ込む、たくし込む、縫い込む、
かがり込む…

(d) 【対象の全体が中心に向かって凝縮する】

(他動詞): 疊み込む、絞り込む

(e) 【主体あるいは対象の一部の削除によって形態や量が縮小する】

(自動詞): はげ込む、切れ込む

(他動詞): 刈り込む、切り込む、すき込む、剃り込む、えぐり込む、
使い込む

⑦ 「その他」¹⁵

覗き込む、見込む、当て込む、(金を) 張り込む、(数量を) 割り込む…

(姫野 1999: 61-69)

また、姫野 (1978) は外部移動を表す「～出る」と比較しながら、「内部移動」を表す「～込む」の結合条件を検討している。

- (8) a. 「～込む」: 飛び込む、流れ込む、躍り込む
b. 「～出る」: 飛び出る、流れ出る、躍り出る

- (9) a. 「～込む」: 入り込む、塗り込む、沈み込む
b. 「～出る」: *入り出る、*塗り出る、*沈み出る

(姫野 1978: 66)

(8a) と (8b) の例から、「～込む」は、「飛ぶ」、「流れる」、「躍る」など、外部移動を表す動詞と結合することが確認される。これらの動詞は「～出る」とも結合できるため、方向性

¹⁵ 姫野 (1999: 68) によれば、「その他」に分類された動詞は、格助詞「ニ」を伴わず、越えて入るべき枠組み (=領域) が明示されない。しかし、潜在的な枠組みとしてその存在が推測できる場合がある。例えば、「彼は腰をかがめて穴の中をのぞきこんだ」(石川達三『自分の穴の中で』) という用例では、ニ格が現れないものの、「視線を穴に注ぐ」という潜在的な枠組みが解釈として成立している。

が自由な動詞であるといえる。

一方、(9a) と (9b) の例から、「～込む」は、「入る」、「塗る」、「沈む」のように、すでに内部移動や接着の意味を含んでいる動詞とも結合することが分かる。これらの動詞は「～出る」とは結合しない特徴を持っている。

言い換えれば、「～込む」は「外部移動」、「離反」、「拡散」、「上昇」などの意味に關係のある動詞と結合しないということである (姫野 1978)(例: *浮かび込む、*出し込む、*湧き込む、*離れ込む、*広がり込む、*上り込む、など)。

さらに、姫野 (1999) は、「～込む」と同じく内部移動を表す複合動詞類に属す「～める」、「～入る」、「～入れる」の意味についても分類を行っており、「～込む」と同じ V1 をとる場合を例にとって、それらの意味の違いを比較している。

「～込む」と「～入れる」を比較した結果、「～入れる」は自立語としての意味がそのまま残り、常に対象がある場へ移動させるということを示す。V1 は、何かを入れるための目的や方法などを表し、複合動詞としての構成が単純である。「～込む」と同じ V1 と結合する場合、(10) のような意味的異同があると述べている。

(10) (同) 書き込む=書き入れる、運び込む=運び入れる

(異) 子を懐に抱え込む (主体に近づける) ↔ 子を中に抱え入れる

草を短く刈り込む (対象の領域侵入) ↔ 草を中に刈り入れる

車に乗り込む (主体の移動) ↔ 車に乗り入れる

(姫野 1999:78)

このような異同について、姫野は、「～入れる」は純粋な内部移動を表すのに対し、「～込む」はより複雑な用法を持っており、(11) のような少なくとも 4 つの「内部移動」の意味以上のニュアンスを伴うと説明している。

(11) a. 全体がすっかり奥深く入るという感じがある。

* (ちょっと、半分、少しばかり、先だけ) 入り込む、浸し込む、上がり込む

* (端に、ふちに、浅く) 落とし込む、入れ込む、つけ込む

b. いったん入ったら動かないという固定感がある。

* 「乗車の際、切符を買い込む」 (切符は下車の際には手放される)

- * 「箸で豆を挟み込んで食べる」（豆はすぐ箸から離れ、口に入る）
- c. 予期せぬものが入るという抵抗感がある。
 - * 「先生が（授業のため）教室に入り込む」
 - * 「自分の家に住み込む」
 - * 「自宅へ我が子を連れ込む」
- d. 人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じがある。
 - * 「ふらっとホテルに泊まり込む」
 - * 「手なぐさみに無意味な線を書き込む」

(姫野 1999: 78-81)

次に、「程度進行」について確認したい。姫野（1999）では、「程度進行」の様態に基づき、「固着化」、「濃密化」、「累積化」の3つに分けている。この3つの共通点として動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達する、すなわち「程度進行」を表すが、それぞれが表す程度進行の様態が異なる。

【固着化】

(12) 弟はむつとしたようだ。それっきり黙り込んだ。（源氏鶴太『御身』）

(姫野 1999: 70)

例(12)の「黙り込む」は、「動作・作用の進行の結果、ある状態に至ったまま固定化している」ことを表し、「固着化」として分類されている。「固着化」という意味グループに関して、姫野（1999）は以下の4点の特徴を挙げている。

- (a) 前項動詞はすべて人間の心理作用、思考作用などに関するものである。
- (b) 「信じる」、「決める」、「思う」のような認識動詞と結合する場合、その認識が正しいとは限らないというニュアンスが含まれている。
- (c) このグループの動詞は本人の意志と関わりなく、その状態に陥るということから、無意志動詞化する場合が多い。
- (c) 状態の固定化を強調する意味から、「すっかりしおげこむ」、「てっきりそう思い込む」、「ぐっすり寝込む」、「とことん信じ込む」、「固く決め込む」のような強い程度を表す修

飾語を伴うことが多い。

(姫野 1999: 70-71)

例えば、(13-14) からわかるように、「考える」のような完全に意志的な行為を表す動詞は「～込む」と組み合わせることにより、無意志的な状態性の強いものになってしまう。そのため、「考え込もう」や「考え込みたい」のような話者の意志や希望を表すモダリティ表現は適切でないと考えられる。

(13) a. 一緒に考えよう

b. ? 一緒に考え込もう

(14) a. 考えたい

b. ? 考え込みたい

姫野(1999: 69-71)

【濃密化】

(15) 画家は三年見ぬまにすっかり老い込んで、頬骨は一層とがっていた。(大岡昇平『黒髪』)

(姫野 1999: 71)

例 (15) の「老い込む」は、「程度が高まり、状態が昇進していく」ことを表し、「濃密化」として分類されている。姫野 (1999) によれば、「濃密化」グループに属するものは、以下の特徴を持つと述べている。

(a) 生理的な変化や自然現象の変化を表すものが多いが、その変化の程度が進むことに対してマイナス評価の感じを伴う。

(b) 「ぎっしりたてこむ」、「めっきり冷えこむ」、「すっかり老けこむ」のような強い程度を表す修飾句を伴うことが多い。

(姫野 1999: 71-72)

【累積化】

(16) 大会参加に備え二ヶ月ほど前から毎朝 15 キロほど走り込んでいた。(新聞)

(姫野 1999: 72)

例 (16) の「走り込む」は、「何か目的のため、人が動作や行為の積み重ねにより、その技や対象とするものの質の向上を図ること」を表ものであり、「累積化」として分類されている。

「累積化」グループの前項動詞は、「繰り返しのきく、人間の意志的行為」を表している。

「～込む」は、「時間をかけてその行為を重ね（累積し）人の技や対象とする事柄の質を向上させる」ことを表している。この場合、「～に備えて」、「～を目指して」、「～のために」のような表現を用いて、明確な目的を示すのが普通であると述べている（姫野 1999: 72）。

以上、姫野（1999）の意味分類をまとめて示すと、表 2-1 のようになる。

表 2-1: 「～込む」の意味分類（姫野 1999:61-73 を参考に、筆者が作成）

「～込む」の意味特徴	語彙項目	
内部移動 (主体あるいは対象が何らかの枠組みの「かこむ」領域の中へと移動していくこと)	上がり込む、落ち込む、食い込む、擦り込む、漬かり込む、沈め込む、染み込む、混ぜ込む、握り込む、着込む、窪み込む、落ち込む、畳み込む、しゃがみ込む、など	
程度進行 (動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達する)	固着化 (動作・作用の進行の結果、ある状態に至ったまま固定化している)	眠り込む、寝込む、黙り込む、ふさぎ込む、思い込む、考え込む、しょげ込む、沈み込む、決め込む、話しこみ、気負い込む、困り込む、弱り込む、など
	濃密化 (程度が高まり、状態が昇進していくもの)	老い込む、老け込む、ぼけ込む、冷え込む、枯れ込む、錆び込む、咳き込む、たて込む、すまし込む、しゃれ込む、だまし込む、更け込む、せつ込む、など
	累積化 (繰り返しのきく、人間の意志的行為)	歌い込む、泳ぎ込む、さらい込む、使い込む、磨き込む、拭き込む、練り込む、読み込む、漬け込む、履き込む、煮込む、炊き込む、など

姫野（1978, 1999）は、「V1+込む」に対して詳細な意味分類を行い、それぞれの細かな意味特徴や構文特徴を詳細に分析しており、後続の研究にとって重要な考察基盤となるものとして、高く評価される。しかし、姫野の研究は記述的な意味分析にとどまり、「内部移動」と「程度進行」の間の関連性、さらに下位分類における異なる意味同士の関連性については言及されていない。また、「V1+込む」の多様な意味がどのように生じるのか、そのプロセスやそれらの関連性の背後にある認知的動機付けについての検討も十分に行われていない。

加えて、姫野は「V1+込む」の結合条件について、「内部移動」グループのみに焦点を当てているが、「程度進行」グループについては検討されていない。また、「V1+込む」と類義語「V1+入れる」、「V1+詰める」との関係性を包括的に捉えるためには、さらなる考察が必要である。

2.1.3. 由本(2013): 生成語彙論的アプローチによる考察

「～込む」の前項動詞との意味合成のパターンについては、生成語彙論的アプローチを用いた由本(2013)が代表的な研究として挙げられる。

由本(2013: 121)によれば、「V1+込む」は、「主語や目的語の移動や位置変化を表すもの」から、「移動の意味が完全になくなり、行為や変化の程度を強調するもの」へと意味が拡張しており、生産性が高い複合動詞とされる。由本は、松本(2009)と同様に、「～込む」の多様な意味関係には「何らかの内部への方向性の意味が認められる」という共通点があると主張し、「～込む」の多様な意味に共通の語彙意味記述を(17)のようなクオリア構造で示している。

(17) 構成役割 : [[([x ACT ON y] CAUSE)[y BECOME [y BE [IN-z]]]]
 形式役割 : in (e₂, y, z)
 主体役割 : move_act <MANER> (e₁, x, y)

(由本 2013: 122)

(17) の「～込む」のクオリア構造¹⁶、特に意味の中核として、語彙概念構造(LCS)に相当する構成役割に情報を補充する形で、様々なV1が結合できると考えられる。

由本(2013)は、非能格動詞と「～込む」の合成について、「駆け込む」を例に挙げて説明している。具体的には、「～込む」では特定されていない位置変化の様態がV1の「駆ける」によって補充されている。このような合成パターンが「V1+込む」の中で最も多いと述べている。

¹⁶ 「クオリア構造」とは、ある語彙項目の意味を最もよく説明できる、その語彙項目に関連する属性や事象の集合のことである。主に「形式役割」(物体を他の物体方識別する関係)、「構成役割」(物体とそれを構成する部分の関係)、「目的役割」(物体の目的と機能(習性))、「主体役割」(物体の起源や発生に関する要因)4つの役割が含まれる(Pustejovsky 1995: 77, 小野 2005: 24)。

また、他動詞と「～込む」の合成については、「投げ込む」という使役移動を表す語彙項目を例に挙げている。この場合、「投げる」は「～込む」では特定されていない位置変化の手段を補充していると考えられ、(18) のようにクオリア構造で示される。

- (18) a. 「投げる」 $\left[\begin{array}{l} \text{構成役割: } [[x \text{ ACT AT ON } y] \text{ CAUSE } [y \text{ MOVE}]] \\ \text{目的役割: } \text{at } (e, y, z) \end{array} \right]$

b. 「投げ込む」

- $\left[\begin{array}{l} \text{構成役割: } v_2 [[x_i \text{ ACT ON } y_j] \text{ CAUSE } [[y_j \text{ BECOME } [y_i \text{ BE } [\text{IN-}z]]]] \\ \text{代入 } \uparrow \\ v_1 [[x_i \text{ ACT AT ON } y_j] \text{ CAUSE } [y_j \text{ MOVE}]] \\ \text{形式役割: } \text{in } (e_2, y_j, z) \leftarrow V_1 \text{ の目的役割と適合} \\ \text{主体役割: } \text{move_act } (e_1, x_i, y_j) \leftarrow V_1 \text{ の構成役割と一致} \end{array} \right]$

(由本 2013: 124)

さらに、由本 (2013) は、「眠り込む」のような、原義を失い、強意を表す接尾辞化している「～込む」の意味も (17) を基盤として導き出すことができると主張している。(19) は「眠り込む」の意味合成を示している。

- (19) a. 「眠る」 $\left[\begin{array}{l} \text{構成役割: } [x \text{ ACT}] \\ \text{形式役割: } \text{at } (e, x, \text{ASLEEP}) \end{array} \right]$

- b. 「眠り込む」 $\left[\begin{array}{l} \text{構成役割: } v_2 [y \text{ BECOME}_{\text{Ident}} [y \text{ BE } [\text{IN-}z]]] \\ \text{形式役割: } \text{in}(e_2, y, \boxed{z: \text{ASLEEP}}) \\ \text{主体役割: } \text{sleep_act}(e_1, y) \end{array} \right]$

(由本 2013: 126)

「眠り込む」の意味合成について、由本 (2013) は次のように分析している。

…まず、「～込む」の構成役割内の原因事象に「眠る」の $[x \text{ ACT}]$ が代入されると適格な使役連鎖が作られないため、「眠る」の構成役割は主体役割として合

成される。ここでスキーマ転換が起こり、構成役割の意味場は空間的なものから対象の抽象的な状態や属性を表す意味場に変更される…この意味場の転移により IN の項は具体的な事物ではなくなる。そこで形式役割のほうも「込む」の形式役割が保持されながらも、「眠る」が含意する結果状態 asleep(眠っている状態)が代入され IN の項と同定される。このようなクオリア構造の合成を想定すれば、「眠る」においては at で表されていた結果状態が in に変更されることになり、これによって「眠り」の中に深く入っているという「程度進行」や「強調」の意味が生じることが説明される…

(由本 2013: 126)

このような「程度進行」の意味を表す「～込む」と結合する V1 の意味制約について、由本 (2013) は V1 の形式役割において明確に結果状態を含意しなければならないと指摘している。また、その結果含意は点的な at の項としてではなく、段階性の持つ [+gradable] 、 in の項として解釈可能な概念でなければならないとしている。

この意味制約を検証するために、姫野 (1999) で「累積化」の意味を表すとされる「走り込む」のような例も取り上げられている。

- (20) a. 猫が納屋に走り込んだ。
b. 山本選手は試合に向けて走り込んでいる。

(由本 2013: 129)

(20a) では、「走り込む」は「納屋」という着点への移動を表すのが自然であるのに対し、(20b) を容認可能にするには、「走る」練習を重ねることで期待される成果が目的役割として読み込まれるコンテキストが必要となる。その成果には段階性が想定できるため、z として解釈することで容認可能となっていると考えられる (由本 2013)。また、次の (21a-b) の例もこのような解釈が可能なコンテキストが与えられれば容認可能になるかもしれないと言っている。

- (21) a. ??踊り込む、??料理を作り込む、*壊し込む
b. ?北島選手は試合に向けて泳ぎ込んでいる。

(由本 2013: 129)

由本 (2013) は、(17) という語彙意味記述を共通の基盤として、多様な意味を持つ「～込む」の意味合成を説明可能であることを示している。また、「内部移動」という原義から拡張義である「程度進行」への意味派生は、意味場のスキーマ転換によって動機付けられないと説明している。具体的には、in の項としての z は、「内部移動」の意味場では、空間的場所概念を指すのに対し、「固着化」、「濃密化」といった意味場では、前項動詞に含意される段階性の持つ何らかの結果状態を指す。また、「累積化」の場合、z は前項動詞が示す動作を重ねることで期待される段階性を持つ成果を指す。

由本 (2013) は「V1+込む」が持つ多様な意味を共通の基盤のもとで統一的に説明しており、一貫性があり非常に明快で理解しやすいと評価できる。しかしながら、意味場のスキーマ転換が起こる動機づけについての説明は十分ではない。また、クオリア構造による語彙意味情報の設定は限定的であり、類義表現である「V1+入れる」との意味合成パターンとの違いをどのように捉えるのかは十分に説明されていない。類義表現との違いを明確に区別するためには、より詳細な情報の記述が求められる。

さらに、由本 (2013) によれば、「V1+込む」が「程度進行」を表す場合、前項動詞は段階性を持つ状態である必要があると指摘されている。しかしながら、この段階性は必要条件であるに過ぎず、十分条件にはなっていないと考えられる。例えば、(22) の「驚く」、「喜ぶ」、「楽しむ」、「疑う」といった動詞は、段階性を持つと解釈可能であるにもかかわらず、データベースや一般の国語辞典に掲載されていないのはなぜなのだろうか。この点に関して、「V1+込む」の意味合成において、他にどのような制約が存在するのかについては、さらなる詳細な考察が必要であると考えられる。

(22) #驚き込む、#喜び込む、#楽しみ込む、#疑い込む

(cf. かなり/少し {驚いた/喜んだ/楽しんでた/疑った})

2.1.4. 松田 (2004)：コア図式による多義性分析

松田 (2004) は、表 2-2 が示すように、「～込む」の用法を 4 つのタイプに分類し、1 つの共通のコア図式の焦点化移動によって、4 つの意味を記述している。

表 2-2: 「～込む」の用法の分類およびイメージ図式 (松田 2004: 75-85 参照)

二格を伴う「～込む」		二格を伴わない「～込む」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」を含意しない	V1 自体は「内部移動」を含意する	V1 が示す状態への変化とその状態への固着	V1 の反復行為により生じる状態変化 (目標に向けて)
例) 飛び込む、呼び込む	例) 入り込む、植え込む	例) 冷え込む、眠り込む	例) 十分に走り込む

タイプごとの意味分析を紹介する前に、松田が採用する「コア図式」という認知言語学的なアプローチについて確認しておきたい。

認知意味論では、多義語の複数の語義の関連性を考察する際、イメージ図式を用いてそれらの語義を記述する方法が試みられている(Lakoff 1987; Langacker 1987, 1990; 田中 1990, 1997; 国広 1994; など)。同じ図式による意味の記述法であるが、研究者によってその解釈が異なる。以下では、松田 (2004) の紹介を引用し、「複数図式論」と「共通図式論」という2つの図式論の特徴を見ていく。

(23) Lakoff に代表される「複数図式論」 (=プロトタイプ図式論)

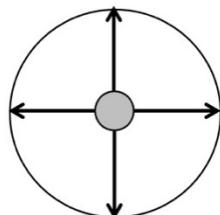


図 2-1: 「複数図式論」「=プロトタイプ図式 (プロトタイプ・スキーマ)」 (松田 2004: 67)

図 2-1 が示すように、中央の円は多義語のプロトタイプ的語義を示す。「複数図式論」は多義語の意味拡張をプロトタイプ的語義から周辺的語義へ、すなわち、平面的な意味拡張として捉えている。「複数図式論」の立場から有名な分析例として Lakoff (1987) の英語前置詞「over」に対する研究¹⁷が注目されている。Lakoff (1987) では「over」に対して 6 種類の図式が与えられている。

もう 1 つは図 2-2 が示すように、円錐の頂点は多義語の複数の意味を包含するような共通的意味 (context-free meaning) 、すなわち、「コア」を示す。多義語の意味拡張によって、下

¹⁷ 詳しくは Lakoff (1987: 419–427) を参照されたい。

に位置する円が大きくなれば、コアもそれに従って高くなると考えられる。

(24) 国広や田中に代表される「共通図式理論」「=コア図式（コア・スキーマ）」

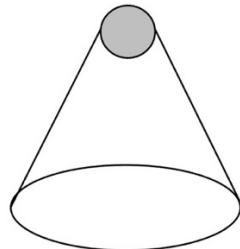


図 2-2: 「コア図式」（コア・スキーマ）(松田 2004: 67)

松田 (2004) は田中 (1990) に従って、「コア」を (25) のように定義している。

(25) コア: コアは語の意味の全体を見渡すことのできる円錐形の頂点のようなものを表す概念であり、典型、非典型を問わずすべての用例の背後に
ある抽象的な概念である。

(松田 2004: 68-69)

松田 (2004) は複数の図式を用いる方法について、図式が複雑で、学習者に過度な負担をかける点と、複数図式（=プロトタイプ図式）では隣接語との意味境界を説明できない点という 2 つの問題を指摘している。そのため、松田は後者、すなわち「コア図式¹⁸」（=「共通図式論」）を用いて、「～込む」の多義を考察している。

次に、松田 (2004) が提案する 4 つの分類について順を追って確認していく。

松田は、「～込む」の各意味に共通するコア図式として、図 2-3 のように提示している。この図式において、四角形は領域 X を表している。A タイプと B タイプの場合、領域 X は実線で示されるのに対し、C タイプと D タイプの場合、領域 X は何らかの状態を表しているため、点線で表示されている。領域 Y は、領域 X 内にある「難可逆的な領域」¹⁹をイメージしたものである。また、「α」は領域 X に入ることを意味するイメージを表し、「β」は領域 Y に入るこ

¹⁸ ここで「コア図式」は「共通図式」のことである。田中 (1990) に倣った呼び方である。

¹⁹ 松田 (2004) によれば、領域 Y は主観的に、領域 X の外に出るのが困難だと感じられる領域であり、物理的に存在するわけではない。

とを意味するイメージを表している。

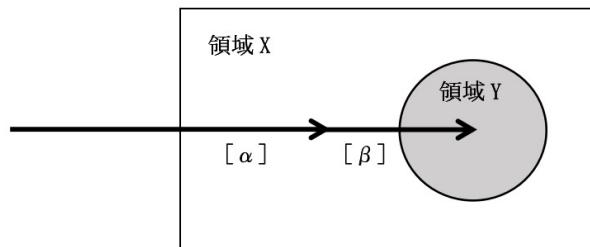


図 2-3: 「～込む」のコア図式 (松田 2004: 75)

A タイプの場合、例 (26a-b) に示されるように、「投げ込む」と「投げ入れる」の両者が交換可能な場合もあれば、例 (26c-d) のような容認度に差²⁰が感じられる場合もある。

- (26) a. 「男が店内に発煙筒を投げ込んだ」と 110 番があった。 (朝日、'00.10.20)
- b. 東京・歌舞伎町のビデオ店に爆発物を投げ入れたとされ栃木県立高校 2 年の男子生徒 (17 歳) は、夏の終わりにこんなことを同級生に言っていた。 (朝日、'00.12.10)
- c. 鈴木平の武器は変則サイドスローから {投げ込む/?投げ入れる} 力強いストレートだ。
- d. 「有る程の菊 {*抛げ込めよ/抛げ入れよ} 棺の中」 (夏目漱石)

(松田 2004: 77-78)

松田 (2004) によると、例 (26a-b) では、前項動詞「投げる」に内部移動の意味が含意されておらず、「～込む」と結合することではじめて内部移動の意味が成立する。そのため、[α] の部分が強く焦点化され、[β] の部分が認知的に非常に弱いと考えられる。「投げ入れる」との交換が可能であると説明している。一方、例 (26c) では、文脈が [β] まで含意しているため、「投げ入れる」との交換が認められない。(26d) の場合は文脈が [β] まで含意していないため、「投げ込む」よりも「投げ入れる」の方が適切であると説明している。

²⁰ 松田 (2004) はやや不自然だと判定される文に「?」、また誤用例に「*」を付けている。

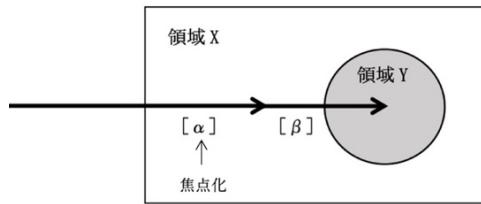


図 2-4 : A タイプ 「～込む」 のイメージ図式 (松田 2004: 77)

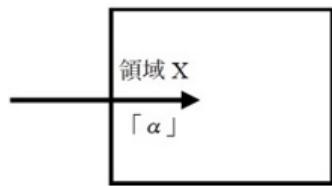


図 2-5: 「～入れる」 のイメージ図式(松田 2004: 80)

A タイプに分類される複合動詞には以下のようなものがある。

(27) (自動詞) 流れ込む、駆け込む、逃げ込む、怒鳴り込む、忍び込む、殴り込む、踏み込む

(他動詞) 書き込む、投げ込む、呼び込む、運び込む、流し込む、取り込む、誘い込む、炊き込む、編み込む、押し込む、積み込む、送り込む、引き込む、持ち込む、追い込む、混ぜ込む、折り込む

B タイプは A タイプと同様に二格を伴うが、前項動詞にはすでに内部移動の意味、すなわち [α] の部分が含意されている。この場合、認知的に焦点化されている部分は [α] ではなく、[β] となる。

(28) (植毛で) 頭皮に一本一本丁寧に {植え込む/植える}。(松田 2004: 87)

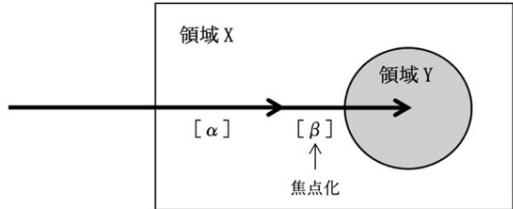


図 2-6: B タイプ「～込む」のイメージ図式 (松田 2004: 82)

B タイプに分類される複合動詞には以下のようなものがある。

(29) (自動詞) 泊まり込む、乗り込む、入り込む、もぐり込む、住み込む、上がり込む、

染み込む、紛れ込む

(他動詞) 飲み込む、吸い込む、しまい込む、詰め込む、植え込む、埋め込む、

溜め込む、教え込む、抱き込む

C タイプには、「考える」、「話す」のような意志動詞に「～込む」を付加することで無意志動詞化する「考え込む」、「話し込む」のような「固着化」タイプと、「老ける」、「冷える」のような状態変化動詞に「～込む」を付加することで、その状態に留まってしまうことを表す「老け込む」、「冷え込む」のような「濃密化」タイプがある。松田 (2004) は姫野 (1999) が提唱した「固着化」と「濃密化」という 2 つの用法の違いを認めつつ、それらに共通する意味的特徴を抽出し、C タイプという上位概念に統合している。

松田によれば、C タイプは、B タイプの物理的な場所へ「しっかりと、きちんと、奥深く」行為を行うというイメージが、抽象的なレベルに拡張された用法である。B タイプと同様に、 $[\beta]$ および前項動詞が表す状態への固着が焦点化されている。

例えば、例 (30) の場合、「眠る」は「眠っていない状態」から「眠っている状態」への変化を表すのに対し、「眠り込む」は「眠っていない状態」から「すっかり/深く眠っている（目覚め難い）状態」への変化を表すとされている。

(30) 太郎は安心して {眠り込んでいる/眠っている。} (松田 2004: 87)

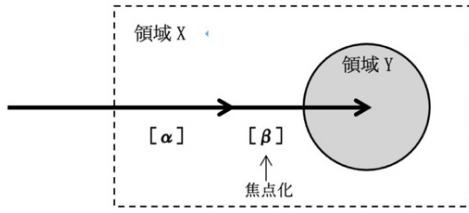


図 2-7: C タイプ「～込む」のイメージ図式 (松田 2004: 85)

C タイプに分類される複合動詞は以下のようなものがある。

- (31) (自動詞) 眠り込む、黙り込む、冷え込む、老け込む、思い込む、考え込む、
座り込む、話し込む、寝込む

最後に、松田 (2004) の D タイプを確認していく。松田による D タイプは、姫野 (1999) が「累積化」とした用法にあたる。松田によると、D タイプは A タイプの「入る・入れる」と B タイプの「しっかりと、きちんと、奥深く」行為を行うという 2 つのイメージが合わさって、抽象レベルへ拡張した用法ということである。

松田 (2004: 87) では、(32) と (33) はいずれも「走る」行為が繰り返し行われることを表しているが、(33) には「目標」を持って繰り返し走っているニュアンスが感じられると指摘されている。つまり、「走り込む」には、「繰り返し走って練習するという反復行為」と「(競技などの) 目標が達成できるという状態」の両方のニュアンスが含まれることを主張している。

- (32) 毎日 50 キロ走る。
(33) 每日 50 キロ走り込む。

(松田 2004: 87)

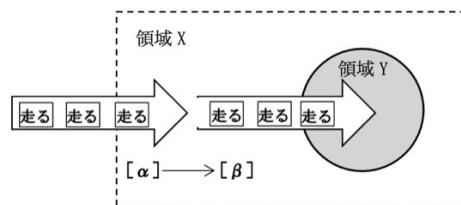


図 2-8: D タイプ「～込む」のイメージ図式 (松田 2004: 87 参照)

図 2-8 における点線で表示されている領域 X は「満足できる状態」(目標) を表し、領域 Y は「目標が達成できる状態」(すぐ元の状態に戻ってしまわない状態) を表している。図 2-8 のイメージ図式に基づき、松田 (2004) は、「走り込む」の意味を以下のように解釈している。

「走り込む」は、「走る行為」の反復行為によって、「満足しない状態」から「満足する状態」(領域 X) への「(抽象領域への) 内部移動」と、さらに「目標が達成できる状態 (領域 Y)」に留まるという固着のニュアンスを併せて持っている用法であると解釈される。

(松田 2004: 88)

D タイプに分類される複合動詞は以下のようなものがある。

(34) (自動詞) 泳ぎ込む、走り込む

(他動詞) 煮込む、使い込む、磨き込む、読み込む

松田 (2004) は、日本語学習者に過度な負担をかけないことを出発点とし、「～込む」の持つ多様な意味に共通するコア図式を提案している。そして、単一のコア図式の焦点化移動によって、「～込む」の意味の多様性を論じ、「～込む」の多義構造に関する研究に大きな進展をもたらしたと評価できる。

特に、難可逆的な領域 Y に入る[β]段階の存在を提示することで、「～込む」独特な特徴や、類義表現の「～入れる」との意味的差異を明確にし、(11) で示した「～込む」に伴う「内部移動」の意味以上のニュアンスが伴う理由も明らかにしている。しかしながら、Y 領域、および [β] 段階の存在はどのような認知的基盤に支えられているのか、それを設定する根拠については明確に示されていない。

また、松田 (2004) は、姫野 (1999) の「内部移動」グループを、前項動詞が内部移動を含意するか否かによって、さらに 2 つの下位タイプに分類しているが、どのような領域が内部領域と見なされるのか、「移動」と判断される基準は何かを明確に示す必要があると考えられる。

さらに、松田 (2004) は「～込む」の多義性分析に重点を置いており、「～込む」と結合す

る前項動詞として何が許容され、何が許容されないのか、またなぜ許容されないのかといった結合制約に関する検討は行っていない。

2.1.5. 金 (2010): 「～込む」の意味に関わる身体的・経験的動機づけの提示

金 (2010) は松田 (2004) の研究においては、「～込む」の意味に関わっている身体的・経験的動機づけに関する検討がなされていないという不足点を指摘し、「～込む」に関わる身体的・経験的動機づけについて、次のような 3 つの側面から検討している。

- (i) 「～込む」は、動的に形成された容器の内部への移動を表すことができる。Dewell (2005) も指摘しているように、私たちが経験する容器のパターンは連続体を成していると言えるので、「～込む」だけが動的に形成される容器を移動先として取るとは言いがたいが、「握り込む」、「抱え込む」、「挟み込む」と関連する容器のように、容器としての性質を内在的に有していないものを移動先として取るのは、「～込む」だけである。
- (ii) 「～込む」は、<容器 (container)>と<中心-周辺 (center-periphery)>のイメージ・スキーマと関わっている。Johnson (1987: 125) が指摘しているように、<中心-周辺>のイメージスキーマには、<容器>のイメージスキーマがよく重ねあわされる。認知主体は、常に何がより中心的 (inner) で、何がより周辺的 (outer) かを主観的に判断している。後項動詞「～込む」は「～入れる」に比べて、容器の中でもより中心的なところへ移動していくことをスキーマ的に表す表現であると考えられる。
- (iii) このような言語表現の基盤になるイメージ形成やイメージスキーマの形成には社会・文化的な視点が反映されるという点も看過してはいけない
(山梨 2000:157-158; Johnson1987; Gibbs2005; Langacker2006)。

(金 2010: 33-34)

金 (2010) はLangacker(1999) が提唱した主体化のプロセスに基づき、「～込む」の意味拡張のプロセスには、<焦点の希薄化>、<領域の希薄化>、<活動の源の希薄化>という 3

つの希薄化が観察されることを示している²¹。

さらに、金は、主体化の観点から捉えられない「反復の意味」²²(松田のDタイプ) の獲得は言語使用の場で起こっている話し手の意図と聞き手の理解のズレにより動機づけられていると主張している。

例 (35) で例示するように、本来「～込む」は (35a) のような内部への移動を表していたが、(35b) のような内部への移動、反復両方の意味を持つ中間段階を経て、(35c) のような反復の意味を表すようになったと考えられる。

(35) a. 太郎は干してあった洗濯物を部屋の中に取り込んだ。 (内部への移動)

b. 太郎は生徒に基本的なルールを教え込んだ。 (内部への移動・反復の意味)

c. 花子は試合に備え、泳ぎ込んだ。 (反復の意味)

(金 2010: 35)

金 (2010) によると、こういった「反復の意味」の獲得を動機づける重要な要因の1つとして、言語使用の場で起こっている話し手の意図と聞き手の理解のズレが頻繁に起きることである。例えば、例 (36) の発話の場合、話し手の発話や意図と聞き手の解釈との間にズレが生じることによって、「～込む」に新しい意味、すなわち、「反復の意味」が与えられるようになったと金 (2000) は考えている。

(36) 太郎は生徒に基本的なルールを教え込んだ。

話し手：太郎は基本的なルールを生徒が習得できるように教えた。

聞き手：太郎は基本的なルールを生徒に何度も繰り返し教えた。

(金 2010: 35)

金 (2010) による「～込む」の意味が<容器>(container)と<中心-周辺>(center-periphery)のイメージ・スキーマと密接に関わっているという洞察は、認知言語学的な意味観から極めて重要であると考えられる。イメージ・スキーマは、人間が身体的・感覚的な経験を通して

²¹ 詳細は金 (2010: 31)を参照されたい。

²² 金 (2010) によると、「反復の意味」は「(目標とする状態に到達するために) 反復的にVの行為を行う」という意味」の略称を指す。

形成される概念的な枠組みであり、特に、その重なりや相互作用が意味の形成や拡張に寄与することが広く認識されている。しかしながら、金の研究はこの指摘にとどまり、「～込む」の多様な意味の形成がどのように<容器>(container) と<中心-周辺>(center-periphery) イメージ・スキーマと関わっているのか、さらにそれ以外のどのようなイメージ・スキーマと関係しているのかについて、具体的な検討が十分には行われていない。それでもなお、金の研究は複合動詞の意味分析に新たな視点を提供しており、「V1+込む」、およびその類義表現の多義構造を解明する上で、重要な参考となるだろう。

2.2. 「V1+詰める」に関する先行研究

「V1+込む」の意味形成に関する個別の研究は数多く行われてきたが、類義語関係にある「V1+詰める」に関する研究は非常に限られているが、その中、「壁塗り交替」(spray paint alternation) という観点から「詰める」、「V1+詰める」の意味特徴を分析する研究として、森田 (1989)、岸本 (2001, 2011)、Iwata (2008)、川野 (2009, 2012) が挙げられる。

「壁塗り交替」は「場所格交替」(locative alternation)とも呼ばれ、他動詞の場合、(37) のように、直接目的語(ヲ格)と、場所(ニ格)または移動物(デ格)との間で名詞句の交替が起こる現象を指す。岸本 (2001) では、壁塗り交替を起こす代表的な動詞として、「詰める」、「塗る」、「張る」、「飾る」、「満ちる」、「埋める」、「溢れる」などが挙げられている。

(37) a. 彼は、(スーツケースに)シャツを一杯詰めたよ。

b. 彼は、(シャツで)スーツケースを一杯詰めたよ。

(岸本 2011: 42)

「詰める」は、壁塗り交替を起こす動詞であるのに対し、(38) が示すように、「入れる」は壁塗り交替を起こさない動詞であると考えられる。

(38) a. 箱に苺を入れる。(作例)

b. *箱を苺で入れる。(作例)

岸本 (2001) では、【pour 型/中身指向の動詞】と【fill 型/容器指向の動詞】の意味特徴を示した

後、壁塗り交替の本質は、[<行為>→<変化(動き)>→<結果状態>]という意味構造の中にどの部分がより注目されているのかということであると主張している。

以下では、【pour型/中身指向の動詞】と【fill型/容器指向の動詞】の意味特徴を先に確認する。

(39) a. John poured water into the glass.

b. *John poured the glass with water.

(岸本 2001: 109)

(39) における pour は、[X が Y を Z に動かす] という <動き> の部分に重点を置いて表現する動詞である。つまり、「水が重力によって空中を上から下へ落ちてグラスの中に入った」という部分は注目されているが、水が注がれた結果、容器がどのような状態になったかということは注目されていない。そのため、pour は、移動物を直接目的語にとる構文 (39a) では生起するが、(39b) の交替構文では生起しない。このような動詞は、pour型動詞、または中身指向 (content-oriented) (pinker 1989) の動詞と呼ばれる。

pour型動詞、中身指向 (content-oriented) の動詞に対して、<動き> より、<結果状態> の部分に注目する fill型動詞、容器指向 (container-oriented) の動詞もある。

(40) a. John filled the glass with water.

b. *John filled water into the glass.

(pinker 1989)

(40) における fill は、[Y が Z に動くことによって X が Z の状態変化を引き起こす] という <状態変化> の部分に重点を置いて表現する動詞である。つまり、fill は、「グラスが水でいっぱいになる」という結果状態に重点を置いおり、水がどのように移動されたのかという <動き> の部分は注目されていない。そのため、fill は、容器を直接目的語にとる (40a) のような構文に生起するが、移動物を直接目的語にとる構文 (40b) に生起しない。

(41) ①移動物の動きを指定する意味 【pour型/中身指向の動詞】

②移動の結果として場所に影響を及ぼす意味 【fill型/容器指向の動詞】

まとめると、【pour型/中身指向の動詞】の意味には、<移動物の位置変化>がより認知的際立つため、[~ニ~ヲ V] 構文に生起することが多いが、[~ヲ~デ V] 構文には生起しない。一方、【fill型/容器指向の動詞】の意味には、<場所の状態変化>がより認知的際立つため、[~ヲ~デ V] 構文に生起するが、[~ニ~ヲ V] 構文に生起しない。これに基づき、「詰める」のような壁塗り交替を起こす動詞は、(42) の①、②両方の意味を持つと考えられる。

- (42) ① (移動物の位置変化) 移動物の移動先の外部から移動先の内部への位置変化
② (移動先の状態変化) 移動物の内部移動の結果、移動先の内部領域が満たされた。

単純動詞の「詰める」だけでなく、複合動詞の「V1+詰める」も壁塗り交替を起こす動詞であると述べている。

- (43) a. 孝は、床にタイルを敷いた。
b. *孝は、タイルで床を敷いた。
(44) a. 孝は、床にタイルを敷き詰めた。
b. 孝は、タイルで床を敷き詰めた。

(岸本 2001: 117-118)

(43-44) から分かるように、「敷く」はもともと移動物の位置変化に重点を置く動詞であり、移動先を直接目的語にとる構文 (43b) に生起しないが、「~詰める」と結合すると、移動先である「床」の結果状態が際立たせられ、移動先を直接目的語にとる構文 (44b) に生起することが可能になる。

以上の分析から、単純動詞「詰める」と複合動詞「V1+詰める」には、移動物の<変化(動き)>と移動先の<結果状態>両方の意味が含まれ、壁塗り交替が可能であることが分かる。

しかしながら、「詰める」が壁塗り交替を起こす動詞であるか否かについて、研究者によって見解が分かれている。例えば、川野 (2012) は、「詰める」が (45b) のような移動物を直接目的語にとる [~ヲ~デ V] 構文に生起する用例数が非常に少なく、「詰める」において壁塗り交替が許容されにくくと指摘している。

(45) a. 袋に小石を詰める。

b. ?袋を小石で詰める。

(川野 2012: 33)

川野 (2009, 2012) によれば、「満たす」のようなが表す位置変化は、「場所の形状に対象を適応させながら位置付ける」という「形状適応の依存的転移」でなければならない。例えば、(46a) では、移動物の「石」が複数の集合として解釈されやすいのは、「バケツ」に満たされた「石」は、「バケツ」の形と同じ形状で「バケツ」の中に存在する必要があるためである。

(46) a. バケツに石を満たす (複数の石の集合)。

b. ??バケツに大きな石を一つ満たす。

c. バケツに大きな石を一つ入れる。

(川野 2012: 35)

一方、(46b) のように、移動物が一個の「石」である場合、「形状適応の依存的転移」ではないため、成立しにくい。また、「入れる」は非交替動詞であるため、「形状適応の依存的転移」に制限されない。

このように、「形状適応の依存的転移」の制限があるため、[～に～を V] 構文のヲ格にとる移動物として、固体と比べ、水やペンキなどの液体や、布などの薄くて柔らかいものが許容されやすいと考えられる (川野 2012)。

「満たす」のような典型的な交替動詞とは異なり、森田 (1989) によれば、[～に～を詰める] 構文が表す位置変化は、必ずしも「形状適応の依存的転移」ではない。(47) のように、「移動物」が単数の固体である場合でも、許容されると述べている。

(47) a. 木箱に壊れないよう気をつけて石膏細工を詰める。

b. 運搬は木ワクを造って、そこに慎重に仏像を詰めるのです。

(森田 1989: 744)

(47) では、「移動物」の「石膏細工」、「仏像」が、「移動先」の「木箱」、「木ワク」に合わせて形状適応するとは考え難い。また、(47)における「詰める」を「満たす」に書き換えると不自然になることから、[～に～を詰める] 構文は、「移動物」の「移動先」への形状適応を要求するわけではないことが分かる。

森田 (1989)、川野 (2009, 2013) の分析から、「詰める」は、典型的な交替動詞 (例: 満たす、塗る、巻く、飾る….) にも、典型的な非交替動詞 (例: 入れる、置く、付ける、膨らむ、塞ぐ、薄める….) にも分類しにくい動詞であることが分かる。

「敷き詰める」、「押し詰める」のように、「詰める」が複合動詞の後項動詞とする場合でも、ある空間領域への位置変化を表す。しかし、内部移動を表す複合動詞「V1+詰める」の用例数は非常に限られており (*投げ詰める、*揉み詰める、*浸し詰める、*流し詰める、など)、その前項動詞には何らかの意味的制約が課されていると考えられる。本動詞の「詰める」の意味特徴は、複合動詞「V1+詰める」の結合制約の解明にどのような示唆を与えているのかについて、さらに検討する必要があると考えられる。

2.3. 課題提示

序論では簡単に触れたが、本稿は複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の意味に関する様々な問題を、認知言語学的な視点から論じるものである。具体的な課題を提示する前に、認知言語学に基づくアプローチの指針となる基本理念について確認しておきたい。

Tyler (2012) は、認知言語学的なアプローチの指針として、以下の 4 つの基本理念を挙げている。

- a. 語彙と文法に明確な区別はない。
- b. 意味は、周りの世界と私たちとの日々のインタラクション、そして私たちの身体性に根ざしている。
- c. 言語ユニットはカテゴリーを形成する。
- d. 言語は使用基盤である。

(Tyler2012, 和訳は中村 (2023: 24-31) による)

これらの基本理念を踏まえ、上記で述べた先行研究の残された課題を基に、「V1+入れる/込む/詰める」の意味に関する本研究で扱う課題を、「多義性」 (polysemy)、「類義性」

(synonymy)、そして「創造性」(creativity) の 3 つの視点から提示する。

2.3.1. 「V1+入れる/込む/詰める」の多義性に纏わる課題

日本語の多義語をめぐる諸問題について、様々な方法から分析・記述した代表的な研究として、糸山 (2001, 2010, 2019, 2020, 2021)、糸山・深田 (2003) が挙げられる。糸山 (2021) では、多義語分析において明らかにすべき課題として、以下の 4 点が示されている。

- 1) 何からの程度の自立性を有する複数の意味 (多義的別義) の認定
- 2) プロトタイプ的意味の認定
- 3) 複数の意味の相互関係の明示
- 4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

(糸山 2021: 15)

本稿が考察対象とする「V1+入れる/込む/詰める」は、多義語であると同時に、2 つの動詞が結び付いて成立する複合動詞である。特に「語彙的複合動詞」においては、V1 と V2 の形態的緊密性²³がより強く、2 つの動詞の組み合わせには厳しい制約が課される。また、複合動詞全体の意味は、必ずしも構成要素の V1 と V2 の意味の総和には還元されるわけではない。このような多義語分析の課題と語彙的複合動詞の意味的特徴を踏まえ、本稿では、次の 3 つの課題に取り組むことにする。

- (a) 「V1+入れる/込む/詰める」に対応する本動詞の意味的特徴を確認する。
- (b) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義を認定し、各意味における V1 と V2 の意味関係、および前項動詞の意味特徴を明らかにする。
- (c) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義の間の水平的な意味の関連性、および意味拡張の認知的メカニズムを明らかにする。また、各意味が共通するスーパースキーマスキーマ的な意味を認定し、垂直的な意味の関連性を解明

²³ 影山 (1999) によれば、「語の形態的緊密性」とは、語の内部に統語的な要素を挿入できない性質を指す。統語的複合動詞は、表層構造では 1 語に融合しているが、深層構造では 2 語として扱われる。一方、語彙的複合動詞は、V1 と V2 が結びついて 1 つの出来事を表すものである。統語的複合動詞では、V1 を代用形「そうする」に置き換えたり、受身形に変えたりすることが可能であるのに対し、語彙的複合動詞ではこれらの操作ができない。この違いが、語彙的複合動詞における「語の形態的緊密性」の特徴を際立たせていると考えられる。

する。最後に、「V1+入れる/込む/詰める」それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」および「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示する。

2.3.2. 「V1+入れる/込む/詰める」の類義性に纏わる課題

「V1+入れる/込む/詰める」の多義性の問題を個別に解明した後、それらの意味的共通点と相違点に焦点を当て、類義性に纏わる諸課題に取り組むことにする。

前述のように、「V1+入れる/込む/詰める」は、いずれも「内部移動」を基盤としているものの、多義性の形成プロセスにおいて、異なる特徴を示している。本稿は特に次の特徴に注目したい。

(48) 「V1+入れる/込む/詰める」の前項動詞には、「内部移動」という基本義および拡張義において、互いに重なるものもあれば、いずれか一方にのみ結合するものも見られる。

基本義の場合、前節で確認したように、「～入れる」は純粋な「内部移動」を表す後項動詞であるのに対して、「～込む」、「～詰める」は、「内部移動」以上のニュアンスを含む後項動詞である。こうした意味の違いは、前項動詞との結合における意味的制約に反映されると考えられる。

ここではまず、「～入れる」と「～込む」に結合する前項動詞について見ていく。「～込む」の意味分類に関して、松田 (2004) は姫野 (1999) が提唱した「内部移動」をさらに A タイプと B タイプの 2 つのタイプに分類している。A タイプの前項動詞には、「流れる、駆ける、逃げる、踏む、書く、投げる、運ぶ、取る、編む、押す」のように「内部移動」の意味を含んでいない動詞が現れ、「～込む」と組み合わせると、「～込む」の 2 つの意味要素「 α 」と「 β 」のうち、「 α 」の部分がプロファイルされている。一方、B タイプの前項動詞には、「泊まる、乗る、入る、住む、飲む、吸う、詰める」など、すでに「内部移動」の意を含んでいる動詞が現れ、「～込む」と組み合わせると、「 β 」の部分がよりプロファイルされている。

これらの前項動詞と類義表現の「～入れる」との組み合わせについて考えてみると、B タイプの前項動詞はすでに「内部移動」の意を含んでおり、「 α 」という意味要素を持つ「～入れる」との組み合わせは意味的に重複するため、言語の経済性に反し、複合動詞として成立しにくいと考えられる。実際に確認したところ、(49=(29)) に挙げられている「V1+込む」

の前項動詞のすべてと、「～入れる」との組み合わせはデータベースには見られない。

(49) (自動詞) 泊まり込む、乗り込む、入り込む、もぐり込む、住み込む、上がり込む、

染み込む、紛れ込む

(他動詞) 飲み込む、吸い込む、しまい込む、詰め込む、植え込む、埋め込む、

溜め込む、教え込む、抱き込む

一方で、A タイプの前項動詞は、理論上には「 α 」という意味要素のみを持つ「～入れる」と意味的に結合可能であるはずだと考えられるが、松田 (2004) が提示した A タイプの「～込む」24 語のうち、後項動詞を「～入れる」に置き換えて複合動詞として成立するのは 14 語であり、残りの 10 語は「～入れる」との組み合わせがデータベースに見当たらない。

(50) A タイプの「～込む」との置き換え

見つかった例：踏み入れる、書き入れる、投げ入れる、呼び入れる、運び入れる、

流し入れる、取り入れる、誘い入れる、編み入れる、押し入れる、積

み入れる、引き入れる、追い入れる、混ぜ入れる (14 語)

見当たらない例：*流れ入れる、*駆け入れる、*逃げ入れる、*怒鳴り入れる、*忍

び入れる、*殴り入れる、*炊き入れる、*送り入れる、*持ち入れ

る、*折り入れる (10 語)

「～込む」のコア的意味には、松田 (2004) が指摘した Y 領域に入る「 β 」段階が含まれているため、置き換えが可能な語彙項目であっても、意味やニュアンスにおいて差異が生じる。具体的にどのような差異が生じたのかについては、目的語に現れる被動作主名詞や、移動先に現れる場所名詞句など、構文全体の意味的特徴や使用文脈を含めて詳しく検討する必要がある。また、「流れ入れる」(非対格自動詞+他動詞) のような他動詞調和の原則に違反する語彙項目を除き、他の組み合わせが見当たらない理由についての検討が求められる。

同様の疑問は、「～詰める」と「～入れる」、および「～詰める」と「～込む」の関係にも存在する。

拡張義について、序章で述べたように、「～詰める」のタイプ頻度²⁴は15語で、この3つの複合動詞の中で最も低い。それにもかかわらず、「～詰める」は「～込む」と同様に、「内部移動」から多様な意味への意味広がりを持つ多義的な複合動詞である。(51a-c) が示すように、「～込む」とも「～詰める」とも結合する前項動詞もあれば、(52a-d)が示すように、「～込む」と結合するが、「～詰める」とは結合しない前項動詞も見られる。

- (51) a. 部屋の隅々まで床暖房パネルを敷き込むことができます。 (cf. 敷き詰める)
b. 教育とは人を自殺に追い込むためになされるものなのかと驚いてしまう。 (cf. 追い詰める)
c. 彼はスープを一晩煮込んだ。 (cf. 煮詰める)

(= 1.1 節 (2))

- (52) a. 看護婦は傷口に薬を塗り込んだ。 (cf. #*塗り詰める)
b. 作業員は杭を地面に突き込んだ。 (cf. *突き詰める)
c. 彼は、自分の靴を磨き込んで、ピカピカにした。 (cf. #*磨き詰める)
d. 子供たちはその話をすっかり信じ込んだ。 (cf. #*信じ詰める)

(= 1.1 節 (4))

さらに、「～詰める」と結合する前項動詞の中には、「～込む」と結合しそうでありながら、実際にはデータベースに収録されていないものとして、「通う」、「煎じる」、「問う」、「食う」などが挙げられる。

これらの特徴を踏まえ、類義性をめぐる課題を以下のように提示する。

- (d) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義に着目し、共通して結合するV1と、いずれか一方にしか結合しないV1の意味的特徴を分析することで、「V1+入れる/込む/詰める」の多義形成における共通点と相違点を明確にし、それぞれ結合制約を検討する。

²⁴ 「タイプ頻度」という概念は「トークン頻度」とともに、用法基盤モデル (Usage-Based Model) において重要な概念である。個々の具体的な言語表現の生起例を数えることで得られる「トークン頻度」とは違つて、「タイプ頻度」はどれだけ異なる種類の表現が出てきたかを数える (早瀬・堀田 2005: 79)。本稿では、1つの後項動詞と結合する前項動詞の数を指す。

このように、「V1+入れる/込む/詰める」の前項にどのような動詞が来るのかのみならず、その前項にはどのような動詞が来ないのか、さらに共通部分と異なる部分の特徴を分析することで、「V1+入れる/込む/詰める」の意味的異同がより一層明確になり、また、意味分類の妥当性を検証することも可能である。

2.3.3. 「V1+入れる/込む/詰める」の創造性に纏わる課題

早瀬・堀田 (2005: 53) が指摘しているように、現実世界での言語表現は、コミュニケーション活動の文脈、場面、状況と密接に結びついて存在するものである。近年の認知文法でも、言語の使用実態に近い形で、具体的な使用場面との関わりから言語表現を分析する方向性が示された (Langacker 2012, 2016)。しかし、従来の言語学においては、使用文脈や場面のような要素は、二次的なもの、あるいは「ノイズ(雑音)」として扱われ、後回しにされてきた。そのため、言語研究の考察対象は、文法規則に基づいて産出される範囲内の言語データに限られている。複合動詞の研究も同様であり、「V1+入れる/込む/詰める」に関する先行研究の多くは、データベースや国語辞書に掲載されている、いわゆる「慣習化(conventionalization)」²⁵された用例のみを記述分類の対象としてきた。その一方で、話者が談話の流れをもとに作り出した例や、慣習化にまだ辿り着いていない例に関しては、分析対象とされてこなかった傾向がある。

例えば、姫野 (1999) では、複合動詞の結合性を分析する際、「話し込む」の組み合わせは容認される一方で、「言い込む」や「語り込む」といった組み合わせが容認されないとされている。Google で簡易検索を行うと、「言い込む」が 276 例²⁶、「語り込む」が 805 例ヒットする。(53-56) は、「言い込む」と「語り込む」の使用実例を示している。

(53) 私は、自分の考えをマシンガントークで相手に言い込むタイプです。言葉はかなり鋭いので、相手をズタズタに傷つけます。しかしそれはその場限りで、引きずりませんし、蒸し返すこともありません。

(『Yahoo!知恵袋』²⁷ 最終検索日 2024/10/10)

²⁵ 本稿は、便宜上、データベースに収録されている項目を「慣習化(conventionalization)」²⁵されたものとして扱う。一方、データベースに収録されていない項目は、まだ慣習化されていないか、容認不可能なものとみなす。

²⁶ ここで注意されたいのは、「言い込む」は 276 例ヒットするが、(42) のような用法が多数確認される。その多くは「言いめる」、または「言いくるめる」との混同である可能性が高いと考えられる。

²⁷ https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11188103091

(54) 授業でインプットしたものを音読して言い込むことが習慣になっているので、言い込んだフレーズを無意識的に口にしていたり、相手の言葉をキャッチできたりする機会が増えました。

(『受講者様の声』²⁸最終検索日 2024/10/10)

(55) 「学び合い」の時間に関して、その意義を生徒に語り込むとともに、生徒たちの活動状況をしっかり見とり、生徒の活動意欲を高める言葉かけを行ったか。

(『令和 5 年度 学校評価(2 学期末自己評価【職員】)集計結果』²⁹最終検索日 2024/10/10)

(56) 現代は、「本当の友だちを作りづらい時代」ともいわれますが、そんな時代だからこそ友だちと向かい合って、「将来の事」や「身の回りに起こっている事」「共通の趣味」等についてじっくり語り込む時間を作ってみてください。

(志布志私立志布志中学校/令和 2 年 2 月 17 日『友だちつくりは、語り込みから』³⁰
最終検索日 2024/10/10)

つまり、辞書に掲載されていない用例であっても、実際の日本語話者の言語使用で、具体的な使用コンテクストを適切に設定すれば、元来容認されなかった語例も、一部の日本語母語話者にとって容認されやすくなることがわかる。

このような新規表現の創出過程に関して、日本語母語話者は既存の「V1+込む」の用法から抽象的なスキーマを取り出し、そのスキーマをもとに新しい組み合わせを即興的に作り出していると考えられる。したがって、すでに慣習化されている語彙項目の意味用法のみならず、特定の場面において創造的に用いられる表現にも注目することが求められる。

そこで本稿では、言語は使用基盤であるという観点を採用し、複合動詞の容認性を判断する際には、コミュニケーション活動における文脈、場面、状況の相互作用を重視する必要があると考える。また、容認性が固定的ではなく、段階的であることを前提とする。

このような言語観を踏まえて、「V1+入れる/込む/詰める」の「創造性」をめぐる以下の課題を提示する。

²⁸ <https://www.vectorinternational.ca/minicourse/>

²⁹ <https://jh.higo.ed.jp/yatuljhs/wysiwyg/file/download/19/696>

³⁰ <https://424.ciao.jp/shibushi-jhs/2020/02/2058/>

- (e) 辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている用例に注目し、その使用を可能にする談話上のコンテクストを分析する。そして、前項動詞と後項動詞の間に生じる不整合性はどのように解消されているのかを解明する。「V1+入れる/込む/詰める」の慣習化されるまでの動的な側面、とそれらの生産性の違いを示す。
- (f) 「V1+入れる/込む/詰める」の使用実態に基づき、ヒット数が多い語例からヒット数が比較的に少ない語例、さらに実際の用例が観察されない語例を提示することで、「V+入れる/込む/詰める」の容認性が段階的なものであることを主張する。複合動詞の意味形成、および、言語使用の創造性を反映するカテゴリ一化の動的な側面を示す。

2.4. 第2章のまとめ

本章では、「V1+入れる/込む」、および、「詰める」、「V1+詰める」に関する先行研究をそれぞれ概観した。「V1+入れる/込む」については、意味を詳細に分類する記述的研究から、多義構造のメカニズムを解明するための語彙概念構造、コア図式、主体化、イメージ・スキーマなど、多様なアプローチが採用された研究を取り上げた。また、「詰める」、「V1+詰める」については、壁塗り交替の視点に基づく意味分析を中心に概観した。しかしながら、「V1+入れる/込む/詰める」の意味的共通点と相違点に焦点を当てた包括的な考察が十分にはなされていないという課題が残されている。

特に、「V1+込む」の多様な意味の認知的・経験的基盤として「容器」という概念が指摘されているものの、それを統一的な認知原理に基づいて整理し、同様に内部移動事象を基盤とする「V1+入れる/詰める」の多義構造との共通点と相違点を包括的に捉えた研究はほとんど見られない。また、先行研究の多くが慣習化された表現のみに焦点を当てているのに対し、本研究では、まだ慣習化されていない複合動詞にも着目し、複合動詞の結合が容認されるか否かの判断が使用基盤的であることを強調する。これにより、「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成と創造性を反映したカテゴリー化の動的側面を明らかにすることを目指す。

以上の課題を踏まえ、本研究では「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)の3つの視点から、6つの問い合わせを設定した。これらの問い合わせに答える

ための理論的枠組みとして、イメージ・スキーマとコンストラクション形態論を導入する。次章では、これらの理論的枠組みを詳しく紹介し、研究の基盤を形成する。

第3章 理論的枠組み

2章の課題提示では、Tyler (2012) が示した認知言語学的なアプローチにおける4つの基本理念(以下に再掲)を基礎として、「V1+入れる/込む/詰める」の意味に関する3つの重要な視点—「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)を提示した。

- (1) a. 語彙と文法に明確な区別はない。
b. 意味は、周りの世界と私たちとの日々のインタラクション、そして私たちの身体性に根ざしている。
c. 言語ユニットはカテゴリーを形成する。
d. 言語は使用基盤である。

(Tyler 2012, 和訳は中村 (2023: 24-31)による)

本章では、これらの課題を検討するため、本研究が依拠するいくつかの理論的枠組みについて紹介する。

まず、3.1節では、言語表現の多義性や意味拡張のプロセス、異なる語同士の意味的類似性を体系的に説明するために不可欠とされる身体的・経験的基盤である概念構造—「イメージ・スキーマ」(image schema)を取り上げる。主なイメージ・スキーマの種類や、イメージ・スキーマと語彙的意味との関わりを確認したうえで、これらのイメージ・スキーマがそれぞれ独立した存在ではなく、相互に関わり合いながら、言語表現における多義性、類義性、創造性といった意味に関わる諸問題に密接に関わっていることを示す。最後に、これらのイメージ・スキーマの性質に基づき、本稿が扱う「内部移動」という事象に関わるイメージ・スキーマのネットワークを提案する。

続いて、3.2節では、まず、語レベルの意味と形式のペアリングをコンストラクションとして捉える理論、「コンストラクション形態論」(Construction Morphology)について概観したうえで、本稿の考察対象である「V1+入れる/込む/詰める」もコンストラクションの一種として捉えられることを示す。また、陳・松本 (2018) が提案した日本語の複合動詞の階層的ネットワークを参考にし、本稿において、「V1+入れる/込む/詰める」の意味カテゴリーの階層的構造を可視化する構文的多義ネットワークを提案する。最後に、コンストラクション

形態論の使用基盤 (usage-based) 的言語観を取り上げる。「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成と言語使用の創造性を反映するカテゴリー化の動的な側面は、頻度や構文スキーマの定着度といった要因との関連から説明できることを示す。

3.1. イメージ・スキーマ (image schema)

前述のように、認知言語学において、「意味は、周りの世界と私たちとの日々のインタラクション、そして私たちの身体性に根ざしている」(Tyler2012), (和訳は中村(2023: 24-31)による) とされている。言い換えると、言葉の意味は、我々言語主体の外界に対する主観的な認知と我々の身体的経験によって動機づけられ、外界認知に関わる我々認知主体の経験的基盤を無視して理解していくことは不可能であると考えられる。

外部世界とのインタラクションに関わる私たちの基本的な経験に関して、山梨 (2000:120) では、その一部として、以下のようなタイプのドメインがあると示されている。

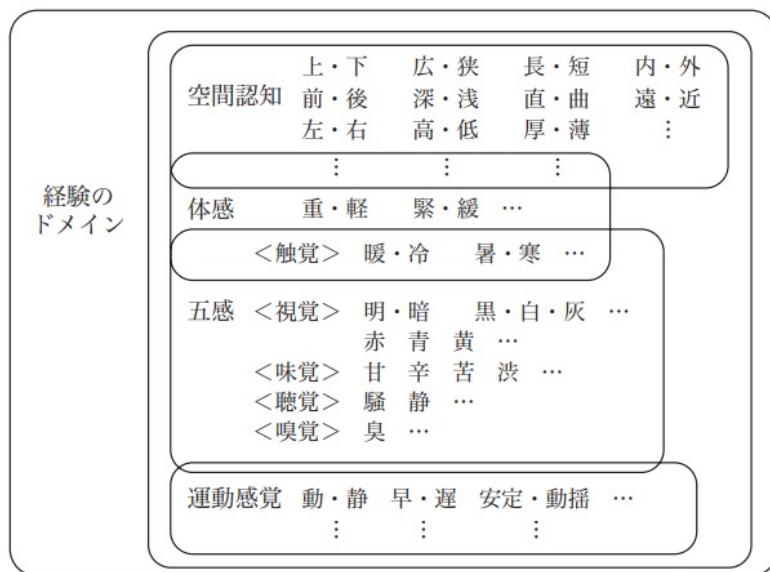


図 3-1: 外界との相互作用に関わる主体の経験のドメイン (山梨 2000: 120)

図 3-1 では、外界と関わる私たちの基本的な経験の下位分類として、「空間認知」に関するドメイン、「体感」に関するドメイン、「五感」に関するドメイン、「運動感覚」に関するドメインの 4 つが挙げられている。山梨 (2000) によれば、これらの下位ドメインの間の区別は絶対的なものではなく、互いに重なり合う部分もある。私たちは、このような空間認知や運動感覚といった具体的な経験を通して、外部世界を意味づけ、そこから意味のある構造

を取り出している。この構造は「前概念的構造」(preconceptual structure)と呼ばれる (Lakoff 1987: 267-268)。Lakoff (1987)によると、「前概念的構造」には、少なくとも2つの構造が存在する。一つは、表象レベルとして位置付けられる、外部世界の個々の対象に関わる具象性のあるスキーマである。もう一つは、本稿が取り上げる対象で、ボトムアップの処理に基づいて形成される、より抽象レベルの「イメージ・スキーマ」(image schema)である。

イメージ・スキーマとは、我々の日常の行動、知覚、概念の中に繰り返し現れるパターンや形、規則性のある単純な構造である (Lakoff 1987, Johnson 1987, Mandler 1992)。イメージ・スキーマの種類に関する明確な見解は定まらないが、言語学における先行研究では、代表的なイメージ・スキーマとして、以下のようなものが挙げられる (Evans and Green 2006)。

- (2) 空間: 上下 前後 左右 遠近 中心周辺 接触 直線 垂直
- 包含: 容器 内外 表面 満空 内容
- 移動: 速度 起点/経路/目標
- 均衡: 軸均衡 両天秤均衡 点均衡 物理的力の均衡
- 力: 強制 妨害 対抗力迂回 障害の除去 力の可能化 牽引 抵抗
- 統一/多数(性): 融合 集積 分離 反復 部分 全体 個体集合 接触
- 同化: 調和 重ね合わせ
- 存在: 除去 境界線のある空間 循環 対象 過程

(Evans and Green 2006, 和訳は篠原 (2019: 295) による)

このようなイメージ・スキーマは、言語表現の意味拡張プロセスや創造的側面に深く関わっていると考えられる。特に、メタファー的写像やイメージ・スキーマ変換といった認知的操作が加わることで、言語表現の空間物理的な意味用法から非空間物理的な状況の記述まで、複雑な概念体系の構築に重要な役割を果たしている。本稿が取り扱う多義的複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の多義ネットワークの構築においても、こうしたイメージ・スキーマの役割が例外なく働いていると主張したい。

本節では、まず「V1+入れる/込む/詰める」の意味分析に関連して、<容器>のイメージ・スキーマを取り上げ、その「空間的側面」と「機能的側面」の両方が言語表現の意味解釈や多義形成のプロセスを説明する上で不可欠であることを示す。次に、言語表現の意味拡張を動機づける認知的操作として、メタファー的写像、イメージ・スキーマの背景化、イメージ・

スキーマ変換を概観する。最後に、<容器>に関連する<中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>、<起点-経路-着点>、<尺度>といったイメージ・スキーマが次元の変換や異なる主体的視点を介して相互に関連し、1つのネットワークを形成することを示し、それに基づき「内部移動」の事象におけるイメージ・スキーマの相互関係をネットワークとして提示する。

3.1.1. <容器>のイメージ・スキーマの両側面

我々人間は自分の身体構造、また日常経験に基づき、「何かの中に何かがある」というイメージがよく浮かぶ。この抽象的なイメージを構造化したものが<容器>のイメージ・スキーマと呼ばれる。

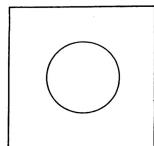


図 3-2: <容器>のイメージ・スキーマ

図 3-2 が示すように、<容器>のイメージ・スキーマは、構造的に、<内部>、<外部>、および<内部>と<外部>を仕切る<境界>の 3 つの要素からなっている (Lakoff 1987: 272)。この構造自体は視覚的に 2 次元の図として表示されているが、2 次元の図には表示できない視覚情報以外のマルチモーダルな情報も組み込まれている (Johnson 1987; Lakoff 1987; Clausner and Croft 1999; 山梨 1995, 2000; 深田 2003, 2008, 2020; 鍋島 2002, 2003)。こういったマルチモーダルな情報は、こういったマルチモーダルな情報は、Johnson (1987: 22) では、論理的含意 (entailment)、Vandeloise (1991, 1994)、Tyler and Evans (2003)、深田 (2003) では、《内包》の機能的要素、機能的側面 (functional element) と呼ばれている。

Tyler and Evans (2003) は、英語の空間辞 *in* の意味を我々が何度も経験する「トラジェクターがランドマークによって取り囲まれている」という空間的シーン (spatial scene) との関わりから分析している。この空間的シーンは図 3-3 が示すような TR-LM 空間配置を表すだけではなく、《内包》という有意味な概念をも表し、「配置」と「機能」という 2 つの要素で構成されていると述べている。Tyler and Evans (2003) (国広 (訳) 2005: 61) によれば、「配置」の要素には、トラジェクター、ランドマーク、そしてトラジェクターとランドマークを表示する概念的空間関係という 3 つの要素が含まれ、「機能」的要素は空間配置に置かれたトラ

ジェクターとランドマークの相互作用的な関係を映し出すということである。

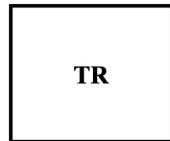


図 3-3: 《内包》の空間配置 (Tyler and Evans 2003: 61)

通常、1つの空間的シーンは複数の機能的要素と結びついており、Tyler and Evans (2003) (国広 (訳) 2005: 221)、《内包》の空間配置に含まれる機能的要素として、「制約」、「支持」、「保護」などの機能的要素を挙げている。

Containment itself is a complex relation, involving numerous functional consequences, In the guise of containers, bounded LMs constrain and delimit movement of their TRs, as in a coffee cup which constrains the coffee it contains to a specific location, or a prison cell, which restricts the movements of a convict, In certain circumstances, constraining movement can be understood as providing support, thus a cut flower can be held in an upright position as a result of being placed in a vase. If the boundaries of the container are opaque, they prevent us from seeing beyond them, or the interior area from being seen by entities outside, as in a walled garden or a windowless room. Containers can also provide protection, as with a jeweller's safe.

(Tyler and Evans 2003: 179-180)

内包それ自体は複雑な関係性であり、そこに幾つもの機能的影響が含まれている。有限ランドマークは“容器”の形をとってトراجエクターの動きを制約し、その移動範囲を限定する。コーヒーカップが中に入っているコーヒーを一定の位置にとどめたり、刑務所の独房が囚人の行動を制限することなどがその例である。動きに対する制約が‘支持’を与えるものとして理解されるような状況もある。切り花がまっすぐ立っていられるのは花びんに入れられていることの結果なのである。容器の境界が不透明なものであると、容器の中から外側が‘見えなく’なったり、その内部が外にいる存在物からは見えなくなったりする。壁で囲まれた庭や窓のない部屋

などがどの例である。容器はまた‘保護’を与えることもある。宝石商の金庫がその例である。

(国広(訳)2005:221)

<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面に関する議論は、Johnson(1987)でも行われている。Johnson(1987:19-22)では、<容器>のイメージ・スキーマは少なくとも次の5つの機能的要素を持つと述べている。

- (i) 容器は外部からの力を遮断または和らげる。
- (ii) 容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる。
- (iii) 容器の中のものは比較的位置が変わらない。
- (iv) 容器の中のものは内部のものには見やすく、外部のものには見にくい。
- (v) 容器には推移性³¹が働く。

(Johnson 1987: 19-22, 和訳は鍋島(2002: 75)による)

以上を踏まえて考えると、本稿が考察対象とする、内部移動という物理空間経験に基づく複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の多義性、類義性問題は、内部移動という空間的シーンに埋め込まれている私たちの空間理解、すなわち、その機能的側面との関連で捉えられることが示唆される。

関連する研究として、深田(2003)が挙げられる。深田(2003)によれば、従来の研究では、イメージスキーマの空間的側面が強調され、機能的側面に焦点が当てられることは少なかったと指摘し、「かける」、「注ぐ」、「～込む」、「入れる」、「込める」、「詰める」の意味的差異を、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面との関連で捉えている。

深田(2003)の結論を先に述べておくと、「～込む」、「入れる」、「詰める」の3つとも<容器>のイメージ・スキーマを喚起しているが、「入れる」では、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面のみが顕在化しており、「～込む」と「詰める」では、空間的側面に加えて機能的側面も両方顕在化していると主張している。

³¹ ここでいう「推移性」とは、「鞄の中にある財布の中の硬貨は必ず鞄の中にある」といえるような関係性を指す。

- (3) 母親が息子に愛情を {かける/注ぐ/注ぎ込む}。
- (4) 警察に追われた犯人が山の中に {逃げた/逃げ込んだ}。
- (5) 男は、ピストルに弾を {入れた/入めた}。
- (6) {*皿/箱} にりんごを詰める。

(深田 2003: 343-344)

(3) の「かける」と比べ、「注ぐ/注ぎ込む」を用いる場合、<息子>が愛情を内部にためて保存することのできる対象、すなわち、ある種の容器として捉えられていることがわかる。これは<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面によって導き出されたものであると考えられる。

また、(4) では、「逃げる」も「逃げ込む」も、同じく<山>を<容器>として考えているが、「逃げる」の場合、<山の中>は単なる移動の到達点として機能しており、<容器>の内部という場所性が喚起されているのに対し、「逃げ込む」の場合、<山の中>は単なる移動の到達点だけでなく、外部から内部のものを見えなくしたり、外部からの力を内部に伝わるにくくしたり、あるいは、内部のものを外部から守ったりする空間として捉えられている。

(5) では、「入れる」は、<弾のピストル>の内部への移動を表している。それに対し、「込める」を用いる場合、弾がカラカラと動くことなくきちんと装填されたことを表すため、内部のものを固定するという<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化されていると述べている。

(6) の「詰める」は<箱>と共に起するが、平面的で、中に入れられたものを固定することができない<皿>とは共起しない。このことから、「詰める」も<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面を顕在化させる言語表現であると主張されている。

まとめると、「入れる」、「詰める」、「～込む」はそれぞれ行為の対象に対して、<容器>のイメージ・スキーマを喚起する言語表現である。「入れる」は空間的側面のみを顕在化している一方、「詰める」と「～込む」は、空間的側面と機能的側面両方を顕在化しているとしている。

深田 (2003) によれば、一般に、容器性が高くなればなるほど、機能的側面が顕在化し、容器性が低くなればなるほど、機能的側面が希薄化し、単に<境界>として機能するようになる。これに基づき、「入れる」、「詰める」、「～込む」の容器性の違いを図 3-4 のように示

す。

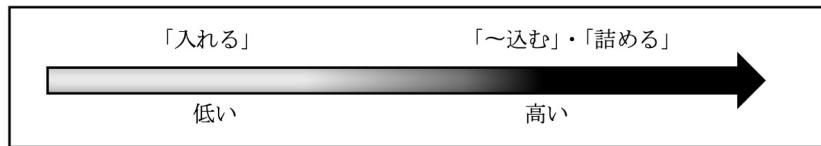


図 3-4: 「入れる/～込む/詰める」の容器性の比較 (深田 (2003) を基に、筆者が作成)

3.1.2. イメージ・スキーマと認知操作

このような具体的な身体経験をもとに作り上げた＜容器＞のイメージ・スキーマは、様々な認知的動作を加えて、より抽象的な概念の形成に動機づけられる。本節では、日常言語の意味拡張に主に関わる 2 つのタイプの認知操作、「メタファー的写像」と「イメージ・スキーマの背景化」の 2 つのタイプの認知操作を概観する。

人間は「比較」という基本的な認知能力に基づき、異なる概念にあるものの類似性を取り出す能力を持っている。メタファーは、この類似性に基づく連想を通じて、把握しにくい抽象的な概念を、把握しやすい具体的な概念に喩えて理解するプロセスである。Lakoff and Johnson (1980) は、伝統的なメタファーを認知という観点から捉え、彼らはメタファーを、起点領域 (喻えるものが存在する領域) から目標領域 (喻えられるもの) へのメタファー的写像 (metaphorical mapping) として捉えている。このメタファー的写像に不变性原理 (Invariance Principle) という制約が課される (Lakoff 1993: 215)。

Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain, in a way consistent with the inherent structure of the target domain.

(メタファー写像は目標領域の内在的構造に合致する仕方で起点領域のイメージ・スキーマ構造を維持する³²。)

(Lakoff 1993: 215)

＜容器＞のイメージ・スキーマのメタファー的写像も例外ではなく、図 3-5 に示されるよ

³² 和訳は杉本 (2000) による。

うに、トポロジー的な構造が維持されたまま、物理的空間領域から、社会的空間、心理的空间といった抽象的な概念領域へと拡張されている。

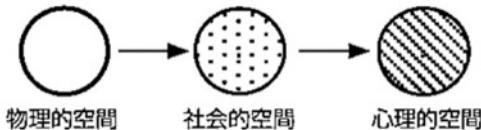


図 3-5: <容器>のイメージ・スキーマの変容とトポロジー的継承 (山梨 2000: 142)

<容器>のイメージ・スキーマを社会的空間、心理的空間といった抽象的な概念領域に適用した場合の実例は以下の通りである。

【物理的な空間領域】

- (7) a. タンクに水を入れる。
b. タイヤの空気を抜く。
c. 筆入れから鉛筆を取り出す。

【社会的な集団としての容器】

- (8) a. 彼女は新しい劇団に入った。
b. 鈴木氏はその政党から出ていった。
c. あのチームは出入りが激しい。

【心理的な空間領域としての容器】

- (9) a. どうもいいアイディアがねり出せない。
b. 彼は今そのことで頭一杯だ。
c. その考えを頭に叩き込んでおけ！

(山梨 2000: 141-142)

このように、<容器>のイメージ・スキーマのメタファー的写像は、「入れる」、「抜く」、「取り出す」、「入る」、「出入り」、「練り出す」、「一杯だ」、「叩き込む」といった表現の意味拡張の基盤となっている。この基盤は、動詞や名詞といった品詞の違いや、自動詞・他動詞の区別、さらには複合語かどうか、といった品詞の枠組みを超えて、これらの表現の共通する意味の広がりを支えている（山梨 1995, 2000）。

複合動詞「V1+入れる/込む」においても、<容器>のイメージ・スキーマのメタファー的写像による意味拡張が確認できる。

- (10) a. 彼らは井戸の水をバケツに汲み入れた。 (物理的領域)
b....できるだけ多くの人たちの意見を汲み入れたいと思います。 (抽象的領域)
- (11) a. 柱に釘を打ち込んだ。 (物理的領域)
b. 彼は、留学のための勉強に打ち込んだ。 (抽象的領域)

次に、「<容器>のイメージ・スキーマの背景化」という認知操作を概観する。背景化について、山梨(2000)は、「イメージ・スキーマが比喩的に具象レベルから抽象レベルに変容していくのではなく、そのイメージ・スキーマの指示する世界の実存性それ自体が背景化され、心理的な実在性が薄れている」と述べている(山梨 2000:143)。

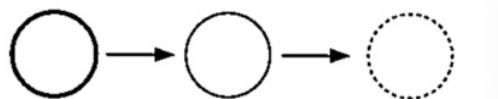


図 3-6: <容器>のイメージ・スキーマの背景化/ブリーチング (山梨 2000:143)

以下、「いっぱい」という言語表現の意味は<容器>のイメージ・スキーマの背景化によって拡張されている例である。

- (12) a. ポケットに小銭がいっぱいだけど、お札はないよ。
b. モチモチの皮の中に熱々の肉汁がいっぱいの小籠包。
- (13) a. この時期はどこに行っても、観光客がいっぱいだからなあ。
b. 今思えば、学生の頃は楽しい思い出がいっぱいだった。
c. ママ見て!お星様がいっぱい!つかめそう!
- (14) a. あ～あ。やることがいっぱい。目が回る。
b. もう、いっぱい、いっぱいで大変!
c. 予定がいっぱいで、身動きがとれないよ。

(伊藤 2013: 109)

(12)において、「ポケット」「皮の中」といった表現によって、「小銭」と「熱々の肉汁」がどこに位置しているのかは明示されている。一方、(13)では、言語的には明示されていないものの、<容器>として解釈されるものとして、「どこかの行楽地」、「学生時代」、「夜空」が想定される。そして、(14)においては、<容器>に該当するものが存在するか否かは不明瞭である。すなわち、(12)では<容器>のイメージ・スキーマが前景化しているのに対し、(13)では相対的に背景化され、(14)ではさらに背景化されていると考えられる。

ここで、<容器>のイメージ・スキーマが背景化される際に、何が前景化されるのかという疑問が生じると思われる。次節では、前景化されると想定されるイメージ・スキーマを紹介し、またイメージ・スキーマ変換、認知主体が持つ異なる主観的視点から、それらの相互関係について確認する。

3.1.3. 「内部移動」に関わるイメージ・スキーマのネットワーク

3.1.1節と3.1.2節では、<容器>のイメージ・スキーマに焦点を当てて議論を展開してきたが、本稿の考察対象「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成を説明するには、他のイメージ・スキーマとの関連も考慮しなければならない。

2章で紹介した金(2010)の研究では、「～込む」の意味に関わる身体的・経験的基盤として、<容器>のイメージ・スキーマが挙げられている。また、「～込む」が<中心/周辺>のイメージ・スキーマにも関連している点で、「～入れる」とは意味的に異なると指摘している。このように、<容器>のイメージ・スキーマと<中心/周辺>のイメージ・スキーマはしばしば同時に経験され、同じ言語表現の意味に重ね合わせられることが多い研究で示されている(Johnson1987; Clausner and Croft1999; 山梨2000; 深田2003; 伊藤2013など)。これらの研究では、<容器>のイメージ・スキーマと<中心/周辺>のイメージ・スキーマの関係だけではなく、<満/空>、<内/外>、<表/裏>、<出入り>、<部分/全体>、<遠/近>といったイメージ・スキーマとの相互関係も指摘されている。しかしながら、イメージ・スキーマを援用した個別の研究は進展しているものの、従来の研究では多くのイメージ・スキーマが個々に独立したものとして提示されており、それらの相互関係に関しては十分に検討されていない(山梨2000, 2001)。さらに、こうしたイメージ・スキーマの相互関係が、言語表現の多義性や類義性といった意味に関する問題に対して、どのような視点を提供するのかについても、管見では十分に議論されていない。

本節では、<容器>のイメージ・スキーマと関連し合う<中心/周辺>、<満/空>、<遠

/近>、<部分/全体>、といったイメージ・スキーマ、また我々の移動に関する様々な日常経験を通して形成される<起点-経路-着点>、<尺度>について取り上げ、イメージ・スキーマの次元変換、認知主体が持つ異なる主観的視点との関わりから、「内部移動」という事象における相互関係をネットワークという形で示すことを試みる。

- <中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>のイメージ・スキーマ

山梨 (2000) によれば、<中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>のイメージ・スキーマは互いに関連し合っているものであり、<容器>のイメージ・スキーマの下位類に位置付けられている。

まず、<容器>のイメージ・スキーマの内部に視点が置かれることで形成される<中心/周辺>のイメージ・スキーマについて概観する。

<中心/周辺>のイメージ・スキーマは図 3-7 のように表示される。容器の内部の中心点を示すランドマーク (lm) は、トラジェクター (tr) としての対象を場所・空間に位置づけるための参照点を示すものである。左側の tr は lm に近い、容器の内部の比較的に中心的なところに位置するのに対し、右側の tr は lm に近い、容器の内部の比較的に周辺的なところに位置することが示されている。

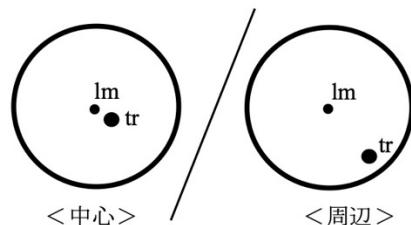


図 3-7: <中心/周辺>のイメージ・スキーマ (山梨 2000: 148)

3.1.1 節で述べたように、イメージ・スキーマは有意味な構造であり、空間的要素だけではなく、機能的要素も含まれている。<中心/周辺>のイメージ・スキーマも例外なく、視覚情報以外のマルチモーダルな情報が組み込まれている。<中心/周辺>のイメージ・スキーマの機能的側面に注目している研究として、深田 (2008) がある。

深田 (2008) は、英語の直示表現 *here*、*there* の遂行的用法への意味発展³³について考察す

³³ 詳細は深田 (2008) を参照されたい。

る際に、<中心/周辺>のイメージ・スキーマの論理的含意 (entailment) との関連で説明している。

(15) <中心/周辺>のイメージ・スキーマの論理的含意

<中心>には、全体を統制する核がある。この核には、他を引きつける力がある。

<中心>が決まれば、<周辺>も自ずと決まる (Lakoff (1987: 274-275) も参照)。

<中心>からどの程度離れるかによって、<中心>に引き付けられる度合いは異なる。<周辺>に行けば行くほど、そこに存在するモノは広く無限に拡散し、お互いを引きつけ合う力も弱まる。

(深田 2008: 203-204)

このような<中心/周辺>のイメージ・スキーマに「中身が詰まっているか否か」という主体的な視点を組み込んでいくと、図 3-8 が示されるように、<満/空>のイメージ・スキーマが形成される (山梨 2000)³⁴。

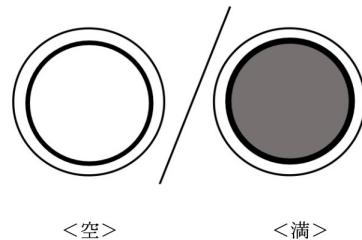


図 3-8: <満/空>のイメージ・スキーマ (山梨 2000: 162)

<虚/実>のイメージ・スキーマが機能している実例は以下の通りである。

(16) a. 彼の頭はからっぽだ。

b. あの本は内容が豊富で面白い。

c. 彼女の頭にはアイディアがいっぱい詰まっている。

³⁴山梨 (2000: 162) では、<虚/実>という訳語を使用し、<full/empty>のイメージ・スキーマを提示している。また、図 3-8 の 2 つの円盤のうち、左側が<実>を、右側が<虚>を表している。本稿で提示する<満/空>のイメージ・スキーマは、山梨 (2000: 162) の図式を一部修正したものである。

d. あの政治家の講演は中味がなかった。

(山梨 2000: 144-145)

(16a) と (16d)では、「頭」、「講演」という<容器>に存在する中身が<空>である。それに對し、(16b) と (16c)では、「本」、「頭」といった容器の中に存在する中身が<満>である。

また、<中心/周辺>のイメージ・スキーマを1次元に変換することで、<遠/近>のイメージ・スキーマが形成される。山梨 (2000: 148) によると、我々人間はある外部世界にある対象を捉える際に、流動的かつ多面的な視点をとっている。<中心/周辺>のイメージ・スキーマには、2次元、3次元的な場所・空間の位置関係に基づく視点が関わっているのに対し、<遠/近>のイメージ・スキーマは1次元的な視点に基づくものである。

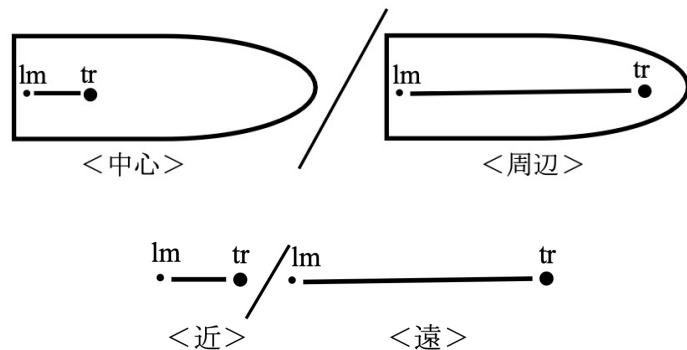


図 3-9: <中心/周辺>と<遠/近>のイメージ・スキーマの次元変換 (山梨 2000: 148 を参考照)

さらに、<容器>という同じ対象を捉えるとき、一体性を持つ統一体に焦点を当てているのか、<容器>の内部にある複数の離散した部分に焦点を当てているのかという主体的視点の違いから、図 3-10 が示された<部分/全体>のイメージ・スキーマが形成される。<部分/全体>のイメージ・スキーマの<全体-部分>の関係は、統一性、一体性の有無にかかわる抽象的な概念が理解される際の背景的なイメージ・スキーマとして機能する (山梨 2000)。

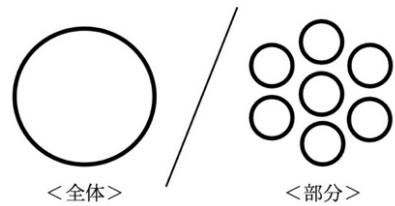


図 3-10: <部分/全体>のイメージ・スキーマ (山梨 2000: 148)

伊藤 (2013) では、以上紹介した<中心/周辺>、<遠/近>、<部分/全体>のイメージ・スキーマと<容器>のイメージ・スキーマとの階層関係を図 3-11 のネットワークで表示している。

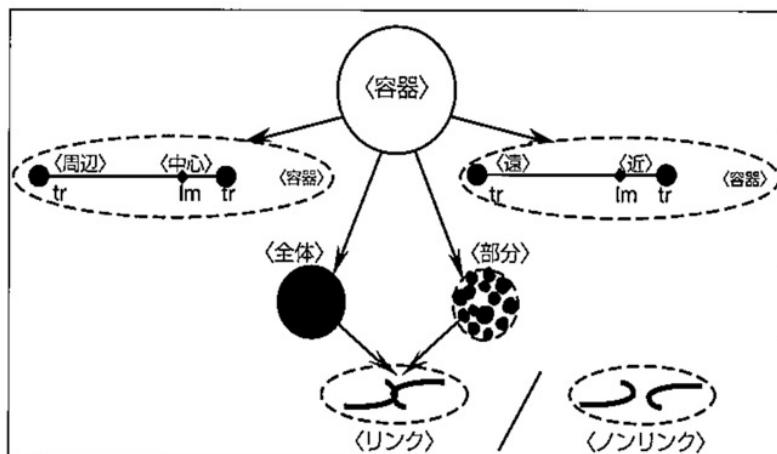


図 3-11: <容器>のイメージ・スキーマを中心としたネットワーク (伊藤 2013: 123)

● <起点-経路-着点>、<尺度>のイメージ・スキーマ

先述した<中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>のイメージ・スキーマのほか、「V1+入れる/込む/詰める」は内部移動を表すことから、我々の移動に関する様々な日常経験を通して形成される<起点-経路-着点>、<尺度>のイメージ・スキーマとも関わっていることが想定される。以下、<起点-経路-着点>、<尺度>のイメージ・スキーマについて概観する。

<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは我々人間の持つ基本的な空間認知から抽出されたものであり、典型的には例 (17) のような空間的領域の移動事象を表す。

- (17) a. I never expected that she would come out of her room. (作例)
 b. I'm looking for an inexpensive flight from Japan to China. (作例)

例 (18) のように、come out、from…to…のような表現を用い、depression、wetのような<変化前の状態>を<起点>として、dryのような<変化後の状態>を<着点>として捉えることもできる。

- (18) a. I came out of my depression.
 b. In the sun, the clothes went from wet to dry in an hour.

(Lakoff and Johnson 1999)

さらに抽象化が進んで、例 (19) が示すように、ある物事の<原因>と<結果>が<起点>と<着点>として捉えられる例もよく見られる。

- (19) a. She is tired from overwork.
 b. The pottery has gone down to a dollar.

(山梨 2001: 187-188)

本来、from、to はそれぞれ<起点>、<着点>を提示する前置詞であるが、例 (17) のように、overwork という<原因>、a dollar という<結果>を提示し、<起点>と<着点>が<原因>と<結果>に写像される。これは<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマを物理的移動から物事の因果関係に拡張するものである。

<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは図 3-12 のように表される。



図 3-12: <起点-経路-着点>のイメージ・スキーマ

<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマの<経路>は、状況によって、図 3-13 のような一次元的な方向性を持つ<尺度>として捉えられうる。



図 3-13: <尺度>のイメージ・スキーマ (Johnson1987)

ここで、Rappaport Hovav (2008) による<尺度> (scale) の説明を参照したい。Rappaport Hovav (2008) では、状態動詞に対する動作動詞の様態動詞と結果動詞を区別するために、基準として、「尺度」という概念を導入している。Rappaport Hovav (2008: 17) は「尺度」という概念を次のように定義している。

尺度とは特定の属性に対する、値の順序づけられた集合である。尺度のある変化は、单一の属性がもつ値の、特定の方向への変化の順序づけられた集合に含むので、その尺度に沿った特定の方向への移動として特徴付けることができる

(Rappaport Hovav 2008: 17, 和訳は出水 (2018: 25) による)

また、Rappaport Hovav (2008) は、「尺度」の下位分類として、「経路尺度」と「特性尺度」を提示している。「経路尺度」とは、何らかの想定される経路上における移動物の位置を値とする尺度である (例: ascend、descend、入る、下るなど)。一方、「特性尺度」とは、モノやコトの状態が動作主の関与によって進行する状態変化の結果が生じる場合、そのモノやコトがもつ性質の値から構成された尺度である (例: warm、温めるなど) (Rappaport Hovav 2008, 和訳は出水 (2018) を参照)。

<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマと<尺度>のイメージ・スキーマいずれも、状況によって、<容器>のイメージ・スキーマに関係している場合がある。

<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマにおける<起点>と<着点>は通常「点」としての一地点として捉えられているが、(20) のような例から、状況によっては、<起点>と<着点>は 2 次元か 3 次元の<容器>としての空間領域を指示する場合もある。

- (20) a. モグラが洞穴から出て繁みに入っていた。

- b. 水が溜め池から川に流れ込んだ。
- c. 彼は街を出て田舎に引きこもった。

(山梨 2000: 152)

山梨 (2000) は、このような関係に基づき、図 3-14 のような複合図式を提示している。

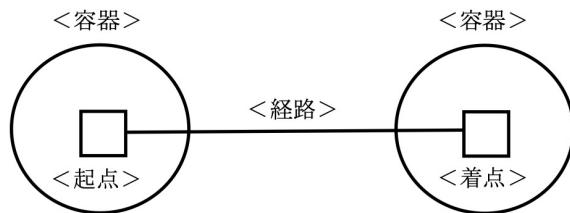


図 3-14: <起点-経路-着点>のイメージ・スキーマと<容器>のイメージ・スキーマの複合図式 (山梨 2000: 152 を参照)

<尺度>のイメージ・スキーマは、<容器>のイメージ・スキーマ、また<中心/周辺>のイメージ・スキーマの下位類として位置付けられる場合がある。つまり、ある<容器>の中に、移動物 tr がより<容器の中心>へと移動することや、モノやコトの状態が<容器の周辺>から<容器の中心>へと深まっていくことが想定される。

「V1+入れる/込む/詰める」は、<容器>の<外部>から、<容器>の<内部>へという方向性を持つ<経路>に沿って、移動することを表すことから、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが喚起されると同時に、<経路尺度>のイメージ・スキーマも喚起されると考えられる。

以上、3.1 節では、<容器>のイメージ・スキーマ、またそれに関連する、<中心/周辺>、<満/空>、<遠/近>、<部分/全体>、<起点-経路-着点>、<尺度>といったイメージ・スキーマを取り上げて概観した。これらのイメージ・スキーマはそれぞれ独立した存在ではなく、次元の変換や同一の身体経験に対する異なる主体的な視点が介在することで互いに関連し合っている存在であることを示した。

山梨 (2000) は、これらのイメージ・スキーマの分布関係の一部を図 3-15 によって、ネットワークで示している。

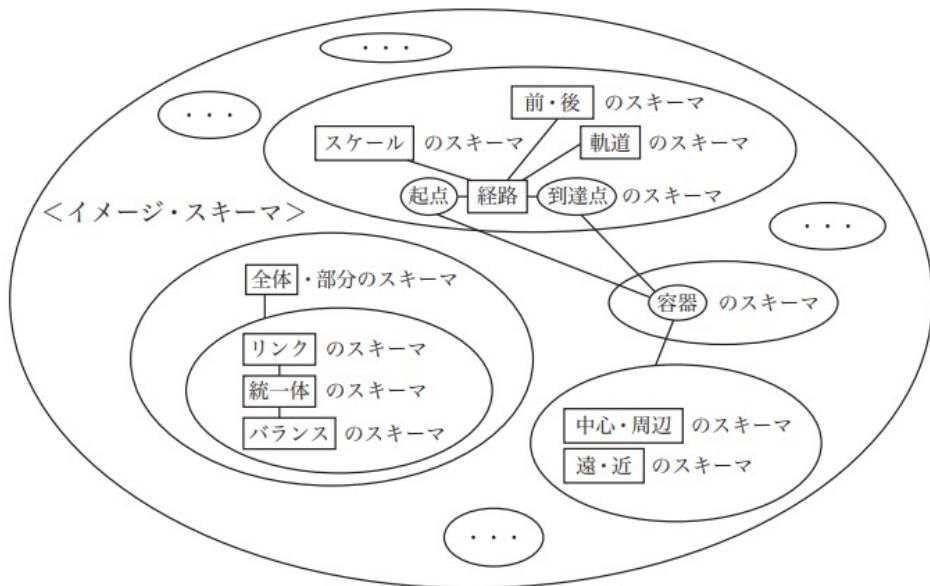


図 3-15: イメージ・スキーマのネットワーク (山梨 2000: 153)

図 3-15 のネットワークを参考にし、本稿は、「内部移動」に関わるイメージ・スキーマのネットワークを以下のように提示する。

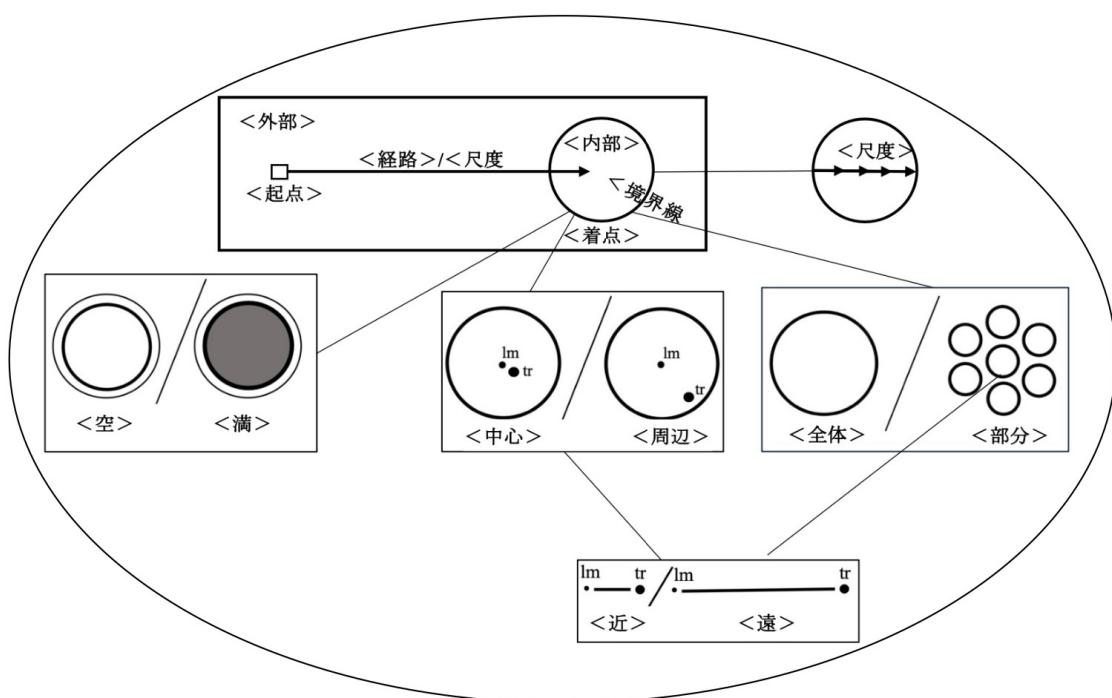


図 3-16: 「内部移動」事象に関するイメージ・スキーマのネットワーク

3.2. コンストラクション形態論 (Construction Morphology)

序章で述べたように、本稿の考察対象である「V1+入れる/込む/詰める」は、日本語の語彙的複合動詞に属し、前項動詞と後項動詞の意味が単純に足し合わされるだけでは説明できず、全体として意味の変容が生じることが多い。したがって、「V1+入れる/込む/詰める」は、前項動詞と後項動詞という 2 つの構成要素が有機的に組み合わさった複合体として機能し、語レベルの「コンストラクション」として捉えることが可能であると考えられる。

3.2 節では、まず「コンストラクション」という概念を語の成り立ちを扱う形態論に適用した「コンストラクション形態論」の考え方を紹介し、日本語複合動詞の研究 (野田 2011; 松本 2011; 陳 2015, 2016) を参考に、「V1+入れる/込む/詰める」の意味カテゴリーの階層的構造を可視化する構文的多義ネットワークを提案する。次に、使用基盤的言語観を取り上げ、構文的多義ネットワークにおける構文スキーマの特徴を確認する。また、「トーケン頻度」と「タイプ頻度」という 2 つの概念を取り上げ、それぞれが上位スキーマの定着性や言語パターンの生産性に与える影響を解説し、「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成と言語使用的創造性を反映するカテゴリー化の動的な側面が、頻度や構文スキーマの定着度と関連して説明できることを示す。

3.2.1. コンストラクション形態論に基づく構文的多義ネットワーク

コンストラクション形態論 (Construction Morphology) は、その名の通り、語レベルの意味と形式のペアリングをコンストラクションとして捉える理論である。

“construction” の和訳として、「構文」が広く定着している。しかしながら、“construction grammar”においては、語と文の間に本質的な境界を設けず、表 3-1 が示すように、単純語、複雑語、イディオム、文など、あらゆるレベルの複合表現が “construction” として位置づけられる (Goldberg 1995; Booij 2010, 2013)。したがって、“construction” は、厳密には、「統合体」や「構成体」と訳す方が適切であると考えられる (大堀 2001: 530)。

表 3-1: サイズと複雑さの異なる様々なコンストラクションの例 (Booij 2010: 15)

	<i>Example</i>
Word	<i>tentacle, gangster, the</i>
Word (partially filled)	<i>post-N, V-ing</i>
Complex word	<i>textbook, drive-in</i>
Idiom (filled)	<i>like a bat out of hell</i>
Idiom (partially filled)	<i>believe <one's> ears/eyes</i>
Ditransitive	<i>Subj V Obj₁ Obj₂ (e.g. he baked her a muffin)</i>

Booij (2013) は、コンストラクション形態論に基づき、V-able の意味形成を分析している。

(21) <i>accept</i>	<i>acceptable</i>
<i>afford</i>	<i>affordable</i>
<i>approach</i>	<i>approachable</i>
<i>believe</i>	<i>believable</i>
<i>do</i>	<i>doable</i>

(Booij 2013: 256)

(21) に挙げられている語彙を分析すると、右側の列にある V-able は左側の列の語彙が表す動作が実現可能であることを共通して表していることが分かる。Booij (2013) はこのような意味的な対応関係を一般化し、(22) のようなスキーマを提案する。

(22) $[VTR_i \text{-} able]_{Aj} \leftrightarrow [[CAN \text{ BE SEM}_i\text{-ed}]_{PROPERTY}]_j$

(TR は他動詞を表し、SEM は対応する構成要素の意味を表す)

(Booij 2013: 256)

コンストラクション形態論において、レキシコンには (22) のような一般化されるスキーマのほか、具体的レベルの個々の事例も含まれ、図 3-17 のような階層的レキシコンとして表すことができる。

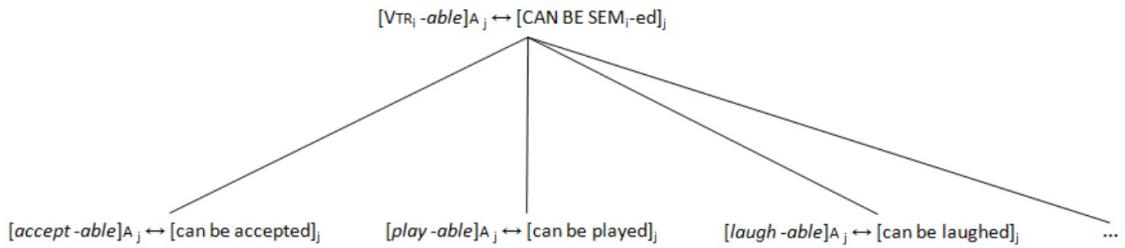


図 3-17: 階層的レキシコンにおける V-able (陳 2016: 8)

このような階層的レキシコンは、Langacker (1987, 1988, 1991, 2000) で提案された、図 3-18 のようなスキーマとプロトタイプが階層的に組み込まれるネットワークとしてのカテゴリーに似た特徴を持っている。その特徴に関しては、次節で使用基盤モデルの説明とともに、詳しく述べることにする。

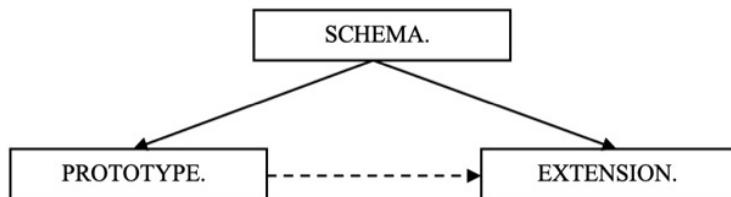


図 3-18: ネットワーク・モデル (Langacker 1991: 271)

前述の通り、日本語の複合動詞もコンストラクションの一種であり、形式と意味のペアリングとして、レキシコンに登録されていると考えられる (野田 2011; 松本 2011, Matsumoto 2012; 史 2014; 陳 2015, 2016; 陳・松本 2018; などを参照)。したがって、複合動詞の体系も、このような階層的なコンストラクションのネットワークによって捉えられる。陳・松本 (2018) が提案した日本語の複合動詞の階層的ネットワークは、野田 (2011)、松本 (2011)、Matsumoto (2012)、陳 (2015, 2016) に基づいているため、本稿では、代表的な研究として、陳・松本 (2018) の提案を取り上げて確認する。

陳・松本 (2018: 75) は、コンストラクション形態論に基づき、日本語の語彙的複合動詞の体系を、図 3-19 のような 5 つのレベルが含まれる階層的スキーマネットワークで表している。

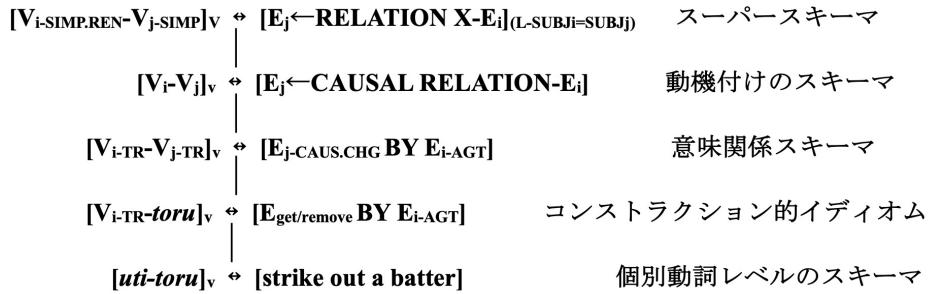


図 3-19: 日本語語彙的複合動詞の階層性 (陳・松本 2018: 75)

図 3-19 の一番上に位置するスーパースキーマ³⁵は、日本語の語彙的複合動詞における一般的な結合制約である主語一致の原則を表す。左側の形式は、和語単純動詞 V_i の連用形と和語単純動詞 V_j の組み合わせである。この形式に対応する右側の意味は、 V_i の表す事象 E_i と、それと何らかの関連性を持つ V_j が表す事象 E_j からなり、 V_i と V_j の主語相当の意味的項が一致する必要がある (陳・松本 2018: 76)。このスーパースキーマの下には、動機付けのスキーマがある。これは、日本語の語彙的複合動詞の成り立ちに働く、広義的な因果関係とそれに基づく必然的な時間的緊密性の存在によるものである。その下に、意味関係スキーマ³⁶である手段型などが位置する。手段型という意味関係スキーマの下に位置するのは、コンストラクション的イディオムと呼ばれるものであり、前項動詞が空きスロットで、後項動詞が「取る」という動詞に固定されている。一番下では、「打ち取る」のような個別動詞レベルのスキーマがある。

本稿の考察対象「 $V1 + \text{入れる}/\text{込む}/\text{詰める}$ 」は、前項動詞が空きスロットで、後項動詞が「～入れる/込む/詰める」といった動詞に固定されており、図 3-19 に示されるコンストラクション的イディオムという階層に位置付けられる。これらの複合動詞は、前項動詞の意味特徴やコンテクストによって、異なる意味形成がなされ、多義性を持つと考えられる。したがって、「 $V1 + \text{入れる}/\text{込む}/\text{詰める}$ 」は、多義的なコンストラクション的イディオムとして捉えられる。陳・松本 (2018: 115) は、「～込む」の多義的なコンストラクション的イ

³⁵ このスーパースキーマが日本語複合動詞においてデフォルトのケースを示している (陳・松本 2018: 76)。

³⁶ 陳・松本 (2018) は、日本語の語彙的複合動詞を $V1$ と $V2$ の意味関係に基づき、原因型 (溶け落ちる、歩き疲れる)、手段型 (叩き壊す、切り倒す)、前段階型 (割り入れる、狙い撃つ)、背景型 (見落とす、聞き漏らす)、様態型 (舞い落ちる、漂い出る)、付帯事象型 (泣き叫ぶ、探し回る)、同一事象型 (抱き抱える、飛び跳ねる)、事象対象型 (出し惜しむ、降りやむ)、比喩的様態型 (咲き狂う、書き殴る)、派生型 (打ち上げる、舞い上げる)、 $V1$ 希薄型 (打ち震える、押し黙る)、 $V2$ 補助型 (騒ぎ立てる、困り果てる)、不透明型の 13 種類に分けています。各意味関係の詳細は、陳・松本 (2018: 76-96) を参照されたい。

ディオムを (23) のように設定している。

(23) [[V1]v - [込む]v]v \leftrightarrow [V1 しながら内側に入る]

[V1 することによって、内側に入る]

[V1 の変化がかなりの程度に進む]

...

(陳・松本 2018: 115)

陳・松本 (2018) は、日本語語彙的複合動詞全体に関する体系的分析に焦点を当てたものであり、(23) のような「～込む」の多義的なコンストラクション的イディオムを設定することにとどまり、それ以上の詳細な考察は行われていない。本稿は、陳・松本 (2018) の提案を参考にし、「V1+入れる/込む/詰める」の意味カテゴリーを以下のような 3 つのレベルが含まれる階層的な構文ネットワークによって示す。

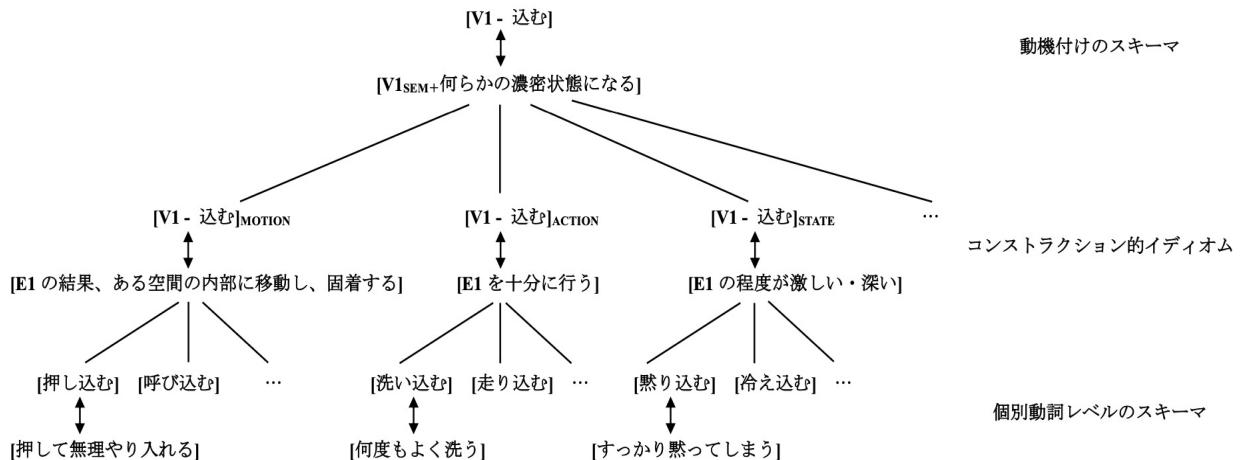


図 3-20: 「V1+込む」の意味カテゴリー³⁷

(\leftrightarrow =形式と意味の対応関係、V1_{SEM}=V1 が表す意味、E1=V1 が表す事象、MOTION=移動、ACTION=行為、STATE=状態)

³⁷ コンストラクション的イディオムレベルにおける「…」は、「見込む」、「申し込む」、「仕込む」など、複合動詞全体の意味が V1 と V2 の意味、またそれらの意味関係から合成的に導き出すことが難しいと考えられる語例を指す。本稿は、これら語例は一まとめ性が高いと考え、考察対象から除外することとする。

以上のように、「V1+込む」を例に挙げ、本稿では複合動詞の意味カテゴリーを図 3-20 のような階層的な構文ネットワークとして捉えることを示した。図 3-20 では、複合動詞の意味の階層性と多様性が示されているが、厳密に言えば、中間階層に位置する 3 つのコンストラクション的イディオム間の意味的関連性が表されていない。この点に関しては、第 4 章での具体的な考察を踏まえて詳述する。

3.2.2. 使用基盤モデル (usage-based model)

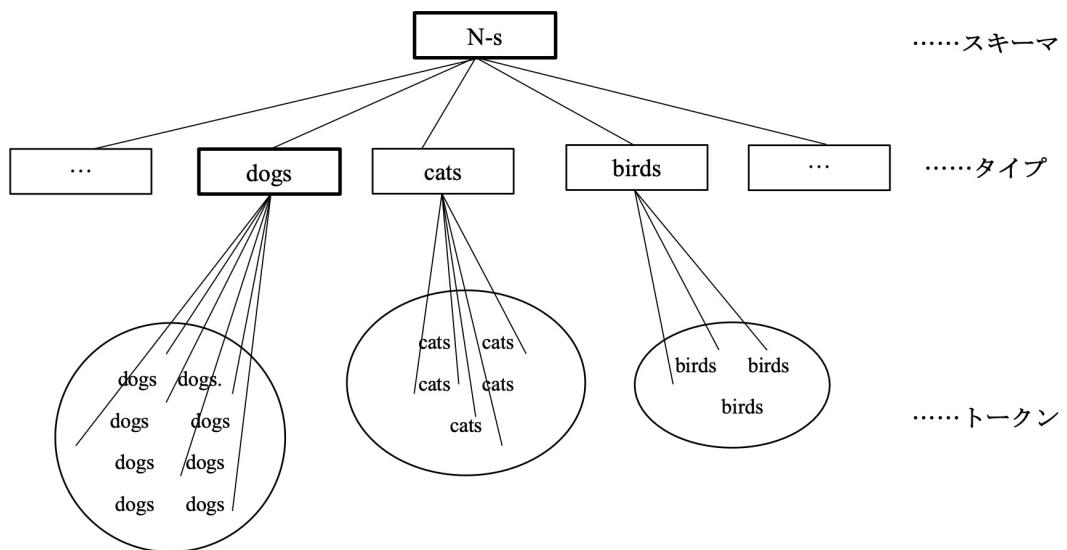
コンストラクション形態論は使用基盤 (usage-based, Langacker1987; Bybee1985, 2006a, 2006b; Barlow&Kemmer2000; Tomasello2003 などを参照) に基づき、語形成を捉え直す形態論であると言える。使用基盤モデルにおいて、言語知識は抽象レベルの構文スキーマだけではなく、具体的な事例も含めた包括的なネットワークの総体として捉えられている。前節で述べたように、Booij (2010, 2013) が提案するコンストラクション形態論では、複合語の語形成に見られる一般性・共通性は、階層的な構文的多義ネットワークのより上位に位置する構文スキーマによって捉えられている。この構文スキーマは、従来の「トップダウン式」的な「規則」とは異なり、現場の言語使用から「ボトムアップ式」に抽出されており、より柔軟かつダイナミックなものである。坪井・早瀬 (2020: 223-225) は、構文スキーマの特徴を以下の 4 点にまとめている。

- ① 構文スキーマが部分の総和以上の意味をになうことができる。
- ② 「規則」は入力ベースであるのに対し、構文スキーマは結果ベースである。
- ③ 構文スキーマはあくまでも具体事例から抽出されたものなので、理論上存在するはずなのにその事例が実際には見られないと言うギャップや偏りはそもそも問題にならないし、その生産性の程度の違いも使用に伴う下位構文スキーマの定着度の差として説明可能である。
- ④ 語形成規則は理屈重視であり、高次レベルの構文スキーマだけを原則として重視している。一方で構文スキーマは現場の言語使用から抽象化されていくものであり、低次スキーマから定着して利用されることになる。また、高次レベルでもタイプ頻度に基づき定着度が高ければ規則のように生産的に働くことはあるので、語形成規則が表す創造的現象も同じように捉えることができ

(坪井・早瀬 2020: 223-225)

この意味で、コンストラクション形態論は使用基盤 (usage-based, Langacker 1987; Bybee 1985, 1995; Barlow & Kemmer 2000; Tomasello 2003 などを参照) に基づき、語形成を捉え直す形態論であると言える。使用基盤モデルにおいて、言語知識はこのような抽象レベルの構文スキーマだけではなく、具体的な事例も含めた包括的なネットワークの総体として捉えられている。また、このような言語知識のネットワークは固定的ではなく、言語が使用される中で変化し続けるため、可変的な構造である。こうした動的な構造を客観的に測る要因として、「頻度」(frequency) という概念が挙げられる。「頻度」は具体的に「タイプ頻度」(type frequency) と「トークン頻度」(token frequency) という 2 つの性質の異なる頻度に分けられ、言語知識の構造の形成において、重要な役割を果たしていると考えられている(Bybee 1995, 2008; 早瀬・堀田 2005; など)

ここで、早瀬・堀田 (2005: 79-80) に示された図 3-21 の複数形名詞 “N-s” のネットワークを通じて、「トークン頻度」と「タイプ頻度」それぞれ果たしている異なる役割を確認していく。



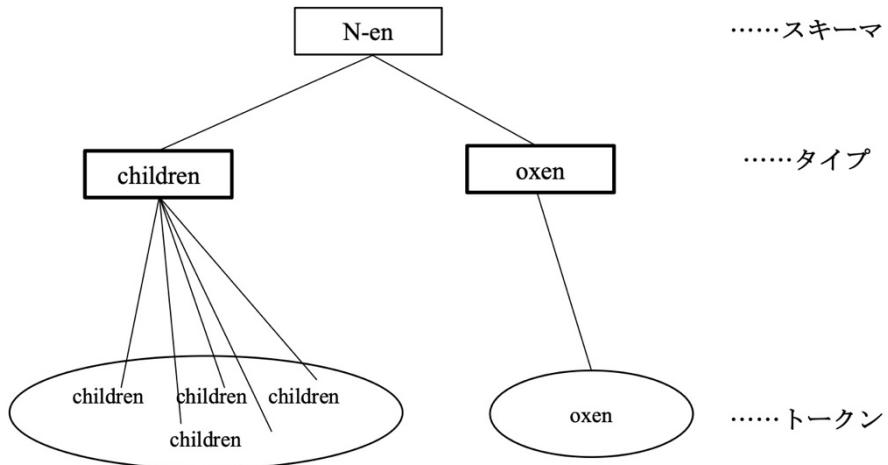


図 3-21: トークン、タイプ、スキーマ (早瀬・堀田 2005: 80)

早瀬・堀田 (2005: 79) によれば、「トークン頻度」は、ある言語表現が何度生起したか、個々の具体的な言語表現を 1 つ 1 つ数えることで得られる頻度である。それに対し、「タイプ頻度」は、個々の具体的表現の生起例を数えるのではなく、どれだけ異なった種類の表現が出てきたかを数える。例えば、図 3-21 の複数形名詞 “N-s” の場合、“dogs” のトークン頻度が 8、“cats” が 5、“birds” が 3 となる。この図では “dogs”、“cats”、“birds” 3 種類の “N-s” があるため、“N-s” のタイプ頻度は 3 となる。

「トークン頻度」も「タイプ頻度」が高ければ高いほど、その上位のスキーマの定着度 (degree of entrenchment) が高くなる。例えば、図 3-21 では、“dogs” のトークン頻度が 8 で最も高いため、その上位である “dogs” というタイプの定着度も高いと考えられる。また、タイプ頻度を比較すると、“N-s”的下位に位置するタイプには “dogs”、“cats”、“birds” などがあるのに対し、“N-en”的下位に位置するタイプは “children”、“oxen” の 2 種類しかない。したがって、“N-s” という複数形名詞の定着度が相対的に高いと考えられる。

さらに、早瀬・堀田 (2005: 81) によれば、定着度が高い情報単位は、処理上で 1 つのまとまりとして機能するユニットとしての地位が確立されやすいという。例えば、「V1+込む」では、全体の意味を V1 と V2 の意味から合成的に導き出すことが難しく、分析可能性が低いとされる語例として、「申し込む」、「見込む」、「振り込む」、「仕込む」などが挙げられる。『Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)』における収録用例数 (トークン頻度) を確認すると、これらの語例はそれぞれ 2 位、3 位、8 位、20 位にランクしており、一まとまり性の高さがうかがえる。

表 3-2: 「V1+込む」の語例ごとのトークン頻度(トップ 20 位)

順位	語例	用例数 (トークン頻度)	順位	語例	用例数 (トークン頻度)
1	書き込む	7555	11	取り込む	3172
2	申し込む	5039	12	盛り込む	3153
3	見込む	4682	13	持ち込む	3094
4	飛び込む	4248	14	漬け込む	2906
5	煮込む	3853	15	追い込む	2774
6	突っ込む	3773	16	吸い込む	2758
7	読み込む	3536	17	打ち込む	2753
8	振り込む	3384	18	巻き込む	2747
9	思い込む	3303	19	差し込む	2711
10	落ち込む	3279	20	仕込む	2575

以上、「トークン頻度」と「タイプ頻度」の両方が、その上位にあるスキーマの定着度 (degree of entrenchment) に影響を与えることが示された。そのうち、「タイプ頻度」は異なった種類の表現がどれだけ出現したのかを示す指標であり、「タイプ頻度」が高いほど、その上位のスキーマの定着度も高くなる。この意味で、「タイプ頻度」は、その上位に位置する表現パターンが新しい形式に適用される可能性、すなわち、ある表現パターンの生産性 (productivity) に関与する。生産性の高いスキーマは定着度が高く、新規表現に適用される際に、優先的に活性化され、利用される可能性も高いと考えられる。たとえば、図 3-21 における “N-en” と比較すると “N-s” という複数形スキーマの「タイプ頻度」がより高く、定着度も相対的に高いため、“N-s” の生産性も高いとされる。この場合 “N-s” のスキーマがある種の規則のように機能するようになり、新規表現がトップダウン式に適用される可能性が出てくる。

このようなトークン、タイプ、スキーマのネットワーク構造は複合動詞の階層的な意味カテゴリにも適用されると考えられる。図 3-20 で示された「V1+込む」の意味カテゴリにトークン、タイプ、スキーマを当てはめると、以下のようになる。

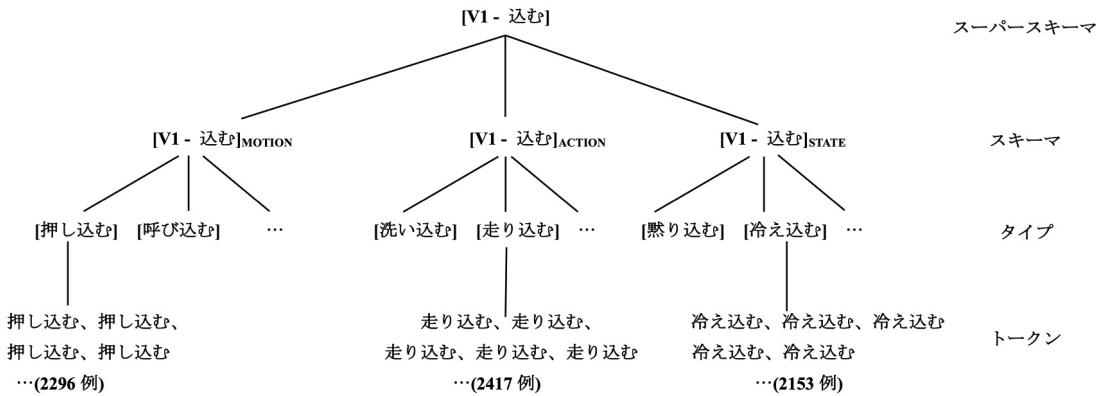


図 3-22: 「V1+込む」の意味カテゴリー³⁸におけるトークン、タイプ、スキーマ

序章で述べたように、日本語の語彙的複合動詞において、「V1+込む」は生産性が高い複合動詞とされている（森田 1979; 影山 1993; 姫野 1978, 1999; 甲斐 1998, 2000; 松田 2004; 由本 2005, 2013; 松本 2009; 金 2010, 2016; 山口 2013;など）。その理由として、「～込む」に結合する前項動詞の異なり語数（255 語）が日本語の語彙的複合動詞の中で最も多い点、また、意的にも多様性が見られる点が挙げられる。由本（2013: 121）によれば、「V1+込む」には、「移動」（本稿における[V1-込む]MOTIONに相当する）を表すものが 60-70%と高い割合を占めており、残りの約 30%が「程度」あるいは「強調」（本稿における[V1-込む]ACTION と [V1-込む]STATE に相当する）を表す。したがって、理論的には、[V1+込む]の 3 つのスキーマのうち、[V1-込む]MOTION スキーマが最も定着しており、生産性が最も高く、アクセスされやすいと推測される。しかし、これはあくまで理論的な推測にすぎず、新規の複合動詞表現がどのように意味を形成し、使用されているのかについては、日本語母語話者の実際の言語使用に基づいて検討する必要がある。

まだ慣習化されていない新規の複合動詞の容認性判断には、日本語母語話者の間でも揺れが生じることが想定される。このような新規表現の容認性をより正確に把握するために、Google 検索で得られるヒット数という量的データに加え、日本語母語話者を対象とする言語調査から新規表現に関する質的データを収集することで、より客観的に使用実態を把握することが可能であると考えられる。

これらのデータを基に、ヒット数が多い語例から、ヒット数が比較的に少ない語例、さら

³⁸ 図 3-22 で示される「V1+込む」の意味カテゴリーは図 3-20 の「V1+込む」の意味カテゴリーに含まれる一部の情報を省略し、簡略化したものである。

に実例が確認されない語例までを分析することで、「V1+入れる/込む/詰める」の容認性が段階的なものであることが示されるだろう。この分析を通して、「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成と創造性を反映したカテゴリー化の動的な側面が浮き彫りになることが期待される。

3.3. 第3章のまとめ

本章では、日本語の複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の意味分析を行うための理論的枠組みを提案した。まず、3.1節では、言語表現の多義性や意味拡張、異なる語同士の意味的類似性を体系的に説明するために、身体的・経験的基盤である「イメージ・スキーマ」を取り上げた。主要なイメージ・スキーマの種類と語彙的意味との関わりを確認し、これらのスキーマが独立ではなく相互に関わり合い、言語表現における多義性、類義性、創造性に密接に関与していることを示した。また、「内部移動」という事象に関連するイメージ・スキーマのネットワークを提案し、これは「V1+入れる/込む/詰める」の意味記述に大きな参考となると考えられる。

次に、「V1+入れる/込む/詰める」の多義構造とその生産性の動的側面を捉るために、語の意味と形式のペアリングを「コンストラクション」として捉える「コンストラクション形態論」を概観し、これらの複合動詞もコンストラクションの一種として分析できることを示した。さらに、陳・松本(2018)の日本語複合動詞の階層的ネットワークを参考に、意味カテゴリーの階層的構造を可視化する「構文的多義ネットワーク」を提案した。最後に、コンストラクション形態論の使用基盤的言語観を取り上げ、頻度や構文スキーマの定着度といった要因が「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成や言語使用の創造性に与える影響を示した。

これらの理論的枠組みに基づき、第4章からは具体的な考察を進めていく。

第4章 「V1+入れる/込む/詰める」の多義性

本章からは「V1+入れる/込む/詰める」の多義性をめぐる諸課題に着目し、複合動詞ごとに詳細な考察を行う。以下、第2章で提示した多義性をめぐる3つの課題を再掲する。

- (a) 「V1+入れる/込む/詰める」に対応する本動詞の意味的特徴を確認する。
- (b) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義を認定し、各意味におけるV1とV2の意味関係、および前項動詞の意味特徴を明らかにする。
- (c) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義の間の水平方向の意味的関連性、および意味拡張の認知的メカニズムを明らかにする。また、各意味に共通するスーパースキーマ的な意味を認定し、垂直方向の意味的関連性を解明する。最後に、「V1+入れる/込む/詰める」それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」および「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示する。

以下、「V1+入れる」、「V1+込む」、「V1+詰める」の順に沿って考察を展開する。

4.1. 「V1+入れる」の多義性

前述のように、「V1+入れる」、「V1+込む」、「V1+詰める」はいずれも語彙的複合動詞に属するが、後項動詞「～入れる」、「～込む」、「～詰める」の独立性、すなわち、それぞれが単独で用いられるときの意味や文法的特徴が複合体の中でも保持されているか否か、また複合体においてどのような意味的役割を担っているのかに関して、各複合動詞は異なる特徴を示す。特に、「V1+込む」、「V1+詰める」と異なり、「V1+入れる」の後項動詞「～入れる」は、自立語としての意味がそのまま残存し、比較的単純な意味カテゴリーを構成している（姫野 1999 を参照）。

そこで、4.1.1節では、基本動詞ハンドブック³⁹で記述されている17種類の「入れる」の意味を確認したうえで、本動詞「入れる」の語彙的・文法的特徴を検討する。4.1.2節では、複合動詞「V1+入れる」を[V1-入れる]という形式を持つコンストラクションとして捉え、

³⁹ 基本動詞ハンドブック (<https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/>)は、日本語教師や中上級の日本語学習者向けに、多義的な基本動詞の意味の広がりと用法を図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールである。

[V1-入れる]構文の基本義と拡張義を認定する。また、[V1-入れる]構文の意味的特徴、および構成要素である V1 と V2 の意味関係について検討し、[V1-入れる]構文の意味を〈容器〉のイメージ・スキーマと〈起点-経路-着点〉のイメージ・スキーマとを合わせたイメージ図式で視覚的に示す。最後に、[V1-入れる]構文の意味カテゴリーを多義ネットワークとして提示する。

4.1.1. 本動詞「入れる」の意味特徴

基本動詞ハンドブックは、「入れる」の多義的な意味、および、各意味間の派生関係について詳細に示しており、「入れる」に関してさらなる考察を進めるうえで重要な参考資料と言える。先んじて、基本動詞ハンドブックによる「入れる」の意味分類とその派生のプロセスについての解説を確認する。

- 1 《ものを中へ動かす》人がものを入れ物などの外から中に動かす。
 - (1) かばんに書類を入れた。
- 2 《ものを中へ移動させる》人が状況を作ることで、ものを外から中に動かす。
 - (2) 窓を開けて部屋に風を入れた。
- 3 《電気を取り込む》人が電流を通じさせて、機器を作動させる。
 - (3) パソコンの電源を入れて、レポートを書き始めた。
- 4 《口座へ支払う》人が払うべき金銭を他の口座に支払う。
 - (4) 商品の代金としてこの口座に 2000 円を入れてください。
- 5 《組織に所属させる》人がほかの人を組織や集団の一員にする。
 - (5) 息子を私立中学に入れた。
- 6 《茶を飲めるようにする》人が湯を差すなどして茶を作り、入れ物に注いで飲めるようになる。
 - (6) 午後には紅茶を入れます。
- 7 《候補を支持する》人が候補を選択して支持する。
 - (7) 新人候補に票を入れた。
- 8 《中で役に立てる》人が有用なものを導入する。
 - (8) 事務所に新しいコピー機を入れた。
- 9 《中に加える》人がものに別のものを加える。

- (9) コーヒーに砂糖を入れますか。
- 10 《書き加える》人がスペースに言葉や記号などを加える。
- (10) このエクセルの表の一つのセルに一つのデータを入れてください。
- 11 《切れ目を加える》人がものに切れ目をつける。
- (11) この魚は、斜めに包丁を入れて薄くそぐように切ってください。
- 12 《点を加える》人やチームが得点する。
- (12) 相手チームが先に1点を入れた。
- 13 《力を加える》人が身体や取り組みに力を加える。
- (13) 腰に力を入れて、姿勢をしっかりと保ちなさい。
- 14 《要素を加える》人が判断をしたりものを作ったりするときに、それに影響し得る周辺的な要素を含める。
- (14) 評価に主観を入れないように注意しなければならない。
- 15 《予定などを間に加える》時間の隙間に予定など置く。
- (15) 来週は火曜日に出張の予定を入れている。
- 16 《連絡をする》人がほかの人や組織に連絡をする。
- (16) 入試結果を見にいき、家族に合格の第一報を入れた。
- 17 《要求を認める》人がほかの人の希望や要求を認める。
- (17) 君の希望を容れて特別に休暇をあげることにするが、できる限り早く仕事に戻ってほしい。

(『基本動詞ハンドブック』より)

基本動詞ハンドブックの解説によれば、「入れる」は、「ものを入れ物などの外側から内側に動かす（語義1）」を基本義とし、2つの方向へと意味が広がるという。語義2～語義5のように「動かす対象となるもの」の相違によって意味が広がる例と、語義6～語義9のように「動かす」前や「動かした」結果に注目することによって広がる例である。語義2から語義5の場合、「動かす対象」として、人、モノ、電流、金銭など様々なく_{移動物}が挙げられる。また、語義6が、「動かす」前のプロセスに注目する一方で、語義7～語義9は、「動かした」結果に注目している。

さらに、語義9から「加える」という意味を引き継いだ意味として、語義10～語義14がある。語義10～語義11では、文字や絵、切れ目を「加える」ことを表す。一方で、語義12

～語義 14 は空間に存在するものではなく、「点」、「力」、「主観」のような抽象的なものを「加える」ことを表す。

また、語義 15～語義 16 では、「加える」先の場所として、「時間の隙間」のような「間」のイメージを持つものが現れている。最後に、語義 17 は、基本義である物理的な内部移動から、抽象的な概念領域に写像された意味であり、「要求を認める」ことが「要求」という抽象的なものを内側に取り込むことに喩えられていると考えられる。

以上で示されているように、「入れる」は、基本的に、[<使役的動作主>ハ/ガ<移動物>ヲ<移動先>ニ[入れる]] という使役移動構文に生起しており、「動作主がある移動物をどこかの移動先の中に移動させる」という内部移動事象を描写する動詞であるが、その拡張義においては、「移動物」と「移動先」が異なる性質を示す。「入れる」の 17 種類の用法において、「移動物」と「移動先」に相当するもの⁴⁰が物理的な内部移動を実現する機能を持っているか否かに基づき、各用法を整理すると、表 4-1 のようになる。

表 4-1: 「入れる」の 17 種類の用法における「移動物」と「移動先」の性質

意味	移動物	移動先	移動物の性質	移動先の性質	内部移動の性質
1	書類	かばん	+	+	+
2	風	部屋	+	+	+
3	電源(電気)	φ(パソコン)	-	+	-
4	代金	口座	+	-	-
5	息子	中学	+	+	-
6	紅茶	φ(茶碗)	+	+	+
7	票	新人候補	-	-	-
8	コピー機	事務所	+	+	+
9	砂糖	コーヒー	+	+	+
10	データ	セル	+	+	-
11	包丁(切れ目)	魚	-	+	-
12	1 点	φ(元々の点数)	-	-	-
13	力	腰	-	+	-
14	主観	評価	-	-	-
15	予定	火曜日	-	-	-
16	第一報	家族	-	-	-
17	要求	φ(上司)	-	-	-

⁴⁰ 「入れる」の使用において、「移動物」に相当するものは、物理的なものであれ抽象的なものであれ、常に文中に明示されている。一方、「移動先」に相当するものには物理的な場合、抽象的な場合両方あるが、必ずしも文中で明示されるとは限らない。「移動先」が文中で明示されていない場合は、「φ」で表示し、後の括弧内に文脈に基づいて想定される「移動先」を記入している。

「移動物」と「移動先」に相当するもの: ヲ格、ニ格で提示されるもの

φ: 言語的に明示されていない。

0: 「移動物」と「移動先」が言語的に明示されていない場合、または、ヲ格、ニ格に現れるものが実際の「移動物」、「移動先」に該当しない場合に、文脈上で想定される実際の「移動物」、「移動先」。

+: 物理的な内部移動を実現する機能を持つ。

-: 物理的な内部移動を実現する機能を持たない。

以下では、<容器>のイメージ・スキーマとの関わりを踏まえながら、a. 「移動物」の性質、b. 「移動先」の性質、c. 「移動の目的」の3点に基づいて、「入れる」の語彙的・文法的特徴を検討する。

● 「入れる」における<容器>のイメージ・スキーマのメタファー的写像

表4-1に示された17種類の意味における「移動物」、「移動先」、「内部移動」の性質をさらに統合すると、表4-2の4つのパターンに集約される。

表4-2: 「入れる」が表す「内部移動」の性質

	移動物の性質	移動先の性質	内部移動の性質
①	+	+	+
②	+	+	-
③	-	+	-
④	-	-	-

パターン①は物理的な内部移動を表しており、パターン②-④は、①のような物理的な概念領域から、社会的・心理的といった抽象的な概念領域へのメタファー的写像によって、抽象的な内部移動を表していると考えられる。ここで、特に②-④において、「移動物」と「移動先」に相当するものの性質を確認し、それが何に基づいて抽象的な内部移動と認定されたのかに注目したい。

まず、パターン②では、「移動物」と「移動先」がともに物理的な内部移動を実現する機能を持つが、物理的ではなく、抽象的な内部移動を表している。「息子を私立中学に入れた」がその例である。この場合、「中学」は「息子」を受け入れる機能を持つため、<容器>として概念化されている。つまり、息子を中学に所属させることは、息子を中学の外部から中学という組織の内部へ移動させる行為として捉えられている。

パターン③では、抽象的な「移動物」を物理的な「移動先」に移動させることを表す。「腰

に力を入れて、姿勢をしっかりと保ちなさい」がその例である。この場合、「腰」は「力」という抽象的なエネルギーを注ぎ込む＜容器＞として概念化されている。つまり、「力」を「腰」という＜容器＞に集中させるという抽象的な移動を表している。

パターン④では、抽象的な「移動物」を抽象的な「移動先」に移動させることを表す。「評価に主観を入れないように注意しなければならない」がその一例である。この場合、「評価」は「主観」という抽象的な要素を組み込む＜容器＞として捉えられており、そのことにより、「主観」を「評価」という抽象的な＜容器＞に加え入れる行為が表されている。

このように、「移動物」と「移動先」が物理的なものであっても、抽象的なものであっても、また、それらが構文上で明示されているか否かにかかわらず、「入れる」という動詞の意味が成立するためには、「移動物」は元来「移動先」に存在しないものであり、「移動先」は＜容器＞としての役割を果たし得るものでなければならない (cf. ??ボールをテーブル/マットの上に入れた VS. ボールをテーブル/マットの上に置いた)。つまり、「入れる」は、「移動物」を＜容器＞の＜外部＞から、＜境界線＞を越えて、＜容器＞の＜内部＞へ移動させることを意味し、その多義性は、物理的な概念領域と抽象的な概念領域との間で、＜容器＞のイメージスキーマのメタファー的な写像によって動機づけられている。

● <容器>のイメージ・スキーマの空間的側面のみの顕在化

第2章では、＜容器＞のイメージ・スキーマの空間的側面と機能的側面について述べた。つまり、＜容器＞のイメージ・スキーマは単なる＜内部＞、＜外部＞、および＜内部＞と＜外部＞を仕切る＜境界＞の3つの要素からなる。これは視覚的な図式だけではなく、視覚情報以外の複数の感覚次元にまたがるものである。次に、「入れる」と＜容器＞のイメージ・スキーマの両側面との関わりを、「入れる」が表す移動という行為の目的から検討する。

基本動詞ハンドブックの解説によれば、「入れる」の語義(7-9)は「動かす」目的に注目している。例えば、「《候補を支持する》人が候補を選択して支持する(語義7)」(例: 新人候補に票を入れた)の場合、誰を支持するか、という目的に焦点が当てられている。また、「《中で役に立てる》人が有用なものを導入する(語義8)」(例: 事務所に新しいコピー機を入れた)の場合、単なる「移動物」の移動ではなく、移動の後「移動先」にとどまって何らかの機能を担うことを意味する。さらに、「《中に加える》人がものに別のものを加える(語義9)」(例: コーヒーに砂糖を入れますか)の場合、「移動物」を「動かした」結果、「移動先」に「移動物」が加わることが注目されている。

しかしながら、語義 7 「候補に票を入れる」という表現では、「候補を支持する」という目的が焦点化されているのは、「入れる」という動詞から生じたものではなく、「候補に票を入れる」という物理的な内部移動行為と「候補を支持する」という目的の間の因果関係に基づくメトニミーによるものであると考えられる。「入れる」という動詞は単に内部移動を表すだけであり、「支持する」という目的の意味が含意されていない。同様に、語義 8において、「移動物」が「移動先」でなんらかの機能を担うという意味合いが強調されているのも、「入れる」という動詞自体に由来するものではなく、「移動物」の性質に基づく結果であると考えられる。

その裏付けとして、以下の例(18-19) を挙げる。(18) と (19) は、それぞれ明確な目的が伴う例と、目的が伴わない例を示している。

(18) 太郎は大切な手紙を失くさないよう、丁寧に引き出しに入れた。(作例)

(19) 太郎は何気なく手元のメモを引き出しに入れた。(作例)

(18) において、「無くさないよう」や「丁寧に」といった文脈要素から、「移動先」の「引き出し」は、「移動物」である「手紙」を保管し、「保護」する役割を担う＜容器＞として機能しているとわかる。この場合、＜容器＞のイメージ・スキーマの空間的側面に加え、「容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる」という機能的な側面も強調されている。一方、

(19) では、「何気なく」という表現との共起により、「引き出し」は単に「境界」として機能しており、手元のメモを保護するという意図や目的が含意されていない。

以上より、「入れる」という使役移動行為の目的は、単に「移動物」を＜容器＞に相当する「移動先」の＜内部＞に位置させることに限定されており、移動後に、「移動物」と「移動先」がどのような状態になるかについての情報は、「入れる」の意味に含意されておらず、文脈に依拠して推測されるものであると考えられる。したがって、「入れる」は＜容器＞のイメージ・スキーマの空間的側面のみを顕在化させる表現であり、＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面は「入れる」の意味構造に含まれていないと考えられる。

4.1.2. 「V1+入れる」の多義性メカニズム

4.1.2.1. <容器>のイメージ・スキーマとの関わり

「入れる」と同様に、「V1+入れる」は通常、[<使役的動作主>ハ/ガ<移動物>ヲ<移

動先>ニ[V1-入れる]] という使役移動構文に生起する。例 (20-23) の用法が、[V1-入れる] 構文の基本的用法と考えられる。本稿では、このような用法を[V1-入れる]構文の基本義とし、[あるモノを何らかの形である物理的空間の内部に移動させる]と記述する。

- (20) 循環水を塔内に導き入れる配管の入口。
- (21) 待機している患者さんをフルネームで呼び、診察室へ迎え入れます。
- (22) 放射性物質を口から体に取り入れるのをできるだけ避けましょう。
- (23) 彼らは井戸の水をバケツに汲み入れた。

(20-23) では、「移動物」と「移動先」は物理的なものであり、それぞれヲ格、ニ格かヘ格によって言語的に明示される。ここで注意すべき点は、[V1-入れる]構文の使用において、「移動物」は常にヲ格によって文中に明示されるが、「移動先」は常にニ格によって提示されるわけではないことである。(24) のように、「移動先」が主語の領域にある場合、ニ格は通常現れない。

- (24) 企業が社員を雇い入れる場合、通常雇用契約には契約期間を定めません。

この例では、視点が「移動先」の<外部>ではなく、<内部>に置かれているため、ニ格が省略されていると考えられる。このように、視点が「移動先」の<内部>に位置する際は、ニ格が省略される傾向がある。

また、「入れる」と同様に、[V1-入れる]は<容器>のイメージ・スキーマに関わっており、<外部>と<内部>の境界がはっきりしている<容器>として機能する「移動先」を取ることが義務的であると考えられる。以下、(25-26) に示される容認度の差からも確認できる。

(25a)、(26a) における「ゴミ箱」や「新居」のような<容器>に相当する「移動先」を、「床」、「新居の前」といった<容器>の役割を果たさない場所に書き換えると、「V1+入れる」の使用が不自然になる。

- (25) a. ゴミをゴミ箱へ投げ入れるゲーム。
b. *ゴミを床へ投げ入れるゲーム。
- (26) a. 結婚の際に新居に荷物を運び入れることを「荷物送り」と言います。

b. *結婚の際に新居の前に荷物を運び入れることを「荷物送り」と言います。

[V1-入れる]構文では、<容器>のイメージ・スキーマが社会的空間や心理的空間といった抽象的な概念領域にメタファー的に写像され、(27-30) に示されるような抽象的な内部移動を表す拡張義も観察される。本稿では、このような [V1-入れる]構文の拡張義を、[あるモノを何らかの形である抽象的空間の内部に移動させる]と記述する。

拡張義の場合、<移動物>は抽象的なものとなり、<移動先>は「日本」のような具体的な場所である場合もあれば、「佛の道」、「生態系の管理」のような抽象的な場所である場合もある。

(27) 佛は、どのようにしたら衆生<移動物>を佛の道<移動先>に導き入れることが出来るか。

(28) 人文科学研究所は、…外部からの新風<移動物>を自由に迎え入れる目的で設立された研究所です。

(29) 伝統的・地域的な知識<移動物>を生態系管理<移動先>に積極的に取り入れること。

(30) できるだけ多くの人たちの意見<移動物>を汲み入れたいと思います。

以上より、[V1-入れる]構文の多義性は、物理的概念領域と抽象的概念領域における<容器>イメージスキーマのメタファー的写像によって動機づけられていると考えられる。

また、本動詞「入れる」と同様に、「V1+入れる」が表す使役移動行為の目的は、単に「移動物」を<容器>に相当する「移動先」の<内部>に位置させることに限定されており、移動後に、「移動物」と「移動先」がどのような状態になるかについての情報は、「V1+入れる」の意味に含意されておらず、文脈に依拠して推測されるものであると考えられる。つまり、「V1+入れる」も<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面のみを顕在化させる表現であると考えられる。

4.1.2.2. 「V1+入れる」における V1 と V2 の意味関係

「V1+入れる」において、後項動詞「～入れる」は意味的主要部を担い、なんらかの形での使役移動を表す。使役移動に関するより具体的な情報は前項に来る動詞によって補足される。データベースに収録されている実例を確認したところ、「V1+入れる」の前項動詞と

後項動詞の意味関係には、以下の<手段型>と<前段階型>の2つのタイプが観察される。

(a) <手段型> (手段-目的関係) [V1 することによって、V2]

例: 追い入れる、抱え入れる、囲い入れる、刻み入れる、蹴り入れる、
投げ入れる、誘い入れる、絞り入れる、運び入れる、吹き入れる、
巻き入れる、雇い入れる、呼び入れる、引き入れる…

(b) <前段階型> (継起的時間関係) [V1 したうえで V2]

例: 混ぜ入れる、割り入れる、迎え入れる、導き入れる、刈り入れる、
受け入れる、聞き入れる、戻し入れる…

<手段型>は、「V1 をすることによって、「移動物」を「移動先」に入れる」と書き換えることができる。V1 と V2<前段階型>は、「[「移動物」を V1 したうえで、「移動物」を「移動先」に入れる]と書き換えることができる。

4.1.3. イメージ図式および構文的多義ネットワーク

4.1.1節と4.1.2節の考察により、本動詞「入れる」と複合動詞「V1+入れる」において、どのような「内部移動事象」に関連するイメージ・スキーマが喚起されているのかを表4-3に示すことができる。

表4-3: 「入れる」と[V1-入れる]における「内部移動事象」に関わるイメージ・スキーマの喚起

語彙	語義	イメージ・スキーマの喚起						
		<容器>		<満/空>	<中心/周辺>	<起点-経路-着点>	<尺度>	
		空間的側面	機能的側面				<経路尺度>	<特性尺度>
「入れる」	基本義	●	×	×	×	●	●	×
	拡張義							
[V1-入れる]	基本義	●	×	×	×	●	●	×
	拡張義							

(●: 喚起+前景、○: 喚起+背景、×: 喚起されない)

(マークの下に括弧で補足がない場合、両方が観察されることを表す)

認知言語学において、言語表現の意味は、基盤となる一定の概念内容に照らして得られるものと捉えられている。この概念内容は、Langacker (1987, 1988) による認知ドメイン (cognitive domain)、Fillmore (1982) によるフレーム (frame)、Lakoff (1987) による理想認知モデル (Idealized Cognitive Model) として定義されている。このような、ある言語表現の意味を理解する際に基盤となる概念内容をベース (base) といい、言語表現が具体的に何を指しているかといった意味の中心的な部分をプロファイル (profile) といい、通常太線で表される。

動詞の意味構造は、通常時間の流れに沿って展開され、参与者とその間の関係からなる一連の行為連鎖 (action chain) として捉えることができる (Langacker 1987, 1991)。

本稿では、「V1+入れる」の意味構造に関わる《内部移動事象》の行為連鎖を、図 4-1 のような<容器>のイメージ・スキーマと<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマを合わせた複合図式の連続で図示する。

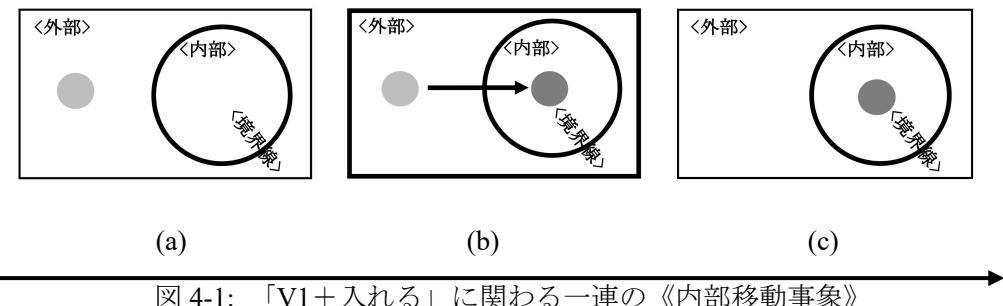


図 4-1(a) は、「移動物」が「移動先」としての<容器>の外部にあるという初期状態を指し、使役的な内部移動が発生する前の段階である。図 4-1 (b) は、使役動作主が「移動物」を<容器>の<外部>から<境界線>を越えて、<容器>の<内部>へと移動させるという中間段階を指す。図 4-1 (b) は、太線で枠取られ、「V1+入れる」の中心的意味を象徴している。図 4-1 (c) は、「移動物」が<容器>の<内部>に位置するという使役的な内部移動が完了した後の最終状態を表示する。

このような一連の《内部移動事象》の行為連鎖は「V1+入れる」の意味を捉えるうえで不可欠なベースであると考えられる。しかし、「V1+入れる」の中心的意味として図 4-1 (b) のみがプロファイルされていると考えられる。

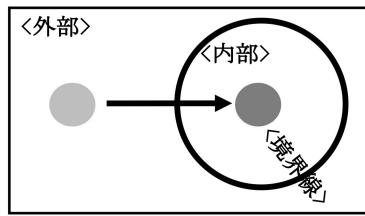
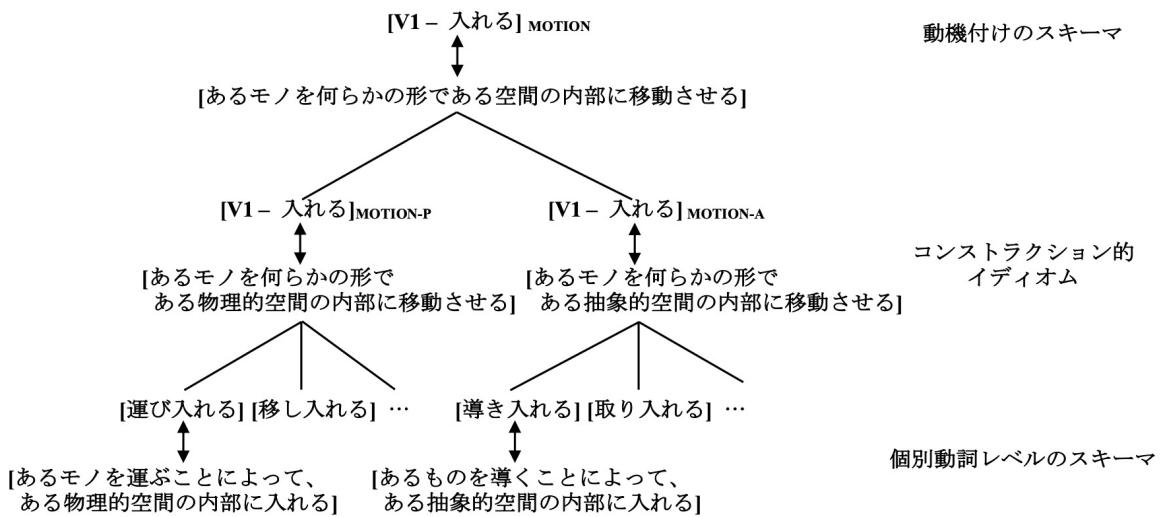


図 4-2: 「V1+入れる」のイメージ図式 (=図 4-1 (b))⁴¹

また、[V1-入れる]構文の意味カテゴリーを階層的な多義ネットワークとして提示すると、図 4-3 のようになる。



MOTION-P: MOTION- PHYSICAL の略で、物理的空間への移動を表す。

MOTION-A: MOTION- ABSTRACT の略で、抽象的空間への移動を表す。

図 4-3: [V1-入れる] 構文の意味カテゴリー

また、[V1-入れる]構文における多義性が生じる認知的メカニズムを視覚的に明示することで、図 4-4 に示されるような構文的多義ネットワークとして再構成することが可能である。

⁴¹ [V1-入れる]の基本義と拡張義は、物理的概念領域と抽象的概念領域の間でのメタファー的写像によって相互に関連づけられている。この場合、起点領域の「容器」イメージ・スキーマの構造はそのまま維持され、異なるのは概念領域のみである。そのため、特別な説明がない限り、本稿は、概念領域の違いを捨象した図式（「容器」の内部が塗りつぶされていない図式）を用いてその意味を表示する。[V1-込む]、[V1-詰める]にも同じような意味拡張パターンが見られるため、同じ基準で図式化を行う。

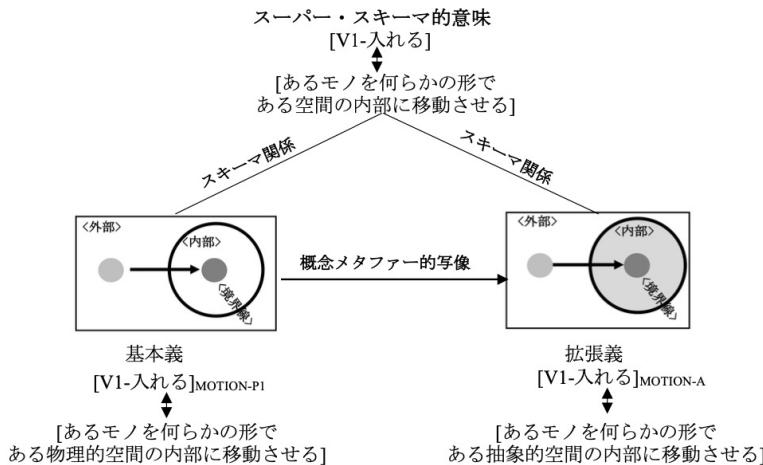


図 4-4: [V1-入れる] の構文的多義ネットワーク

4.2. 「V1+込む」の多義性

本節では、まず、4.2.1 節では、「V1+込む」に対応する本動詞「こむ」の意味を確認する。続いて 4.2.2 節からは「V1+込む」を [V1-込む] 構文として位置づけ、その多義性メカニズムを明らかにする。具体的には、

- ① [V1-込む] 構文における前項動詞と後項動詞の意味関係に着目し、[V1-込む] という形式に対応する意味として、基本義 [V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]、拡張義 I [V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]、拡張義 II [V1-込む]_{STATE} ↔ [E1 の程度が激しい・深い] の 3 通りのコンストラクション的イディオムが認められることを確認する。
- ② <容器>イメージ・スキーマを含む複数のイメージ・スキーマとの関わりに基づき、それぞれの意味特徴、意味同士の意味的関連性、意味拡張プロセスを明らかにする。[V1-込む] 構文の多義性は、イメージ・スキーマの前景化・背景化、メタファー的写像などの認知的操作によって動機付けられていることを示す。
- ③ 複数のイメージ・スキーマを重ね合わせたイメージ図式を用いて各意味を視覚化する。

最後に、4.2.3 節では、3 つの意味に共通するスキーマ的な意味を抽出したうえで、[V1-込む] 構文の意味カテゴリー、多義性メカニズムを階層的な多義ネットワークとして提示する。

4.2.1. 本動詞「こむ」の意味特徴

序章で述べたように、「V1+込む」が一見「他動性調和の原則」や「主語一致の原則」に反しているように見えるが、歴史を遡れば、古語の「こむ」は他動詞的用法も持っている。また、「こむ」が複合語の構成要素として自他両用の働きがあることが多くの研究で指摘されている（姫野 1999; 松田 2004; 松田 2009; 由本 2013）。そこで、『角川古語大辞典（ジャパンナレッジ版）』と『小学館全文全訳古語辞典（ジャパンナレッジ版）』での意味記述を確認したところ、古語の「こむ」【込・籠】の他動詞的な意味（下線部によって提示）として、以下のようなものが記述されている⁴²。

一 [動詞マ行四段活用] 狹い空間に多くの物がいっぱいに入った状態になる意。

- ①人や物が一か所に集中していっぱいになる。すきまもなく入り交じって混雑する。
- ②たたみかけて斬りつける。攻め込む。
- ③手続きが複雑に入り組んでいる。手間がかかっている。「手がこむ」の形で、精巧に作られていることをいうのに用いる。
- ④日数や費用がたくさんかかる。
- ⑤よく了解する。十分に心得る。飲み込む。
- ⑥他動詞的に用いて、狭い所へ詰めて入れる。押し入れる。

(31) 「山中にて鉄炮二つ玉をこみ、十二・三間隔て情なく打申候」〔信長公記・六〕

- ⑦ぐさっと矢を射立てる。

二 [補助動詞マ行四段活用]

- ①多くの人や物が一か所に集中して…する、…して混雑する意を表す。古くは、一1よりもこの用い方が多い。
- ②その動作によって、あるものの中へ入れる、または入ることを表す。

三 [動詞マ行下二段活用] 一および「こもる」に対する他動詞。

- ①中へ入れて外へ出さないようにする。閉じ込める。

(32) 「雀の子をいぬきが逃しつる。伏籠の中にこめたりつるものを」〔源氏物語・若紫〕

⁴² ここでは、紙面の都合上、他動詞的用法の例文のみを列挙する。より詳細な意味記述と例文は、『角川古語大辞典（ジャパンナレッジ版）』を参照されたい。

❷参籠させる。僧侶に「こもり」を命じる。

❸内側に包み入れて外から見えないようにする。包み隠す。

(33) 「花の色は霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春の山かぜ」 [古今和歌集・春下]

❹収納する。入れ物や倉などにしまい入れる。ことに寺社などに奉納する場合に多く用いる。

(34) 「いみじうけうぜさせたまひて、これ (=独楽) をのみつねに御覽じあそばせたま
へば、こと物どもはこめられにけり」 [大鏡・伊尹伝]

❺鉄砲に弾丸や弾薬を入れる。近世初期までは四段活用を用いた。

(35) 「見れば這 {この} 鎏砲 {てつぼう} に両丸 {ふたつだま} さへ籠 {こめ} てあり」
[南総里見八犬伝・九・一七二]

❻心の思いを秘めて外に現さないようにする。事実や本心を表情に出したり口外したりしないようにする。

(36) 「祐成はもつたいなくもかなしさの涙を胸にこめながら」 [曾我扇八景・中]

❼表情・言語・行動などの表現行為の中に可能なかぎり入れる。含み持たせる。「心」「思ひ」「力」などを込める。

(37) 「調子をば機 (=息) にこめて声に出すがゆへに」 [花鏡]

❽ひとまとめにする。込みにして一括する。

(38) 「此の寺は本より、此くの如くの僧供引くには、一房に籠めて止む事未だ无し」 [今昔物語集・四・一五]

❾力まかせに従わせる。手も足も出ないようにさせる。やり込める。補助動詞的に用いて「言ひこむ」などともいう。

(39) 「刀を comuru てごめにする <刀を抜かないように人を抑えつける>」 [日葡辭書]

❿あたりのものを包み隠すように広がる意で、3 から転じて自動詞として用いたもの。雲・霞・煙などがあたりいっぱいに広がって立つ。

(40) 「かすみこめたるながめのたど / \ しさ」 [十六夜日記]

(『角川古語大辞典 (ジャパンナレッジ版)』)

上記の記述から分かるように、古語の「こむ」には自動詞的な用法以外に、2 つの他動詞的な用法が挙げられる。1 つ目は、例 (31) のように、「こむ」自体が他動詞的に用いられ、「他動詞的に用いて、狭い所へ詰めて入れる。押し入れる」という意を表す場合である。2 つ目

は、例 (32-40) のように、「こめる」という語形でも用いられ、自動詞「こむ」および「こもる」に対する他動詞とする場合である。現代語では、「こむ」は自動詞的な用法しか残つておらず、本来持っていた他動詞的な用法は「こめる」に引き継がれたと考えられる。また、現代語の「V1+込む」が複雑かつ多様な意味用法を持つのは、「～込む」が他の動詞に接する補助動詞として用いられてきた歴史が長いという要因に加え、それに対応する本動詞が自他用法の働きを持つ古語の「こむ」であることも一因であると言えるだろう。

影山 (2001) によれば、他動詞は<行為>-<変化>-<結果>という一連の要素で構成され、非対格自動詞では<変化>-<結果>のみに焦点が当てられる。この特徴に基づき、自動詞と他動詞の対応関係を持つ「こむ」を考察すると、本動詞「こむ」という 1 つの単語の中には、[中へ入れて外へ出さないようにした結果 (他動詞としての意味) 、狭い空間に多くの物がいっぱいに入った状態になる (非対格自動詞としての意味)]、という一連の《内部移動事象》の行為連鎖が含まれていると考えられる。

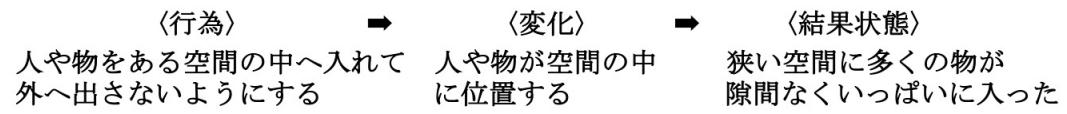


図 4-5: 本動詞「こむ」に関わる一連の《内部移動事象》

また、「外に出さないようにする」という<行為>の目的、「隙間なくいっぱいに入った」という<結果状態>から、「こむ」の意味構造には、<容器>のイメージ・スキーマの物理的側面だけでなく、外へ出ることが難しく感じられる、<容器>に守られているといった機能的側面も喚起されていることがわかる。さらに、「狭い空間に多くの物がいっぱいに入った状態になる」という自動詞的意味から、「こむ」には、<容器>のイメージ・スキーマに加え、それと関連する<満-空>のイメージ・スキーマも喚起されていることが明らかである。

4.2.2. 「V1+込む」の多義性メカニズム

4.2.2.1. 基本義: [V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]

本節で考察する基本義である [V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]は、姫野 (1999) において「内部移動」、松田 (2004) において「二格を伴う『～込

む』として記述され、「V1+入れる」と類似した性質を持つとされている。その前項には、内部移動事象を引き起こす<手段>(叩き込む)、<原因>(溶け込む)、<移動様態>(舞い込む)、<付帯事象>(怒鳴り込む)などとして認められる動作性動詞がよく見られる。

「V1+込む」の基本義は二格を伴う「内部移動」とされているものの、二格が常に文中に明示されるわけではない。また、「V1+込む」において、「V1+入れる」と同様に、「移動物」と「移動先」がそれぞれ独立した存在であり、内部移動の結果、「移動物」が「移動先」に包含される位置関係が生じるという、最も一般的でプロトタイプ⁴³的な「内部移動」を表す用例もあれば、「移動物」と「移動先」の存在が明確でない、周辺的な「内部移動」を表す用例も観察される。このように、「V1+込む」が表す「内部移動」は、概念話者の主観的把握による複雑かつ多様な形態を持つと考えられる。

認知言語学では、言葉は決して外部世界をあるがまま映し出しているわけではない(Langacker2008: 35, 和訳は小熊(2019: 281)による)言語表現の意味は認知主体である我々が概念内容をどのように捉えるかという概念操作の産物である。ここでの「内部移動」という事象も同様に、客観的にその生起が確認できる物理的移動に限らず、概念主体である話者の主観的な概念化による抽象的な内部移動も含まれる。すなわち、「言語化された内部移動」とは、話者が主観的に把握する「内部移動」を指し、話者が「内部移動」をどのように捉えるかが反映されているものである。

そこで本節は、2.1.2節(7)で提示した姫野(1999)による「移動先」の7分類を参考にし(以下(41)で再掲)、「V1+込む」が表す「内部移動」における「移動物」と「移動先」の関係性に焦点を当て、概念話者が「内部移動」をどのように主観的に把握しているのかについて検討していく。

なお、「V1+込む」が表す周辺的な「内部移動」の用例も考慮し、用語上の誤解を避けるため、本節では、「移動物」をトラジェクター(trajector = TR)、「移動先」をランドマーク(landmark = LM)⁴⁴という専門用語を用いて記述する。

⁴³ 「プロトタイプ理論」は、認知意味論における基本概念の1つであり、Rosch(1973, 1975)によって心理学の分野で初めて提唱された。この理論では、ある意味カテゴリーに属する成員にはそのカテゴリーへの帰属に程度があり、プロトタイプ的なケース、すなわち典型的なケースと、そうでない周辺的なケースが存在するとされる。認知意味論においては、言葉の意味カテゴリーは通常、プロトタイプ的なケースを中心に、周辺的なケースへと拡張されると考えられる。プロトタイプ的意味が持つ特徴として、(i)文字通りの意味である;(ii)関連する他の意味を理解するまでの前提となる;(iii)具体性を持つ;(iv)認知されやすい;(v)想起されやすい;(vi)用法上の制約を受けにくく;(vii)意味展開の起点となる;(viii)言語習得の早い段階で獲得される;(ix)使用頻度が高い、などが挙げられる(瀬戸2007、松本2009を参照)。

⁴⁴ Langacker(2008)によれば、名詞がモノ(thing)をプロファイルするのに対し、動詞が関係(relation)を

4.2.2.1.1節では、「V1+込む」が表す「内部移動」における「移動物」と「移動先」の関係性として、

- (a) 【 $TR \neq LM$ 】 (TR と LM がそれぞれ独立した存在である場合)
- (b) 【 $TR \neq ?LM$ 】 (LM が $V1$ の動作によってはじめて動的に形成される場合)
- (c) 【 $TR = LM$ 】 (TR と LM が重なっている場合)

の3つのタイプがあることを示す。最後に、<容器>のイメージ・スキーマなどとの関わりを確認し、基本義:[$V1$ -込む] $MOTION \leftrightarrow [E1]$ の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]のイメージ図式を提示する。

(41) (=2.1.2 節 (7))

① 「閉じた空間」を移動先の領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

上がり込む、落ち込む、駆け込む、転がり込む、滑り込む、飛び込む、
走り込む、舞い込む、迷い込む、踏み込む、押し込む、割り込む、泣き
込む、住み込む、座り込む、注ぎ込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

運び込む、投げ込む、打ち込む、積み込む、詰め込む、飲み込む、吸い
込む、買い込む、呼び込む、売り込む、教え込む、頼み込む、刻み込む、
絞り込む…

② 「固体」を移動先の領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

食い込む、のめり込む、めり込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

こすり込む、擦り込む、塗り込む、はたき込む、揉み込む、植え込む、
埋め込む、打ち込む、彫り込む、書き込む、写し込む、鋲込む…

プロファイルする。動詞が指示する関係概念がプロファイルされる際、そこに含まれている参与体に異なる際立ち方を示す。そのうち、認知的に際立ちが最も高い参与体はトラジェクター (trajector=TR) と呼ばれ、トラジェクターの参照点として機能する参与体はランドマーク (landmark=LM) と呼ばれる。本稿で扱う「 $V1$ +入れる/込む/詰める」は、「内部移動」を基本義とする複合動詞であるため、「移動物」と「移動先」の位置関係の変化をプロファイルしていると考えられる。したがって、「内部移動」という事象において最も認知的際立つ「移動物」が「トラジェクター」に相当し、「移動先」としての内部領域は、「ランドマーク」に相当すると考えられる。

③ 「流動体」を移動先の領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

漬かり込む、溶け込む、浸り込む、沈み込む、潜り込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

漬け込む、溶かし込む、溶き込む、浸し込む、沈めこむ…

④ 「間隙のある集合体または組織体」を移動先の領域とするもの

(a) 【主体の移動(自動詞)】

染み込む、混じり込む、埋まり込む、埋もれ込む…

(b) 【対象の移動(他動詞)】

混ぜ込む、編み込む、織り込む、縫い込む、組み込む、炊き込む、歌い込む…

⑤ 「動く取り囲み体」を移動先の領域とするもの

(a) 【[対象]を[取り囲み体]に/で「～込む】】

握り込む、丸め込む、包み込む、抱き込む、抱え込む、くるみ込む、囲み込む、覆い込む、敷き込む、巻き込む、挟み込む、綴じ込む、くわえ込む…

(b) 【[対象]に[取り囲み体]を「～込む】】

着込む、かぶり込む、履き込む、背負い込む、しょい込む…

⑥ 「自己の内部(自己凝縮体)」を移動先の領域とするもの

(a) 【主体の一部が自己の内部に向かって陥没する】

(自動詞): 窪み込む、引っ込む、くびれ込む、めり込む、へこむ

(b) 【主体あるいは対象の一部が基底部に向かって沈下する】

(自動詞): 落ち込む、崩れ込む、沈み込む、かがみ込む、しゃがみ込む、へたり込む

(他動詞): かがめ込む、押さえ込む

(c) 【主体あるいは対象の一部同士が重なり合い、形態が縮小する】

(自動詞): まくれ込む、めくれ込む、折れ込む、曲がり込む

(他動詞): まくり込む、折り込む、曲げ込む、たくし込む、縫い込む、

かがり込む…

(d) 【対象の全体が中心に向かって凝縮する】

(他動詞): 豊み込む、絞り込む

(e) 【主体あるいは対象の一部の削除によって形態や量が縮小する】

(自動詞): はげ込む、切れ込む

(他動詞): 刈り込む、切り込む、すき込む、剃り込む、えぐり込む、
使い込む

⑦ 「その他」

覗き込む、見込む、当て込む、(金を)張り込む、(数量を)割り込む…

(姫野1999: 61-69)

4.2.2.1.1. TR と LM の関係性

● (a) 【TR≠LM】 (TRとLMがそれぞれ独立した存在である場合)

姫野 (1999) が提示した「V1+込む」の7種類の移動先の領域のうち、①-④の4種類は「V1+入れる」にも見られる。また、「V1+入れる」と同様に、「V1+込む」におけるTRとLMは、(a) 【TR≠LM】 という関係にあるケースが一般的であると考えられる。

(42) ① 「閉じた空間」を領域とするもの

注ぎ入れる、運び入れる、踏み入れる、押し入れる…

② 「固体」を領域とするもの

彫り入れる、書き入れる、擦り入れる、刻み入れる…

③ 「流動体」を領域とするもの

溶かし入れる、溶き入れる、浸し入れる…

④ 「間隙のある集合体または組織体」を領域とするもの

混ぜ入れる、編み入れる、組み入れる…

ここで注意すべき点は、「V1+入れる」は使役的内部移動の用法しか持たないのに対して、「V1+込む」には (43) に示すような使役的内部移動の用法と、(44) に示すような自動詞

的内部移動の用法の両方が存在することである。

(43) 【使役的内部移動】

- a. 作業員は型にセメントを注ぎ込んだ。
- b. 彼女は洗濯物を家の中に取り込んだ。
- c. 3分以内で20頭の山羊を小屋に追い込むと、仕事終了。

(44) 【自動詞的内部移動】

- a. 彼は落とし穴に落ち込んだ。
- b. 雪解け水が山から川に流れ込んだ。
- c. 塩が水に溶け込んでいる。

(43) のように、使役的内部移動を表す場合、TR(セメント、ボール、レモン汁) はヲ格で提示され、LM(型、ゴール、ソーダ水) はニ格で提示されるのが一般的である。また、(44) のように、自動詞的内部移動を表す場合、TR(彼、雪溶け水、彼) は通常主語の位置に置かれ、ハ格またはガヲ格で提示され、LM(落とし穴、川、会社) はニ格で提示される。

(43-44) で示される例は、物理的な領域の内部への移動を表しているが、「V1+入れる」と同様に、「V1+込む」においても、<容器>のイメージ・スキーマが物理的領域から抽象的領域へメタファー的に写像され、心理的、社会的など抽象的な領域の内部への移動を表す用法が観察される (45-46)。

(45) 【使役的内部移動】

- a. 彼は新製品開発に情熱を注ぎ込んだ。
- b. 商品開発などに、お客様の意見をどう取り込むか?
- c. (...) 職場に居づらい雰囲気を作ることで、社員を辞職に追い込むための戦略とし使われることもある。

(46) 【自動詞的内部移動】

- a. しかし、戦争が終結し戦争景気が終わると、人類社会全体が不況に落ち込むことになった。
- b. 原油に投機資金が流れ込むのはどうしてでしょうか?
- c. 彼はすぐ新しいクラスに溶け込んだ。

このように、「使役的内部移動」と「自動詞的内部移動」は、それぞれ [<使役的動作主>ハ/ガ<移動物>ヲ<移動先>ニ[V1-込む]]構文、 [<移動物>ハ/ガ<移動先>ニ[V1-込む]]構文として現れるのが一般的である。しかし、(47) に示すように、「彼」、「私」、「教師」といった「使役動作主」の領域がLMとして機能する場合には、LMはニ格ではなく、ハ格またはガ格で提示される。

(47) 【使役的内部移動】

- a. 彼は錠剤を飲み込んだ。
- b. 私は、酒場で妙な噂を聞き込んだ。
- c. もともと、教師はストレスを抱え込む宿命を背負わされているといえます。

続いて、「V1+入れる」と「V1+込む」のLMの違いについて触れたい。

姫野 (1999) による「V1+込む」の7つの移動先の領域のうち、⑤「動く取り囲み体」と⑥「自己の内部 (自己凝縮体)」を領域とするものは、「V1+入れる」には見られず⁴⁵、「V1+込む」に特有の用法であると言える。以下では、「V1+込む」の⑤と⑥をLMとする用法に焦点を当て、それぞれ【TR≠?LM】、および【TR=LM】の関係性に基づいて詳しく論じる。

● (b) 【TR≠?LM】 (LMがV1の動作によってはじめて動的に形成される場合)

⑤「動く取り囲み体」をLMとする「V1+込む」には、以下のようない用例が挙げられる。

(48) ⑤【「動く取り囲み体」を領域とするもの】

- a. ベッドに横向きに寝て、頭と足とを抱え込むように、海老のように丸くなりま
す。
- b. 髪の毛の中間から毛先に掛けて両手で挟み込むようにして、(…)
- c. 深夜、その人がベルガールの制服をこっそり着込む事から騒動になる。

⁴⁵ ⑤「動く取り囲み体」、⑥「自己の内部 (自己凝縮体)」を領域とするもの、を移動先とする「V1+込む」には、「囲い込む」(⑤)、「抱え込む」(⑤)、「挟み込む」(⑤)、「絞り込む」(⑥)、「刈り込む」(⑥)のような語例が挙げられている。それと同じ前項動詞をとる「囲い入れる」、「抱え入れる」、「挟み入れる」や、「絞り入れる」、「刈り入れる」などの語例も⑤と⑥のような領域を移動先としてとるように思われるかもしれないが、実際の用例を確認すると、「V1+入れる」がとる移動先は、「V1+込む」とは異なることが確認できる。この点については、第5章で改めて議論する。

(48) に示されている用例では、LMとしての「内部空間」が、元々存在しておらず、前項動詞が表す動作を行うことによってはじめて形成される点が共通している。例えば、(48a) では、「抱える」という動作を行うことによって、両腕が「外部」と「内部」を分ける「境界線」として機能し、「内部領域」が新たに作られる。最終的に、「頭と足」が「移動物」として、両腕で囲まれた「内部領域」に収まる。同様に、(48b) では、両手で「挟む」という動作を行うことで「髪の毛」が「内部領域」に配置されるようになる。(48c) では、「制服」は本来LMとして機能するのではなく、「着る」という動作を行うことではじめて、「人の体」を囲み込む「内部領域」として機能するようになる。

● (c) 【TR=LM】 (TRとLMが重なっている場合)

⑥「自己の内部（自己凝縮体）を移動先の領域とするもの」、をLMとする「V1+込む」には、以下のような用例が挙げられる。

(49) ⑥【「自己の内部（自己凝縮体）」を領域とするもの】

- a. アリのような虫は、胴がくびれ込んでいる。（『日本語複合動詞活用辞典』（2023）
- b. 看護師の坂井恵美子さんが、毛布をひざに何枚も重ねた80代の女性の横に
しゃがみ込んだ。
- c. 最後に奥の紙を折り、先ほどの対角線と合うように余分な紙を内側に折り込み、
テープで止めます。
- d. 肘を支点に腕を畳み込む。
- e. 生长期はこまめに芝を刈り込むことにより、密度の高い芝生になります。

姫野（1999）が指摘しているように、(49a-e) のいずれも、「自己の内部（自己凝縮体）」LMとする用例である。すなわち、(49a-e) では、TRである「アリ」、「坂井恵美子さん」「紙」、「腕」、「芝」が、LMである「自己の内部」へ移動することを表している。

ここで、「内部」と「移動」という2つの概念の捉え方について考えてみよう。

まず、「内部」については、(49a) におけるLMが「アリ」の身体の「内部」であることは直感的に理解されやすいが、「坂井恵美子さん」、「紙」、「腕」、「芝」の「内部」が何を指しているのかは、一見すると不明瞭である。

さらに、「移動」については、第3章で確認したように、「移動」は<起点-経路-着点>とい

うイメージ・スキーマを介して概念化されるものであり、(49a-e)において、<起点>として機能するTRと<着点>として機能するLMが同一の存在であるとすれば、どのような<経路>に沿って「移動」が行われたと見なされるのかが問われる。

以下では、我々認知主体の中で起こった「心的走査」(mental scanning)によって生み出される「仮想移動」(fictive motion)(「虚構的移動」、「主体移動」(subjective motion)とも呼ばれる; Langacker 1987; Matsumoto 1996; Talmy 2000)、また、<容器>のイメージ・スキーマと<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマとの複合図式を用いて、「内部移動」の概念化を説明できることを示す。

(49a) では、通常何らかの動的な移動を表す表現である「くびれ込む」が用いられているが、この文では、TR=LMである「アリの胴」の静的形状を描写しており、物理的に移動する実体は存在しない。むしろ、概念話者が「アリの胴」という対象を観察する際、その静的形状を端から順に見渡し、注視点や視線が移動する「心的走査」によって生み出される「仮想的な内部移動」であると考えられる。

また、(49a)とは異なり、(49b-e)では、物理的に移動する実体が確認できる。(49b)では、「坂井恵美子さん」の「上半身」が「下半身」の方向に移動していく動作を描写している。また、(49c-d)では、「紙」、「腕」の一部が「折る」、「畳む」という動作によって、残りの「紙」、「腕」の方向へ移動する様子を表している。さらに、(49e)では、「刈る」ことによって、「芝」の高さが「根から遠い所」から「根から近い所」へと移動する、つまり根という下方向への移動であると言える。

日常生活において、物体は重力によって下に向かって安定する傾向がある。例えば、水や砂などを容器に入れると自然と底に溜まる。こうした経験から、我々は「下」を「安定した場所」、「落ち着く場所」として捉え、「内部」、「中心」、「基盤」といった概念と結びつける認識が生まれる。さらに、根や地中に埋まるものは、「下」かつ「内部」に隠れたものとして理解されるため、「下」が「内部」のイメージにつながりやすいと考えられる⁴⁶。

したがって、(49)における人間や植物の下方向への移動は、ある種の「内部移動」と概念化されていると考えられる。

第3章で提示した図4-6(=図3-14)のような<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマと<容器>のイメージ・スキーマの複合図式は【<起点>(TR)≠<着点>(LM)】に適用される

⁴⁶ 認知主体の頭の中では、「下」の概念と、「内部」や「奥」の概念が結びついていることを示す裏付けとして、「心の底」や英語の“Get to the root of the problem”といった言語表現が挙げられる。

ものであるが、(49b-e)のような【<起点>(TR)=<着点>(LM)】の場合に対応する場合、図4-7に示すように、<容器>内での<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマの複合図式が適用されると考えられる。

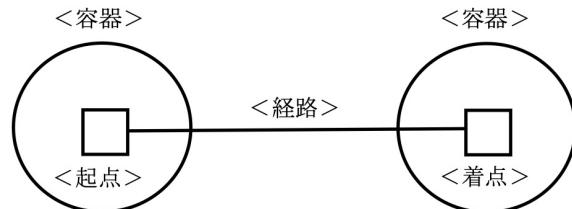


図4-6: <起点-経路-着点>のイメージ・スキーマと<容器>のイメージ・スキーマの複合図式 (山梨 2000: 152 を参照) (=図 3-14)

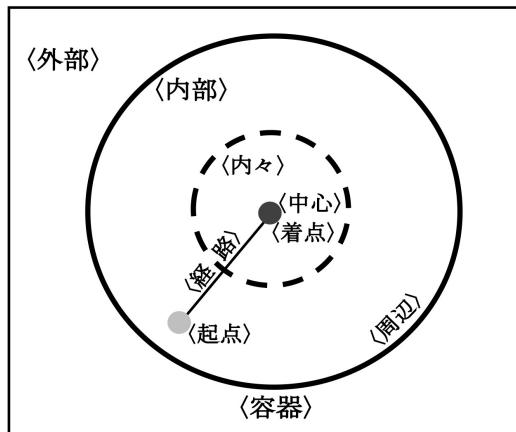


図4-7: <容器>のイメージ・スキーマの内部における<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマ

つまり、(49b-e)において、「しゃがみ込む」、「折り込む」、「畳み込む」、「刈り込む」が用いられる場合、認知主体である我々は、「坂井恵美子さん」、「紙」、「腕」、「芝」をそれぞれ1つの<容器>として認識し、異なる形態の動きを、その対象内での<周辺>から<内々>への「内部移動」として主観的に把握しているのである。

以上、「V1+込む」における「内部移動」という事象が、TRとLMの3種類の関係性に基づいてどのように主観的に把握されているかを確認した。

4.2.2.1.2. イメージ・スキーマとの関わり

第2章で確認したように、姫野(1999)は「内部移動」を表す「～込む」には(50)(=2.1.2節(11))のような4つのニュアンスが伴うと主張している。

(50)

- a. 全体がすっかり奥深く入るという感じがある。
 - *(ちょっと、半分、少しばかり、先だけ) 入り込む、浸し込む、上がり込む
 - *(端に、ふちに、浅く) 落とし込む、入れ込む、つけ込む
- b. いったん入ったら動かないという固定感がある。
 - *「乗車の際、切符を買い込む」(切符は下車の際には手放される)
 - *「箸で豆を挟み込んで食べる」(豆はすぐ箸から離れ、口に入る)
- c. 予期せぬものが入るという抵抗感がある。
 - *「先生が(授業のため)教室に入り込む」
 - *「自分の家に住み込む」
 - *「自宅へ我が子を連れ込む」
- d. 人の行動を表す場合、意志性や目的意識が強いという感じがある。
 - *「ふらっとホテルに泊まり込む」
 - *「手なぐさみに無意味な線を書き込む」

(姫野 1999: 78-81)(=2.1.2節(11))

また、松田(2004)による図4-8(=図2-3)の「V1+込む」のコア図式では、「移動先」としての内部領域Xだけでなく、主観的に領域Xの外に出るのが困難だと感じられる領域Yも設定されている。

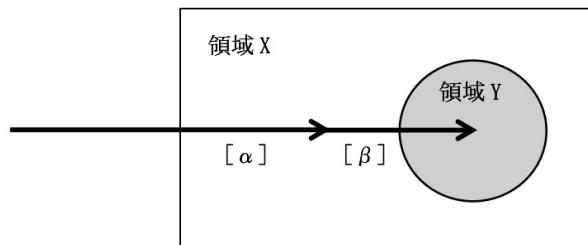


図4-8: 「～込む」のコア図式(松田 2004: 75)(=図2-3)

しかしながら、このような「内部移動」以上のニュアンスの存在がどのような認知的基盤に支えられているのか、また、領域 Y と $[\beta]$ 段階を設定する根拠が明確に示されていない。

本節では、本動詞「こむ」との意味的継承関係に基づき、「V1+込む」における「内部移動」以上のニュアンスの付加、領域 Y と $[\beta]$ 段階の設定が、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面、また、<満/空>、<中心/周辺>、<起点-経路-着点>、<尺度>のイメージ・スキーマの顕在化により説明可能であることを示す。

● 本動詞からのイメージ・スキーマの継承

4.2.1 節において、本動詞「こむ」には、図 4-9 (=図 4-5) のような一連の《内部移動事象》の行為連鎖が含まれており、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面、機能的側面、および<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されていることについて論じた。

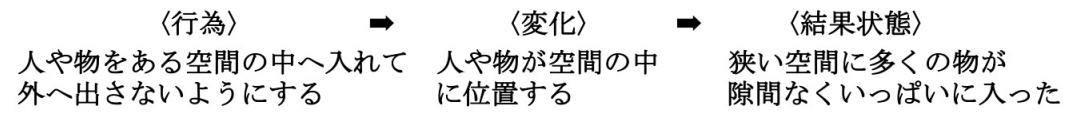


図 4-9: 本動詞「こむ」に関わる一連の《内部移動事象》(=図 4-5)

3.1.1 節で確認したように、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面に関して、Johnson (1987:19-22) は少なくとも 5 つの機能的要素を持つと述べている。以下に再掲する。

- (i) 容器は外部からの力を遮断または和らげる。
- (ii) 容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる。
- (iii) 容器の中のものは比較的位置が変わらない。
- (iv) 容器の中のものは内部のものには見やすく、外部のものには見にくい。
- (v) 容器には推移性⁴⁷が働く。

(Johnson 1987:19-22, 和訳は鍋島 (2002: 75) による)

⁴⁷ 例えば、鞄の中にある財布の中の硬貨は必ず鞄の中にあるといえる。

このように、<容器>は比較的密閉した空間であることから、ものが一旦<容器>の中に入ると動くことや外に出ることが難しく、<容器>の中に閉じ込められ、「固着する」という状態になると考えられる。ここでの「固着する」は多くの場合、主観的、心理的な<固着>を意味しており、必ずしも移動物が<容器>の中に封じ込められ、出られない状態を指しているわけではない。

次は、実際の言語表現において、「固着する」という概念はどのように表現されているのかについて確認する。

- (51) a. 船いっぱいの荷物を料理屋の倉庫に運び込むのが仕事だ。 (a)
b. この価格にはピアノをクレーンで2階に運び込む費用も含まれている。 (a)
- (52) a. 香りも素晴らしい、胸いっぱいに吸い込むと、爽やかな香りに癒されます。 (a)
b. このとき、息を吸い込むときは吸い込んだ空気は下腹部まで浸透していく状況をイメージしてください。 (b)
- (53) a. この辺りはビジネス街ですし、冬は特にホームレスが住み込むのを警戒します。
(c)
b. 1955年、20歳の雅代は、美大で油絵を教える川久保悟郎の家に、娘の桃子の家庭教師を条件に住み込むことになる。 (c)、(d)
- (54) a. 日本の医療の質は高く、一時、海外から患者を呼び込もうというメディカル・ツーリズムが話題になりました。 (cf. 患者を診療室に??呼び込む) (a)、(c)、(d)
b. しかしある時点から演奏家を家に呼び込むホーム・コンサートのようなものに変わっていきます。 (cf. 演奏家を劇場に??呼び込む) (d)

(51a-b) 「運び込む」

(51a) では「船いっぱいの荷物」が「倉庫」に運び込まれるため、容易に取り出されない「固着」感を生み出している。

(51b) では、「移動物」である「ピアノ」は数が多くはないが、物理的にサイズが大きいため、特定の場所に運び入れる際の困難や後に動かしにくいというニュアンスが生じ、「固着」状態が連想されやすい。

(52a-b) 「吸い込む」

(52a)では、「胸いっぱい」という表現から、大量の香りが内部に取り込まれることで、「胸」という＜容器＞に固定されるイメージが喚起されている。

(52b) では、「下腹部まで浸透していく」という文脈から、「空気」が「腹の奥」まで移動し、外に出ることが比較的に難しく感じられ、「固着」するという印象が与えられる。

(53a-b) 「住み込む」

(53a) では、「住み込む」を用いて、「移動物」の滞在時間が長いこと、すなわち、ホームレスがビジネス街に長く住むことを指しているため、「固着」と結びつくのは妥当であると考えられる。

(53b) では、「雅代」が単なる「川久保悟郎の家」に長く住むではなく、「家庭教師」という職務の目的が伴っている。

(54a-b) 「呼び込む」

(54a)の「メディカル・ツーリズム」では、日本にたくさんの「患者」を「呼ぶ」ことにより、彼らが長期滞在し、医療や観光で日本に経済的な貢献をもたらすという目的が含まれている。

(54b) では、「演奏家」が家に滞在する時間が必ずしも長いとは限らないが、「ホーム・コンサート」を行うという特定の目的が強調されている。

以上の分析から、実際の使用場面において、「固着する」という結果状態に達するとされる多様な状況が見受けられ、我々は少なくとも以下の4つの文脈要素のいずれかに基づいて、「移動物」が最終的に「固着する」状態に達すると捉えていることが分かる。

- (a) 「移動物」の量が多い、またはサイズが大きいこと；
- (b) ＜容器＞の奥深くまで移動すること；
- (c) 「移動物」の滞在時間が長いこと；
- (d) 内部移動の行為に何らかの特定の目的が伴うこと；

これらの文脈要素が、互いに関わり合い、「移動物」が最終的に「固着する」という結果状態に至ることに寄与していると考えられる。

以上のことから、「V1+込む」の使用において、「固着する」という結果状態が、本動詞

「こむ」の場合とは異なる形で表現されているにもかかわらず、「V1+込む」では、依然として<容器>のイメージ・スキーマの両側面が顕在化していると考えられる。<固着する>という意味要素は「V1+込む」の使用において無視できない重要な役割を担っているため、本稿は、「V1+込む」の基本義を [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]と記述することにする。ここで E1 は、前項動詞 V1 が表す事象を指す。

続いて、本動詞「こむ」が喚起しているもう 1 つのイメージ・スキーマである<満/空>のイメージ・スキーマが、一部の「V1+込む」においてのみ顕在化することについて確認する。

例えば、(55a-b) に示されるように、「運び込む」は、「箱 1 個」のような単数の「移動物」をとる場合もあれば、「いっぱいの荷物」のような複数の「移動物」をとる場合もある。(56a-b) も同様である。

(55) a. 箱 1 個の重さも 40kg 弱あるので、部屋に運び込むのも一仕事です。

b. 船いっぱいの荷物を料理屋の倉庫に運び込むのが仕事だ。

(56) a. 試験官がバスに乗り込んだら、最初の受験者は“運行前の点検”をします。

b. 大勢の通勤客がバスに乗り込んだ。

<容器>は限られた空間であるため、通常、その内部に多くのものが入るほど、<容器>の内部空間が混んでいる状態になることが想定されやすい。しかし、このような<満/空>のイメージ・スキーマは「V1+込む」の一部にのみ顕在化しており、基本義の使用において十分条件ではあるが、必須の条件とまでは言えない。

● <中心/周辺>、<起点-経路-着点>、<経路尺度>のイメージ・スキーマ

<容器>のイメージ・スキーマの両側面のほか、基本義 [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]は、<中心/周辺>、<起点-経路-着点>、<経路尺度>のイメージ・スキーマとも関わっている。

(57) の例から、一部の「V1+込む」は単に<容器>の内部に移動するだけでなく、<容器>の相対的に<中心>となる所に移動することを表すことがわかる。

(57) a. このとき、息を吸い込むときは吸い込んだ空気は下腹部まで浸透していく状況

をイメージしてください。

- c. 私は酔っぱらって家に帰り、{自分の部屋/??玄関} に転げ込んだ。
- d. この物語は、受験生の女の子が親とけんかし、家出して {森の中/??遊園地の入り口} に迷い込むことから始まります。

さらに、基本義 [V1-込む]MOTION \leftrightarrow [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]は「内部移動」を表すため、当然ながら<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマと関連しているが、ここで注目すべき点は、「V1+込む」では「移動物」が<容器>の<外部>、または<内部>のより周辺的な位置から中心へと向かう移動を表すという方向性である。この特徴により、<経路尺度>のイメージ・スキーマも「V1+込む」の使用において重要な役割を果たしていると考えられる。

4.2.2.1.3. イメージ図式

以上の分析を踏まえて、本稿は、本動詞「こむ」との継承関係に基づき、基本義 [V1-込む]MOTION \leftrightarrow [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]が喚起する一連の《内部移動事象》を図 4-10 のように表示する。

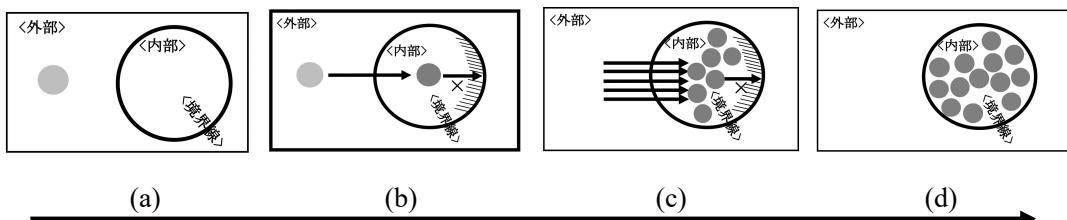


図 4-10：「V1+込む」の基本義に関わる一連の《内部移動事象》

「V1+入れる」と同様、図 4-10(a) は、内部移動が発生する前の段階を指す。また、図 4-10(b) は太線で枠取られ、基本義 [V1-込む]MOTION \leftrightarrow [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]の中心的意味を象徴している。図 4-10(b) における斜線の影と「×」マークは、「移動物」にあたる円盤が<境界線>を超えることができず、その位置に留まっていることを視覚的に示しており、<固着する>という意味要素を強調している。

図 4-10 (c-d) は、内部移動が完了した後の段階を視覚化している。つまり、図 4-10 (a-b) の後続段階として、より多くの「移動物」が<容器>の<内部>に移動し、そして、<容器

>の<内部>に留まり(図4-10(c))、その結果として、<容器>の<内部>に、多くの「移動物」が満たされた状態(図4-10(d))が想定される。

基本義 [V1-込む]MOTION \leftrightarrow [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]は、図4-10のような一連の《内部移動事象》をベースとしているが、その中心的な意味として、以下の図4-11(=図4-10(b))のみがプロファイルされている。

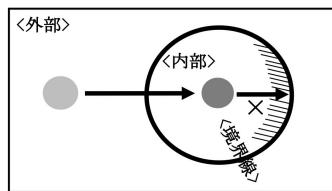


図4-11: 「V1+込む」の基本義のイメージ図式(=図4-10(b))

4.2.2.2. 拡張義 I : [V1-込む]ACTION \leftrightarrow [E1 を十分に行う]

本稿の拡張義Iは、姫野(1999)による「程度進行」の「累積化」、松田(2004)による「Dタイプ」に相当するものである。本節では、拡張義Iの前項動詞の意味特徴に着目し、「E1を十分に行う」ことで生じる結果状態はV1の意味特徴によって異なることを示す。その後、喚起されるイメージ・スキーマを確認し、拡張義I:[V1-込む]ACTION \leftrightarrow [E1を十分に行う]をイメージ図式を用いて視覚的に記述する。

4.2.2.2.1. V1の意味特徴および結果状態

拡張義Iにおいては、「量的変化」⁴⁸によって「質的変化」が起こりやすいV1と「量的変化」によって「質的変化」が起こりにくいV1、という2種類の前項動詞が観察される。それぞれの「量的変化」によって引き起こされる結果状態は異なる特徴を示す。

● 「量的変化」によって「質的変化」が起こりやすいV1

考察に入る前に、本稿における「量的変化」と「質的変化」という2つの概念について簡潔に説明しておきたい。

「量的変化」は、「時間的長さに関わる量の変化」と「数に関わる量の変化」、2つの場合

⁴⁸ ここで「量」は前項にくる動詞の性質によって表すものが異なる。通常、「時間的長さ」、「回数」、「目的語の数」を指す場合が多い。

を想定して提示する概念である。「時間的長さに関わる量的変化」は、時間の累積や反復の回数の増加、「数に関わる量的変化」は、対象となるものの数量が多いことを指す。この2種類の変化は、それぞれ異なる性質を持ちながらも相互に関連している。例えば、ものの数量が多ければ、当然ながらその行為に長時間かかることが多く、同様に、長時間かかる行為であれば、対象の量がより多くなる可能性が高いと考えられる。

一方、「質的変化」は、「量的変化」により、主語の動作主または目的語の被動作主に生じる結果状態の質的変化を指す。

例(58)が示すように、「煮る」、「洗う」、「使う」、「投げる」のような前項動詞は、「量的変化」によって、「質的変化」が起こりやすいと考えられる。

- (58) a. もやし入れて透き通るくらいまで煮込む。
b. さらに洗い込むことによって古着の味が出てきます。
c. ほぼ全てのアプリをキーボードで操作できるため、一つのソフトを使い込むと
異常に速く操作が出来るようになります。
d. 監督島岡吉郎の下で毎日500球を投げ込むほどの猛練習を重ね、高橋とともに
投手陣を支えた。

例(58a-c)では、「煮る」、「洗う」、「使う」といった前項動詞の「時間的長さに関わる量的変化」が強調されており、十分に「煮る」、「洗う」、「使う」ことで、「透き通る」、「古着の味が出る」、「異常に速く操作が出来る」といった結果状態の「質的変化」が引き起こされる。

例(58d)では、前項動詞「投げる」の「数に関わる量的変化」が強調されており、十分に「投げる」ことによって、「投手陣を支えるほどの能力を持つ」という結果状態の「質的変化」が起こることが想定される。

● 「量的変化」によって「質的変化」が起こりにくいV1

「量的変化」によって「質的変化」が起こりにくいV1と結合する用例として、(59)が挙げられる。

- (59) a. 年末年始に家でゆっくり過ごすために、食料を買い込むのもいいですね。

- b. 暑いときは窓をあける、寒いときは皆で服を着込むなどの対策を取りましょう。
- c. 製薬会社のMRはあまり医者の悪口を書き込み過ぎないようにしてください。

(59) では、前項動詞「買う」、「着る」、「書く」が「～込む」と結びつくことで、「大量の食料を買う」、「服を何枚も重ねて着る」、「たくさんの悪口を書く」ことを強調し、目的語「食料」、「服」、「悪口」の「量の変化」を表していると考えられる。これは、(58a-c) の「煮る」、「洗う」、「使う」といった前項動詞と異なり、「量的変化」によって「質的変化」が生じるのではなく、単に目的語の「量の増加」が際立っているケースである。

以上、「量的変化」によって「質的変化」が起こりやすいV1と「量的変化」によって「質的変化」が起こりにくいV1は、それぞれ「質的変化」と「量の増加」といった結果状態を引き起こすことについて確認した。

● 語用論的推論による結果状態

最後に、「質的変化」という結果状態は、あくまで、推論によるものであり、必ずしもそういう状態になるとは限らない点について確認する。

このような「質的変化」という結果状態は、松田(2004)によるDタイプのイメージ図式では、領域Yによって表示されている。以下に再掲する。

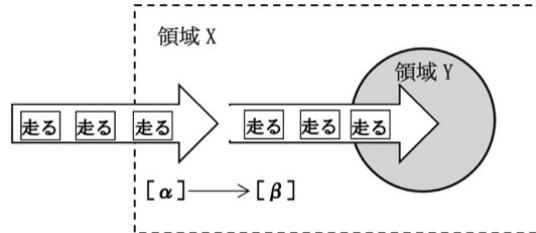


図4-12: Dタイプ「走り込む」のイメージ図式 (松田2004: 87参照)(=図2-8)

図4-12のイメージ図式に基づき、松田(2004)は、「走り込む」の意味を以下のように解釈している。

「走り込む」は、「走る行為」の反復行為によって、「満足しない状態」から「満足する状態」(領域X)への「(抽象領域への) 内部移動」と、さらに「目標が達成

できる状態（領域 Y）」に留まるという固着のニュアンスを併せて持っている用法であると解釈される。

（松田 2004: 88）

つまり、D タイプ「V1+込む」（本稿の拡張義 I）の意味には、「目標が達成できる状態（領域 Y）」へ移動し、留まるという部分も含まれているという主張である。

しかしながら、(60) のような結果達成性テストから、「質的変化」といった結果状態が達成されていなくても、「煮込む」、「洗い込む」、「使い込む」、「投げ込む」の使用が許容されることがわかる。

- (60) a. シチューを 2 時間煮込んだが、野菜がまだ硬くて食べられない。
b. お気に入りのジーンズを何度も洗い込んだが、生地が柔らかくならず、まだ硬さが残っている。
c. 新しい包丁を何度も使い込んでみたが、まだ手に馴染む感じがしない。
d. 繰り返し球を投げ込んでみたが、思ったほど球速が上がらない。

以上から、拡張義 I の中心的意味では、「V1 が表す行為を十分に行う」という「量的変化」の部分のみがプロファイルされており、V1 が表す行為の「質的変化」により、引き起こされる「質的変化」はあくまで語用論的推論によるものであると言えるだろう。したがって、本稿では、拡張義 I を[V1-込む]ACTION ↔ [E1 を十分に行う]と記述する。ここでの E1 は、前項動詞 V1 が表す行為のことを指す。

4.2.2.2. イメージ・スキーマとの関わり

ここでは、拡張義 I [V1-込む]ACTION ↔ [E1 を十分に行う]の意味に関して、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面、および<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマがどのように関わっているのかを確認する。また、基本義と拡張義 I は、<満-空>のイメージ・スキーマの変容や語用論的強化といった認知的動機付けによって関連づけられていることを示す。最後に、これらのイメージ・スキーマに基づき、拡張義 I のイメージ図式を提示する。

- <容器>と<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマのメタファー的写像

これまでの考察で明らかにしたように、「V1+込む」の基本義 [V1-込む]MOTION \leftrightarrow [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する] では、物理的・抽象的、客観的・主観的を問わず、「移動物」と「移動先」が確認できる「内部移動」を表しており、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが喚起されている。

では、拡張義 I の場合はどうだろうか。まず、用例 (61-62) に示される格要素について確認してみよう。

(61) a. 彼は、自分の靴を磨き込んで、ピカピカにした。

b. 柔らかい布で鏡を拭き込んだ。

(62) a. オリンピックを前に、選手たちは泳ぎ込んだ。

b. 残された 3 週間でしっかり走り込むしかありません。

(61a-b) の他動詞用例において、ヲ格よって提示されているのは「移動物」ではなく、「磨く」、「拭く」の「被動作主」である。また、(61a) では、ニ格が明示されているものの、それは「移動先」ではなく、「磨く」行為の「結果状態」を示している。

また、(62a-b) の自動詞用例においては、ニ格が明示されておらず、ハ/ガ格によって提示されているのは「移動物」ではなく、「泳ぐ」、「走る」といった行為を行う「動作主」である。

このように、拡張義 I では、「移動物」と「移動先」が確認できず、実質的な内部移動の意味がなくなっている。この場合、「～込む」は前項動詞が表す行為を程度副詞的修飾する役割を担い、行為、および、その行為の「量的変化」がプロファイルされていると考えられる。

イメージ・スキーマとの関わりについては、<容器>のイメージ・スキーマと<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが依然として喚起されているが、それらは内部空間への移動を示すのではなく、結果状態を表す内部空間、物事の因果関係を示す構造へとメタファー的に写像されていると解釈される。

つまり、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマにおける<起点>は、「V1 が表す行為を十分に行う」という<原因>に、<着点>は「質的変化」や「量の増加」といった<結果

>に写像されている。また、拡張義 I では、動作主の関与によって、「V1 が表す行為を一回だけ行う」ことから徐々に「V1 が表す行為を十分に行う」ことへと進行することで、「質的変化」や「量の増加」といった結果状態が生じることを表している。

この場合、V1 が表す行為の「量」は、ある種の特定の属性として値が付与されており、「量的変化」は尺度のある変化とみなされる。この意味で、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマの<経路>は、<尺度>の<特性尺度>に写像されると解釈される。

このような写像関係を図示すると、図 4-13 になる。

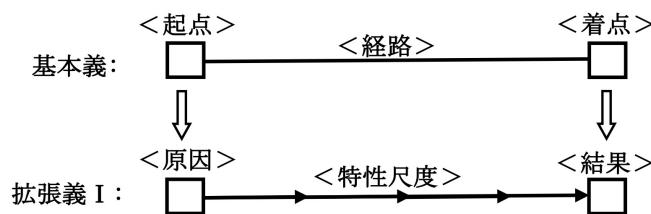


図 4-13: <起点-経路-着点>のイメージ・スキーマの因果関係へのメタファー的写像

さらに、拡張義 I における「質的変化」や「量の増加」といった結果状態は、ある種の抽象的な<容器>として捉えられ、<容器>のイメージ・スキーマが関わっていると考えられる。また、この結果状態は一旦達すると容易に元の状態に戻らない性質を持つことから(姫野 1999; 松田 2004 を参照)、基本義における「固着する」という意味要素が維持され、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が喚起されることがわかる。しかし、前述の通り、このような結果状態はあくまで語用論的推論であり、拡張義 I の中心的意味ではないため、<容器>のイメージ・スキーマは喚起されているものの、背景化されている。

● <満/空>のイメージ・スキーマの変容

前述のように、本動詞の「こむ」は、<満/空>のイメージ・スキーマを喚起する。また、基本義の [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]が喚起する一連の《内部移動事象》の後段階にも、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されていると考えられる。本動詞「こむ」、および基本義の「V1+込む」に喚起される<満/空>のイメージ・スキーマは、物理的な<容器>の<内部>が充満しているか否かという主体的な視点が組み込まれた場合に喚起されるものである。すなわち、この場合の<満>は、物理的な内部領域にあるモノの量の多さを指す。一方、拡張義 I における「V1 が表す行為」の「量的変

化」もまた、ある種の<満>として概念化される。

このように、<満/空>のイメージ・スキーマは元々物理的な内部領域において形成されるものであるが、適用領域の次元が変容することにより、行為の量的多さを表現する際にも喚起されると考えられる。

● 語用論的強化

次に、基本義から拡張義Ⅱへ意味拡張には、<満/空>のイメージ・スキーマの変容のほか、「語用論的強化」(Traugott1988)も働いていることについて確認していく。

まず、基本義と拡張義Ⅰの2つの用法を同時に持つ語彙項目として、以下のようなものが挙げられる。

(63) 【基本義と拡張義Ⅰの両方を持つ語彙項目】

投げ込む、描き込む、走り込む、泳ぎ込む、読み込む、浸し込む、揉み込む、洗い込む、書き込む、着込む、買い込む…

(64) a. 子供たちは籠にボールを投げ込んだ。(基本義)

b. 冬場、通常の公式球より約100グラム重い240グラムの特殊球を1日おきに50-60球投げ込んできたことで身につけた直球の伸びとスタミナには自信がある。
(拡張義Ⅰ)

(65) a. 遅れていた乗客が機内に走り込んで来た。(基本義)

b. 普段から十分に走り込んで、身体を鍛えておく。(拡張義Ⅰ)

(66) a. 大量の半魚が湖に泳ぎ込む。(基本義)

b. オリンピックを前に、選手たちは泳ぎ込んだ。(拡張義Ⅰ)

(67) a. これは社会風刺や皮肉などを歌い込む和歌のジャンル「狂歌(きょうか)」であるそうだ。(基本義)

b. 合唱団は課題曲を歌い込んだ。(拡張義Ⅰ)

(68) a. 小ぶりの鯛を塩焼きしてごはんに炊き込む「鯛飯」は大好きで良く作ります。 (基本義)

b. 最初に10Lだった水量が1時間半炊き込むとだいたい6L位までに煮詰まつてきます。(拡張義Ⅰ)

(69) a. 多摩美術大学に進んで東京に越し、卒業後は横浜に住んで、ガラスや陶器に絵を描き込む仕事を手掛けるようになった。(基本義)

b. ある程度絵を描き込んてきてから、今度は理論というかそういう感じの部分について勉強してみると、理解も早まるし良いのではないかと。(拡張義 I)

(70) a. 酷寒の真冬のアウターとしてコイツを着るし、中に分厚いセーターを着込むこともある。(基本義)

b. 今日は寒いので、服をたくさん着込んで来た。(拡張義 I)

「投げ込む」を例に取り上げ、基本義と拡張義 Iとの意味的関連性を検討していく。

(71) a. ボールを変化させずに最短距離でミットまで投げ込む (...)

b. 監督島岡吉郎の下で毎日 500 球を投げ込むほどの猛練習を重ね、高橋とともに投手陣を支えた。

c. 久しぶりに 1 時間ほど投げ込むが、筋疲労により右腕が言うことを聞かず、ほとんどのボールが右下へずれる。

d. BH 戦終了後から集中的に投げ込んでアップ。

(71a) では、「移動物」(ボール)が「移動先」(ミット)の内部への移動を表し、基本義に属する。(71b-c)の場合、「移動物」(球)の「移動先」は文中に明示されなくなる。(71d)になると、「移動先」が不明瞭で、拡張義 Iとしての用法になる。

つまり、例(71b-c)のように、「500 球」、「1 時間ほど」といった「量」に関わる表現は頻繁に「投げ込む」と共起することによって、「～込む」に内部移動の意味が徐々に失われる一方、「量」の意味合いが組み込まれるようになり、拡張義 Iとしての用法が定着されるようになる。

このように、あるコンテキストにおける繰り返しが、表現と意味との新しい結びつきにつながる現象は、「語用論的強化」(Traugott 1988)とみなされる。以上の分析により、拡張義 Iの意味獲得は語用論的に強化された結果であると言えるだろう。

しかし一方で、「走り込む」、「泳ぎ込む」のような用例は「投げ込む」と同様に、「移動物」と「移動先」がなくなり、基本義と拡張義 I両方の意味を持つが、基本義から語用論的強化によって拡張してきたとは考え難い。ある領域の内部へ「走り込む」ことを十分に行うこと

で、何らかの結果状態に達するという「質的変化」が想定されにくいかからである。

従って、このような語例に見られる拡張義 I の用法は、[V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]というコンストラクション的イディオムが定着してから初めて現れるものと考えられる。

(72) に示すような語彙項目は、拡張義 I としての用法のみを持っており、(73-76) のような内部移動を表す文脈で用いられる場合、不自然となる。

(72) 【拡張義 I のみを持つ語彙項目】

洗い込む、拭き込む、弾き込む、磨き込む、買い込む…

(73) ??彼は大切な手紙をうっかり洗濯機に洗い込んでしまった。

(74) ??テーブルにある食べ残しをゴミ箱に拭き込んだ。(作例)

(75) ??手についた洗い水を水槽に弾き込んだ。

(76) ??新しく引っ越した家に冷蔵庫を買い込んだ。

以上、基本義から拡張義Iへの意味拡張プロセス、また、その意味拡張は、<満/空>のイメージ・スキーマの変容と語用論的強化によって認知的動機づけられていることを明らかにした。

4.2.2.2.3. イメージ図式

以上の分析に基づき、拡張義 I [V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]が喚起する一連の事象を図 4-14 のように表示する。

図 4-14(a) では、物理的な領域におけるモノの数量が多くて、充满している状態を示している。一方、図 4-14(b) では、<満/空>のイメージ・スキーマがトポロジー的に継承され、「行為を十分に行う」という行為の量が多い状態へと変容している。「行為を十分に行う」という意味は、<容器>の<内部>へ移動する<尺度>を持つ複数の矢印で表される。動作主は、このようなく特性尺度>を持つ<経路>に沿って進行し、最終的に「質的変化」や「量の増加」といった結果状態を示す抽象的な<容器>に到達すると想定される。物理的な内部空間としての<容器>と区別するため、抽象的な<容器>の内部を灰色に塗りつぶしている。なお、結果状態は語用論的推論によるものであるため、<容器>のイメージ・スキーマは破線で示されている。

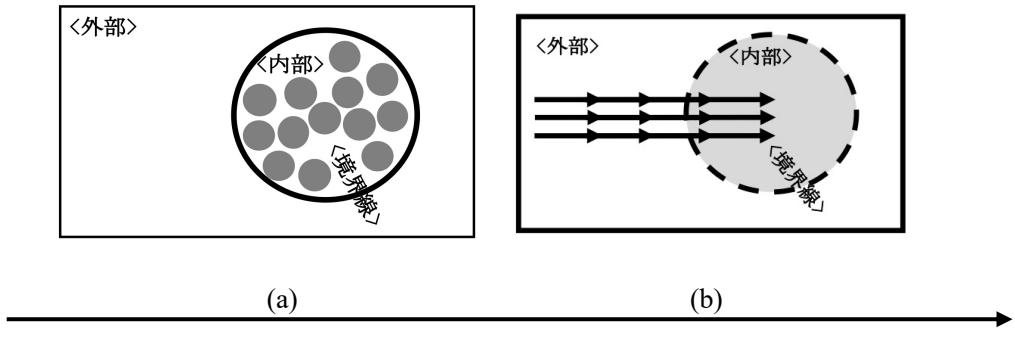


図 4-14: 「V1+込む」の拡張義 I に関する一連の事象

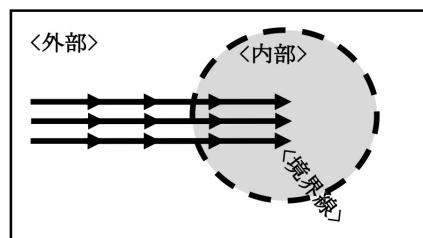


図 4-15: 「V1+込む」の拡張義 I のイメージ図式 (=図 4-14 (b))

4.2.2.3. 拡張義 II: $[V1\text{-}込む}]_{\text{STATE}} \leftrightarrow [E1]$ の程度が激しい・深い]

本稿の拡張義 II は、姫野 (1999) による「固着化」(惚れ込む、話しこむ、黙り込む、思い込む、考え込む、など)、「濃密化」(枯れ込む、冷え込む、錆び込む、老い込む、など)、松田 (2004) による「C タイプ」に相当するものである。基本義の $[V1\text{-}込む}]_{\text{MOTION}} \leftrightarrow [E1]$ の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]、拡張義 I の $[V1\text{-}込む}]_{\text{ACTION}} \leftrightarrow [E1]$ を十分に行う]では、それぞれ、「移動」、「行為」の有り様がプロファイルされているのに対し、拡張義 II では、「状態」のあり様がプロファイルされている。

考察に入る前に、姫野 (1999) による「固着化」と「濃密化」を統合する理由について述べておく。

(77) が示すように、姫野 (1999) による「固着化」に属する「惚れ込む」、「黙り込む」のような語例は、「すっかり」、「めっきり」、「ますます」といった副詞と共に起ることで、状態の変化の程度、いわゆる「濃密化」として解釈することが可能である。

- (77) a. 母親はトニーの人柄にすっかり惚れ込むが、父親は硬い表情で「反対だ」と告げる。

b. ペテロンギウスは、その返答を聞いて、めっきり黙り込んでしまった。

(『ペテロンギウス』(作者: ねう)⁴⁹ 最終検索日: 2024/11/13)

同様に、(78) が示すように、「濃密化」に属するとされる「老け込む」、「冷え込む」のような語例は、「すっかり」、「とことん」、といった修飾句と共に起することで、V1 が表す状態に籠もっていること、いわゆる「固着化」として解釈することが可能である。

(78) a. この 2 年で親父もお袋もすっかり老け込んでしまった。

b. ここ 2~3 年の冬は、寒くなるときはとことん冷え込む傾向のようで、厳冬期は水道管が凍結する現象が東京でも珍しくなくなりました。

(『水道管凍結、年末年始に要注意』大丸商事有限会社⁵⁰ 最終検索日: 2024/11/13)

このように、姫野 (1999) による「固着化」と「濃密化」は、使用コンテクストによって異なる解釈がされるモノであり、両者には一定の伴隨関係があると考えられる。そこで、本稿では、「固着化」と「濃密化」に共通する部分に着目し、拡張義Ⅱの意味を [V1-込む]STATE \leftrightarrow [E1 の程度が激しい・深い] として記述する。ここでの E1 は前項動詞 V1 が表す状態を指す。

以下では、前項動詞の意味特徴を分析し、拡張義Ⅱに関わるイメージ・スキーマを確認したうえで、[V1-込む]STATE \leftrightarrow [E1 の程度が激しい・深い]をイメージ図式で表示する。

4.2.2.3.1. V1 の意味特徴

● 状態性

Langacker (2008) は、動詞の語彙的アスペクトに注目し、動詞を完了動詞と未完了動詞 2 つの対立的な概念に分けています⁵¹。完了動詞 (perfective verb) は例 (79) に挙げられるように、プロファイルされるプロセスの内部が非均質で何らかの時間的な変化を含んでおり、図 4-16 のように時間軸上で区切られている。それに対し、例 (80) のような動詞は未完了動詞 (imperfective verb) であり、プロファイルされるプロセスが均質で安定した状態が続いている

⁴⁹ <https://ncode.syosetu.com/n2364bs/>

⁵⁰ <https://daimaru-syoji.co.jp/contents/593>

⁵¹ Langacker (2008) によれば、動詞はプロセスをプロファイルする。プロセスは時間軸上に展開し、連続的にスキャンされる関係である。

る。図 4-17 が示すように、時間軸上で明確に区切られていない。

(79) 完了動詞 : fall、jump、kick、bite、break、decide、cook…

(80) 未完了動詞 : be、have、know、doubt、believe、contain、fear…

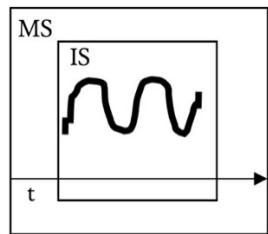


図 4-16⁵² : 完了動詞

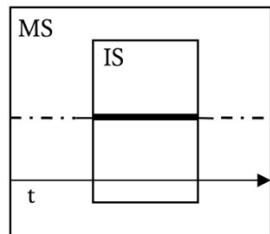


図 4-17: 未完了動詞

拡張義 II [V1-込む]STATE \leftrightarrow [E1 の程度が激しい・深い]の前項動詞 (枯れる、冷える、寝る、信じる、など) は、均一的な状態性を持っており、以下のような未完了動詞 (imperfective verb)と同じ性質を持っていると考えられる。

①内部が均質で、動的ではない。安定した状態が続いている。

②始まりと終わりがプロファイルされていない。関連する期間内、状況が一定である。

つまり、未完了動詞では、それが表す事態の起点と終点が背景化しており、始点と終点を除いた内部のみがプロファイルされている。

しかしながら、「話す」、「しゃべる」、「咳く」などの前項動詞は、通常、動作性動詞として捉えられ、前述の①と②のような未完了動詞の特徴と一見矛盾しているように見える。これらの動詞は、長時間にわたって繰り返したり、積み重ねたりすることができるため、動作性動詞としての一まとまり性を持ちながらも、個々の動作が連續性や持続性を帯びることで、安定した状態が続いているように認識されやすい性質も備えていると考えられる。

⁵² Langacker (2008) によると、IS (immediate scope) はある言語表現の理解に直接関係しており、注目される部分である。MS (maximal scope) はある言語表現が扱う最大スコープを指す。IS に対して背景化される部分である。

● 「内」から「内々」への「特性尺度」

次に、前述の前項動詞の「状態性」には段階性があり、「特性尺度」のある変化が認知的際に立っていることについて確認する。

ここでは、瀬戸 (1995) による「内外」のメタファーの見解を引用する。図 4-18 が示すように、瀬戸 (1995) によれば、「内外」のメタファーは「遠/近」及び「中心/周縁」メタファーと深く関わっている。

「内」と「外」とは、比較的明瞭な境界によって仕切られることが多いのに対し、「中心」と「周縁」という概念は、無段階的な色の濃淡によって描かれるような連続的な概念である。「遠/近」の視点から、「内」の領域にはさらに、「内々」という親密な領域が存在すると指摘されている。通常、「周縁」の内側は「既知」の領域であり、「内々」とされる領域は、最も親しく、「熟知」された領域と捉えられる。一方で、「中心」から見た「周縁」を越境した領域は「未知」の領域として認識される。

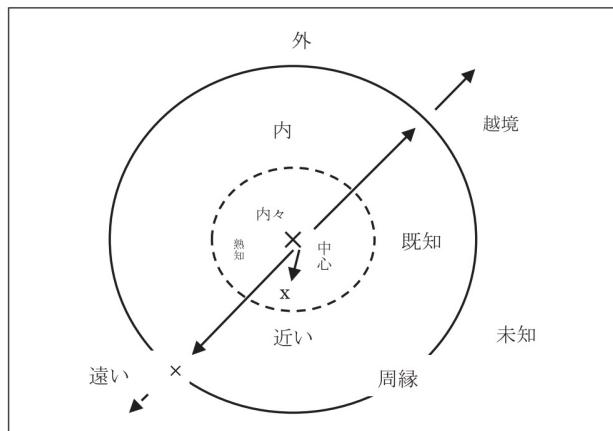


図 4-18: 「内外」の周辺 (瀬戸 1995: 163)

このように、拡張義Ⅱにおける前項動詞の表す状態を 1 つの抽象的な<容器>として考える際に、その<容器>の<内部>には、<周辺>、<内>、さらに「内々」という親密な領域が存在すると考えられる。このような動詞は、「～込む」と結合する場合、その状態の程度は<容器>の「内」から、「内々」という親密な領域へと深化していることが強調される。「内」から「内々」に行くほど程度が強くなるため、これによって、<特性尺度>のイメージ・スキーマが浮かび上がってくると考えられる。

また、姫野 (1999) が指摘するように、「思う」、「信じる」のような認識動詞に「～込む」

が結びつく場合、ト格で示される内容には、現実とは異なり必ずしも正確ではないというニュアンスが含まれる。このことは、<内>と<内々>という親密な領域の存在によって説明が可能である。

例えば、(81) の「信じ込む」の場合、「人」の頭の中で強く信じている「真実」は、正しくないもので、現実世界では「捏造記事」である。

(81) 捏造記事を真実と信じ込む人がいても不思議ではありません。

つまり、認識主体である「人」は、「真実と信じる」という認識状態が充満する抽象的な<容器>の「内」領域を経て、さらに、「内々」という親密な領域まで到達している。この場合、「信じる」という認識は、<容器>の「内」という「既知」の領域にあり、「信じ込む」という認識は、さらに深い「内々」という「熟知」した領域にある。しかしながら、「内々」領域に位置する認識主体は、<容器>の「外部」にある「未知」の現実世界における正しい認識にアクセスしにくいため、ここでの「熟知」はあくまで認識主体自身の判断にすぎない。一方、発話者は<容器>の「外部」、すなわち、「未知」の現実世界から認識主体の状態の様相を描写しているため、ト格がとる内容が正しくないというニュアンスが生じやすいと考えられる。

4.2.2.3.2. イメージ・スキーマとの関わり

以下では、基本義 [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]との意味的関連性から、拡張義 II [V1-込む]STATE ↔ [E1 の程度が激しい・深い]には、どのようなイメージ・スキーマが喚起されているかを検討する。また、それに基づき、拡張義 II のイメージ図式を提示する。

● <経路尺度>の背景化と<特性尺度>の前景化

4.2.2.1 節で確認したように、基本義 [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]においては、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが喚起され、「移動先」の内部領域としては、物理的な場合と抽象的な場合の両方が見られる。

例えば、基本義の「打ち込む」、「追い込む」、「沈み込む」は、(82a)、(83a)、(84a) のように物理的な内部領域への移動を表す文脈で使用される一方、(82b)、(83b)、(84b) のように、

「仕事」、「自殺」、「絶望」といった抽象的な内部領域への移動を表す文脈でも用いられる。この 2 つの用法は、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマのメタファー的な写像 (CHANGES ARE MOVEMENTS (抽象的な状態変化は物理的な空間移動である)) によって動機づけられていると考えられる。また基本義の場合、厳密に言えば、移動物は<容器>の<外部>から、<経路>に沿って、<容器>の<内部>さらに、<中心>まで移動することを表しており、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは 1 次元の方向性を持つ<経路尺度>のイメージ・スキーマとしても解釈される。

【基本義】

- (82) a. 床に釘などを打ち込むことは避けてください。(物理的)
- b. 日中も眠くならず、快適に仕事に打ち込むことができます。(抽象的)
- (83) a. 夕方の給餌の時間になると、運動場の牛を牛舎に追い込むのがジャッキーの日課となっている。(物理的)
- b. 教育とは人を自殺に追い込むためになされるものなのかと驚いてしまう。(抽象的)
- (84) a. プレートが海溝に沈み込む直前に、少し盛り上がり、それをアウターライズと呼ぶ。(物理的)
- b. 身体をひくつかせながら絶望に沈み込む。(抽象的)

一方で、基本義と比べ、拡張義 II [V1-込む]STATE \leftrightarrow [E1 の程度が激しい・深い]では、V1 が表す状態を<内容物>とする抽象的な内部領域の様相が焦点化されているのに対し、状態の対象である主語が「V1 でない状態」から「V1 である状態」へと変化するプロセスは、認知的に際立っていない。

例えば、例 (85) では、「考える」、「寝る」、「話す」、「老ける」、「鎔びる」といった状態領域の<内部>に焦点が当てられ、その状態の程度が激しい・深いことが強調されている。一方で、その前の段階、すなわち、「考えていない状態」から「考えている状態へ」、「寝ていない状態」から「寝ている状態」へといった状態変化のプロセスは焦点化されておらず、背景化されていると考えられる。

【拡張義 II】

- (85) a. 私は、どうするべきか、しばらく考え込んだ。
 b. 彼は風邪で寝込んでいる
 c. 電車の中で友達と話し込んで、駅を乗り過ごしてしまった。
 d. 老人は、入院とかしちゃうと一気に老け込む可能性があるので、
 e. この包丁は錆び込んでいる。

<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマに対応すると、基本義では、<起点-経路-着点>という一連の動きがプロファイルされているのに対し、拡張義Ⅱでは、<着点>の有り様がプロファイルされているが、<起点-経路>の部分はプロファイルされていないとのことである。このような焦点化移動は、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマと<着点>のイメージ・スキーマの間の「イメージ・スキーマ変換」(imageschema transformation) という認知的プロセスを通じて拡張的に成立するものであると考えられる。

しかし、前述通り、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは場合によって、1次元の方向性を持つ<尺度>のイメージ・スキーマとしても解釈される。また、<尺度>には、何らかの想定される経路上における移動物の位置を値とする<経路尺度>と、モノやコトの状態が動作主の関与によって進行する状態変化の結果が生じる場合、そのモノやコトがもつ性質の値から構成される<特性尺度>の2種類が分けられている。

ここで主張したいのは、拡張義Ⅱには、<経路尺度>のイメージ・スキーマが背景化されているが、V1の表す状態を<内容物>とする抽象的な<容器>の内部のでは、状態の対象が<容器>の<周辺>から<内>へ、さらに<内々>へと深化していくことがプロファイルされているため、<特性尺度>のイメージ・スキーマが前景化されていると考えられる。

● <中心/周辺>、<満/空>、<容器>のイメージ・スキーマ

前述のように、拡張義Ⅱ[V1-込む]STATEでは、V1が表す状態は1つの抽象的な<容器>として概念化されており、<容器>のイメージ・スキーマが喚起されている。具体的には、<容器>の<内部>にあるV1が表す状態と、その<外部>にある状態変化の前の状態を分ける境界線が認識されていることで、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面が喚起されている。また、姫野(1999:70)が指摘しているように、状態の対象である主語は、次の段階の状態変化を前提としながらも、依然としてV1のままの状態でいる。つまり、基本義 [V1-込む]MOTION ↔ [E1の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]における「固着する」とい

う意味要素は、[CHANGES ARE MOVEMENTS (抽象的な状態変化は物理的な空間移動である)という概念メタファーによって、起点領域から目標領域に写像されており、拡張義Ⅱでは、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面だけでなく、機能的側面も同時に喚起されていると考えられる。

また、拡張義Ⅱでは、V1が表す状態の程度が激しい・深いことが強調されているのは、<容器>のイメージ・スキーマの内部に、「周辺」、「内」、さらに「内々」といった連続的な領域が存在するからである。したがって、拡張義Ⅱでは、<中心/周辺>のイメージ・スキーマが喚起されている。

さらに、V1の表す状態は、<容器>の<内容物>として機能し、<容器>の属性を規定する役割を担っており、その状態には程度の差があるものの、<容器>がその状態によって満たされると捉えられる。このため、拡張義Ⅱでは、<満/空>のイメージ・スキーマも同時に喚起されると考えられる。

4.2.2.3.3. イメージ図式

以上の分析により、拡張義Ⅱに関わる一連の事象および、拡張義Ⅱの中心的意味のイメージ図式を表示すると、図4-19と図4-20になる。

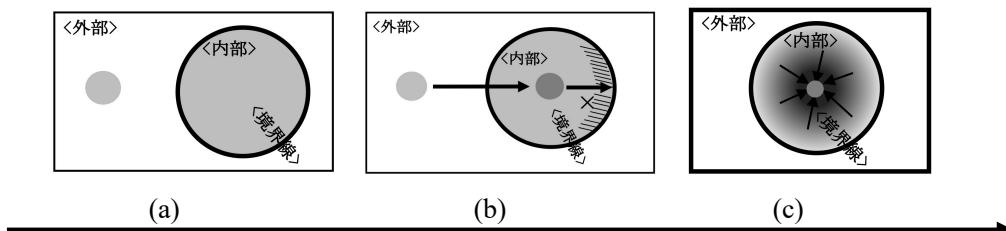


図4-19: 「V1+込む」の拡張義Ⅱに関わる一連の事象

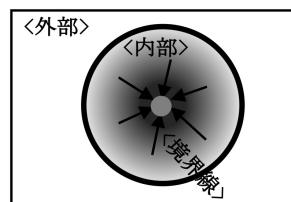


図4-20: 「V1+込む」の拡張義Ⅱのイメージ図式 (=図4-19(c))

前述のように、基本義と拡張義Ⅱは、[CHANGES ARE MOVEMENTS (抽象的な状態変化

は物理的な空間移動である)という概念メタファーによって関連づけられている。(Lakoff (1990) の「不変化仮説」(Invariance Hypothesis)によれば、メタファー的写像は、起点領域のイメージ・スキーマ構造を維持する。そのため、図 4-19(a-b) の図式は、基本義の図 4-10 (a-b) の図式構造を維持している。ただし、ここでは、<容器>の抽象的属性を強調するため、<容器>の<内部>を灰色に塗りつぶしている。

図 4-19(a) は状態変化の前の段階を表示する。また、図 4-19(b) は V1 が表す状態の<容器>へ移動するプロセス、および、そこに「固着する」ことを表示する。

図 4-19(c) は、状態変化が完了した後の段階、すなわち、<容器>の<内部>の様相を視覚化している。<特性尺度><容器>の<周辺>から<中心>への複数本の矢印によって表示される。また、状態の対象が<容器>の「内」、さらに「内々」へと移動し、程度が深化していくことは、<容器>の<内部>の色のグラデーションによって表示される。つまり、<中心>に近い「内々」に行けば行くほど、色が濃くなり、程度が激しい・深いことを表す。

4.2.3. 「V1+込む」の構文的多義ネットワーク

本節では、まず、これまで考察してきた[V1-込む]構文の 3 つの意味の共通点に基づき、それらに共通しているスーパースキーマ的意味を抽出する。また、[V1-込む] 構文の意味カテゴリーを階層的なネットワークとして提示する。最後に、4.2.1 節と 4.2.2 節で考察した、複数のイメージ・スキーマとの関わりを整理し、[V1-込む]構文の意味拡張の全体像を示す。

4.2.3.1. スーパースキーマ的意味

4.1.1 節で確認したように、「V1+込む」に対応する本動詞「こむ」という 1 つの単語の中には、図 4-21 が示すように、[中へ入れて外へ出さないようにした結果(他動詞としての意味)、狭い空間に多くの物がいっぱいに入った状態になる(非対格自動詞としての意味)]、という一連の《内部移動事象》の行為連鎖が含まれている。

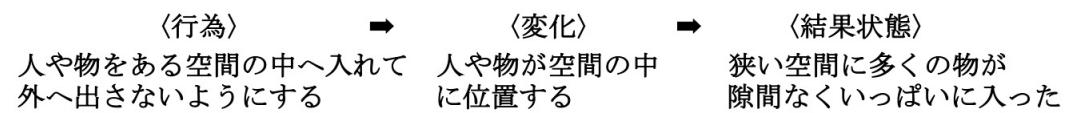


図 4-21: 本動詞「こむ」に関わる一連の《内部移動事象》(=図 4-5)

「こむ」が喚起するこの一連の《内部移動事象》における「狭い空間に多くの物がいっぱいに入った状態になる」という結果状態から、本動詞「こむ」には、<満-空>のイメージ・スキーマが喚起されていることがわかる。

また、『国語の語根とその分類』(大島正健 1934) の記述によれば、人や物の密集することを表すところから、「こむ」の「コ」は、「コ(濃)」の義に由来するとされている。

このように、本動詞「こむ」に含まれる結果状態は、空間という概念領域における「濃密状態」として捉えられると考えられる。

[V1-込む]の多義性メカニズムにおいて確認したように、本稿が提示した[V-込む]構文に対応する3つの意味、基本義 [V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]、拡張義 I [V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]、拡張義 II [V1-込む]_{STATE} ↔ [E1 の程度が激しい・深い]は、それぞれ異なる形の<満/空>のイメージ・スキーマを喚起している。これは、「濃密状態」の3つの実現形式として考えられる。

具体的には、基本義[E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]ことにより、空間という概念領域の「濃密状態」が結果的に達成される。また、拡張義 I [E1 を十分に行う]ことにより、行為という概念領域の「濃密状態」が結果的に達成される。さらに、拡張義 II [E1 の程度が激しい・深い]ことにより、状態という概念領域の「濃密状態」が結果的に達成される。

表 4-4: [V1-込む]構文における「濃密状態」の3つの実現形式

語義	「濃密状態」の概念領域
基本義: [V1-込む] _{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]	空間
拡張義 I : [V1-込む] _{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]	行為
拡張義 II: [V1-込む] _{STATE} ↔ [E1 の程度が激しい・深い]	状態

以上の分析により、基本義、拡張義 I、拡張義 IIにおいて、「濃密状態」という結果を実現する概念領域が異なるものの、何らかの濃密状態になるという点で共通していると考えられる。したがって、本稿は、[なんらかの濃密状態になる]を[V1-込む]のスーパー・スキーマ的な意味と認定する。ここで留意すべき点は、基本義の場合、内部空間領域が「濃密状態」になるのは、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面の顕在化による推論であるということである。

4.2.3.2. 「V1+込む」の構文的多義ネットワーク

- [V1-込む]の意味カテゴリー

[V1-込む]構文の意味カテゴリーを図 4-22 のような 3 つのレベルが含まれる階層的な構文ネットワークによって示されることができる。

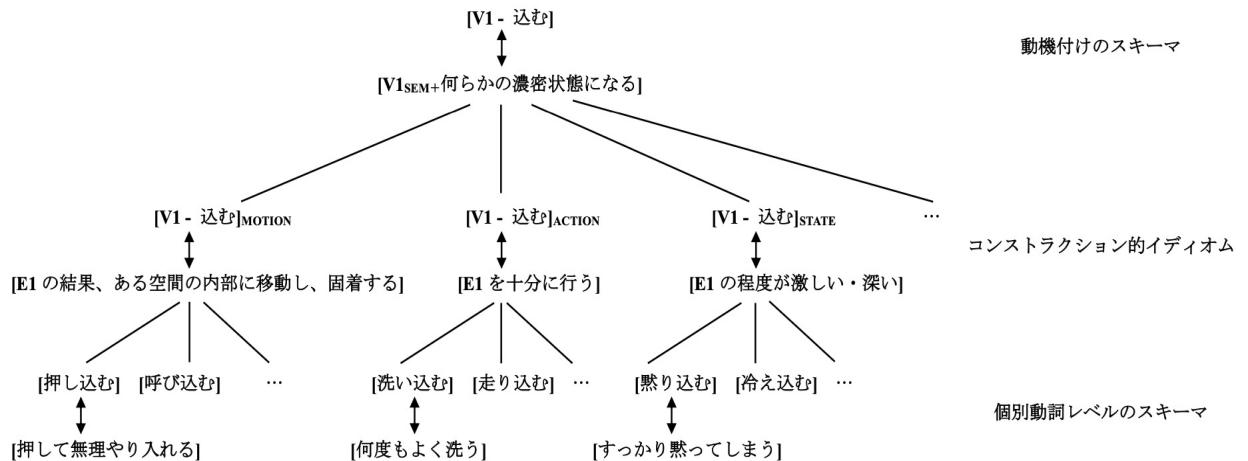


図 4-22: [V1-込む]構文の意味カテゴリー⁵³

(↔=形式と意味の対応関係、V1SEM=V1 が表す意味、E1=V1 が表す事象、MOTION=移動、ACTION=行為、STATE=状態)

- [V1-込む]の意味間の拡張関係の全体像

4.2.1 節と 4.2.2 節では、本動詞「こむ」と「V1+込む」が複数のイメージ・スキーマとどのように関わっているのかについて考察した。具体的には、「V1+込む」の意味拡張が、イメージ・スキーマの前景化や背景化、概念メタファー、イメージ・スキーマの変換といった認知的操作によって、動機づけられていることを示した。意味ごとに喚起されるイメージ・スキーマを表にまとめると、以下のようになる。

⁵³ コンストラクション的イディオムレベルにおける「…」は、「見込む」、「申し込む」、「仕込む」など、複合動詞全体の意味が V1 と V2 の意味、またそれらの意味関係から合成的に導き出すことが難しいと考えられる語例を指す。本稿は、これら語例は一まとまり性が高いと考え、考察対象から除外することとする。

表 4-5: 「こむ」と[V1-込む]における「内部移動事象」に関わるイメージ・スキーマの喚起

語彙	語義	イメージ・スキーマの喚起							
		<容器>		<満/空>	<中心/周辺>	<起点-経路-着点>	<尺度>		<部分/全体><遠/近>
		空間的側面	機能的側面				<経路尺度>	<特性尺度>	
[こむ]	他動詞的用法	●	●	×	×	●	●	×	×
	自動詞的用法	●	●	(空間)	×	×	×		×
[V1-込む]	基本義	●	●	(空間) (一部)	(一部)	●	●	×	×
	拡張義 I	○ (抽象状態)	○ (抽象状態)	● (行為)	×	● (状態変化)	×	● (状態)	×
	拡張義 II	● (抽象状態)	● (抽象状態)	● (状態)	●	● (状態変化)	○	●	●

(●:喚起+前景、○:喚起+背景、×:喚起されない)

(マークの下に括弧で補足がない場合、両方が観察されることを表す)

また、図 4-22 で示されている[V1-込む]の階層的な構文ネットワークでは、[V1-込む]における各意味間の「横の関係」および、スーパー・スキーマ的な意味との「縦の関係」が反映されていない。[V1-込む]構文における多義性が生じる認知的メカニズムを視覚的に明示することで、図 4-23 に示されるような構文的多義ネットワークとして再構成することが可能である。

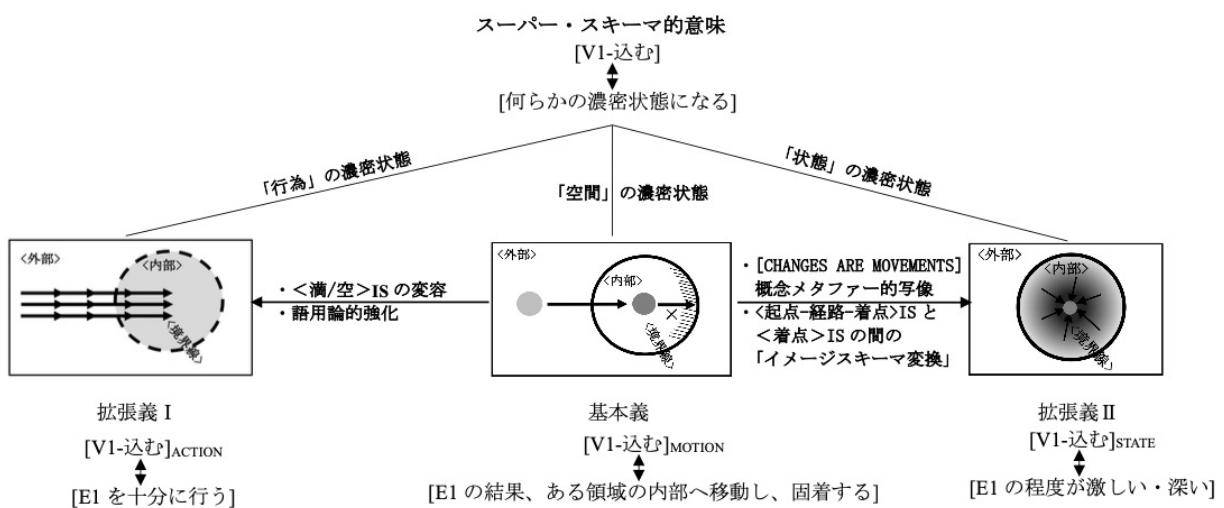


図 4-23: [V1-込む]の構文的多義ネットワーク

4.3. 「V1+詰める」の多義性

「V1+込む」と類義関係にある複合動詞として、「V1+入れる」がよく取り上げられる一方で、「V1+詰める」の多義性に焦点を当てた研究は、管見の限りほとんど見受けられない。

本節では、まず、4.3.1節では、「V1+詰める」に対応する本動詞「詰める」が持つ多様な意味の特徴を確認する。続いて4.3.2節以降では、「V1+詰める」を[V1-詰める]構文として位置づけ、その多義性メカニズムを明らかにすることを目的とする。具体的には、

- ① [V1-詰める]構文における前項動詞と後項動詞の意味関係に基づき、[V1-詰める]という形式に対応する意味として、基本義:[V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1 をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]、拡張義I:[V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある場所の限界まで E1 をする]、拡張義II:[V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする]の3通りのコンストラクション的イディオムが認められることを確認する。
- ② <容器>イメージ・スキーマを含む複数のイメージ・スキーマとの関わりに基づき、それぞれの意味特徴、意味同士の意味的関連性、意味拡張プロセスを明らかにする。[V1-詰める]構文の多義性は、イメージ・スキーマの前景化・背景化などの認知的操作によって動機付けられていることを示す。
- ③ 複数のイメージ・スキーマを重ね合わせたイメージ図式を用いて各意味を視覚化する。

最後に、4.3.3節では、3つの意味に共通するスキーマ的な意味を抽出したうえで、[V1-詰める]構文の多義性メカニズムを階層的な多義ネットワークによって提示する。

4.3.1. 本動詞「詰める」の意味特徴

本稿は、図4-24が示すような国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』で記述されている「詰める」の多義構造に基づき、考察していく。

国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』では、単独動詞「詰める」の基本義を、「人が容器の限度いっぱいに、隙間なく物を入れる」と定義している。この場合、<人が容器に物を詰める>という文型が一般的とられている。

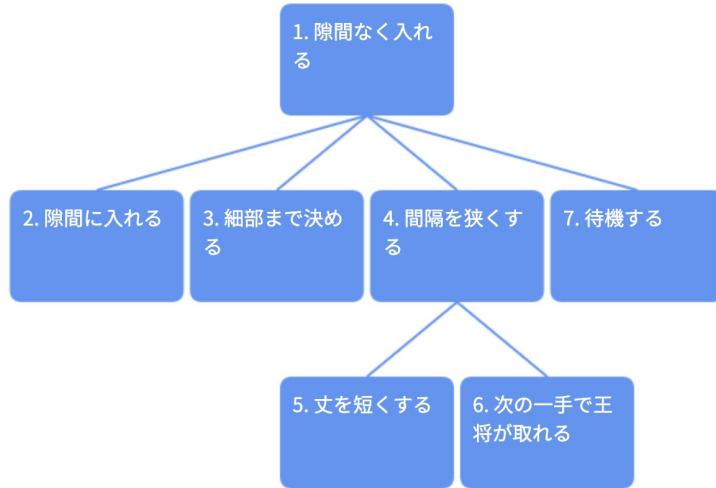


図 4-24: 「詰める」の意味拡張を視覚化した多義ネットワーク

(国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』より)

意味分類の詳細は以下の通りである。

【語義 1】

《隙間なく入れる》人が容器の限度いっぱいに、隙間なくものを入れる。

【語義 2】

《隙間にに入る》人が隙間の限度いっぱいに、ものを入れる。

【語義 3】

《細部まで決まる》人や組織が計画などを十分に検討し、細部まで決める。

【語義 4】

《間隔を狭くする》人がものとものとの間隔を狭くする。

【語義 5】

《丈を短くする》人がものの丈を調整して短くする。

【語義 6】

《次の一手で王将が取れる》人が(将棋などで)次の一手で王将を取れる状態にする。

【語義 7】

《待機する》人が特定の場所に行き、出来事に対応できるように待機する。

(国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』より)

以下では、本稿と主に関係ある【語義 1】から【語義 4】の意味特徴を具体的に検討して

いく。

【語義 1】《隙間なく入れる》人が容器の限度いっぱいに、隙間なくものを入れる。

- (86) a. 飛行機の出発の時間が迫っていたので、大慌てでスーツケースに荷物を詰めた。
b. 昨夜は、子どもと一緒にピーマンの肉詰めを作りました。子どもは、ピーマンに肉を詰めるのが面白いらしく、楽しんで作っていました。

【語義 2】《隙間に入れる》人が隙間の限度いっぱいに、ものを入れる。

- (87) a. 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を詰めるとよい。
b. 歯に詰め物を詰めてもらったのだが、そこがどうも痛む。

【語義 3】《細部まで決まる》人や組織が計画などを十分に検討し、細部まで決める。

- (88) a. 家を建てることにした。春までには計画を詰め、工事にとりかかる予定だ。
b. 友人と一緒に会社を作ることにした。最初に、利益の分配などの重要な事柄について、細部を詰めておくことが重要だと思っている。

【語義 4】《間隔を狭くする》人がものとの間隔を狭くする。

- (89) a. レポートを手書きするとき、細かな字をびっしりと詰めて書く学生がいる。
b. 年配のご夫婦が並んで座れるように席を詰めてあげました。

(国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』より)

国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』によれば、「詰める」は【語義 1】「《隙間なく入れる》人が容器の限度いっぱいに、隙間なくものを入れる」を基本的な意味とする。

(86-87) が示すように、【語義 1】と【語義 2】はいずれも、「人がものをどこかに入れる」ことを表すことから、<起点-経路-着点> (<経路尺度>) のイメージ・スキーマが関わっていることがわかる。しかし、<着点>として機能する「移動先」の性質に違いが見られる。

【語義 1】の「詰める」は、[<人>が<移動先>に<移動物>を詰める] 構文に生起し、「スーツケース、箱、カバン、袋、瓶、ダンボール」など、<内部>、<外部>、<境界線

>を持つプロトタイプ的な<容器>が「移動先」として選ばれる。この場合、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面が喚起されていると考えられる。

さらに、深田(2003)の指摘によれば、「詰める」は<箱>と共に起するが、平面的で、中に入れられたものを固定することができない<皿>とは共起しない。

- (90) {*皿/箱} にりんごを詰める。(深田2003)(=3.1.1節(6))

これにより、「詰める」には、内部のものを固定するという<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面も強く関わっていることがわかる。

一方で、【語義2】の場合、「虫歯、窓の隙間、傷口、壁の穴」といった「隙間」とみなされるものが「移動先」として用いられる。国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』では、「隙間」は<容器>ではないと述べられているが、(91)(=(87a-b))における「詰める」を「入れる」に書き換えることが可能であることから、「隙間」は、「スーツケース、箱、カバン」のようなプロトタイプ的な<容器>と比べて、周辺的であるものの、<容器>としての性質を持つと認識されていると考えられる。

- (91) a. 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を入れるとよい。(=87a)
b. 歯に詰め物を入れてもらったのだが、そこがどうも痛む。(=87b)

また、【語義1】と同様に、【語義2】の「詰める」においても、内部のものを固定し、動かないようにするという<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化している。

しかし、【語義1】と異なり、【語義2】では、「人がものをどこかに入れる」という「位置変化」よりも、「移動先」としての「隙間」の「状態変化」がより認知的に際立っている点が特徴的である。(92a-b)に示すように、【語義2】の「詰める」は、(87a-b)のような「<人>が<移動先>に<移動物>を詰める」構文だけでなく、「<人>が<移動先>を詰める」構文でも同じ容認度で生起するため、いわゆる、壁塗り交替⁵⁴が起こる動詞とみなされる。一方、(92a-b)に示すように、【語義1】の「詰める」は、「人がものをどこかの内部へ入れる」という「位置変化」がより認知的に際立っており、[<人>が<移動先>に<移動物>

⁵⁴ 「詰める」の「壁塗り交替」現象に関して、第5章で「V1+込む」との対照を触れる際に、改めて取り上げることにする。

を詰める】構文では問題なく容認される。しかし、「移動先」の「状態変化」に焦点を当てていないので、【<人>が<移動先>を詰める】の構文を取る場合は容認度が低くなり、壁塗り交替が起こりにくいと考えられる。

【語義 2】

- (92) a. 部屋に風が入らないようにするには、窓の隙間に新聞紙を詰めるとよい。 (=87a)
→(…), 新聞紙で窓の隙間を詰めると良い。
b. 歯に詰め物を詰めてもらったのだが、そこがどうも痛む。 (=87b)
→詰め物で歯を詰めてもらったのだが、(…).

【語義 1】

- (93) a. 飛行機の出発の時間が迫っていたので、大慌てでスーツケースに荷物を詰めた。 (=86a)
→??(…), 大慌てで荷物でスーツケースを詰めた。
b. 昨夜は、子どもと一緒にピーマンの肉詰めを作りました。子どもは、ピーマンに肉を詰めるのが面白いらしく、楽しんで作っていました。 (=86b)
→??(…), 肉でピーマンを詰めるのが面白いらしく、(…).

【語義 1】と【語義 2】には、壁塗り交替の起こりやすさには違いがあるものの、「限度いっぱい」という意味記述からわかるように、「人がものをどこかの内部へ入れる」という「位置変化」の結果、「移動先」としての<容器>が<満>という結果状態になる点で共通している。ただし、この場合、認知主体は、<容器>の<満>という結果状態に焦点を当てており、全体的視点をとっているため、<容器>の<内部>にある「移動物」の量が多い、「移動物」と「移動物」の間の距離が近い、などの情報は認識されていない。このように、【語義 1】と【語義 2】のいずれにおいても、<満/空>、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマが喚起されているが、<満/空>のイメージ・スキーマは前景化されているのに対し、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマは背景され、認知的に際立っていないと考えられる。

以上の考察から、【語義 1】と【語義 2】では、<起点-経路-着点> (経路尺度) 、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面、<満/空>のイメージ・スキーマが前景化し、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマが背景にあることについて確認し

た。

【語義 1】と【語義 2】とは異なり、【語義 3】においては、ニ格が取らず、ヲ格のみが取られる。ヲ格目的語には、「計画」、「細部」、「話」といった抽象的な対象が現れ、それらを十分に検討し、細部まで決めるこことを意味する。

この場合、「計画」は、抽象的な意味での＜容器＞として概念化され、「計画の中で決まっていない部分」は、抽象的な意味での「隙間」として概念化されている。このように、「計画の決まっていない部分をなくすこと」は、「計画の隙間をなくすこと」として捉えられる。このような認知的概念操作に基づき、「詰める」は【語義 1】から【語義 3】へと拡張されている（国立国語研究所『基本動詞ハンドブック』を参照）。

【語義 3】では、「計画」、「細部」、「話」といった＜容器＞がヲ格の直接目的語として現れるのは、それらが結果として精緻化されるという状態変化が、認知的に際立っているためであると考えられる。

以上の分析により、【語義 3】では、＜容器＞という集合体ではなく、＜容器＞の＜内部＞にある個体、およびそれら個体間の隙間の距離に焦点が移行している。その結果、＜容器＞のイメージ・スキーマが背景化され、代わりに、＜部分/全体＞、＜遠/近＞のイメージ・スキーマが前景化されていると考えられる。

また、概念話者の＜全般的視点＞から＜個体的視点＞への転換によって生じる意味として、【語義 4】が挙げられる。

【語義 4】では、ヲ格目的語として「字」や「席」といった対象が現れる。この場合、ヲ格目的語は通常複数なものであり、それらの間隔を狭めることによって、全体として占める範囲が縮小することが想定される。結果として、全体としてのサイズが視覚的に縮小された状態が強調される。このような用法は、話者の視点転換によるものであると考えられる。

以上、本動詞「詰める」の【語義 1】から【語義 4】におけるイメージ・スキーマとの関わりをまとめると、【語義 1】、【語義 2】では、＜起点-経路-着点＞（経路尺度）、＜容器＞のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面、＜満/空＞のイメージ・スキーマが喚起されている。【語義 3】では、＜容器＞のイメージ・スキーマが背景化されている一方で、＜部分/全体＞、＜遠/近＞のイメージ・スキーマがより前景化されている。さらに、【語義 4】では、＜容器＞のイメージ・スキーマが喚起されず、＜部分/全体＞、＜遠/近＞のイメージ・スキーマのみが喚起されている。

4.3.2. 「V1+詰める」の多義性メカニズム

4.3.2.1. 基本義: [V1-詰める]MOTION₁ ↔ [E1 をすることで、ある空間の限界まで隙間なくモノを入れる/モノが入る]

● 後項動詞「～詰める」の補助動詞化

まず、以下の基本義に該当する用例を確認してみよう。

(94) a. スーツケースを開けると、ぎゅうぎゅうに押し詰めていた荷物があふれ出た。

b. 種を取ったピーマンにひき肉を押し詰めて、フライパンで焼く。

(『日本語複合動詞活用辞典』(姫野 2023: 201-201))

(95) a. 棺の中にピンクのバラを敷き詰めるというのもなかなかいいなあ。

b. 解凍したパイシートをパイ皿に敷き詰める。(??パイシートを皿に詰める。)

(96) a. 床にカーペットを張り詰めた。(??床にカーペットを詰める。)

b. 緊張がスタジアムに張り詰めた。

(94-96) における「押し詰める」、「敷き詰める」、「張り詰める」の用法を確認すると、これらは「人が容器の限度いっぱいに、隙間なくものを入れる」という本動詞「詰める」の基本義（語義1）と一致している。しかしながら、「移動先」として機能する場所の性質に着目すると、本動詞「詰める」の基本義とは異なる特徴が見られる。

具体的には、(94a-b) の「スーツケース」、「ピーマン」や、(96b) の「スタジアム」のように、3次元的な包囲空間となり、プロトタイプ的な＜容器＞が「移動先」となる場合もあれば、(95b) の「パイ皿」や(96a) の「床」のように、2次元的な空間が「移動先」となる場合も存在する。

(95a) における「移動先」である「棺の中」は、一見するとプロトタイプ的な＜容器＞とみなされるが、前項動詞「敷く」は通常、「壁」、「表面」、「庭」、「道」、「地面」など、2次元的な平面空間を「移動先」としてとる動詞である。したがって、(95a)において実質的な「移動先」として機能しているのは、「棺の中」という3次元の包囲空間ではなく、その内部に存在する「底面」という2次元の平面空間であると解釈される。

また、(95b)、(96a) における「パイ皿」、「床」は、単独で見ると2次元的な平面空間である。しかしながら、この平面空間には明確な＜内部＞、＜外部＞、および＜境界線＞が存在し、無限に広がる平面空間とは異なり、一定の範囲に限定されている。したがって、これ

らはプロトタイプ的な<容器>ではないものの、内部のものを固定するという<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が強く関わっているため、周辺的な<容器>として解釈可能であると考えられる。

また、(95b)、(96a)における「敷き詰める」と「張り詰める」を、「詰める」に書き換えると不自然になることから、本動詞「詰める」の基本義では、プロトタイプ的な<容器>が「移動先」に現れるのに対し、複合動詞の「V1+詰める」の基本義では、必ずしもプロトタイプ的な<容器>が「移動先」となるわけではない。明確な<境界線>を持つ2次元的な平面空間が「移動先」として現れることも認められる。このことから、基本義の「V1+詰める」において、後項動詞「～詰める」は、本動詞「詰める」が持つ実質的な「内部移動」の意味が希薄化し、「隙間なく」、「限度いっぱいに」といった副詞的な意味を担う役割に特化しており、補助動詞として機能していることが示唆される。

本動詞「詰める」の「移動先」の性質が「V1+詰める」の基本義にそのまま継承されているわけではないが、「移動先」がプロトタイプ的な<容器>であれ、周辺的な<容器>であれ、いずれの場合も明確な<境界線>を持つ限られた空間である点は共通している。さらに、「内部移動」の結果として、「移動先」の内部空間が「隙間なく詰まっている」という空間的な「限界」状態に達するという特徴が維持されている点も共通点として指摘できる。

そこで、本稿は、「V1+詰める」の基本義を [V1-詰める]MOTION \leftrightarrow [E1] をすることで、ある空間の限界まで隙間なくモノを入れる/モノが入る]というコンストラクション的イディオムとして記述する。

● イメージ・スキーマとの関わり

前述の通り、基本義 [V1-詰める]MOTION \leftrightarrow [E1] をすることで、ある空間の限界まで隙間なくモノを入れる/モノが入る]は、本動詞「詰める」の【語義1】を引き継いだ意味を持つ。このため、基本義は本動詞「詰める」の【語義1】と同様のイメージ・スキーマを喚起していると考えられる。具体的には、<起点-経路-着点>(経路尺度)、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されている。また、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマも潜在的に喚起されているものの、これらは認知的に際立つことなく、背景化されていると考えられる。

● イメージ図式

以上の分析により、本稿は、基本義 $[V1\text{-詰める}]_{MOTION} \leftrightarrow [E1]$ をすることで、ある空間の限界まで隙間なくモノを入れる/モノが入る] が喚起する一連の《内部移動事象》を図 4-25 のように表示する。

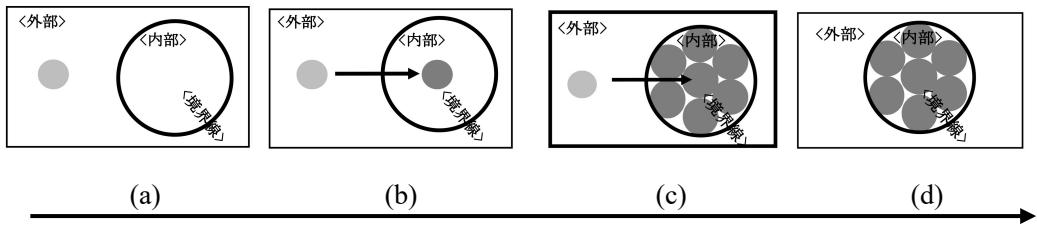


図 4-25: 「V1+詰める」の基本義に関する一連の《内部移動事象》

図 4-25 (a-b) は、内部移動が発生する前の段階を示している。これは $[V1\text{-入れる}]_{MOTION}$ において喚起される一連の《内部移動事象》の前半 (図 4-1 (a-b)) と同じ構造を持つ。具体的には、図 4-25 (a) では、「移動物」が「移動先」としての<容器>の<外部>にある、という初期状態が示されている。図 4-25 (b) は、「移動物」が<容器>の<外部>から<境界線>を越えて、<容器>の<内部>へと移動する、という中間段階を表している。これに続く段階が図 4-25 (c-d) によって示される。

図 4-25 (c)では、複数の「移動物」が<容器>の<内部>に隙間なく移動し、<容器>の<内部>が満たされる状態が描かれている。この段階は、 $[V1\text{-詰める}]_{MOTION}$ の中心的意味を担っているため、太線で枠取られている。最終段階として、図 4-25 (d) は、「移動先」としての<容器>の<内部>が完全に詰まった状態を示している。

このように、基本義 $[V1\text{-詰める}]_{MOTION} \leftrightarrow [E1]$ をすることで、ある空間の限界まで隙間なくモノを入れる/モノが入る] は、図 4-25 に示される一連の動的プロセスをベースとしている。その中で図 4-25 (c) が中心的にプロファイルされていると考えられる。

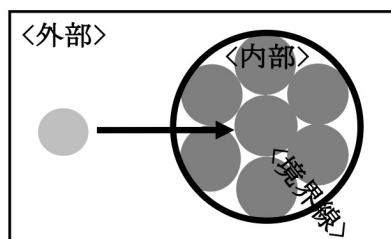


図 4-26: 「V1+詰める」の基本義のイメージ図式 (=図 4-25 (c))

4.3.2.2. 拡張義 I : [V1-詰める]MOTION₂ ↔ [ある場所の限界まで E1 をする]

拡張義 Iにおいても、基本義と同様に、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが喚起されており、どこかに移動することが表されている。しかしながら、「移動先」となるものは、基本義の<容器>とみなされるものではなく、1次元の線や、ゼロ次元の点が「移動先」として機能する用例が観察される。本節では、具体例における「移動先」と「移動物」の特徴を検討し、基本義から拡張義 Iへの意味拡張のプロセス、とその認知的動機づけをイメージ・スキーマとの関わりから解明する。最後に、拡張義 Iをイメージ図式として視覚的に提示する。

● イメージ・スキーマとの関わり

まず、拡張義 Iの用例を挙げる。

(97) a. 横綱は土俵際まで押し詰められ、結局釣り出された。

b. 人は死の極限まで押し詰められた時、どう行動するか。

(『日本語複合動詞活用辞典』(姫野 2023: 201-201))

(98) a. じりじりと後ずさる黒猫を壁際に追い詰める。

b. 多くの会社が倒産に追い詰められた。

(99) a. 彼らは山頂に上り詰めた。

b. 彼は社長に上り詰めた。

(97-99) の用例を分析し、以下の3点を確認しながら、イメージ・スキーマとの関わりを明らかにする。

(a) 「移動先」: <容器>から<境界線>/<限界点>へ

(b) 「移動物」: 「複数」から「単数」へ

(c) 「移動」: 「+方向性」、「尺度」のある変化

(a) 「移動先」: <容器>から<境界線>/<限界点>へ

拡張義 Iでは、(97a)、(98a)、(99a)の「土俵際」、「壁際」、「山頂」のように、物理的な場所が「移動先」となる場合もあれば、(97b)、(98b)、(99b)の「死の極限」、「倒産」、「社

長」のように、抽象的な場所が「移動先」となる場合も見られる。これは、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが、概念メタファーによって、物理的な概念領域から抽象的な概念領域へと写像されていると解釈できる。

ただし、これらの「移動先」にあたる、「土俵際」、「壁際」、「山頂」、「死の極限」、「倒産」、「社長」は、物理的であれ、抽象的であれ、<容器>としての性質を持つとは考えがたい。むしろ、2次元的な線やゼロ次元の点とみなされるものである。しかし、このような2次元的な線やゼロ次元の点は、独立した存在ではなく、それぞれが別のイメージ・スキーマを基盤としている。具体的には、2次元的な線は、<容器>の<内部>と<外部>を分ける<境界線>として、ゼロ次元的な点は、<経路>の終端に位置する「限界点」として機能していると考えられる。

例えば、(97a)における「土俵際」は、「土俵」という限られた空間の<外部>と<内部>を分ける<境界線>である。(97b)では、「死の極限」は、「生」と「死」を分ける<限界点>として捉えられている。この場合、人生は、生まれた瞬間から死に至るまでの時間的な流れとして認識されており、我々の「生命状態」は「死」という<限界点>に向けて進行していると考えられる。この<限界点>を越えると、「死」の状態に至る。

同様に、(98a)の「壁際」は、「部屋」という限られた空間の<外部>と<内部>を分ける<境界線>として認識されている。また、(98b)の「倒産」は、ある会社の経営状態が「良い状態」から「悪い状態」へ進行する過程の中で、抽象的な<限界点>として機能している。

さらに、(99a)の「山頂」は、「山脚」から「山道」に沿って登る過程の中で到達する、先のない<限界点>として認識される。一方、(99b)の「社長」は、「職務的地位」が、「普通の社員」から、「課長」へ、さらに「社長」まで昇進していく過程における最高点であり、職務上の<限界点>として捉えられている。

このように、拡張義Iでは、<容器>という要素が背景化され、その一部である<境界線>、<経路>の<限界点>が「移動先」として機能していることが示される。

(b). 「移動物」：「複数」から「単数」へ

前述のように、「V1+詰める」の基本義は、[E1 をすることで、ある空間の限界まで隙間なくモノを入れる/モノが入る]を表す。この場合、「移動物」は通常複数であり、結果として、<容器>の内部空間が満たされ、空間的な限界に達することが示されている。

一方、拡張義Iでは、「移動先」は限られた空間ではなく、<境界線>や<限界点>であ

るため、結果として、空間的な限界に達するのではなく、移動主体の位置が＜境界線＞や＜限界点＞に到達することが焦点化されている。この場合、「移動物」の数や量は、重要視されず、「移動物」がある場所の「限界」まで到達するという位置の変化がプロファイルされている。

(c). 「移動」：「+方向性」、「尺度」のある変化

拡張義 I における一連の移動のプロセスには、「どの程度進んでいるか」という段階的な進行が認識されていることを改めて確認する。

まず、拡張義 I 「V1+詰める」の前項動詞の特徴を確認する。「登る」は、何らかの特定の経路を沿って移動することを表す動詞であり、「押す」、「追う」は、位置の変化を引き起こす原動力としての行為を表す動詞である。これらの動詞は「～詰める」と結合することで、「先のない境界線まで押す/追う/登る」ことを意味し、このプロセスにおいて、＜境界線＞から遠いところから、＜境界線＞に向かう移動が認識されている。

具体的に、(97-99) の (a) において、「横綱」、「猫」、「彼ら」がそれぞれ「土俵際」、「壁際」、「山頂」から遠い位置から、「土俵際」、「壁際」、「山頂」の方向へ進行し、最終的に「土俵際」、「壁際」、「山頂」に到達するプロセスが表されている。これらの移動は、＜経路尺度＞によって順序づけられた移動として特徴づけられる。

一方、(97-99) の (b) において、「人間の生命状態」、「会社の経営状態」、「職務的地位」といった抽象的な概念には、段階的な属性があり、動作主はその属性に沿って変化しながら、最終的「死の極限」、「倒産」、「社長」といった「限界」に達することを表している。この場合、＜起点-経路-着点＞、＜経路尺度＞のイメージ・スキーマが、抽象的概念領域にメタファー的に写像され、＜特性尺度＞のイメージ・スキーマが喚起されている。

まとめると、拡張義 I : [V1-詰める]_{MOTION2} ⇔ [ある場所の限界まで E1 をする]では、＜容器＞のイメージ・スキーマが背景化される一方、＜起点-経路-着点＞、＜経路尺度＞、＜特性尺度＞のイメージ・スキーマが関わっていると考えられる。

● イメージ図式

以上の分析により、本稿は、基本義の認知図式を基に、拡張義 I : [V1-詰める]_{MOTION1} ⇔ [ある場所の限界まで E1 をする] が喚起する一連の《移動事象》、およびその中心的意味をそれぞれ図 4-27 と図 4-28 のように表示する。

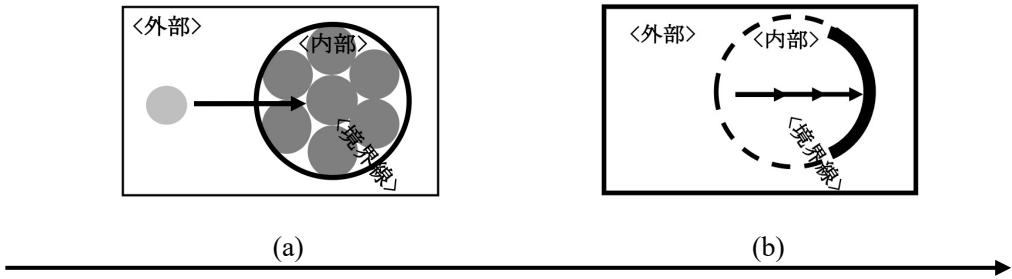


図 4-27: 「V1+詰める」の拡張義 I に関する一連の《移動事象》

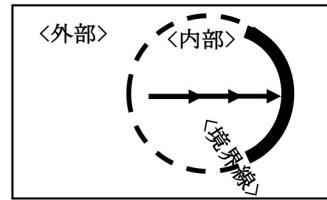


図 4-28: 「V1+詰める」の拡張義 I のイメージ図式 (=図 4-27 (b))

図 4-27(a) は、基本義「V1+詰める」の中心的意味を示す図式である。一方、図 4-27(b) では、<容器>が実線から破線に変化しており、これは<容器>のイメージ・スキーマが背景化していることを示している。<容器>のイメージ・スキーマの背景化に伴い、その一部である<境界線>が認知的に際立ち、移動の<着点>として前景化している。この変化は、<容器>の右端に描かれた太線の弧によって表示されており、<境界線>がある場所の「限界」としての役割を果たしていることを強調している。

さらに、<経路尺度>と<特性尺度>のイメージ・スキーマは、右方向の矢印で表示されており、「移動物」が<境界線>という「限界」まで進む様子が視覚的に示されている。

4.3.2.3. 拡張義 II: [V1-詰める]ACTION ↔ [ある状態の限界まで E1 をする]

前節では、拡張義 I : [V1-詰める]MOTION は、移動主体が<尺度>の変化のある<経路>に沿って、<容器>の<境界線>まで移動すること、すなわち、[ある場所の限界まで E1 をする] を表すことについて確認した。

それに対し、拡張義 II では、<経路尺度>ではなく、<特性尺度>へ変容している。つまり、動作主の関与で、前項動詞が表す行為の進行によって、何らかの状態変化の結果が生じると考えられる。以下では、拡張義 I との意味的関連性から、拡張義 II におけるイメージ・スキーマとの関わりを確認したうえで、拡張義 II をイメージ図式によって可視化する。

● イメージ・スキーマとの関わり

以下、拡張義Ⅱの用法について先に確認しておく。

(100) a. 同様にお金と時間があれば、英会話スクールに毎日通い詰めることでも、ある程度話せるようになるはずです。

b. そんなに一つのことを思い詰めると、病気になるよ。

c. 彼は薬草茶を煎じ詰めた。

d. 彼は事故の原因を突き詰めた。

e. 上司は彼に欠勤の理由を問い合わせた。

f. 約2トンの海水を2日間煮詰め、30キロ前後の藻塩を作る。

g. でも、365日24時間、ずっと神経を張り詰めるのは辛いですよね。

(100) の「通い詰める」、「思い詰める」、「煎じ詰める」、「突き詰める」、「問い合わせる」、「煮詰める」、「張り詰める」といった用例においては、基本義と拡張義Ⅰとは異なり、<着点>としての「移動先」を提示する二格場所句が現れないのが特徴的である。

まず、(100a) の「通い詰める」において、「英会話スクール」という場所が二格で提示されている。しかし、この二格は、特定な方向性を持つ一回限りの移動を表す移動動詞がとる二格着点句を指すものではない。むしろ、「通う」という行き来の反復的な行為が行われる場所や活動の拠点としての役割を果たしている。したがって、「通い詰める」は、「英会話スクール」という<境界線>まで移動するという拡張義Ⅰの解釈が取らず、「毎日」、「連日」、「毎週」などの時間の量を表す副詞と共に起し、「通う」という行為の回数が極めて多いことを強調している。

(100b-g)においても、「思う」、「煎じる」、「突く」、「問う」、「煮る」、「張る」といった動詞が「～詰める」と結合することで、それらの行為が徹底的に行われる事が表される。これらの動詞は、いずれも何らかの状態変化を引き起こす性質を持つと考えられる。(101) が示すように、動作主による徹底的な行為を通じて、動作主または被動作主の状態が徐々に変化し、最終的に質的な変化が生じることが想定される。

(101) a. 同様にお金と時間があれば、英会話スクールに毎日通い詰めることでも、ある程度話せるようになるはずです。

- ▶ (結果状態: 何回も通うことで、英会話が上手になる)
- b. そんなに一つのことを思い詰めると、病気になるよ。
- ▶ (結果状態: 長時間/深く思うことで、病気になる)
- c. 彼は薬草茶を煎じ詰めた。
- ▶ (結果状態: 長時間煎じることで、薬草茶の成分がすっかり出る)
- d. 彼は事故の原因を突き詰めた。
- ▶ (結果状態: 徹底的に突くことで、事故の原因が明らかになる)
- e. 上司は彼に欠勤の理由を問い合わせた。
- ▶ (結果状態: 徹底的に問うことで、欠勤の理由が明らかになる)
- f. 約2トンの海水を2日間煮詰め、30キロ前後の藻塩を作る。
- ▶ (結果状態: 長時間煮ることで、藻塩ができ上がる)

つまり、拡張義IIでは、前項動詞の行為を徹底的に行うことによって、「英会話のレベル」(101a)、「精神状態」(101b)、「薬草茶の効果」(101c)、「事故原因の解明」(101d)、「欠勤理由の解明」(101e)、「海水の物質状態」(101f)といった状態が徐々に変化していく。この状態は、臨界点である<境界線>に達し、さらに、<境界線>を<越境>して、最終的に何らかの結果状態に至ることが想定される。このように、拡張義IIでは、状態変化の結果が生じることが想定されることから、そのモノやコトが持つ性質の値から構成された尺度<特性尺度>のイメージ・スキーマが喚起されていると考えられる。

ここで注意すべき点は、「V1+詰める」の拡張義IIにおいて、<境界線>までの段階は認知的際立っているのに対し、<境界線>を<越境>して状態の質的变化に至る段階は、文脈に依存する語用論的推論に基づくものであり、全ての用例が必ずしもその結果状態に達するわけではない。したがって、本稿では、「V1+詰める」の拡張義IIを、[V1-詰める]_{ACTION} ⇔ [ある状態の限界までE1をする]として定義する。

以上の分析を踏まえると、拡張義IIでは、<容器>のイメージ・スキーマが背景化し、<特性尺度>のイメージ・スキーマが前景化していると考えられる。

● イメージ図式

以上で確認したイメージ・スキーマとの関わりに基づき、拡張義II[V1-詰める]_{ACTION} ⇔ [ある状態の限界までE1をする]が喚起する事象、および、イメージ図式をそれぞれ図4-29、

図 4-30 のように表示する。

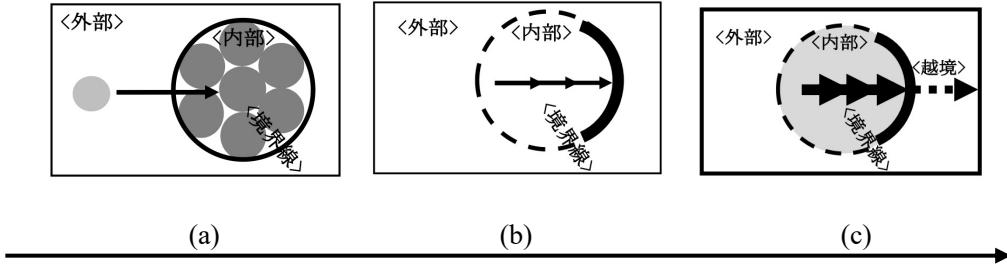


図 4-29: 「V1+詰める」の拡張義 II に関する一連の事象

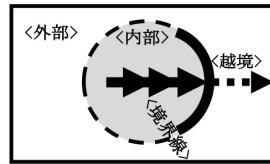


図 4-30: 「V1+詰める」の拡張義 II のイメージ図式 (=図 4-29 (c))

図 4-29(a)、(b) は、それぞれ基本義 [V1-詰める]_{MOTION1}、拡張義 I [V1-詰める]_{MOTION2} のイメージ図式である。図 4-29 (c) は、図 4-29 (b) と類似した構造を持つ図式である。

拡張義 IIにおいて、<容器>のイメージ・スキーマは背景化されているため、図 4-29 (c) における<容器>の円盤は破線によって表示されている。状態変化前の状態を表すため、<容器>は灰色に塗りつぶされている。また、<特性尺度>のイメージスキーマは、<容器>の右端にある<境界線>へ移動する矢印によって表示されている。前項動詞が表す行為が限界まで徹底的に行われている程度を強調するため、矢印は太線によって表示されている。

さらに、<特性尺度>を持つ<経路>に沿って進行することで、<境界線>に到達し、さらに、直線的に延長し、<容器>の<外部>に出る、すなわち<越境>することが想定される。ただし、この<越境>は語用論的推論によるものであるため、破線として示されている。

4.3.3. 「V1+詰める」の構文的多義ネットワーク

本節では、まず、これまで考察してきた [V1-詰める] 構文の 3 つの意味の共通点に基づき、それらに共通しているスーパースキーマ的意味を抽出する。また、[V1-詰める] 構文の意味カテゴリーを階層的なネットワークとして提示する。最後に、4.3.1 節と 4.3.2 節で考察

した、複数のイメージ・スキーマとの関わりを整理し、[V1-詰める]構文の意味拡張の全体像を示す。

4.3.3.1. スーパー・スキーマ的意味

4.3.2 節では、[V1-詰める]という構文形式において、基本義: [V1-詰める]_{MOTION₁} ↔ [E₁ をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]、拡張義 I : [V1-詰める]_{MOTION₂} ↔ [ある場所の限界まで E₁ をする]、拡張義 II [V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E₁ をする]、という 3 つのコンスタラクションイディオムが認められることを考察した。

改めて確認することになるが、基本義では、「移動先」としての<容器>の容量が「限界」に達することが表している。一方、拡張義 I では、移動主体が何らかの<尺度>のある<経路>に沿って進み、その「終端」としての「限界」に達することが表されている。また、拡張義 II では、前項動詞が表す行為を徹底的に行うことで、何らかの状態変化の「臨界点」としての「限界」に達することが強調されている。このように、各意味はそれぞれ異なる性質の「限界」を表しており、<容器>の容量、<経路>の終端、<状態変化>の臨界点といった多様な「限界」を描き出していることが分かった。

このような共通点に基づき、本稿では、[何らかの限界に達する]を[V1-詰める]構文のスーパー・スキーマ的な意味として抽出する。このスーパー・スキーマ的な意味は、[V1-詰める]構文の基本義から拡張義への意味変化のプロセスを統合的に捉え、その構造的共通性を示す枠組みとして位置付けられる。

表 4-6: [V1-詰める]構文における 3 種類の「限界」

語義	「限界」のタイプ
基本義: [V1-詰める] _{MOTION₁} ↔ [E ₁ をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]	<容器>の容量
拡張義 I : [V1-詰める] _{MOTION₂} ↔ [ある場所の限界まで E ₁ をする]	<経路>の終端
拡張義 II [V1-詰める] _{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E ₁ をする]	<状態変化>の臨界点

4.3.3.2. 「V1+詰める」の構文的多義ネットワーク

- [V1-詰める]の意味カテゴリー

[V1-詰める]構文の意味カテゴリーを図 4-31 のような 3 つのレベルが含まれる階層的な構文ネットワークによって示されることができる。

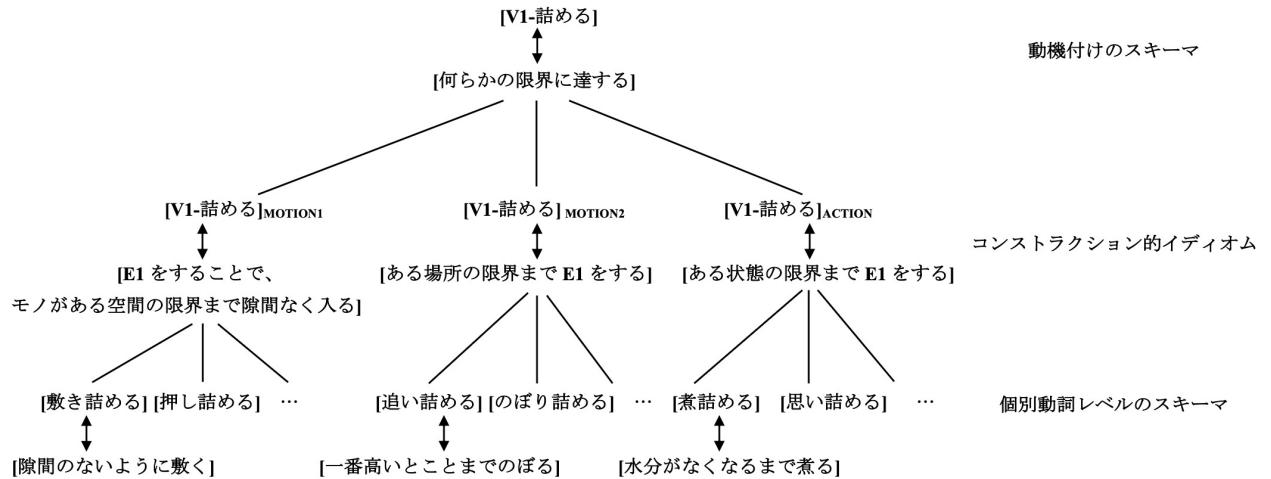


図 4-31: [V1-詰める]構文の意味カテゴリー

(⇒=形式と意味の対応関係、E1=V1 が表す事象、MOTION=移動、ACTION=行為)

● [V1-詰める]の意味間の拡張関係の全体像

4.3.1 節と 4.3.2 節では、本動詞「詰める」と「V1+詰める」が複数のイメージ・スキーマとどのように関わっているのかについて考察した。「V1+詰める」の意味拡張が、イメージ・スキーマの前景化や背景化といった認知的操作によって、動機づけられていることを示した。意味ごとに喚起されるイメージ・スキーマまとめると、表 4-7 のようになる。

表 4-7: 「詰める」と[V1-詰める]におけるイメージ・スキーマの喚起

語彙	語義	イメージ・スキーマの喚起							
		<容器>		<満/空>	<中心/周辺>	<起点-経路-着点>	<尺度>		
		空間的側面	機能的側面				<経路尺度>	<特性尺度>	
「詰める」	語義 1	●	●	● (空間)	×	● (空間移動)	●	×	○
	語義 2	●	●	● (空間)	×	● (空間移動)	●	×	○
	語義 3	○ (抽象)	○ (抽象)	×	×	×	×	×	●
	語義 4	×	×	×	×	×	×	×	●
[V1-詰める]	基本義	● (物理空間)	● (物理空間)	● (空間)	×	● (空間移動)	●	×	○
	拡張義 I	○	○	×	×	●	●	●	×
	拡張義 II	○ (抽象状態)	○ (抽象状態)	×	×	● (状態変化)	×	●	×

(●: 喚起+前景、○: 喚起+背景、×: 喚起されない)

(マークの下に括弧で補足がない場合、両方が観察されることを表す)

また、図 4-31 で示されている[V1-詰める]の階層的な構文ネットワークでは、[V1-詰める]における各意味間の「横の関係」および、スーパースキーマ的な意味との「縦の関係」が反映されていない。[V1-詰める]構文における多義性が生じる認知的メカニズムを視覚的に明示することで、図 4-32 に示されるような構文的多義ネットワークとして再構成することが可能である。

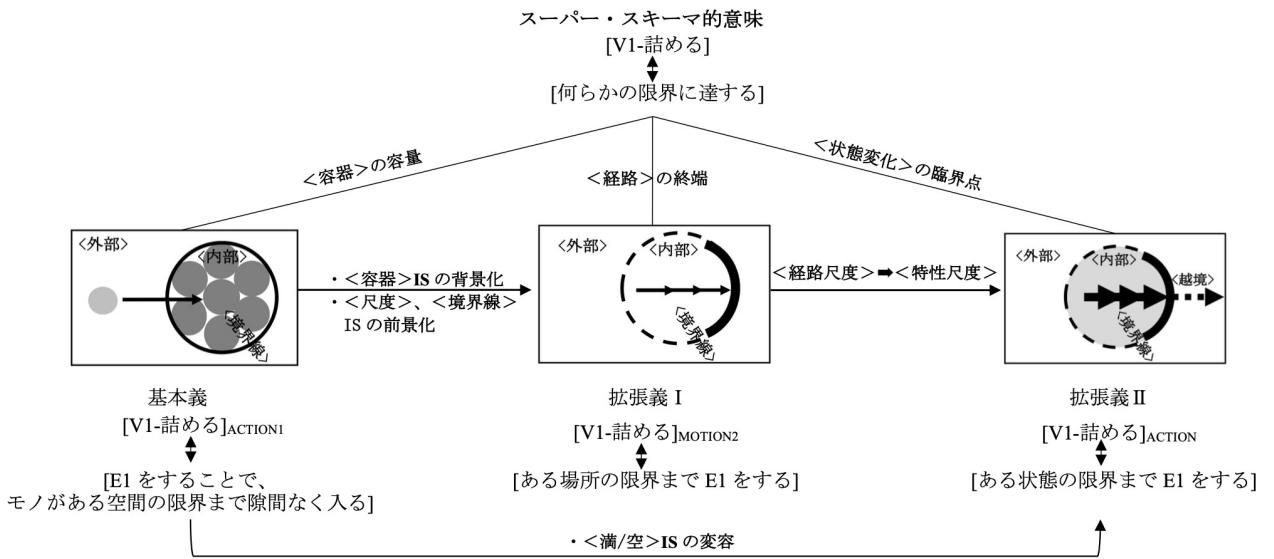


図 4-32: [V1-詰める]の構文的多義ネットワーク

4.4. 第4章のまとめ

本章では、第2章で提示した「V1+入れる/込む/詰める」の多義性をめぐる以下の3つの課題に着目し、複合動詞ごとに詳細な分析を行った。

- 「V1+入れる/込む/詰める」に対応する本動詞の意味的特徴を確認する。
- 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義を認定し、各意味におけるV1とV2の意味関係、および前項動詞の意味特徴を明らかにする。
- 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義の間の水平方向の意味的関連性、および意味拡張の認知的メカニズムを明らかにする。また、各意味に共通するスーパースキーマ的な意味を認定し、垂直方向の意味的関連性を解明する。最後に、「V1+入れる/込む/詰める」それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」とおよび「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示する。

以下に、複合動詞ごとの議論を以下のように要約する。

[V1-入れる]の多義性 :

- 本動詞「入れる」の意味的特徴

本動詞「入れる」は、「移動物」を<容器>の<外部>から<境界線>を越え、<容器>の<内部>へ移動させることを意味する動詞である。「入れる」における「移動物」、「移動先」、「移動の目的」に着目し、どのような事象は《内部移動事象》として概念化される事象として、一般的な物理的な空間への移動行為だけでなく、物理的な概念領域と抽象的な概念領域との間でのメタファー的写像により、抽象的な内部移動も観察される。また、「入れる」の使役移動行為の目的は、「移動物」を<容器>の内部に位置させることに限定されている。このため、本動詞「入れる」は、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面のみを顕在化させる表現であると確認された。

(b) [V1-入れる]の基本義と拡張義

[V1-入れる]について、本稿では以下の 2 つのコンストラクション的イディオムを提示した。

- ① [V1-入れる]_{MOTION-P} ↔ [あるものを何らかの形である物理的空間の内部に移動させる]
- ② [V1-入れる]_{MOTION-A} ↔ [あるものを何らかの形である抽象的空間の内部に移動させる]

この 2 つは、本動詞と同様に、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面、および、<起点-経路-着点>、<経路尺度>のイメージ・スキーマを基盤とし、物理的空間から抽象的空間へのメタファー的写像によって関連づけられている。また、V1 と V2 の意味関係においては、<手段型>と<前段階型>の 2 つのタイプが観察された。

(c) 基本義と拡張義の水平方向・垂直方向の意味的関連性

[V1-入れる]における各意味間の「横の関係」と、スーパー・スキーマ的な意味との「縦の関係」、さらに多義性が生じる認知的メカニズムは、図 4-33 の構文的多義ネットワークとして視覚的にまとめられる。

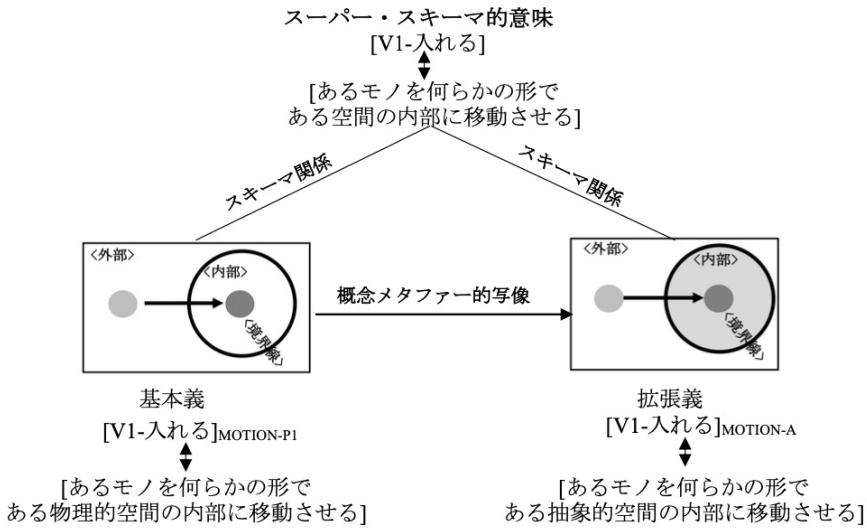


図 4-33: [V1-入る] の構文的多義ネットワーク (=図 4-4)

[V1-込む]の多義性：

(a) 本動詞「こむ」の意味的特徴

まず、複合動詞[V1-込む]に対応する本動詞「こむ」が、自他用法を持つ古語であり、図4-34で示されるような一連の《内部移動事象》の行為連鎖を含むことを確認した。「こむ」では、「入れる」と同様に、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面、<起点-経路-着点>、<経路尺度>のイメージ・スキーマが喚起される。そのほか、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面、さらに<満/空>のイメージ・スキーマも喚起されていることを明らかにした。

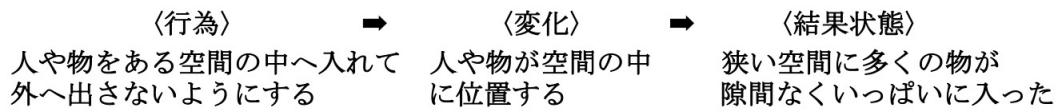


図 4-34: 本動詞「こむ」に関わる一連の《内部移動事象》 (=図 4-5)

(b) [V1-込む]の基本義と拡張義

[V1-込む]について、本稿では以下の 3 つのコンストラクション的イディオムを提示した。

- ① 基本義 [V1-込む]MOTION \leftrightarrow [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]

- ② 拡張義 I [V1-込む]ACTION \leftrightarrow [E1 を十分に行う]
- ③ 拡張義 II [V1-込む]STATE \leftrightarrow [E1 の程度が激しい・深い]

基本義の前項には、内部移動事象を引き起こす手段(叩き込む)、原因(溶け込む)、移動様態(舞い込む)、付帯事象(怒鳴り込む)などを表す動作性動詞がよく見られる。また、「内部移動」は、物理的移動に限らず、概念話者の主観的把握に基づく複雑かつ多様な形態を持ち、(a)【TR≠LM】 (b)【TR≠?LM】 (c)【TR=LM】の3つの関係性に分類できることを確認した。さらに、「固着する」という結果状態が、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面の顕在化に由来することを示した。

基本義では、「こむ」が喚起するイメージ・スキーマのほか、一部の用例に、<中心-周辺>のイメージ・スキーマが喚起されていることが分かった。

拡張義 I の前項には、基本義と同様に動作性動詞が来るが、その動作の「量的変化」によって引き起こされる結果状態に基づき、2種類にされる。1つは「煮る」、「洗う」のような「量的変化」によって「質的変化」が起こりやすい動詞、もう1つは、「買う」、「着る」のような「量的変化」によって「量の増加」のみ起こる動詞である。拡張義 I では、「量的変化」がプロファイルされ、「質的変化」は語用論的推論に依存し、認知的に際立っていないことを確認した。

拡張義 I では、<容器>のイメージ・スキーマが背景化している。<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが[位置変化は状態変化]という概念メタファーによって、<特性尺度>へと写像されている。また、<満/空>のイメージ・スキーマは「空間」という概念領域から、「行為」という概念領域へと変換していることが確認した。

拡張義 II に現れる前項動詞には、「状態性」および「特性尺度」を持つ動詞が多く観察される。V1 が表す状態を内容物とする<容器>では、<周辺>、<内>、さらに「内々」という親密な領域が存在することを確認した。「思い込む」、「信じ込む」のような認識動詞と「～込む」が結びつく場合、ト格で示される内容には、現実とは異なり必ずしも正確ではないというニュアンスが含まれるのは、<容器>における<内>と<内々>という親密な領域の存在によって説明可能であることを示した。

拡張義 II では、<容器>のイメージ・スキーマが V1 が表す「状態」領域へ写像され、その状態の程度が<容器>の<周辺>から<内>、さらに<内々>へと深化していくこと強調されている。このため、<特性尺度>や、「状態」を内容物とする<満/空>のイメージ・

スキーマが前景化されている。さらに、拡張義Ⅱは、<容器>の内部の状態の程度に焦点を当てており、「部分/全体」の視点の変換が関与していることから、<部分/全体>および<遠/近>のイメージ・スキーマも前景化されていると考えられる。

(c) 基本義と拡張義の水平方向・垂直方向の意味的関連性

垂直的関係について、本稿が提示した[V1-込む]構文に対応する3つの意味は、表のように、それぞれ異なる形の<満/空>のイメージ・スキーマを喚起しており、「濃密状態」の3つの実現形式として捉えられることを確認した。

表 4-8: [V1-込む]構文における「濃密状態」の3つの実現形式 (=表 4-4)

語義	「濃密状態」の概念領域
基本義: [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]	空間
拡張義 I : [V1-込む]ACTION ↔ [E1 を十分に行う]	行為
拡張義 II : [V1-込む]STATE ↔ [E1 の程度が激しい・深い]	状態

[V1-込む]における各意味間の「横の関係」と、スーパー・スキーマ的な意味との「縦の関係」、さらに多義性が生じる認知的メカニズムは、図 4-35 のような構文的多義ネットワークとして視覚的にまとめられる。

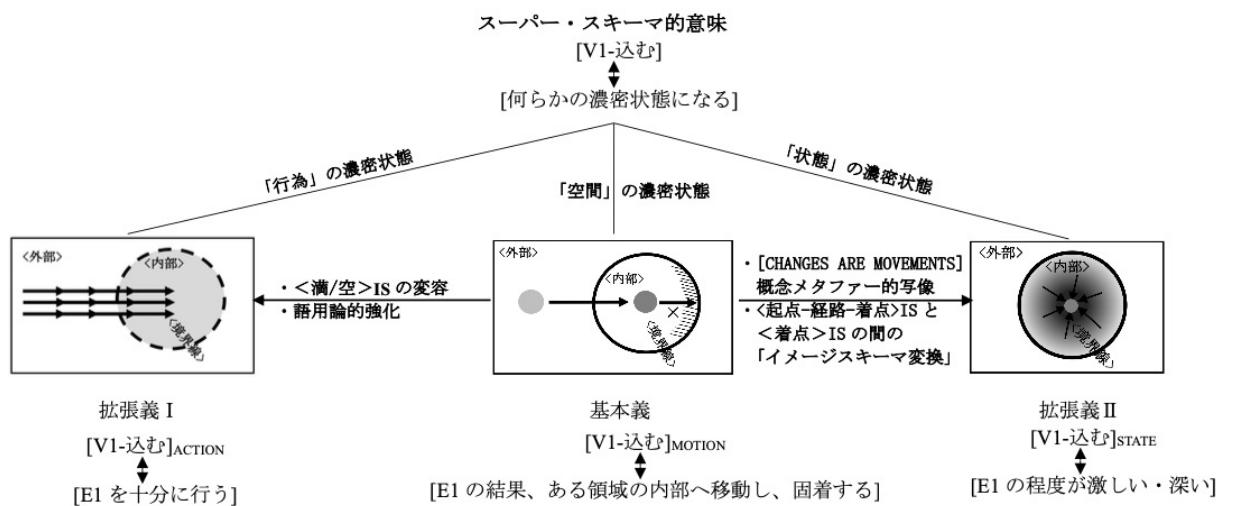


図 4-35: [V1-込む]の構文的多義ネットワーク (=図 4-23)

[V1-詰める]の多義性：

(a) 本動詞「詰める」の意味的特徴

[V1-詰める]に対応する本動詞「詰める」の以下の 4 つの語義に着目して、その間の意味拡張関係や、イメージ・スキーマとの関わりについて検討した。

【語義 1】

《隙間なく入れる》人が容器の限度いっぱいに、隙間なくものを入れる。

【語義 2】

《隙間に入れる》人が隙間の限度いっぱいに、ものを入れる。

【語義 3】

《細部まで決まる》人や組織が計画などを十分に検討し、細部まで決める。

【語義 4】

《間隔を狭くする》人がものとものとの間隔を狭くする。

その結果、【語義 1】、【語義 2】では、どこかの内部へ移動することを表すことから、<起点-経路-着点>（経路尺度）、<容器>のイメージ・スキーマが喚起されていることが分かった。また、「移動物」が「移動先」に移動し、そこに固定され、動けなくなるため、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化していることが示唆される。また、「移動先」は結果的に埋まられたり、満たされたりするため、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されている。【語義 3】では、<容器>のイメージ・スキーマが背景化されている一方で、<容器>の内部のものに焦点が当てられ、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマがより前景化されている。さらに、【語義 4】では、<容器>のイメージ・スキーマが喚起されず、<容器>にある「移動物」の間の状態が焦点化され、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマのみが喚起されていることが分かった。

(b) [V1-詰める]の基本義と拡張義

複合動詞[V1-詰める]における後項動詞は、本動詞「詰める」が持つ実質的な「内部移動」の意味が希薄化し、「限界まで」といった副詞的な意味を担う役割に特化しており、補助動詞として機能していることが確認された。本稿では、[V1-詰める]のコンストラクション的イディオムを以下の 3 つを提示した。

①基本義 [V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1 をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]

②拡張義 I [V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある場所の限界まで E1 をする]

③拡張義 II [V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする]

基本義には、本動詞「詰める」の【語義 1】を引き継いだ意味を持っており、「詰める」の【語義 1】と同様に、<起点-経路-着点>（経路尺度）、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されている。また、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマも潜在的に喚起されているものの、これらは認知的に際立つことなく、背景化されていると考えられる。

拡張義 Iにおいても、基本義と同様に、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマが喚起されており、どこかに移動することが表されているが、「移動先」となるものは、<容器>とみなされるものから、1 次元の線や、ゼロ次元の点とみなされるものが「移動先」として機能する用例が観察された。基本義と比べると、以下の 3 点の特徴があることを示した。

- ・「移動先」：<容器>から<境界線>/<限界点>へ
- ・「移動物」：「複数」から「単数」へ
- ・「移動」：「十方向性」、「尺度」のある変化

拡張義 I では、<容器>のイメージ・スキーマが背景化される一方、<起点-経路-着点>、<経路尺度>、<特性尺度>のイメージ・スキーマが関わっていることを確認した。

拡張義 I は、移動主体が<尺度>の変化のある<経路>に沿って、<容器>の<境界線>まで移動すること、すなわち、[ある場所の限界まで E1 をする] を表すことのに対し、拡張義 II では、<経路尺度>ではなく、<特性尺度>へ変容している。つまり、動作主の関与で、前項動詞が表す行為の進行によって、何らかの状態変化の結果が生じると考えられる。

したがって、拡張義 I と比べると、拡張義 II では、<容器>のイメージ・スキーマが背景化し、<経路尺度>の代わりに、<特性尺度>のイメージ・スキーマが前景化していると考えられる。

(c) 基本義と拡張義の水平方向・垂直方向の意味的関連性

垂直的関係について、本稿が提示した[V-込む]構文に対応する3つの意味は、それぞれ異なる性質の「限界」を表しており、<容器>の容量（基本義）、<経路>の終端（拡張義I）、<状態変化>の臨界点（拡張義II）といった多様な「限界」が描き出されている。

このような共通点に基づき、本稿では、[何らかの限界に達する]を[V1-詰める]構文のスーパー・スキーマ的な意味として抽出する。

[V1-詰める]における各意味間の「横の関係」と、スーパー・スキーマ的な意味との「縦の関係」、さらに多義性が生じる認知的メカニズムは、図4-36のような構文的多義ネットワークとして視覚的にまとめられる。

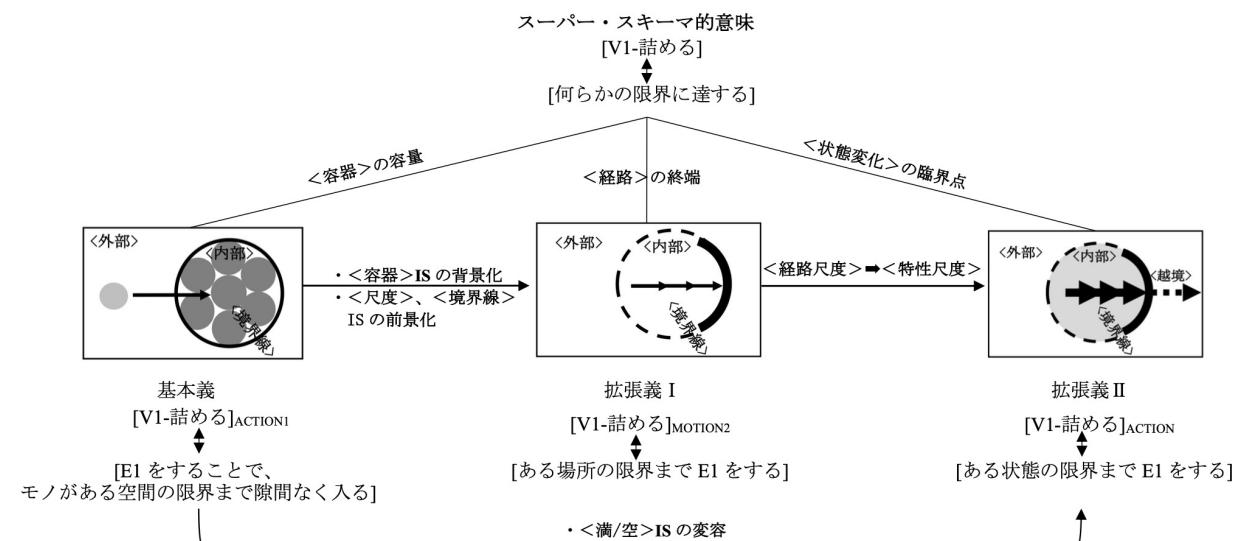


図4-36: [V1-詰める]の構文的多義ネットワーク (=図4-32)

以上の分析を通じて、「V1+入れる/込む/詰める」は、いずれも内部移動事象を基盤とし、<容器>のイメージ・スキーマを共有しつつも、動詞ごとに独自の意味特徴や拡張のパターンを持つことが明らかとなった。また、これらの複合動詞の多義性形成には、<容器>、<満/空>、<中心-周辺>、<起点-経路-着点>、<経路尺度>、<特性尺度>、<部分/全体>、<遠/近>、といったイメージ・スキーマが複雑に関与していることが示唆された。各複合動詞におけるイメージ・スキーマの喚起をまとめると、表4-9のようになる。

表 4-9: [V1-入れる/込む/詰める] におけるイメージ・スキーマの喚起

語彙	語義	イメージ・スキーマの喚起							
		<容器>		<満/空>	<中心/周辺>	<起点-経路-着点>	<尺度>		<部分/全体><遠/近>
		空間的側面	機能的側面				<経路尺度>	<特性尺度>	
[V1-入れる]	基本義	●	×	×	×	●	●	×	×
	拡張義								
[V1-込む]	基本義	●	●	● (空間) (一部)	● (一部)	●	●	×	×
	拡張義 I	○ (抽象 状態)	○ (抽象 状態)	● (行為)	×	● (状態 変化)	× (状態)	●	×
	拡張義 II	● (抽象 状態)	● (抽象 状態)	● (状態)	●	● (状態 変化)	○	●	●
[V1-詰める]	基本義	● (物理 空間)	● (物理 空間)	● (空間)	×	● (空間 移動)	● (空間 移動)	×	○
	拡張義 I	○	○	×	×	●	●	●	×
	拡張義 II	○ (抽象 状態)	○ (抽象 状態)	×	×	● (状態 変化)	×	●	×

(●:喚起+前景、○:喚起+背景、×:喚起されない)
(マークの下に括弧で補足がない場合、両方が観察されることを表す)

本章の議論は、《内部移動事象》に関わるイメージ・スキーマに基づき、日本語複合動詞の多義構造とその認知的基盤を解明するものであり、次章では、本章の議論を踏まえながら、「V1+入れる/込む/詰める」の類義性をめぐる課題に焦点を当てる。

第5章 「V1-入れる/込む/詰める」の類義性

第4章では、「V1-入れる/込む/詰める」の多義性に関する諸課題を検討し、それぞれが、形式と意味の対応関係に基づくコンストラクション的イディオムとして捉えられることを示した。これらの複合動詞は、いずれも《内部移動事象》と関与し、類似した意味を持つ一方で、喚起されるイメージ・スキーマの違いにより、多義構造において異なる特徴を示すことが確認された。以下、「内部移動」を表すか否かという観点から、それぞれの一般化されたコンストラクション的イディオムを整理すると、表5-1のようになる。

表5-1: [V1+入れる/込む/詰める]の多義的コンストラクション的イディオム

	[V1-入れる]	[V1-込む]	[V1-詰める]
+ 内部移動	【基本義】 [V1-入れる]MOTION-P ↔ [あるものを何らかの形 である物理的空間の内 部に移動させる]		
	【拡張義】 [V1-入れる]MOTION-A ↔ [あるものを何らかの形 である抽象的空間の内 部に移動させる]	【基本義】 [V1-込む]MOTION ↔ [E1の結果、ある領域の内部へ移動し、固 着する]	【基本義】 [V1-詰める]MOTION1 ↔ [E1 をすることで、モノがある空間 の限界まで隙間なく入る]
- 内部移動			【拡張義Ⅰ】 [V1-詰める]ACTION ↔ [E1 を十分に行う]
			【拡張義Ⅱ】 [V1-詰める]STATE ↔ [E1 の程度が激しい・ 深い]

本章では、第4章で得られた考察結果を踏まえつつ、第2章で提示した「V1+入れる/込
む/詰める」の類義性に関する課題に取り組む。以下に、その課題を再掲する。

- (d) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義に着目し、共通して結合するV1
と、いずれか一方にしか結合しないV1の意味的特徴を分析することで、「V1
+入れる/込む/詰める」の多義形成における共通点と相違点を明確にし、それ
ぞれ結合制約を検討する。

[V1-入れる/込む/詰める] に生起する前項動詞を基に、理論上可能なすべての組み合わせを導き出すと、表 5-2 に示される 8 つの結合パターンが得られる。

表 5-2: [V1-入れる/込む/詰める] の結合パターン一覧

	[V1-入れる]	[V1-込む]	[V1-詰める]	V1
①	○	○	○	追う、押す、突く、引く
②	○	○	×	編む、抱える、刻む、注ぐ、流す、浸す、書く、運ぶ、絞る、刈る、積む、取る、投げる、揉む、掃く、挟む、呼ぶ、割る、買う、
③	○	×	○	なし
④	○	×	×	移す、預ける、受ける、数える、雇う、迎える、つまむ、導く…
⑤	×	○	○	切る、敷く、食う、煮る、思う
⑥	×	○	×	植える、埋める、覆う、掘る、送る、飲む、吸う、食べる、使う (走る、洗う、磨く、考える、黙る、話す、信じる、老ける、冷える、惚れる、枯れる、錆びる…)
⑦	×	×	○	のぼる、通う、煎じる、問う
⑧	×	×	×	壊す、広がる、離れる…

(○: 該当複合動詞に結合する、×: 該当複合動詞に結合しない)⁵⁵

表 5-2 では、[+内部移動] を表すものは、①-⑥に觀取される。[-内部移動] を表すものは、⑤-⑦に見られる。このことに基づき、本章では、 [+内部移動] 、 [-内部移動] の 2 つのグループに分けて考察を進める。まず、5.1 節では、 [+内部移動] グループにおいて、[V1-入れる] 、 [V1-込む] 、 [V1-詰める] の間の比較を行い、続く 5.2 節では、 [-内部移動] グループにおいて、拡張義の[V1-込む] と [V1-詰める] の比較を行う。なお、 [+内部移動] と [-内部移動] という分類はおおまかな区分であり、複合動詞が各々示す特徴には違いがある。そのため、前項動詞の比較に入る前に、各節において、第 4 章の考察を基にした、 [+内部移動] ならびに、 [-内部移動] の内実確認を行い、それらの共通点と相違点を整理する。その上で、それぞれの複合動詞に結合する前項動詞に注目し、両方の複合動詞に結合する場合と、片方のみに結合する場合について分析を行う。具体的には、両方に結合する場合には、その意味上の差異を明確にし、片方にのみ結合する理由については、各複合動詞に喚起されるイメージ・スキーマの違いを基に解明を試みる。

⁵⁵ ここでの「結合する」と「結合しない」の判断は、便宜上、データベースに収録されているか否かを基準としている。データベースに収録されていない場合は、言語形式の先頭に「#」を付ける。

5.1. [+内部移動]: [V1-入れる] 、 [V1-込む] 、 [V1-詰める] の比較

[V1-入れる] 、 [V1-込む] 、 [V1-詰める] における前項動詞の差異を検討する前に、項構造上の結合制約の差異について確認しておきたい。

[+内部移動] の場合、[V1-入れる] と [V1-詰める] が使役移動動詞としての用法のみを持つ一方で、[V1-込む] は使役移動動詞としての用法も移動動詞としての用法とともに持つことが確認される。データベースに収録されている用例を確認した結果、[V1-入れる] と [V1-詰める] の前項動詞に関しては、そのすべてが移動の手段、またはその前段階の行為を表す他動詞であり、非能格自動詞および非対格自動詞は見当たらないことが確認された。

(1) [V1-入れる]

(a) [他動詞-入れる]

投げ入れる、絞り入れる、運び入れる、踏み入れる、誘い入れる、取り入れる、
流し入れる、囮い入れる、挟み入れる、聞き入れる、割り入れる、…

(b) [非能格自動詞-入れる]

*飛び入れる、*走り入れる、*泳ぎいれる、*逃げ入れる、*住み入れる、*泣き入れる、
*座り入れる、*歩き入れる、…

(c) [非対格自動詞-込む]:

*落ち入れる、*倒れ入れる、*切れ入れる、*転げ入れる、*漏れ入れる、*曲がり入れる、
*埋まり入れる、*折れ入れる、*沈み入れる、*溶け入れる…

(2) [V1-詰める]

(a) [他動詞-詰める]

押し詰める、敷き詰める、張り詰める

(b) [非能格自動詞-詰める]⁵⁶

*飛び詰める、*走り詰める、*住み詰める、*泣き入れる、*座り入れる…

(c) [非対格自動詞-詰める]:

*落ち詰める、*転げ入れる、*漏れ入れる、*埋まり詰める、*沈み詰める…

⁵⁶ [V1-詰める] には、[非能格自動詞-詰める] (の組み合わせとして、「通い詰める」、「のぼり詰める」が見られるが、これらは [+内部移動] の場合ではないため、ここでは、除外する。

[非能格自動詞-入れる/詰める] という結合パターンは、項構造上では「他動性調和の原則」(影山 1996) に違反しないものの、「主語一致の原則」(由本 1996, 2005; 松本 1998) に反することから、許容されにくい傾向にあると考えられる。

一方、[V1-入れる] と [V1-詰める] とは異なり、[V1-込む] の本動詞である古語の「こむ」は自他両用の性質を持つため、(3) で挙げた語例のように、[V1-込む] の前項動詞には、他動詞、非能格自動詞、非能格自動詞のすべてが観取される。

(3) [V1-込む]

[他動詞-込む]:

投げ込む、絞り込む、運び込む、踏み込む、誘い込む、取り込む、流し込む、囲い込む、挟み込む、聞き込む、割り込む、…

[非能格自動詞-込む]:

飛び込む、走り込む、泳ぎ込む、逃げ込む、住み込む、泣き込む、怒鳴り込む、上り込む、駆け込む、しゃがみ込む、泊まり込む、迷い込む…

[非対格自動詞-込む]:

落ち込む、倒れ込む、切れ込む、埋まり込む、転げ込む、曲がり込む、漏れ込む、埋まり込む、折れ込む、沈み込む、溶け込む…

このように、[+内部移動] を表す [V1-入れる/込む/詰める] の前項動詞には、項構造上の結合制約による違いが見られる。本節では、[V1-入れる/込む/詰める] の前項動詞における共通点と相違点を分析する際に、[V1-込む] の前項動詞のうち、[V1-入れる/詰める] には見られない非能格自動詞および非対格自動詞を除外し、他動詞に限定して比較を行う。

5.1.1. 「+内部移動」の内実: 共通点と相違点

本項では、第 4 章の考察を基にして、[V1-入れる/込む/詰める] が「内部移動」を表す際の共通点と相違点を整理する。

(ア) 物理的・抽象的領域間のメタファー写像の有無

第 4 章で述べた通り、[V1-入れる] と [V1-込む] は、(4-10) が示すように、物理的な概念領域と抽象的な概念領域の両方で、「内部移動」を表す用法が観察される。

- (4) a. 循環水を塔内に導き入れる配管の入口。
b. 佛は、どのようにしたら衆生を佛の道に導き入れることが出来るか。
- (5) a. 待機している患者さんをフルネームで呼び、診察室へ迎え入れます。
b. 人文科学研究所は、…外部からの新風を自由に迎え入れる目的で設立された研究所です。
- (6) a. 放射性物質を口から体に取り入れるのをできるだけ避けましょう。
b. 伝統的・地域的な知識を生態系管理に積極的に取り入れること。
- (7) a. 彼らは井戸の水をバケツに汲み入れた。
b. できるだけ多くの人たちの意見を汲み入れたいと思います。

(=4.1.2.1 節 (20-23)、(27-30))

- (8) a. 作業員は型にセメントを注ぎ込んだ。
b. 彼は新製品開発に情熱を注ぎ込んだ。
- (9) a. 彼女は洗濯物を家の中に取り込んだ。
b. 商品開発などに、お客様の意見をどう取り込むか?
- (10) a 3分以内で20頭の山羊を小屋に追い込むと、仕事終了。
b. (…) 職場に居づらい雰囲気を作ることで、社員を辞職に追い込むための戦略とし使われることもある。

(=4.2.2.1.1 節 (43)、(45))

このような2つの概念領域における「内部移動」の意味は、概念メタファーを介した領域間の写像によって関連づけられていると考えられる。

一方で、(11-13) が示すように、「内部移動」を表す「押し詰める」、「敷き詰める」、「張り詰める」は、物理的な概念領域に限定されており、抽象的な内部移動に拡張されていない。

- (11) スーツケースを開けると、ぎゅうぎゅうに押し詰めていた荷物があふれ出た。
(『日本語複合動詞活用辞典』(姫野 2023: 201-201))
(cf. *彼は自分のアイディアを頭の中に押し詰めた。 (作例))
- (12) 棺の中にピンクのバラを敷き詰めるというのもなかなかいいなあ。
(cf. *彼女は会議の議題を全員の心に敷き詰めた。 (作例))

(13) 床にカーペットを張り詰めた。

(cf. *彼は自分の意思を未来の計画に張り詰めた。 (作例))

(=4.2.2.1 節 (94-96))

(イ) 「移動物」 (TR) と「移動先」 (LM) との関係性の差異

第4章では、 [V1-入れる] と [V1-込む] における「移動物」と「移動先」の関係性を、

(a) 【 $TR \neq LM$ 】 (TR と LM がそれぞれ独立した存在である場合)、(b) 【 $TR \neq ?LM$ 】 (LM が $V1$ の動作によってはじめて動的に形成される場合)、(c) 【 $TR = LM$ 】 (TR と LM が重なっている場合) の3つのタイプに分類して提示した。このうち、(a) 【 $TR \neq LM$ 】 は、[V1-入れる] と [V1-込む] の両方に見られる共通の特徴である。一方で、(14-15) が示すように、(b) 【 $TR \neq ?LM$ 】 および (c) 【 $TR = LM$ 】 は、[V1-込む] に特有の特徴であり、これらの場合、「移動物」と「移動先」の存在が必ずしも明確ではなく、話者の主観的な把握によって形成される多様な形態の「内部移動」が確認された。

(14) 【 $TR \neq ?LM$ 】 (LM が $V1$ の動作によってはじめて動的に形成される場合)

- a. ベッドに横向きに寝て、頭と足とを抱え込むように、海老のように丸くなります。
- b. 髪の毛の中間から毛先に掛けて両手で挟み込むようにして、(…)
- c. 深夜、その人がベルガールの制服をこっそり着込む事から騒動になる。

(=4.2.2.1.1 節 (48))

(15) 【 $TR = LM$ 】 (TR と LM が重なっている場合)

- a. アリのような虫は、胴がくびれ込んでいる。

(『日本語複合動詞活用辞典』(2023))

- b. 看護師の坂井恵美子さんが、毛布をひざに何枚も重ねた80代の女性の横にしやがみ込んだ。
- c. 最後に奥の紙を折り、先ほどの対角線と合うように余分な紙を内側に折り込み、テープで止めます。
- d. 肘を支点に腕を畳み込む。

e. 生长期はこまめに芝を刈り込むことにより、密度の高い芝生になります。

(=4.2.2.1.1 節 (49))

[V1-詰める] に関しては、[V1-入れる] と同様に、以上の 3 つのタイプのうち、(a) 【TR≠LM】のみが観察される。

(ウ) [+内部移動] に伴う結果状態の差異

[V1-入れる/込む/詰める] は、いずれも《内部移動事象》を基盤とする複合動詞であるが、それぞれが表す「内部移動」に伴う結果状態が異なる特徴を示す。ここで再度確認したい。

まず、第 4 章で考察したように、[V1-入れる] は、「移動物」を<容器>の<外部>から<容器>の<内部>へ移動させる位置変化を表す。この使役的な「内部移動」の結果として、「移動物」を<容器>の<内部>に位置させることにあり、「移動物」と「移動先」の状態変化が含まれていない。

もちろん、(16) のように、使用文脈により、結果的に「移動物」と「移動先」に何らかの状態変化が起こる場合も見られる。

(16) a. サッカーの試合中、彼はゴールポストにボールを蹴り入れたが、ボールは隙間に挟まって取り出せなくなった。(作例)

b. 店員は紅茶をグラスの縁ぎりぎりまで注ぎ入れた。(作例)

しかし、この場合、(16) に示されている「ボールが隙間に挟まり取り出せなくなった」、「グラスが紅茶で満たされた」といった「移動物」、「移動先」の結果状態は、あくまで使用文脈に依存するものであり、[V1-入れる]の意味には含まれていないと考えられる。したがって、[V1-入れる] は、使役移動の動作そのもののみに焦点を当てており、表 16 に示されるように、そこでは<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面のみが喚起されている。

一方で、[V1-込む] と [V1-詰める] では、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面も喚起されているため、使役移動の動作に加え、内部移動によって生じる結果状態も認知的に際立っている。

表 5-3: [V1-入れる/込む/詰める] におけるイメージ・スキーマの喚起 ([+内部移動] の場合)

語彙	語義	イメージ・スキーマの喚起						
		<容器>		<満/空>	<中心/周辺>	<起点-経路-着点>	<尺度>	
		空間的側面	機能的側面				<経路尺度>	<特性尺度>
[V1-入れる]	基本義	●	×	×	×	●	●	×
	拡張義							×
[V1-込む]	基本義	●	●	(空間) (一部)	(一部)	●	●	×
[V1-詰める]	基本義	● (物理空間)	● (物理空間)	● (空間)	×	● (空間移動)	● (空間移動)	×

(●:喚起+前景、○:喚起+背景、×:喚起されない)

(マークの下に括弧で補足がない場合、両方が観察されることを表す)

第4章で論じたように、[V1-込む] では、「移動物」が<容器>の<内部>に「固着する」という結果が認知的に際立っている。一方、[V1-詰める] では、<満/空>、<遠/近>のイメージ・スキーマが喚起されているため、「移動物」が隙間なくぎっしりと詰まって、動けない状態になること、また、「移動先」としての<容器>の<内部>が満たされる状態になることが認知的に際立つことが分かる。

以上、本節では、[V1-入れる/込む/詰める] が「内部移動」を表す際の共通点と相違点を、(ア) 物理的・抽象的領域間のメタファー写像の有無、(イ) 「移動物」(TR) と「移動先」(LM) との関係性の差異、(ウ) [+内部移動] に伴う結果状態の差異、の3点から確認した。これらに基づき、次節以降は、[V1-入れる/込む/詰める] の前項動詞の共通点と相違点に焦点を当てて考察を行う。

5.1.2. [V1-入れる/込む/詰める] における V1 の比較

本節では、表 5-2 のうち、①-⑥(③を除く) の5つのパターンにおける前項動詞に焦点を当て、同じ前項動詞と結合する場合にどのような意味上の違いがあるのか、また、異なる前項動詞と結合する場合、その結合上の偏りが生じる理由について検討する。

5.1.2.1. ① [V1-入れる/込む/詰める]

[V1-入れる/込む/詰める] が共通して結合する前項動詞としては、「追う」、「押す」、「突

く」、「引く」のような使役内部移動を実現する手段を表すものが挙げられる。

[V1-入れる/込む/詰める] は、いずれも、<容器>に相当する内部空間を二格場所句に取り、結果的に移動物がある領域の中に到達することを表すため、終結点を持つ動詞であると考えられる。一方で、「追う」、「押す」、「引く」、「突く」のような動詞の意味構造では、移動の経路が含まれているが、移動の終結点は含まれていないため、(17) のように、テイル形をとると、その移動動作の継続を表す。着点を表す二格場所句をとるのが義務的ではないことが分かる。

- (17) a. 猫を追っている。(どこに?)
b. ベビカーを押している。(どこに?)
c. 糸を引いている。(どこに?)
d. 床を突いている。(どこに?)

(作例)

したがって、「押す」、「追う」、「引く」、「突く」の使用において、<経路>のイメージ・スキーマが喚起されているが、<容器>のイメージ・スキーマは喚起されていないことが分かる。

この点は、(18) のように、「押す」、「追う」、「引く」、「突く」が、【拡張義 I】の [V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある場所の限界まで E1 をする] や、【拡張義 II】の [V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする] に生起することからも検証される。ただし、「押し詰める」が、【基本義】と【拡張義 I】両方の意味を持っている点には注意されたい。

- (18) a. 横綱は土俵際まで押し詰められ、結局釣り出された。 (= 4.3.2.2 節 (97a))
【拡張義 I】
b. じりじりと後ずさる黒猫を壁際に追い詰める。 (= 4.3.2.2 節 (98a)) 【拡張義 I】
c. ポニーテールというのは、毛髪を引き詰めて後頭部でまとめたヘアスタイルです。
【拡張義 II】
d. 彼は事故の原因を突き詰めた。 (= 4.3.2.3 節 (100d)) 【拡張義 II】

一方で、前述の通り、[V1-入れる/込む/詰める] は、いずれも<容器>のイメージ・ス

キーマの空間的側面を喚起する点において共通しているため、(19) のように、「移動物」、ならびに「移動先」の明確な提示のもとで、純粋な物理的な内部移動を表す文脈では、[押し入れる/込む/詰める] の 3 つとも問題なく用いられる。

(19) a. 集めた大量の落ち葉を両手で袋に {押し入れた/押し込んだ/押し詰めた}。(作例)

(『日本語複合動詞活用辞典』(姫野 2023: 195) を参照)

b. 箱に引っ越しの荷物を {押し入れた/押し込んだ/押し詰めた}。(作例)

c. ラッシュアワーに駅員たちが通勤客を満員電車に {押し入れた/押し込んだ/押し詰めた}。(作例)⁵⁷

以上のように、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面が喚起されている点において、[V1-入れる/込む/詰める] は共通点を示すが、「移動物」と「移動先」の関係性、ならびに<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面などにおいては、異なる特徴を示すため、各々が適用される文脈が異なる場合も観察される。以下、(A)、(B) の 2 つの場合について確認する。

(A) 【TR=LM】 (TR と LM が重なっている) の場合、(20) のような文脈では、[押し込む]のみが容認される。

(20) a. クリック音がするまでスイッチを {*押し入れる/押し込む/*押し詰める} ことで常時点灯。

b. ロックボタンを {*押し入れる/押し込む/*押し詰める} と設定値がロックされます。

この差異は、「移動物」と「移動先」の関係性に由来すると考えられる。つまり、[V1-込む] では、(a) 【TR≠LM】だけでなく、(b) 【TR≠?LM】 (LM が V1 の動作によってはじめて動的に形成される場合)、(c) 【TR=LM】 (TR と LM が重なっている場合) も含まれてお

⁵⁷ 「人」を目的語にとる「押し詰める」の用例が現れる用例が少ないが、ウェブサイトでは確認される。例えば、『2008 年ヒマラヤ体験記 その 2』最終検索日:2024/11/20 <https://note.com/yamamokyo/n/nedc8df713f1a> を参照されたい。

り、故に異なる形態の内部移動が認められる。一方で、[V1-入れる] と [V1-詰める] では、**【TR≠LM】** というタイプのみが観察され、したがって、(20) では、「押し入れる」、「押し詰める」は認められない。

(B): [V1-入れる] は、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面のみを顕在化させる言語表現であり、[V1-込む] と [V1-詰める] は、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面両方を顕在化させる表現である。また、[V1-込む] と [V1-詰める] は、それぞれ<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面の異なる性質を顕在化させる表現であるため、使用文脈に違いが見られる。

例えば、(21) のような抽象的な移動先を提示する文脈においては、[V1-込む/詰める] は許容されるが、[V1-入れる] は許容されない。

(21) 完全使い捨てで、定年退職前に退職に {*追い入れる/追い込む/追い詰める}。

(21) では、「退職」という結果状態がより注目されているため、<容器>のイメージ・スキーマの物理的・機能的側面両方を喚起する [V1-込む] と [V1-詰める] がより適切であると考えられる。ただし、[V1-込む] と [V1-詰める] は、それぞれ<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面の異なる性質を顕在化させる表現であるため、「退職」という結果状態に対する捉え方が異なる。すなわち、[V1-込む] が用いられる場合、「退職」という状態が、状態変化の主体が留まる状態領域として捉えられる一方で、[V1-詰める] が用いられる場合、「退職」という状態が、職務状態の限界として捉えられており、「追い詰める」は、【拡張義Ⅱ】の [V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする] として解釈される。

同様に、(22) では、いずれも「突く」と結合しているが、[突き入れる/込む] が内部移動の意味のみを表す一方で、[突き詰める] は、内部移動ではなく、【拡張義Ⅱ】の [V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする] の意味を形成している。

- (22) a. 彼らは敵陣に槍を突き入れた。(内部移動)
b. 作業員は杭を地面に突き込んだ。(内部移動)
c. 彼は事故の原因を突き詰めた。(抽象的限界性)

5.1.2.2. ② [V1-入れる/込む/#詰める]

[V1-入れる/込む] には生起するが、[V1-詰める] 構文には生起しない動詞として、「編む」、「抱える」、「運ぶ」、「書く」、「絞る」、「揉む」、「投げる」などが挙げられる。以下では、(A) [V1-詰める] の構成要素である「～詰める」の意味機能、また、(B) [V1-詰める] が喚起するイメージ・スキーマを確認したうえで、これらの動詞が [V1-詰める] に生起しない理由を検討する。

(A): [V1-詰める] の構成要素である「～詰める」の意味機能

すでに確認したように、[V1-入れる] の後項動詞である「～入れる」は、常に複合動詞の主要部として機能し、実質的な意味を担っている。[V1-込む] の後項動詞である「～込む」は、「～入れる」と同様に、主要部として機能し、実質的な意味を保持する場合もあれば、前項動詞を副詞的に修飾し、補助動詞的な役割を担う場合もある。[V1-詰める] の後項動詞である「～詰める」は、本動詞「詰める」が持つ実質的な内部移動の意味が薄く、前項動詞が表す行為・状態に対して [空間の限界まで] という付加的な意味を付与するという補助動詞的な役割を担っていると考えられる。

第4章では、[V1-詰める] の基本義の場合、<起点-経路-着点>、<容器>のイメージ・スキーマが喚起されていると主張した。ただし、これは複合動詞全体としての意味性質であり、後項動詞「～詰める」に対するものではない点に注意されたい。後項動詞である「～詰める」は、実質的な内部移動の意味が薄くなり、[空間の限界まで] という程度副詞的な意味を担うことから、<起点-経路>のイメージ・スキーマが背景化され、「着点」としての<容器>の状態が認知的に焦点化されているのである。

以上の説明から、「～詰める」と結合する前項動詞は、<着点>、および、<容器>のイメージ・スキーマを顕在化させる動詞でなければならないと推測される。

このことを検証するために、以下、「抱える」、「呼ぶ」、「揉む」、「絞る」、「編む」といった動詞を取り上げ、『NINJAL-LWP for BCCWJ』⁵⁸ (以下、NLB) における各動詞の格パターン (ニ格とヲ格) の頻度順を確認する。

⁵⁸ 『NINJAL-LWP for BCCWJ』は、国立国語研究所と Lago 言語研究所が開発したオンラインコーパス検索システムである。NLB は、レキシカルプロファイリングという手法を用い、名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示している。

表 5-4: NLB における格パターンの頻度一覧

	抱える	呼ぶ	揉む	絞る	編む
ヲ格	3727	7520	355	1191	250
ニ格	726	2202	174	770	153

表 5-4 から、「抱える」と「呼ぶ」では、ニ格よりもヲ格の出現頻度が圧倒的に高いことがうかがえる。一方、「揉む」、「絞る」、「編む」では、ヲ格とニ格の出現頻度に関して大差がないように見えるが、内情を詳しく確認すると、「揉む」のニ格は、「波」(19)、「荒波」(14)、「ように」(13)などが上位を占め、また、「に揉まれて」という受身形が多いことが分かる。同様に、「絞る」のニ格では、「点」(48)、「一つ」(26)、「ように」(25)、「人」(20)のように、「絞る」行為の「着点」であるとの認識が難しい要素が多く見られる。「編む」のニ格においても、「ように」(10)、「ために」(6)、「通りに」(5)のように、「着点」ではない表現が主に見られる。

このように、これらの動詞に関しては、その使用文脈において、行為の対象を提示するヲ格が必須項となる一方で、ニ格を取ることがない。よって、これらの動詞は、<着点>、ならびに、<容器>のイメージ・スキーマを顕在化させる性質を持たず、[V1-入れる/込む]に生起する一方で、[V1-詰める]に生起することは許容されない傾向にあると考えられる。同じような傾向を示す動詞として、「運ぶ」、「投げる」も挙げられる。このような動詞は、「～から～まで」構文に生起し、<経路>のイメージ・スキーマが喚起されているが、<着点>と<容器>のイメージ・スキーマが喚起されていないため、[V1-詰める]に生起することが許容されにくいと考えられる。

以上の記述に反して、「書く」、「刻む」、「浸す」のような動詞に関して、それらの移動の「着点」がニ格で提示されているにもかかわらず、[V1-詰める]に生起しない。その理由を解明するために、続いて、[V1-入れる/込む]と区別される[V1-詰める]のもう1つの意味特徴(B)を踏まえ、別の結合制約の存在をしたい。

(B): [V1-詰める]が喚起する<満/空>、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマ

表 5-3 が示すように、[V1-詰める]は、<満/空>のイメージ・スキーマが前景に喚起されている点、および、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマが背景に喚起されている点において、[V1-入れる/込む]と異なる。この違いから、②の結合パター

ンに生起する動詞の意味はすべて、<満/空>、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマとは関わらないことが推測される。

<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマは、<満/空>のイメージ・スキーマに基づき、その内部にある複数の部分に焦点を当てる主体的視点から形成されるものであるため、ここでは、「書く」、「刻む」、「浸す」のような動詞は、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されていないことを確認する。

<満/空>のイメージ・スキーマを喚起するには、まず、二格で提示される「着点」が<容器>として認識される、限られた空間でなければならない。また、移動の結果として、複数の移動物が隙間なく<容器>を満たし、空間的限界に達する状態が表現される必要がある。

まず、「浸す」の「着点」としては、「水」、「血」などの液体がよく観察される。液体は通常モノを包み込む機能を担っているが、モノを「浸す」ことによって、液体が満たされるという結果は想定されにくい。次に、「書く」や「刻む」の「着点」は、通常「紙」や「碑」などの表面である。これらの表面は情報や文字を受け取る場であり、特定な文脈がなければ、物理的に満たされる結果状態が想定されにくいと考えられる。したがって、これらの動詞自体は、<満/空>のイメージ・スキーマを顕在化させる表現とは考え難い。

以上、「抱える」、「呼ぶ」、「揉む」、「書く」、「刻む」、「運ぶ」、「投げる」といった動詞が[V1-詰める]に生起しない理由を、[V1-詰める]が喚起する<起点-経路-着点>、<容器>、<満/空>イメージ・スキーマに基づいて検討した。

最後に、[V1-入れる]および、[V1-込む]に同じ動詞が生起する場合、[V1-入れる]は内部移動を表すのに対し、[V1-込む]は、基本義から拡張義Iへと意味が拡張されていることについて確認する。

(23) a. 布を染め液に {浸し入れる/浸し込む}。

b. 16種類の薬草を何ヶ月も {??浸し入れて/浸し込んで} 作った健康薬味酒。

(24) a. 私は空欄に自分の名前を {書き入れた/書き込んだ}

b. 2ちゃんねるに {??書き入れる/書き込む} 時間はあっても、デジサポのHPに
書き込む時間は無い。

[V1-込む]と[V1-入れる]には、同じく<容器>のイメージ・スキーマが喚起されているた

め、(23a)、(24a)のような物理的な内部移動を表す文脈では、[V1-入れる]、[V1-込む]両方の使用が許容される。

一方で、(23b)、(24b)のような時間的長さ、「書く内容」の量の多さが強調される文脈では、[V1-込む]が喚起する<特性尺度>のイメージ・スキーマが活性化するため、[V1-込む]のみが適切と判断される。

5.1.2.3. ④ [V1-入れる/#込む/#詰める]

[V1-入れる]のみに生起する動詞として、「移す」、「迎える」、「導き」、「数える」、「受けれる」、「預ける」、「雇う」、「つまむ」などが挙げられる。これまでの考察を踏まえ、[V1-込む]と[V1-詰める]に見られる[V1-入れる]とは異なる特有の特徴について改めて確認しておきたい。

まず、[V1-込む]および[V1-詰める]は、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面を喚起する点で共通している。一方で、一部の[V1-込む]では、<満/空>、<中心/周辺>のイメージ・スキーマが喚起される。これに対し、[V1-詰める]では、<満/空>に加えて、<部分/全体>、<遠/近>のイメージ・スキーマが背景に喚起される点が特徴的である。

以下では、これらの動詞が[V1-詰める]に生起しない理由を、前節②[V1-入れる/込む/#詰める]の結合パターンで明らかにした[V1-詰める]の結合制約に基づいて検討する。また、<満/空>のイメージ・スキーマの価値付与に着目し、[V1-詰める]の意味形成において、「プラスの価値が付与される動詞と結合しにくい」という制約も存在することを示す。

● <着点>、<容器>、<満/空>のイメージ・スキーマの喚起

前述のように、[V1-詰める]の前項には、<着点>、<容器>、<満/空>のイメージ・スキーマを顕在化させるものが許容されやすい。「つまむ」、「数える」のような動詞は、動作そのものに焦点を当てており、位置の変化を伴わないので、「着点」が意味構造に含まれない。この結果、文脈上、ヲ格目的語が提示される一方で、「二格場所句が現れることはなく、[V1-詰める]に結合することができないと考えられる。

また、「迎える」、「預ける」、「雇う」、「移す」、「導く」、「受ける」など、モノや人をどこかに移動させる意味を含む動詞においても、「着点」としての「移動先」が限られた空間の<容器>として認識されるか、また、移動後に<容器>に相当する空間が満たされる状態を前提とするかによって、結合の容認度が変わる。

ここで、注意すべき点は、[V1-入れる/込む] とは異なり、[V1-詰める] の基本義に喚起される<起点-経路-着点>、<容器>、<満/空>のイメージ・スキーマがすべて、物理的な概念領域のものである。そのため、[V1-詰める] がとる「移動物」も「移動先」も、物理的なモノである必要がある。「導き入れる」や「受け入れる」のような表現は、通常抽象的な内部移動を表す⁵⁹ため、その前項動詞である「導く」や「受ける」は、物理的概念領域に限定される [V1-詰める] との間で不整合性を生じると考えられる。

● <満/空>のイメージ・スキーマにあるマイナスの価値付与

イメージ・スキーマは、我々の空間認知や身体的経験に根ざしており、我々認知主体の主観的な価値判断がそこに反映されていると考えられる(山梨 2000: 154)。たとえば、<中心/周辺>のイメージ・スキーマにおいては、<中心>にあるものがより重要で、プラスの価値が付与されやすいのに対し、<周辺>にあるものが逆に重要性を欠き、マイナスな価値が付与される傾向がある。また、<遠/近>のイメージ・スキーマでは、<近>が人間関係の絆や親密さに結びつきプラスの価値が付与されやすいのに対し、<遠>がマイナスの価値を持つとされる。

この点を踏まえ、<満/空>のイメージ・スキーマの価値付与に着目し、[V1-詰める] 意味形成において、「プラスの価値が付与される動詞と結合しにくい」という制約があることを示す。

[V1-詰める] の目的語として、「モノ」が多く見られるのに対し、「人」を目的語とする例は極めて限定期である。この背景には、[V1-詰める] が「空間が限界に達する」や、「空間はモノに隙間なく満たされる」といった結果状態を前提とし、<満/空>のイメージ・スキーマを顕在化させる性質を持つことが関係していると考えられる。つまり、我々が身体的経験を通して形成した「限界に達した空間」に対する認知は、一般的にマイナスの主観的価値が付与されやすい。このため、「人」を目的語とする場合、非常に特定の文脈でなければ許容されにくいと考えられる。この特性が、[V1-詰める] の前項に「迎える」のようなプラスのニュアンスが伴う動詞が許容されにくい理由の 1 つでもあると言える。

最後に、以上のような動詞が、[V1-込む] にも生起しない理由について検討する。

⁵⁹ 複合動詞用例データベースで確認すると、「導き入れる」の用例には、「自然光を展示空間へと導き入れる」や、「修正を真実の世界に導き入れる」のような抽象的な内部移動を表すものが多く含まれる。同様に、「受け入れる」の用例としても、「障害者を職場に受け入れる」や「現実を前向きに受け入れる」など、抽象的な内部移動を表す例が数多く観察される。

[V1-込む] は [⊕ 内部移動] を表す場合、[V1-入れる] では喚起されない<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面を喚起する点が特徴的である。これらの動詞が[V1-込む]に生起しないのは、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面の性質と矛盾する点があると推測される。しかし、このような機能的側面の性質は、使用文脈によって補完され得るため、データベースには収録されていない理由は、単に慣習化が進んでいないことによるものであり、意味的な整合性がかけるわけではないと考える。使用文脈によっては、これらの動詞が許容される可能性は十分にあると言える。

まず、「つまむ」、「数える」といった<起点-経路-着点>、<容器>、<満/空>のイメージ・スキーマを顕在化させない動詞については、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化する使用文脈が与えられる場合には、基本義 [V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する] が活性化し、<満/空>、<特性尺度>のイメージ・スキーマが顕在化する文脈が与えられる場合には、拡張義 I [V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う] が活性化し、許容される可能性が高まると考えられる。

実際に Google 検索を行ったところ、「摘み込む」と「数え込む」はそれぞれ、266 例、516 例ヒットする。以下の (25a-b) は、それぞれ基本義、拡張義 II として解釈される実例を示している。

(25) a. 新井刑事は日付を数える際に、基準となる日や年を数え込んでしまうのです。

(『金田一耕助事件簿編さん室』最終検索日：2024/11/25)⁶⁰

b. 数量の感覚や「数遊びが楽しい」と思う感性が育ちます。数え込むのではなく、楽しいゲームとして赤ちゃんに見せることが、「数の世界」を楽しく魅力的なものにしていくのです。

(『赤ちゃんは数がわかる』最終検索日：2024/11/25)⁶¹

(26) a. 熟したキュウリを木箱に摘み込む経験豊富な女性農家。

(『Environmental harvesting 動画素材』最終検索日：2024/11/25)⁶²

(27) 畑で野沢菜とりを駿君ママも手伝ってくれたので予定の量を摘み込むことが出来た。

⁶⁰ <http://www.yokomizo.to/chronicle/kkyear2.htm>

⁶¹ <https://www.eqwel.jp/blog/%E8%B5%A4%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93%E3%81%AF%E6%95%B0%E3%81%8C%E3%82%8F%E3%81%8B%E3%82%8B/>

⁶² <https://jp.123rf.com/stock-footage/environmental%20harvesting.html>

(『あかあちゃん日記、立ち入り（食品衛生）』最終検索日 2024/11/25)⁶³

また、「移す」、「迎える」、「導き」、「受ける」、「預ける」、「雇う」のような移動を表す動詞の場合、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が顕在化する使用文脈が与えられると、基本義 [V1-込む]MOTION ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する] が活性化すると考えられる。

実際に Google 検索を行った結果、「移し込む」は 2870 例、「迎え込む」は 112 例、「導き込む」は 298 例ヒットする。以下、(28-30) は実例を示している。

(28) ベーコンの代わりに干し豚を使い、スモークの香りをつけずに、やさしい豚肉のうま味だけをゆっくりとスープに移し込む。

(『天然生活』最終検索日: 2024/11/25)⁶⁴

(29) 風水的に玄関は幸運を迎え込む入口であり、とても重要な場所です。

(『リースを玄関に飾ると運気が落ちる!? 「クリスマス風水」の秘密』最終検索日: 2024/11/25)⁶⁵

(30) 地上の太陽光を捉え地下へ導き込む技術を駆使して作られるこの公園なら冬も市民は凍えることが無いでしょう。

(『ダン・バラシュがニューヨークに建設中の地下公園「ローライン」について TED で語っている動画』最終検索日: 2024/11/25)⁶⁶

(28-30) の文脈において、「移動物」の「豚肉のうま味」、「幸運」、「太陽光」が、結果的に「移動先」の「スープ」、「家」、「地下」に留まるニュアンスが含まれており、「固着する」という<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面が喚起されるため、[V1-込む] の容認度が上がると考えられる。

5.1.2.4. ⑤ [#V1-入れる/込む/詰める]

[+ 内部移動] を表す場合、[V1-込む/詰める] に生起するが、[V1-入れる] に生起しない動

⁶³ <https://shimoyado.exblog.jp/24646687/>

⁶⁴ https://tennenseikatsu.jp/_ct/17330626

⁶⁵ https://www.craستina.co.jp/column/column_1/

⁶⁶ <https://architecturephoto.net/38120/>

詞として、「切る」、「敷く」の2語が挙げられる。本節は、まず、この2つの動詞が [V1-入る] に生起しない理由を検討し、[V1-入れる] の意味形成における制約を明らかにする。その後、[V1-込む/詰める] に生起する際に生じる意味的な差異を確認する。

[V1-入れる]では、「移動物」を<容器>の<外部>から<境界線>を越えて<容器>の<内部>へ移動させ、その結果「移動物」が<容器>の<内部>に位置するという一連の使役的内部移動事象がプロファイルされている。この際、<容器>のイメージ・スキーマの物理的側面のみが喚起されると考えられる。

この意味で、[V1-入れる]と同様に、<起点-経路-着点>、<容器>のイメージ・スキーマを顕在化させる動詞が[V1-入れる]に生起する場合、意味が重複し、言語の経済性に反するため、許容されにくくと推測される。

たとえば、「敷く」という動詞はニ格をとり、<着点>のイメージ・スキーマを顕在化させる表現である。しかし、そのニ格によって提示される「着点」は、通常、2次元の表面空間を指しており、また、その空間が限られているか否かはプロファイルされていないため、<境界線>を持つ<容器>のイメージ・スキーマが喚起されない文脈でも使用可能である。

一方、[V1-入れる]の使用においては、<起点-経路-着点>と<容器>のイメージ・スキーマが喚起されるため、「敷き入れる」を使用する際には、<容器>の<内部>と<外部>を分ける<境界線>が明示される文脈が求められる。

google検索の結果、「敷き入れる」は1840例ヒットしており、実際には一定の頻度で使用されていることが確認できる。

(31) たとえば、地面を掘り、木の葉・砂利・火山灰の順に敷き入れる…

(『北海道の歴史と文化と自然』⁶⁷最終検索日: 2024/11/25)

(31) の文脈によれば、「地面を掘ることでできた凹んだところ」は、「敷く」の「着点」として機能している。この場合、「木の葉・砂利・火山灰」を「凹んでいるところ」の<外部>から「凹んでいるところ」の<内部>に移動させることを表す。つまり、<境界線>を越えることは使用文脈で明示されているため、「敷き入れる」の使用が許容されやすいと考えられる。

⁶⁷ <https://www.akarenga-h.jp/hokkaido/ainu/a-01/>

また、「切り入れる」はデータベースに収録されていないが、実際に google 検索をすると、「切り入れる」は 15100 例ほどヒットする。(32) はその実例を示している。

(32) コンソメ大さじ 1 を入れて中火にかけ、ベーコンをハサミで切り入れる。

(『栄養満点! ほうれん草のふわたまスープ』⁶⁸最終検索日: 2024/11/25)

(32) の文脈では、「切り」と「入れる」は、<前段階型> (継起的時間関係)[V1 したうえで V2] の意味関係にあり、「切る」が前段階で、「入れる」が後段階として、「切って入れる」という連続的な行為を表している。

ここで注意すべき点は、「切る」が [V1-込む/詰める] に生起する場合、それぞれ異なる意味を形成していることである。

(33) a. 私は爪切りで爪を深く切り込んでしまった。([TR=LM]、基本義)

b. 職人はズボンのすそを 1 センチ切り詰めた。(拡張義 I)

5.1.2.5. ⑥ [#V1-入れる/込む/#詰める]

[+内部移動] を表す場合、[V1-込む] のみに生起する動詞として、「植える」、「埋める」、「送る」、「掘る」、「覆う」などの動詞が挙げられる。

● [V1-入れる] に生起しない理由

「植える」、「埋める」、「送る」のような動詞が [V1-入れる] に生起しない理由は、⑤で言及したように、[V1-入れる] と同じく <起点-経路-着点>、<容器>のイメージ・スキーマを顕在化させる動詞が意味的に重複するため、許容されにくい点にあると考えられる。

「植える」、「埋める」、「送る」のような動詞の使用文脈では、二格がとる「着点」が <容器>として認識される場合が多いため、その動詞自体がすでに内部移動を表しており、[V1-入れる] との組み合わせが冗長と感じられる。言語の経済性に基づき、[V1-入れる] との結合が許容されにくいと考えられる。

また、「覆う」、「掘る」のような動詞が [V1-入れる] に生起しない理由は、[V1-入れる] に

⁶⁸ <https://oceans-nadia.com/user/384216/recipe/448740>

おける「移動物」と「移動先」の関係性によって説明することができる。

つまり、[V1-入れる]の使用においては、「移動物」と「移動先」がそれぞれ独立した存在であり、【TR≠LM】という関係性を持つことが求められる。そのため、(34-35)のような文脈では、許容されない。

【TR≠?LM】 (LM が V1 の動作によってはじめて動的に形成される場合)

- (34) 私は黒いビニールで箱を {*#覆い入れた/覆い込んだ}。

【TR=LM】 (TR と LM が重なっている場合)

- (35) 当時の建物は、地面に穴を {*#掘り入れた/掘り込んで}、そこに柱を立てた。

[V1-詰める] は [V1-入れる] と同様に、【TR≠LM】という関係性を前提としているため、「掘る」、「詰う」は、[V1-詰める] にも生起しないと考えられる。

● [V1-詰める] に生起しない理由

「植える」、「埋める」、「送る」のような動詞は、<起点-経路-着点>、<容器>のイメージ・スキーマを顕在化させる表現である点で、[V1-詰める] に生起する条件の一部を満たしているが、<満/空>のイメージ・スキーマを顕在化させる文脈が提示されない限り、[V1-詰める] に生起することが難しいと考えられる。

5.1.3. まとめ

本節は、まず、[V1-入れる/込む/詰める] が「内部移動」を表す際の共通点と相違点を、(ア) 物理的・抽象的領域間のメタファー写像の有無、(イ) 「移動物」(TR) と「移動先」(LM) との関係性の差異、(ウ) [+内部移動] に伴う結果状態の差異、の 3 点から確認した。また、[V1-入れる/込む/詰める] が [+内部移動] を表す場合に喚起されるイメージ・スキーマの特徴に基づき、[V1-入れる/込む/詰める]、[V1-入れる/込む/#詰める]、[V1-入れる/#込む/#詰める]、[V1-#入れる/込む/詰める]、[V1-#入れる/込む/#詰める] の 5 つの結合パターンにおける V1 の意味的特性を分析することで、各複合動詞の結合制約を明らかにした。検討した結果をまとめると、以下のようになる。

[V1-入れる] :

- (a) 「移動物」と「移動先」は、【TR≠LM】という関係性を持ち、それぞれ独立した存在であることが求められる。
- (b) [V1-入れる] と同一のイメージ・スキーマを喚起する動詞は [V1-入れる] の V1 として許容されにくい。

[V1-込む] :

- (a) <容器>のイメージ・スキーマの空間的・機能的側面が伴う性質に矛盾する動詞は、[V1-込む] の V1 として許容されにくい。

[V1-詰める] :

- (a) 「移動物」と「移動先」は、【TR≠LM】という関係性を持ち、それぞれ独立した存在であることが求められる。
- (b) 「移動物」と「移動先」は物理的な概念領域に属する必要がある。
- (c) プラスの価値付与が伴う動詞は、[V1-詰める] の V1 として許容されにくい。
- (d) <着点>、<容器>のイメージ・スキーマを喚起する V1 が求められる。
- (e) <満/空>のイメージ・スキーマが喚起される文脈に矛盾する動詞が [V1-込む] の V1 として許容されにくい。

5.2. [一内部移動] : [V1-込む] と [V1-詰める] の拡張義の比較

本節は、まず、[V1-込む/詰める] の拡張義における共通点と相違点を整理する。また、表 5-2 に示される⑤-⑦の3つのパターンに着目し、[一内部移動] グループの[V1-込む] と [V1-詰める] に生起する V1 の意味特徴を分析することで、拡張義 [V1-込む] と [V1-詰める] の意味形成および結合制約について検討する。

[V1-込む/詰める] の拡張義における共通点と相違点を整理するに先立ち、以下、[V1-込む/詰める] の項構造上の結合制約の差異について確認しておきたい。

(36) [V1-込む]

(a) [他動詞-込む]

書き込む、洗い込む、煮込む、磨き込む、考え込む、信じ込む

(b) [非能格自動詞-込む]

走り込む、黙り込む、話し込む、寝込む、惚れ込む…

(c) [非対格自動詞-込む]

老け込む、枯れ込む、冷え込む、錆び込む…

(37) [V1-詰める]

(a) [他動詞-詰める]

押し詰める、追い詰める、煎じ詰める、煮詰める、問い合わせる、突き詰める、

思い詰める、切り詰める、食い詰める、引き詰める

(b) [非能格自動詞-詰める]

のぼり詰める、通い詰める

(c) [非対格自動詞-詰める]⁶⁹

なし

(36)、(37) が示すように、他動詞および非能格自動詞は、[V1-込む] と [V1-詰める] の両方に生起する。一方、非対格自動詞は [V1-込む] にのみ生起する。このような項構造上の結合制約に基づき、本節では [非対格自動詞-込む] の結合パターンに属する語例を考察対象から除外する。

5.2.1. 「一内部移動」の内実: 共通点と相違点

本節では、第4章の考察をもとに作成した表 5-5 を参照しながら、[V1-込む/詰める] の拡張義における共通点と相違点を整理する。

⁶⁹ [非対格自動詞-詰める]の結合パターンとして、複合動詞レキシコンには、「凍り詰める」《まれ》の1語が収録されているが、複合動詞用例データベースおよび、『日本語複合動詞活用辞典』(姫野 2023) には収録されていない。このことから、「凍り詰める」は非常にまれな語例であるとみなし、本稿では考察の対象外とする。

表 5-5: [V1-込む/詰める] におけるイメージ・スキーマの喚起 ([ー内部移動] の場合)

語彙	語義	イメージ・スキーマの喚起							
		<容器>		<満/空>	<中心/周辺>	<起点-経路-着点>	<尺度>		<部分/全体><遠/近>
		空間的側面	機能的側面				<経路尺度>	<特性尺度>	
[V1-込む]	拡張義 I	○ (抽象状態)	○ (抽象状態)	● (行為)	×	● (状態変化)	×	●	×
	拡張義 II	● (抽象状態)	● (抽象状態)	● (状態)	●	● (状態変化)	○ (状態)	●	●
[V1-詰める]	拡張義 I	○	○	×	×	●	●	●	×
	拡張義 II	○ (抽象状態)	○ (抽象状態)	×	×	● (状態変化)	×	●	×

(●:喚起+前景、○:喚起+背景、×:喚起されない)

(マークの下に括弧で補足がない場合、両方が観察されることを表す)

(ア) <経路尺度>の有無

まず、[ー内部移動] グループに喚起される<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマの性質に注目されたい。

[V1-込む] の拡張義 I、拡張義 II、および、[V1-詰める] の拡張義 II で喚起される<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは、その意味に含まれる「状態変化」に基づくものである。一方で、[V1-詰める] の拡張義 I で喚起される<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは、その意味に含まれる「位置変化」と「状態変化」の両方にに基づくものである。これは、拡張義 I である[V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある場所の限界まで E1 をする] が、何らかの経路に沿って、移動するという「位置変化」の意味を持つためである。このような「位置変化」により喚起される<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは、[V1-詰める] の拡張義 I において、方向づけの<経路尺度>のイメージ・スキーマに変換されることが確認できる。この[+ 移動] という特徴は、[V1-詰める] の拡張義 I に特有のものであり、他の拡張義には観察されないため、本節の考察対象から除外する。

(イ) <満/空>のイメージ・スキーマの性質の違い

表 5-5 が示すように、<満/空>のイメージ・スキーマは、[V1-込む] の拡張義 I、II では喚起されているが、[V1-詰める] の拡張義では喚起されていない。

しかし、[V1-詰める] の拡張義は、<満/空>のイメージ・スキーマと完全に無関係ではない。第4章で確認したように、[V1-詰める]の基本義では、複数の「移動物」により、<容器>の容量が<満>に達することが強調されるため、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されていると考えられる。<容器>のイメージ・スキーマの背景化に伴い、このような<満/空>のイメージ・スキーマは、基本義の「空間的限界」から、「経路の終端」(拡張義I) や「状態変化の臨界点」(拡張義II) といった「経路」および「状態」の「限界」に変容し、[V1-詰める] の意味拡張に動機づけられていると考えられる。

このように、[V1-詰める] の拡張義は、「限界」を表す点において<満/空>のイメージ・スキーマに関わっていることが分かる。

一方で、[V1-込む] の拡張義I、IIで喚起される<満/空>のイメージ・スキーマは、本動詞「こむ」に含まれる「濃密」という意味要素に基づくものである。

このように、[V1-込む]、[V1-詰める] の拡張義の意味形成に動機づけられる<満/空>のイメージ・スキーマは、それぞれ「濃密」と「限界」という2つの異なる性質を持つことが確認した。

(ウ) <中心-周辺>のイメージ・スキーマの有無

表5-5によると、4つの拡張義の中で<容器>のイメージ・スキーマ(状態)を喚起するのは、[V1-込む]の拡張義IIのみである。[V1-込む]の拡張義IIでは、V1が示す状態の激しさや深さが強調されており、<容器>の<内部>には「周辺」、「内」、さらには「内々」といった連続的な領域が想定される。このため、<中心/周辺>のイメージ・スキーマも同時に喚起される。一方で、[V1-込む]の拡張義Iおよび[V1-詰める]の拡張義I、拡張義IIでは、<容器>のイメージ・スキーマが背景化されているため、これに関連する<中心/周辺>のイメージ・スキーマは喚起されない。

(エ) 共通点: <特性尺度>の喚起

先に確認したように、[V1-込む] の拡張義I、拡張義II、[V1-詰める] の拡張義IIに共通して喚起される<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマは、それぞれの意味に内包される「状態変化」によって動機づけられている。これら3つの意味は、動作主の関与を通じてモノやコトの状態が進行し、その結果として何らかの変化が生じることを表現している。

[V1-込む] の拡張義Iでは、動作主が V1 の動作を十分に行うことで、その「量」が累積し、

動作主や被動作主に質的または量的な変化が生じる。拡張義IIにおいては、V1 が表す状態が<容器>内で深化し、<周辺>から<内>、さらには<内々>へと移行する様子がプロファイルされる。方、[V1-詰める]の拡張義IIでは、V1 の行為が徹底的に行われる結果として、動作主や被動作主が徐々に限界に達し、最終的に質的な変化が生じることが示唆される。

このように、これらの拡張義はすべて、動作主の関与によってモノやコトの性質が変化するプロセスを捉えており、<特性尺度>が深く関わっていると考えられる。この共通点が、[V1-込む]と[V1-詰める]の拡張義に類似性をもたらす主な理由であると考えられる。

[V1-込む] と [V1-詰める] は<特性尺度>を共通して喚起するため、前項に同じ V1 が生起する場合が観察される。しかし、それぞれの<特性尺度>の性質が異なるため、同じ V1 が生起しても意味に差異が生じる場合がある。また、一方にしか結合しない動詞も見られる。これらの特徴については、次節で具体例を用いて詳しく考察する。

以上、(ア) 経路尺度の有無、(イ) <満/空>のイメージ・スキーマの性質の違い、(ウ) <中心-周辺>のイメージ・スキーマの有無、(エ) 共通点: <特性尺度>の喚起、の 4 点から、[V1-込む/詰める] の拡張義における共通点と相違点を整理した。

5.2.2. [V1-込む] と [V1-詰める] における V1 の比較

本節からは、表 5-2 に示される⑤-⑦の 3 つのパターンにおける前項動詞に焦点を当て、同じ前項動詞と結合する場合、どのような意味上の違いがあるのか、また、異なる前項動詞と結合する場合、その結合上の偏りが生じる理由について検討する。

5.2.2.1. ⑤ [V1-込む/詰める]

[V1-込む] と [V1-詰める] に共通して生起する動詞として、「食う」、「煮る」、「思う」が挙げられる。以下では、これらの動詞が [V1-込む] および [V1-詰める] と結合する際、それぞれどのような意味が形成されるかを確認する。

例えば、(38) が示すように、「食う」という動詞が [V1-込む] 、 [V1-詰める] に生起する場合、それぞれ、[+ 内部移動] の基本義、[- 内部移動] の拡張義 II が形成される。

- (38) a. ロープが手に食い込んだ。(基本義)
b. 彼は都会で食い詰めて、田舎に帰った。(拡張義 II)

(38a) では、「ロープ」(移動物) が「手」(移動先) の凹みへと移動し、その場に固着する様子が描写されている。この場合、「手」は「ロープ」によって食い込まれる結果として物理的な変形を受け、「移動先」として機能していると考えられる。

ここでは、「ロープ」の物理的な移動が「手」の内部の変化を引き起こし、物理的な内部移動が強調されることから、[V1-込む] の基本義 $[V1\text{-込む}]_{MOTION} \leftrightarrow [E1]$ の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する] が活性化していることが分かる。

一方、(38b) では、「食う」という動詞が転義的に用いられ、[V1-詰める] に生起することで、比喩的表現として経済的困窮や行き詰まりの状態がプロファイルされている。この場合、「都会」は経済的・社会的な領域を象徴する＜容器＞として暗示されており、動作主がその＜容器＞の＜内部＞で限界に達する状態が描かれていることから、[V1-詰める] の拡張義 II である $[V1\text{-詰める}]_{ACTION} \leftrightarrow [ある\text{状態の限界まで } E1\text{ をする}]$ が活性化していることが分かる。

次に、「煮る」を前項とする場合の意味形成について確認する。

(39) a. 彼はスープを一晩煮込んだ。(拡張義 I)

b. バター以外の材料をフライパンに合わせ、とろみがつく程度まで弱火で煮詰める。
(拡張義 II)

(39) から分かるように、「煮込む」と「煮詰める」はいずれも料理作りのコンテクストで用いられる。(39a) の「煮込む」は、[V1-込む] の拡張義 I である $[V1\text{-込む}]_{ACTION} \leftrightarrow [E1\text{ を十分に行う}]$ に対応し、(39b) の「煮詰める」は、[V1-詰める] の拡張義 II である $[V1\text{-詰める}]_{ACTION} \leftrightarrow [ある\text{状態の限界まで } E1\text{ をする}]$ に対応することが確認できる。

5.2.1 節で述べたように、この 2 つの意味には、＜特性尺度＞のイメージ・スキーマを喚起する点で共通しており、何らかの状態変化が引き起こされることが想定される。このことは、(39a-b) における「煮込む」と「煮詰める」を置き換えて文法的に成立する点から確認できる。

しかし、 $[V1\text{-込む}]_{ACTION} \leftrightarrow [E1\text{ を十分に行う}]$ と $[V1\text{-詰める}]_{ACTION} \leftrightarrow [ある\text{状態の限界まで } E1\text{ をする}]$ の違いとして、状態変化が限界に達しているか否かが挙げられる。

この違いにより、(40)のように、特定の文脈で一方しか適切でない場合が観察される。

(40) a. お砂糖をじっくりと鍋で {??煮込んだ/煮詰めた} カラメルソース作りは、地道で大変な作業です。

b. 海水から製塩するには、直接海水を煮詰めて食塩を得るより、一度、塩分濃度の高い塩水を作つてから {??煮込んだ/煮詰めた} ほうが効率が良い。

(40a-b) では、「砂糖」や「海水」が、最終的に「カラメルソース」や「食塩」に変化することが強調されている。つまり、「煮る」という行為の目的は、「砂糖」、「海水」をその本来の状態の限界まで煮ることにより、その形態が根本的に変化させ、新たな物質である「カラメルソース」、「食塩」を得ることである。

一方で、「煮込む」は対象物自体の内部状態の深化に焦点を当てており、新たな物質の生成を目的としない。そのため、「液体から固体」のような物質の状態変化を含む文脈では、「煮込む」よりも、「煮詰める」のほうが許容されやすいと考えられる。

この点に関して、以下、(41) に示される「煮詰める」のメタファー的用法からも確認できる。

(41) 彼らはこの案をじっくり {*煮込んだ/煮詰めた}。

(41) の文脈では、「案」という抽象的な対象に対して「煮詰める」がメタファー的に用いられ、「案を徹底的に検討し、最終的な結論に至る」ことを表している。この場合、「案を検討する」という行為が、「結論に至る」という限界点に到達することを目標としているため、「案を煮詰める」という表現が自然である。一方、[V1-込む]ACTION ↔ [E1 を十分に行う] では、行為の徹底性や「未完成から完成」という結果状態の根本的な変化に焦点が置かれていないので、「案を煮込む」という表現通常許容されないと考えられる。

また、[V1-込む] と [V1-詰める] が「思う」という思考動詞と結合する場合、(42) のような意味的違いが見られる。

(42) a. 人は見えないものは、ないものだと {思い込む/?想い詰める}。(拡張義Ⅱ)

b. 努力と言ってもあまり {??想い込む/想い詰める} ほどでは体に悪いかもしけないし、(…)。(拡張義Ⅱ)

(42a) の「思い込む」は、[V1-込む] の拡張義Ⅱである $[V1\text{-込む}]_{\text{STATE}} \leftrightarrow [E1]$ の程度が激しい・深い] に対応し、「思う」という状態の程度の深化を表している。(42b) の「思い詰める」は、[V1-詰める] の拡張義Ⅱである $[V1\text{-詰める}]_{\text{ACTION}} \leftrightarrow [\text{ある状態の限界まで } E1 \text{ をする}]$ に対応し、思考が限界に達し、心理的に圧迫される様子を表している。

このような意味的違いは、<中心/周辺>のイメージ・スキーマの喚起の有無によるものであると考えられる。

5.2.1 節で述べたように、[V1-込む] の拡張義Ⅱと[V1-詰める]の拡張義Ⅱは、いずれも<特性尺度>のイメージ・スキーマを喚起するが、[V1-込む] の拡張義Ⅱではさらに<中心/周辺>のイメージ・スキーマが喚起される点で異なる。このような違いをより直感的に理解できるようにするため、以下に第4章で提示した[V1-込む] の拡張義Ⅱと[V1-詰める] の拡張義Ⅱのイメージ図式を再掲する。

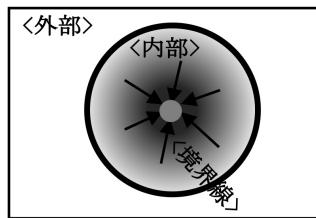


図 5-1: 「V1+込む」の拡張義Ⅱのイメージ図式 (=図 4-20)

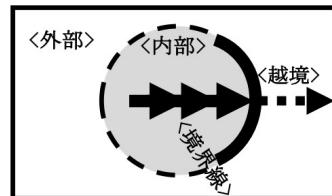


図 5-2: 「V1+詰める」の拡張義Ⅱのイメージ図式 (=図 4-30)

[V1-込む] の拡張義Ⅱと[V1-詰める]の拡張義Ⅱで喚起される<特性尺度>のイメージ・スキーマは、矢印によって表示されている。ここで、矢印の進行方向に注意されたい。[V1-込む] の拡張義Ⅱでは、矢印が<容器>の内部にあり、<容器>の<周辺>から<中心>へと進行している。一方で、[V1-詰める] の拡張義Ⅱでは、矢印が<容器>の<境界線>の左側から、<境界線>を越え、その右側にある<容器>の<外部>へと進行する様子が描かれている。

このような違いは、言語表現の意味的違いに反映される。(42a)では、「見えないもの」を「ないもの」として強く信じるという心理的な状態が描写されている。この場合、「思う」という状態が<容器>の<内部>で深化する様子がプロファイルされ、他の可能性を排除してその状態に閉じ込められることが強調されているため、<中心/周辺>のイメージ・スキーマを喚起する「思い込む」が適切であると考えられる。

一方、(42b)では、過剰な努力や思考が身体に悪影響を及ぼす可能性が指摘されている。この場合、思考が身体的負荷の限界に達し、そこ結果、「体に悪い」という状態が生じることがプロファイルされるため、「思い詰める」がより適切であると考えられる。

5.2.2.2. ⑥ [V1-込む/#詰める]

本節では、[V1-込む]に生起する一方で、[V1-詰める]に生起しない動詞を対象に、その理由を検討する。

拡張義Iである[V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1を十分に行う]に生起する動詞として、「走る」、「磨く」、「洗う」、「拭く」などが挙げられる。また、拡張義IIである[V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1を十分に行う]に生起する動詞として、「黙る」、「話す」、「考える」などが挙げられる。以下では、それぞれのグループから、「走る」、「磨く」、「話す」、「考える」を代表例として取り上げ、それらが[V1-詰める]に生起しない理由を検討する。

まず、第4章で提示した[V1-込む]の拡張義Iと[V1-詰める]の拡張義IIのイメージ図式を以下に再掲する。

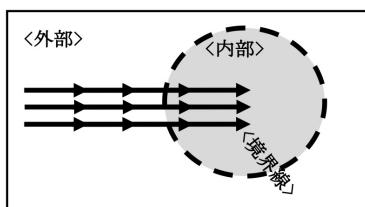


図5-3: 「V1+込む」の拡張義Iのイメージ図式 (=図4-15)

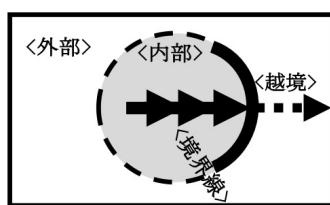


図5-4: 「V1+詰める」の拡張義IIのイメージ図式 (=図4-30)

図 5-3 の [V1-込む] の拡張義 I では、V1 が表す行為を十分に行い、結果として何らかの状態領域に入るプロセスが描かれている。一方、図 5-4 の[V1-詰める] の拡張義 IIにおいて、V1 が表す行為を徹底的に行うことにより、結果的に〈境界線〉に相当する状態の限界に達するプロセスが示されている。この違いに基づき、以下の例を分析する。

- (43) a. 普段から十分に {走り込んで/*#走り詰めて}、身体を鍛えておく。(拡張義 I)
b. 2~3 分ほど置いた後、仕上げ磨き用布 (キメの細かい布) で靴全体を丁寧に {磨き込む/*#磨き詰める} ことで、美しいツヤが出てきます。(拡張義 I)

(43a) における「走り込む」は、「走る」という行為を「十分に」繰り返し行うことで、身体を鍛えるという結果をもたらすことを表している。この場合、「身体を鍛える」というプラスのニュアンスを持つことが目的であり、行為の量的累積がプロファイルされている。

一方、[V1-詰める] は、V1 が表す行為を「限界」まで「徹底的に」行うことをプロファイルするため、「走る」という通常、「身体を鍛える」ことを目的とした継続的な運動との間に不整合性が生じ、一般的には容認されにくいと考えられる。ただし、非常に限定された文脈が与えられ、「走る」行為が極端に徹底され、限界点に達するような状況を想定する場合には、「走り詰める」という表現が成立する可能性も否定できない。たとえば、マラソン選手が限界まで走り続けた末に肉体的な限界に到達するような状況であれば、「走り詰める」という表現が使用される余地があるかもしれない。

また、(43b) において、「磨き詰める」が許容されない理由も同様に説明することができる。(43b) では、「磨く」という行為を「十分に」繰り返し行うことで、対象物の「靴」に美しいツヤというプラスの効果をもたらすことを表している。このようなプラスの効果は、[V1-詰める] に含まれる「限界」という意味要素との間に不整合が生じ、靴を磨くような文脈では「磨き詰める」は成立しにくいと考えられる。

ただし、非常に限定された文脈が与えられ、「磨く」行為が極端に徹底され、結果として何らかの限界点に達する状況が想定される場合には、「磨き詰める」という表現が容認される可能性も否定できない。たとえば、特定の材料を使った実験的な研磨作業で、磨き続けることで材料が削れ尽くし、物理的限界に達するような状況では、「磨き詰める」という表現の容認度が上がるかもしれない。

次に、「話す」や「考える」といった動詞が [V1-詰める] に生起しない理由も、このよう

な「限界」に達する結果が想定されるか否かという要因から説明できることを示す。

(44) a. 電車の中で友達と {話し込んで/*#話し詰めて}, 駅を乗り過ごしてしまった。

b. 私は、どうするべきか、しばらく {考え込んだ/*#考え詰めた}。

(44a) と (44b) は、「話す」および「考える」という行為が深化する様子を描写している。

(44a) では、友人との会話が時間を忘れるほど深まるプロセスがプロファイルされており、

(44b) では、話者が「どうするべきか」という問題に集中し、深い思索に没頭する状況が描かれている。

このように、「話す」と「考える」は、それぞれ [V1-込む] の拡張義IIである [V1-込む]_{STATE} ↔ [E1 の程度が激しい・深い] に適合する特徴を有し、<特性尺度>のある状態の深化が含まれていると考えられる。この特徴自体は、[V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする] と必ずしも矛盾しないと考えられる。例えば、「考え詰める」はデータベースには収録されていないが、Google 検索では約 2270 例の使用が確認される。このことから、

「考え詰める」という表現は、比較的緩やかな制約のもとで成立し得るものであり、個人の言語習慣や使用される文脈によって許容される可能性が高いと考えられる。

同様に、「話し詰める」についても、特定の文脈で「話す」という行為が徹底的に行われ、その結果として心理的・物理的な「限界」に達する状況が想定される場合には、使用される可能性があると考えられる。しかし、一般的な会話や話し合いといった文脈では、「話す」という行為が持つ継続性や内面的深化の特性が拡張義IIの [V1-込む] の意味構造に適合しやすいため、「話し詰める」の使用例は極めて限定的であると推測される。

5.2.2.2. ⑦ [V1-#込む/詰める]

最後に、[V1-詰める] に生起するが、[V1-込む] に生起しない動詞として、「通う」、「煎じる」を取り上げて、その理由を検討する。

ここで注目すべきは、「通う」と「煎じる」が [V1-込む] に生起する場合の容認性に大きな違いが見られる点である。「通い込む」と「煎じ込む」はいずれもデータベースに収録されていないが、google 検索の結果では、「通い込む」が 6140 例と高頻度でヒットする一方、「煎じ込む」はわずか 5 例しか確認されない。この差異は、「通う」が [V1-込む] に生起するか否かの判断が使用文脈に強く依存するのに対し、「煎じる」が [V1-込む] に生起しない

理由が「煎じる」動詞自体の意味的特徴に起因することを示唆している。

まず、「通う」という動詞について検討する。「通う」という行為は、継続性や反復性を含意しており、「量的変化」を実現する性質を持つと考えられる。このような「量」の特徴を備える点で、「通う」という動詞は、[V1-込む] の拡張義I ([V1-込む] ACTION \leftrightarrow [E1 を十分に行う]) および [V1-詰める] の拡張義II ([V1-詰める] ACTION \leftrightarrow [ある状態の限界まで E1 をする]) のいずれにも適合しやすい性質を持つ。しかし、それぞれの構造に生起するためには、異なる前提条件が存在することに留意する必要がある。[V1-詰める] の拡張義II に生起するには、「何らかの状態の限界に達する」ことを前提としているのに対し、[V1-込む] の拡張義I に生起するには、「技能や知識の上達といった抽象的な領域に到達する」ことを前提としている。この違いが、「通い込む」の容認度に影響を与える重要な要因であると考えられる。この点については、次の (45a) と (45b) における「通い込む」の容認度の違いからも確認できる。

(45) a. ひたすらパチ屋に {??#通い込む/通い詰める} 毎日を送るダメな人でしたが、

b. 彼は料理専門学校に {?#通い込んだ/通い詰めた}。

(46) 彼は薬草茶を {??#煎じ込んだ/煎じ詰めた}。

(45a) と (45b) の例では、「通う」の場所が異なることでその行為の目的が異なることが想定される。(45a)では、「パチ屋」に通うという行為が技能や知識の上達と関連づけられることは少なく、単に「限界まで通う」というニュアンスが強調されるため、「通い詰める」が許容される。一方で、(45b) の「料理専門学校」に通う場合は、料理の技術向上を目的とした行為が想定されるため、「通い込む」が容認される可能性が高まる。

このように、「通い詰める」は、特定の技能向上という目的を前提とせずに使用されるため、その二格には、「店」、「病院」、「クラブ」、「ライブ」、「風俗」など、技能の上達とは関係のない場所が多く観察される。この柔軟性により、「通い詰める」は広範な文脈で使用可能であり、一般的に自然な表現として受け入れられている。一方、「通い込む」は、技能の上達という明示的な目的が付加される文脈で自然な表現として成立しやすい。この特徴が、「通い込む」の Google 検索における高いヒット数を説明する一因と考えられる。

次に、「煎じる」が[V1-込む] に生起しない理由について検討する。「煎じる」という動詞は、「薬草」、「漢方薬」、「茶」などを目的語にとり、水などで煮詰めて有効成分を抽出する

ことを目的とする。この行為は新しいものを得るためのプロセスであり、「限界に達すること」をプロファイルする [V1-詰める] の拡張義IIに適合するが、「十分に行う」や「状態の深化」をプロファイルする [V1-込む] の意味構造とは不整合を生じる。したがって、「煎じ詰める」は自然な表現となるが、「煎じ込む」は不自然に感じられる。

5.2.3. まとめ

以上、5.2 節では、[V1-込む] および [V1-詰める] の拡張義のうち、[—移動] を表す [V1-込む] の拡張義I、拡張義II、および [V1-詰める] の拡張義IIに焦点を当て、それらの前項に生起する V1 の意味的特徴について検討した。具体的には、⑤ [V1-込む/詰める]、⑥ [V1-込む/#詰める]、⑦ [#V1-込む/詰める] の 3 つの結合パターンを分析した。

[V1-込む] の拡張義I、拡張義II、および [V1-詰める] の拡張義IIはいずれも <特性尺度> のイメージ・スキーマを喚起するため、類似した意味を共有していることが確認された。しかし、それぞれの意味形成には「濃密」と「限界」という異なる性質が関与している。このため、同じ V1 が生起する場合でも、いずれか一方でのみ用いられる文脈が観察される。

さらに、異なる V1 と結合する際には、V1 自体の意味的特徴が結合の偏りをもたらす場合があること、また使用される文脈によって結合の容認度が左右される場合があることも明らかになった。

加えて、[V1-込む] の拡張義 I、拡張義 II、 [V1-詰める] の拡張義IIの使用には、以下のような制約が存在することが示された。

(a) [V1-込む] の拡張義 I : [V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]

[V1-込む] の拡張義IIは V1 が「量的変化」を実現できる動詞であることを前提として活性化される。また、この場合、[E1 を十分に行う] ことによって生じる「質的変化」には、「目的語自身の存在すべき状態の内部での状態変化」や、「動作主の技能や知識の上達」という抽象的な領域への到達」といった条件を満たすことが必要である。

(例: {煮込む/煮詰める}、{#通い込む/通い詰める})

(b) [V1-込む] の拡張義 II : [V1-込む]_{STATE} ↔ [E1 の程度が激しい・深い]

[V1-込む] の拡張義IIを活性化させるには、E1 が表す状態がその領域の内部へと深化しつつも、別の状態へ変化することを前提としないことが求められる。

(例: {話し込む/#話し詰める}、{考え込む/#考え詰める})

(c) [V1-詰める] の拡張義II:[V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする]

[V1-詰める] の拡張義IIを活性化させるためには、[ある状態の限界まで E1 をする] ことで、動作主や目的語が本来の存在すべき状態の限界に達し、結果として異なる状態に変化することが前提となる必要がある。

(例: {走り込む/#走り詰める}、{#煎じ込む/煎じ詰める})

5.3. 第5章のまとめ

本章では、データベースに収録されているか否かを基準に、[V1-入れる/込む/詰める] の前項動詞の生起パターンを [+内部移動] と [-内部移動] の 2 つのグループに分類し、それぞれの多義構造における共通点と相違点を明確にした。また、各複合動詞の意味形成や結合制約を検討した結果、複合動詞の結合の容認度は、動詞自体の意味特徴に加え、使用文脈が大きな影響を与えることが確認された。特に、使用文脈が前項動詞と後項動詞の不整合性を解消できる場合とできない場合により、容認度に搖れが生じることが明らかになり、複合動詞の容認性が二分法ではなく段階性を持つことが示唆された。

次章では、辞書に未収録の用例を分析対象とし、使用文脈がどのように不整合性を解消するのか、また、複合動詞の慣習化プロセスや生産性の違いを明らかにし、意味形成と言語使用における動的な側面を検討する。

第6章 「V1+入れる/込む/詰める」の創造性

第5章では、[V1-入れる/込む/詰める] の類義性に関する諸課題を検討し、[+内部移動] を表す基本義、および、[-内部移動] を表す拡張義において、同じ前項動詞が生起する場合と、いずれか一方にのみ生起する場合があることを確認した。しかしながら、ある動詞が[V1-入れる/込む/詰める] に生起することの容認性は、データベースに収録されているか否かを基準に判断されており、この基準は、言語が使用基盤であり、使用される中で変化し続ける動的なカテゴリーの形成を重視するコンストラクション形態論の立場と矛盾してしまって、日本語話者の実際の言語使用を必ずしも正確に反映しているとは言い切れない。

たとえば、(1) に示すように、データベースに収録されていないものの、google 検索で高頻度にヒットする用例が確認される。

- (1) 送り入れる (1770例)、置き入れる (3090例)、語り込む (997例)、通い込む (6880例)、使い詰める (1610例)、書き詰める (1300例)、など (最終検索日: 2024/11/27)

このように、複合動詞の容認性は、「許容される/許容されない」という二分法で判断できるものではなく、その場のコンテキストにおける事態の展開により、複合動詞が創造的に用いられる場合があることも考慮に入れる必要があると考えられる。

そこで、本章では、データベースに収録されていない [V1-入れる/込む/詰める] の用例に焦点を当て、第2章で提示した創造性に関する課題を検討する。以下にその課題を再掲する。

- (e) 辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている用例に注目し、その使用を可能にする談話上のコンテキストを分析する。そして、前項動詞と後項動詞の間に生じる不整合性はどのように解消されているのかを解明する。「V1+入れる/込む/詰める」の慣習化されるまでの動的な側面、とそれらの生産性の違いを示す。
- (f) 「V1+入れる/込む/詰める」の使用実態に基づき、ヒット数が多い語例からヒット数が比較的に少ない語例、さらに実際の用例が観察されない語例を提示することで、「V+入れる/込む/詰める」の容認性が段階的なものであることを主

張する。複合動詞の意味形成、および、言語使用の創造性を反映するカテゴリ一化の動的な側面を示す。

具体的に、6.1 節では、フレーム・コンストラクション的なアプローチを用いて、複合動詞の適格性を連続的なものとして捉える陳・松本 (2018) の研究を概観する。6.2 節では、日本語母語話者を対象に実施した言語調査の概要を述べる。6.3 節では、言語調査で収集した日本語母語話者による作例に着目し、使用コンテキストがどのように前項動詞と後項動詞の間に生じる不整合性を解消したのかについて検討する。

6.1. フレーム・コンストラクション的なアプローチ: 陳・松本 (2018)

日本語複合動詞の結合制約については、これまでに、「他動性調和の原則」という項構造に基づく制約 (影山 1993)、前項動詞と後項動詞の主語が同一物を指さなければならない「主語一致の原則」(松本 1998; 由本 1996)、前項動詞と後項動詞の語彙概念構造 (LCS) の合成性に基づく制約 (由本 2005)、背景知識を含むクオリア構造の合成性に基づく制約 (由本 2013) など、さまざまな提案がなされてきた。しかし、これらの結合制約は「慣習化 (conventionalization)」された用例のみが考察の対象として扱われ、話者が談話の流れをもとに作り出した例や慣習化にまだ辿り着いていない例は切り捨てられてきたと言える。

慣習化されていない例にも注目した研究として、陳・松本 (2018) が挙げられる。以下では、陳・松本 (2018) における日本語複合動詞の結合制約に関する提案について概観する。

陳・松本 (2018) は、日本語ではどのような複合動詞が存在し、どのような複合動詞が存在しないのかという問題を解決するために、コンストラクション形態論 (Booij 2010) とフレーム意味論 (Fillmore 1976, 1977, 1982; Petrucci 1996) 2つの理論的枠組みを組み合わせ、フレーム・コンストラクション的 (frame-constructional) なアプローチを提案している。

第3章で紹介したように、日本語の複合動詞は、前項動詞と後項動詞の意味から全体の意味を予測できない合成的な側面を持つことが特徴である。このため、複合動詞という形式自体が独自の意味を持ち、語レベルのコンストラクションとして捉えられると考えられる。また、フレーム意味論は、語の意味とフレームという世界の諸側面に関する背景的知識・経験との関連を重視する経験的意味論である。陳・松本 (2018: 3) によれば、フレームという概念を取り入れることで、複合動詞の結合制約や意味形成など、意味におけるさまざまな問題を説明することができるとしている。

陳・松本 (2018) は、このアプローチに基づき、日本語複合動詞の成立には、以下の「コンストラクションの制約」、「語彙的意味フレームの制約」という 2 つの制約が存在すると主張している。

- (2) a. 日本語の複合動詞のスキーマには、特定の複合事象スキーマのテンプレート⁷⁰が存在し、このテンプレートに特定の動詞が合致することで、複合動詞が成立する。

(コンストラクションの制約)

- b. テンプレートに当てはめられた 2 つの動詞は、1 つの整合性を保った「語彙的意味フレーム」を構成する必要がある。 (語彙的意味フレームの制約)

(陳・松本 2018: 4)

また、語彙的意味フレームの制約には、具体的に以下の 2 つの意味的制約が含まれる。

- (3) a. 複合動詞[V1-V2]_v の語彙的意味フレームにおいて、複合動詞の意味関係のコンストラクション (原因型、手段型、様態型など) によって指定される、意味的一致がなければならない。

- b. 複合動詞[V1-V2]_v の語彙的意味フレームにおいて、不整合性が生じてはならない。

(陳・松本 2018: 148)

陳・松本 (2018) によれば、日本語の複合動詞には、コンストラクション的な制約によって完全に成立できないと判断されるもの (例: *壊れ叩く、*読み書く、*飛び溶ける) がある一方で、複合動詞の容認性判断は多くの場合、成立できるか成立できないか、という二分法的なものではなく、フレームという背景的な知識に依存する相対的なものである。

以下に、例 (4) における「読み逃す」という複合動詞を例に、陳・松本 (2018) の語彙的意味フレームの制約を確認する。

⁷⁰ 陳・松本 (2018) は、日本語の複合動詞として結合できる前項動詞と後項動詞は特定の意味関係にあることを主張し、日本語の語彙的複合動詞を V1 と V2 の意味関係に基づき、13 種類の意味関係スキーマに分類している。具体的に、原因型 (溶け落ちる、歩き疲れる)、手段型 (叩き壊す、切り倒す)、前段階型 (割り入れる、狙い撃つ)、背景型 (見落とす、聞き漏らす)、様態型 (舞い落ちる、漂い出る)、付帯事象型 (泣き叫ぶ、探し回る)、同一事象型 (抱き抱える、飛び跳ねる)、事象対象型 (出し惜しむ、降りやむ)、比喩的様態型 (咲き狂う、書き殴る)、派生型 (打ち上げる、舞い上げる)、V1 希薄型 (打ち震える、押し黙る)、V2 補助型 (騒ぎ立てる、困り果てる)、不透明型 (取り締まる、支払う) がある。各意味関係の詳細は、陳・松本 (2018: 76-96) を参照されたい。

- (4) a. 試験で「論文形式で答えるように」という解答形式の部分を {読みおとして／??読みのがして} 箇条書きで答えてしまった。 (陳・松本 2018: 158)
- b. 電光掲示板に流れている文字を読み逃した。 (陳・松本 2018: 162)

例 (4a) の文脈では、「読みおとす」を「読みのがす」に書き換えると文全体の容認度が低くなる。これは、目的語である「解答形式」というものが【逃げようとしている】ものだと考えられないからである。つまり、表 6-1 が示すように、V1「読む」の事象参与者となる【文字列 (試験用紙)】と V2「逃す」【前提的背景】の間に不整合性が生じており、複合動詞として成立できないのである。

V1V2 「??読みのがす」		
	V1 「読む」	V2 「のがす」
中心事象	<p>【認知主体】が【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る</p>	<p>【捕獲者】が【対象】を捉えることに失敗する</p>
事象参与者	<p>【認知主体】:【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る人。 【情報】:【文字列】から【認知主体】が受け取る知識。 【目】:【認知主体】の身体部位の一つで、ものを見るための器官。</p> <p>【文字列】: 文字で構成された【情報】を含む試験用紙。 【視線】:【目】と見る対象を結ぶ線。</p>	<p>【捕獲者】:【対象】を捉えようとする意思的な主体。 【対象】:【捕獲者】が捉えたい逃げるもの。</p>
関連事象	<p>前提的 (【文字列】は通常読み返せるため逃げない) 背景 :</p>	<p>前提的 (【捕獲者】は【対象】を捉えようとしている; 【対象】は逃げようとしている; …) 不整合 結果 (逃げる【対象】が捕獲不可能な状態になる)</p>

表 6-1 :「??(試験の解答方式を) 読み逃す」における不整合性 (陳・松本 2018: 163)

しかし、例 (4b) のように、「読みのがす」の目的語を、一度読む機会を逃してしまうと二度と読めなくなる性質を持つ「電光掲示板に流れている文字」に書き換えると、表 21 のような不整合性が解消され、文全体が容認されるようになる。このことから、文脈要素の変化により、複合動詞の容認度が変化することがわかる。

陳・松本 (2018) は、動詞の意味フレームを中心事象、関連事象、およびそれらの参与者から構成されるものとして捉えている。特に、関連事象には、動詞の性質に応じて前提的背景、結果、原因、手段、理由、感情・感覚、様態、共起事象、付随音など、多様な情報が含まれる場合がある。そのため、動詞の語彙的意味フレームは固定的ではなく、一定の流動性を持つとされ、文脈や使用状況に応じた設定の工夫が求められる。一方で、この流動性ゆえに、意味フレームの設定には恣意的な側面が含まれる点が指摘されている。

本稿が考察対象とする [V1-入れる/込む/詰める] は、いずれも「内部移動」を基盤としており、それらの意味形成の背後には、図 25 に示すような「内部移動」事象に関わるイメージ・スキーマのネットワークが働いていると考えられる。本稿の立場は、陳・松本 (2018) の主張と基本的に一致するが、複合動詞の容認度の揺れに関しては、広範なフレーム要素を設定するのではなく、第 4 章で明らかにした各複合動詞が喚起するイメージ・スキーマとの整合性に基づいて説明可能であると主張する。

次節以降では、慣習化されていない語彙項目に焦点を当て、それらにおいて生じるイメージ・スキーマの不整合性が使用文脈によってどのように解消されるのかについて検討する。

6.2. 言語調査の概要

データベースに収録されていない [V1-入れる/込む/詰める] の用例の容認性、および、それらの使用実態を把握するため、日本語母語話者 10 名を対象に言語調査を実施した。以下に、言語調査の概要を述べる。

本調査は電子版質問紙による方法を取った。調査では、データベースに収録されていない [V1-入れる] (9 例)、[V1-込む] (26 例)、[V1-詰める] (20 例) の語例を提示し、各組み合わせの容認度を以下の 4 段階に基づいて判定してもらった。1 点、2 点、3 点と判定されたご例については、例文を作成してもらった。

0 点：容認不可能（意味が不明で、使用可能な文脈が想定されない）

1 点：強く違和感を感じる。（非常に限られた文脈でなければ容認不可能）

2点: 軽く違和感を感じる。(適切な使用文脈があれば容認可能)

3点: 容認可能(使用される文脈がすぐに想像できる)

言語調査で提示した55例の複合動詞の前項動詞は、大きく以下の4種類に分けられる。

①「外部移動」、「離反」、「拡散」、「上昇」を表す動詞

(例: 離れ込む、溢れ込む、広がり込む、浮かび込む、湧き込む)

②[V1-入れる/込む/詰める]のうち、いずれかに結合する動詞

(例: 迎え込む、移し込む、数え込む、導き込む、通い込む、登り込む、書き詰める、
迎え詰める、運び詰める、注ぎ詰める、吸い詰める、移し詰める、塗り詰める、
やり詰める、走り詰める、揉み詰める、考え詰める、使い詰める、投げ詰める、
潜り詰める、敷き入れる、貼り入れる、塗り入れる、信じ詰める、折り入れる、
送り入れる、拭き入れる、)

③データベースに収録されている慣習化された語例のV1と類義であると考えられる動詞

(例: 疲れ込む、蒸し込む、言い込む、焦げ込む、論じ込む、働き込む、喜び込む、
感じ込む、語り込む、悩み込む、驚き込む、焦り込む、冷め込む、疑い込む、
論じ詰める、働き詰める、蒸し詰める、悩み詰める、)

④ほかの「内部移動」を含意しない動詞

(例: 飾り込む、下り詰める、飾り入れる、掛け入れる、置き入れる)

言語調査の結果、全員が0点と判定した項目は以下の通りである。

(5) 迎え込む、離れ込む、広がり込む、浮かび込む、焦げ込む、驚き込む、喜び込む、
迎え詰める、吸い詰める、揉み詰める、信じ詰める、下り詰める

次節は、言語調査で収集した日本語母語話者による作例の一部を取り上げ、前項動詞と複合動詞の構文スキーマの間に生じる不整合性がどのように解消されたのかについて詳しく検討する。

6.3. 慣習化されていない用例の分析：コンテクストによるイメージ・スキーマの不整合性解消

6.3.1. ランドマーク (LM) の性質の不整合性の解消

(a) <着点>と<容器>のイメージ・スキーマの有無

第5章で確認したように、[V1-入れる] では、<起点-経路-着点>のイメージ・スキーマおよび<容器>のイメージ・スキーマが喚起される。このため、その前項には、通常、内部移動を含意する動詞や内部移動を引き起こす動詞が結合する傾向がある。一方で、「拭く」や「折る」のような内部移動を含意しない動詞は、目的語を取る際にヲ格が義務的であるものの、ニ格場所句を取らない。すなわち、これらの動詞は<着点>のイメージ・スキーマを喚起しないと考えられる。このような性質を持つ動詞は、[V1-入れる] に生起する場合、通常、許容されにくいと推測される。しかしながら、(6)、(7) のような特定の文脈では、「拭き入れる」や「折り入れる」の容認度が上がるることが観察される。

(6) 床を雑巾掛けしたが、ほこりは隅っこに拭き入れてしまった⁷¹。

- (7) a. この箱に紙を折り入れてください。
- b. チラシを新聞に折り入れる。
- c. (折り紙の指示などで) この部分を先程作ったくぼみに折り入れましょう。
- d. 書類を封筒に入る前に、丁寧に三つ折りにして折り入れた。

(6) と (7) の例では、「隅っこ」、「箱」、「新聞」、「くぼみ」、「封筒」といったニ格場所句が明示されており、これらは<容器>として認識され、移動の<着点>として機能していると考えられる。このような<容器>的な<着点>が明示されることで、「拭く」や「折る」といった内部移動を含意しない動詞と [V1-入れる] の間の不整合性が解消され、「拭き入れる」および「折り入れる」の容認度が上がると考えられる。

さらに、第5章で確認したように、[V1-入れる] の「移動物」と「移動先」には、【TR ≠ LM】(TR と LM がそれぞれ独立した存在である場合) という関係性が求められる。しかし、(8) に示される母語話者の作例では、【TR ≠?LM】(LM が V1 の動作によってはじめて動的に形成される場合) という関係性が確認された。

⁷¹ 本節で提示する例文は、特別に明記されていない場合、すべて日本語母語話者が作成したものである。

(8) (折り紙をするときに) ここの端を中に折り入れてください。

(8) における「折り入れる」は、「折り込む」と同様の用法として解釈される。この場合、内部移動の「移動先」は元々存在しておらず、「折る」という動作を行うことで初めて形成されることが特徴的である。このような創造的用法は、認知主体の主観的な把握によって形成された内部領域が、[V1-入れる] の「移動先」として機能し得ることを示している。

<着点>と<容器>のイメージ・スキーマの有無は、[V1-入れる] の容認度を判断する際にも重要な役割を果たしている。姫野 (1999) によれば、[V1-入れる] は通常、「外部移動」、「離反」、「拡散」を表す動詞とは結合しない。しかし、「湧く」のような「外部移動」を表す動詞であっても、(9) に示すように、「支流」という<容器>として認識され得る「移動先」が提示される文脈では、「湧き込む」の容認度が上がるることが確認される。

(9) 小さな支流へと湧き込む清流。

(b) <境界線>の有無

次に、「塗る」、「敷く」、「掛ける」、「置く」といった、<着点>のイメージ・スキーマを喚起する動詞に注目する。これらの動詞は通常、二格の場所句をとり、「移動物」を特定の場所に移動させることを表す。しかし、「移動先」としての領域は<境界線>を持つ<容器>として認識されにくいため、[V1-入れる]との結合は一般的には困難であると考えられる。ただし、(10-13) に示すような特定の文脈においては、「塗り入れる」、「敷き入れる」、「掛け入れる」、「置き入れる」といった表現の容認度が上がるることが確認される。

(10) 私は、白いキャンバスに、まずは鮮やかな赤色を塗り入れる。

(11) 新しいカーペットはもう部屋に敷き入れてあるのですか？

(12) クローゼットへコートを掛け入れる。

(13) 懐中電灯を窓から入れて、棚の上に置き入れる。

(10-13) では、「移動先」を表す領域が二格またはへ格によって提示されている。その中には、「部屋」や「クローゼット」のようにプロトタイプ的な<容器>として認識される領域もあれば、「キャンバス」や「棚の上」のような平面的な領域も含まれる。

一般的に、「キャンバス」は2次元的な平面領域として認識されるが、そのスペースが限られているため、(10) の文脈では＜容器＞的な役割を果たすと解釈される。また、「棚の上」も通常は平面的な領域と見なされるが、(13) の文脈から「棚」は「部屋」という＜容器＞の＜内部＞に位置することがわかる。つまり、この場合、「置き入れる」の「移動先」として機能しているのは「棚の上」ではなく「部屋」であると考えられる。

このように、「塗り入れる」、「敷き入れる」、「掛け入れる」、「置き入れる」の容認度が高まる背景には、＜容器＞の＜内部＞と＜外部＞を分ける＜境界線＞の存在が重要な役割を果たしている点が挙げられる。

＜境界線＞の有無は [V1-込む] の容認度を判断する際にも重要な役割を果たしている。例えば、「飾る」という動詞は、飾る対象の移動を含意するが、その「移動先」に＜境界線＞を持つ＜容器＞の特性が求められるわけではないため、[V1-込む] と結合した際に不整合が生じる。しかし、(14) のように、「ハンカチ」や「部屋」のような＜境界線＞を持つ＜容器＞が「移動先」として明示される場合、「飾り込む」の容認度が高まることが観察される。

- (14) a. 細かい刺繡で飾り込まれた美しいハンカチ。
b. 部屋をいっぱいの電飾で飾りこんだ。

以上、ランドマークの性質における不整合性の解消について、使用文脈における＜着点＞、＜容器＞、＜境界線＞の有無を基軸に検討した。その結果、「内部移動」を表す基本義の構文スキーマを活性化させるためには、「移動先」としてのランドマークが＜境界線＞を持つ＜容器＞的な領域である必要があることが確認された。

次節では、ランドマークとしての＜容器＞の＜内部＞に焦点を当て、その不整合性がいかに解消されるかについて検討する。

6.3.2. ＜容器＞の＜内部＞の有り様の不整合性の解消

(a) ＜容器＞の機能的側面の顕在化の有無

[V1-入れる]とは異なり、[V1-込む/詰める]では、＜容器＞のイメージ・スキーマの空間的側面・機能的側面の両方が喚起される。このため、[V1-込む/詰める] の基本義の構文スキーマを活性化させるためには、＜境界線＞を持つ＜容器＞が「移動先」として設定される文脈に加え、＜容器＞のイメージ・スキーマの機能的側面を顕在化させる文脈も必要となる。

「移す」という動詞は、「移動物」の単純な位置変化を中心に捉え、<着点>領域の性質や位置変化後の状態には焦点を当てないのが特徴である。一方、[V1-込む]MOTIONでは、「移動物」の位置変化だけではなく、「移動物」が「移動先」である<容器>の<内部>に留まるという結果状態もプロファイルされている。この焦点化のズレにより、「移す」と[V1-込む]MOTIONの間に意味的な不整合性が生じると考えられる。しかし、(15)のような特定の使用文脈において、このズレは柔軟に調整され、解消されることが可能である。

(15) a. A の容器にはもう収まりきらないから、もっと大きい B の容器に移し込んだ方がいいと思う。

b. 彼は師匠のやり方を自身に移し込み、完成の域に達している。

(15a) の文脈では、「移動物」の「容器 A」から「容器 B」への位置変化だけではなく、「移動物」の量の多さや、すべての「移動物」が「容器 B」に収まるという結果状態もプロファイルされている。また、(15b)では、単に「やり方」を「師匠」から「彼」へ移動させるだけでなく、「完成の域に達する」という特定の目的もプロファイルされている。

このような文脈は、4.2.2.1.2 節で提示された「固着する」という結果状態に関連する 4 つの文脈要素のうち、(a) 「移動物」の量が多い、またはサイズが大きいこと、(d) 内部移動の行為に何らかの特定の目的が伴うこと、に該当する。これにより、「移す」と[V1-込む]MOTIONの間に意味的な不整合性が解消され、「移し込む」の容認度が上がると判断される。

同様に、(16)における[V1-詰める]の基本義を活性化させる文脈要素を確認する。

(16) 観葉植物が大きくなってきたので、新しく購入した大きな鉢に土を移し詰めて、移動させた。

(16)では、「観葉植物」を「移す」理由として、「観葉植物が大きくなってきた」という文脈が提示されている。この文脈において、「鉢」は単なる「移動先」ではなく、「植物を固定する」という役割を担う<容器>として認識される。このように、「移動物」である「土」が「鉢」に詰められることによって、「観葉植物」がその<容器>の内部で固定され、動けなくなるという<容器>の機能的側面が顕在化している。これにより、「移す」と[V1-詰める]の間で生じる焦点化のズレが解消され、「移し詰める」の容認度が高まると考えられる。

以上の分析から、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面を顕在化させる文脈が、前項動詞と [V1-込む/詰める] の間に見られる焦点化のズレを解消する役割を果たすことが確認された。次に、[V1-詰める] の基本義の構文スキーマを活性化させる条件として、<満/空>のイメージ・スキーマがどのように関与するのかについて検討する。

(b) <満/空>イメージ・スキーマの顕在化の有無

[V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1 をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]という構文スキーマでは、<満/空>のイメージ・スキーマが喚起されているため、この構文スキーマを活性化させるには、<満/空>のイメージ・スキーマを顕在化させる使用文脈の提示が必要である。

以下では、「書き詰める」の容認性について検討する。

「書く」は、[～を～に書く] 構文に生起し、<着点>のイメージ・スキーマを喚起する動詞である。しかし、「書く」の意味構造には、目的語の数の多寡や、二格場所句の広狭、「書く」こうによる結果状態の変化といった情報が含まれていない。一方で、[V1-詰める] の基本義には、目的語の数や量、二格場所句の結果状態が重要な要素として含まれる。このため、「書く」と [V1-詰める] の間には意味的な不整合性が生じる。

しかしながら、(17) のような文脈では、この不整合性が解消され、「書き詰める」が多くの母語話者に容認されることが確認される。

(17) 紙一面に日記を書き詰める。

(17) では、「紙一面」という文脈要素が提示されており、限られた領域が「日記」という内容で隙間なく埋まるという結果状態が強調されている。このような文脈により、[V1-詰める] が要求する<満/空>のイメージ・スキーマが顕在化し、「書く」と [V1-詰める] の間の不整合性が解消されると考えられる。

(17) の文脈における「書き詰める」は、[V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1 をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]という[V1-詰める] の基本義の構文スキーマが活性化される創造的用法である。一方で、[V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする] 構文スキーマが優先的に活性化される場合も確認される。

(18) 論文の提出まであと少し。今日のうちに書き詰めておこう。

(18) の文脈では、<容器>に相当する空間的要素が明示されておらず、<容器>のイメージ・スキーマが背景化されている。代わりに行為自体の徹底性や結果状態の「限界」に焦点が当たり、<特性尺度>のイメージ・スキーマが前景化されている。そのため、[V1-詰める]ACTION ↔ [ある状態の限界まで E1 をする] 構文スキーマが優先的に活性化されることになる。このように、[V1-詰める] は文脈に応じて異なる構文スキーマが活性化され、その柔軟性が容認度に影響を与えていていると考えられる。

このような文脈における意味形成の特徴については、次節で詳細に検討する。

6.3.3. <特性尺度>の不整合性の解消

第5章で確認したように、[V1-込む] と [V1-詰める] の拡張義は、いずれも<特性尺度>を喚起する点で共通している。しかし、動作主の関与によって引き起こされる結果状態には異なる特徴が見られる。本節では、[V1-込む] と [V1-詰める] の拡張義を活性化させる際に必要となる、<特性尺度>の不整合性解消について検討する。

(a) 「量的変化」および「状態変化」の有無

まず、「数える」という前項動詞と [V1-込む] の間に見られる不整合性について確認する。

(19) の例に示されるように、「数える」が [V1-入れる] に生起し、抽象的な「内部移動」を表すことが可能であることが確認される。

(19) 彼は子供を参加人数に数え入れた。(複合動詞レキシコン)

しかし、[V1-込む] の多義構造には、抽象的な「内部移動」を表す基本義があるにもかかわらず、「数え込む」という組み合わせがデータベースに収録されていないことから、「数える」は [V1-込む] に適合しにくい動詞であると考えられる。

一方で、興味深いことに、日本語母語話者による「数え込む」の作例を確認したところ、内部移動を表す基本義ではなく、拡張義Iの構文スキーマ的意味がより優先的に活性化されることが確認される。

- (20) a. 計算が合っているか、何度も数え込んだ。
- b. 彼は、帳簿上の支出と歳入の不一致に頭を悩ませながら、帳簿上の数字を何度も数えこんだ。
- c. そんなに一生懸命小銭を数え込んでどうしたの？(小銭を数えている人物が、小銭を落とした後に数を確認したり、非常に貧乏であるような状態が考えられる)

(20) の文脈では、「何度も」、「一生懸命」といった「量」に関連する文脈要素が提示されることで、「数える」という行為の量的側面が焦点化される。その結果、[V1-込む] が持つ多義的構文スキーマのうち、[V1-込む] ACTION \leftrightarrow [E1 を十分に行う]との間にインタラクションが生じ、不整合性が解消されると考えられる。

次に、同じく＜特性尺度＞のイメージ・スキーマを喚起する [V1-詰める] の拡張義Ⅱを活性化させるには、(21) に示すように、「量的変化」を示す要素に加え、「量的変化」による「状態変化」を明示する文脈の提示も必要であることを確認する。

- (21) a. 体力の限界を迎えるまで走り詰めた。
- b. 彼は毎日走り詰めた結果、マラソン大会で良い順位をとった。

(21) では、「走る」という行為によって達成された「体力の限界」や「マラソン大会で良い順位をとった」といった結果状態が明示されている。これにより、拡張義Ⅱ[V1-詰める]ACTION \leftrightarrow [ある状態の限界まで E1 をする] が適切に活性化されると考えられる。

以上、[V1-込む] の拡張義Ⅰおよび [V1-詰める] の拡張義Ⅱが活性化される場面において、＜特性尺度＞の不整合性がどのように解消されるかを確認した。これらの場合、＜容器＞のイメージ・スキーマは背景化され、代わりに＜特性尺度＞が前景化されている。この＜特性尺度＞は、＜起点-経路-着点＞というイメージ・スキーマが物事の因果関係を示す抽象的な構造へとメタファー的に写像されることで生じていると考えられる。

次に、＜容器＞のイメージ・スキーマが前景化される場合について検討し、抽象的な＜容器＞の＜内部＞における＜特性尺度＞の不整合性がどのように解消されるかを確認する。

(b) <中心/周辺>のイメージ・スキーマの有無

第5章で確認したように、[V1-込む/詰める]の拡張義のうち、[V1-込む]の拡張義IIにおいてのみ、<中心-周辺>のイメージ・スキーマが喚起されている。本節では、「言う」と「語る」という類義する動詞が[V1-込む]に生起する際の意味形成の違いに注目し、不整合性の解消について検討する。

まず、「言い込む」という組み合わせは、データベースに収録されておらず、一般的に許容されにくい組み合わせであると考えられる。しかし、(22)の文脈では、「何度も何度も」という文脈要素の提示されることで、「言う」という動詞の「量」的側面が強調され、[V1-込む]の拡張義Iとの間にインタラクションが生じ、容認度が高まると考えられる。

(22) 無理なことであると分かっていながらも、何度も何度も言い込んで、やってもらった。

一方、(23)のように、「言う」に類義する動詞である「語る」が[V1-込む]に生起する場合、[V1-込む]の拡張義IIである[V1-込む]_{STATE} ↔ [E1の程度が激しい・深い]スキーマが優先的に活性化されることが確認される。

(23) 久しぶりに再開した彼女たちは、幼い頃の思い出を語りこむあまり、店員に話しかけられるまで、閉店時刻を過ぎていることに気づかなかつた。

(23) では、「店員に話しかけられるまで、閉店時刻を過ぎていることに気づかなかつた」という文脈が提示されることで、「語る」という状態が<容器>の深部へと深化していく様子が強調されている。このようなく中心/周辺>のイメージ・スキーマを顕在化させる文脈の影響により、[V1-込む]の拡張義II[E1の程度が激しい・深い]との適合性が高まり、容認度が上がると考えられる。

以上、「語り込む」と「言い込む」が異なる意味を形成していることを確認した。このような意味形成の違いは、それぞれの動詞が持つ意味的特徴に起因すると考えられる。

「語る」は、通常、聞き手を意識した深い交流を伴い、内容の量や深さが重要視される行為であり、この特徴が「話し込む」という既存の複合動詞を参照することで、拡張義IIを活性化させやすいと考えられる。一方、「言う」は、断片的な情報伝達や聞き手を必須としない行為を表すことが多く、状態の深化を表す[V1-込む]_{STATE}スキーマには適合しにくく、[V1-込む]_{ACTION}スキーマには適合しやすいと考えられる。

- (24) a. ?太郎は一言を語った。 (作例)
b. 太郎は一言を言った。 (作例)

このため、「言い込む」は基本的に容認されにくいが、(22) のように「何度も何度も」という量的側面を強調する文脈が提示される場合には拡張義Iが活性化し、一定の容認度が得られる。一方、「語り込む」は (23) のように、深い交流や行為の深化を示す文脈が提示されることで、拡張義IIが優先的に活性化し、容認度が高まると考えられる。

6.4. 第6章のまとめ

第6章では、辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている [V1-入れる/込む/詰める] の用例に注目し、その意味の不整合性が使用文脈によってどのように解消されるのかを分析した。分析の結果、[V1-入れる/込む/詰める] の動的な意味形成が、主に以下の3つの不整合性の解消によって促進されることが明らかになった。

- ① 「ランドマーク (LM) の性質の不整合性の解消」
 - (a) <着点>と<容器>のイメージ・スキーマの有無
 - (b) <境界線>の有無
- ② 「<容器>の<内部>の有り様の不整合性の解消」
 - (a) <容器>の機能的側面の顕在化の有無
 - (b) <満/空>イメージ・スキーマの顕在化の有無
- ③ 「<特性尺度>の不整合性の解消」
 - (a) 「量的変化」および「状態変化」の有無
 - (b) <中心/周辺>のイメージ・スキーマの有無

以上の分析から、具体的な使用文脈を適切に設定すれば、元々容認されない語例は日本語母語話者の多くにとって容認されやすくなることが確認された。これにより、[V1-入れる/込む/詰める] の容認性が段階的なものであることや、複合動詞の意味形成と言語使用の創

造性を反映したカテゴリー化の動的な側面が示された。

第7章 総括

本論文では、日本語の語彙的複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」を考察対象とし、「内部移動」を基盤とするこれらの複合動詞の多義性形成プロセスおよび意味形成の認知的メカニズムを「内部移動事象」に関するイメージ・スキーマのネットワークという体系的な枠組みで統一的に説明した。本章では、各章の内容の要点をまとめながら、本論文の総括を行い、今後の研究課題を提示する。

第1章では、本研究の導入として、研究対象の特徴、目的、考察に使用したデータベースについて述べた。

第2章では、本論文の考察対象に関する先行研究を概観した。「V1+入れる/込む」に関する研究としては、意味の詳細な分類を行う記述的研究や、語彙概念構造、コア図式、主体化、イメージ・スキーマといった多様なアプローチによる多義構造のメカニズム解明を試みた研究を取り上げた。また、「詰める」および「V1+詰める」に関しては、壁塗り交替の視点を用いた意味分析に焦点を当てた研究を紹介した。

しかしながら、「V1+入れる/込む/詰める」に共通する多義構造の特徴や相違点に注目し、統一的な認知原理に基づいて包括的に考察する研究は見当たらない。また、先行研究の多くが慣習化された表現に限って議論を進めている点も課題として指摘される。

本研究は、慣習化されていない複合動詞にも着目し、複合動詞の結合が容認されるか否かの判断が、使用基盤的な要素に依存していることを強調し、「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity) の3つの視点から、以下の6つの問い合わせを立てた。

- (a) 「V1+入れる/込む/詰める」に対応する本動詞の意味的特徴を確認する。
- (b) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義を認定し、各意味におけるV1とV2の意味関係、および前項動詞の意味特徴を明らかにする。
- (c) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義の間の水平的な意味の関連性、および意味拡張の認知的メカニズムを明らかにする。また、各意味が共通するスーパースキーマスキーマ的な意味を認定し、垂直的な意味の関連性を解明する。最後に、「V1+入れる/込む/詰める」それぞれの意味カテゴリーを、「横の関係」および「縦の関係」を含む構文的多義ネットワークとして図示する。
- (d) 「V1+入れる/込む/詰める」の基本義と拡張義に着目し、共通して結合するV1

と、いずれか一方にしか結合しないV1の意味的特徴を分析することで、「V1+入れる/込む/詰める」の多義形成における共通点と相違点を明確にし、それぞれ結合制約を検討する。

- (e) 辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている用例に注目し、その使用を可能にする談話上のコンテクストを分析する。そして、前項動詞と後項動詞の間に生じる不整合性はどのように解消されているのかを解明する。「V1+入れる/込む/詰める」の慣習化されるまでの動的な側面、とそれらの生産性の違いを示す。
- (f) 「V1+入れる/込む/詰める」の使用実態に基づき、ヒット数が多い語例からヒット数が比較的に少ない語例、さらに実際の用例が観察されない語例を提示することで、「V1+入れる/込む/詰める」の容認性が段階的なものであることを主張する。複合動詞の意味形成、および、言語使用の創造性を反映するカテゴリー化の動的な側面を示す。

第3章では、課題解決する際に援用する理論的枠組みとして、本論文で最も重要な概念である「イメージ・スキーマ」、および、「コンストラクション形態論」を導入した。まず、「V1+入れる/込む/詰める」の多義性や意味形成の認知的メカニズムを体系的に説明するために、それらに共通する身体的・経験的基盤として、<容器>や<起点-経路-着点>をはじめとする「内部移動」事象に関連するイメージ・スキーマのネットワークを提示した。また、これら複合動詞の多義構造や生産性の動的側面を捉るために、意味カテゴリーを階層的な構文ネットワークとして扱う利点を示した。さらに、コンストラクション形態論に基づく使用基盤的な言語観を採用し、頻度や構文スキーマの定着度が「V1+入れる/込む/詰める」の意味形成や言語使用における創造性へ与える影響を論じた。

第4章～第6章は、本論文の考察部分に当たり、「V1+入れる/込む/詰める」の「多義性」(polysemy)、「類義性」(synonymy)、そして「創造性」(creativity)をめぐる課題を順に取り上げて考察した。

第4章では、これら複合動詞の多義性について、個別に詳細な分析を行った。

まず、[V1-入れる]のコンストラクション的イディオムとして、以下の2つを提示した。

①基本義: [V1-入れる]_{MOTION-P} ↔ [あるものを何らかの形である物理的空間の内部に移動さ

せる]

②拡張義: [V1-入れる]_{MOTION-A} ↔ [あるものを何らかの形である抽象的空間の内部に移動させる]

[V1-入れる] の多義性は、<容器>のイメージ・スキーマの空間的側面、および、<起点-経路-着点>、<経路尺度>のイメージ・スキーマを基盤とし、物理的空間から抽象的空間へのメタファー的写像によって動機づけられている。

また、[V1-込む]のコンストラクション的イディオムとして、以下の 3 つを提示した。

①基本義 [V1-込む]_{MOTION} ↔ [E1 の結果、ある領域の内部へ移動し、固着する]

②拡張義 I [V1-込む]_{ACTION} ↔ [E1 を十分に行う]

③拡張義 II [V1-込む]_{STATE} ↔ [E1 の程度が激しい・深い]の 3 つを提示した。

この 3 つは、それぞれ異なる形の<満/空>のイメージ・スキーマを喚起しており、「濃密状態」の 3 つの実現形式として捉えられることを示した。また、[V1-込む]の基本義における「内部移動」は、[V1-入れる]とは異なり、物理的移動に限らず、概念話者の主観的把握に基づく複雑かつ多様な形態を持つことを確認した。さらに、基本義に含まれる「固着する」という結果状態が、<容器>のイメージ・スキーマの機能的側面の顕在化に由来するものであることを示した。

最後に、[V1-詰める]のコンストラクション的イディオムとして、以下の 3 つを提示した。

①基本義 [V1-詰める]_{MOTION1} ↔ [E1 をすることで、モノがある空間の限界まで隙間なく入る]

②拡張義 I [V1-詰める]_{MOTION2} ↔ [ある場所の限界まで E1 をする]

③拡張義 II [V1-詰める]_{ACTION} ↔ [ある状態の限界まで E1 をする]

この 3 つに意味には、それぞれ<容器>の容量(基本義)、<経路>の終端(拡張義 I)、<状態変化>の臨界点(拡張義 II)といった多様な「限界」が描き出されている。

このように、「V1+入れる/込む/詰める」は、いずれも内部移動事象を基盤とし、<容器>のイメージ・スキーマを共有しつつも、動詞ごとに独自の意味特徴や拡張のパターンを持

つことが明らかとなった。また、これらの複合動詞の多義性形成には、<容器>、<満/空>、<中心-周辺>など、多様なイメージ・スキーマが複雑に関与していることが示唆された。

第5章では、「V1+入れる/込む/詰める」を [**+内部移動**] 、 [**-内部移動**] の2つのグループに分けて、結合する V1 の異同に着目し、類義性をめぐる課題を取り上げた。具体的には、同じ V1 と結合する場合の意味上の差異、および、片方にのみ結合する場合の理由については、各複合動詞に喚起されるイメージ・スキーマの違いを基に解明した。

まず、[V1-入れる/込む/詰める] が「内部移動」を表す際の共通点と相違点を、(ア) 物理的・抽象的領域間のメタファー写像の有無、(イ) 「移動物」(TR) と「移動先」(LM) との関係性の差異、(ウ)[**+内部移動**] に伴う結果状態の差異、の3点から確認した。また、5つの結合パターンにおける V1 の意味的特性を分析することで、各複合動詞の結合制約を以下のように明らかにした。

[V1-入れる] :

- (a) 「移動物」と「移動先」は、【 $TR \neq LM$ 】という関係性を持ち、それぞれ独立した存在であることが求められる。
- (b) [V1-入れる] と同一のイメージ・スキーマを喚起する動詞は [V1-入れる] の V1 として許容されにくい。

[V1-込む] :

- (a) <容器>のイメージ・スキーマの空間的・機能的側面が伴う性質に矛盾する動詞は、[V1-込む] の V1 として許容されにくい。

[V1-詰める] :

- (a) 「移動物」と「移動先」は、【 $TR \neq LM$ 】という関係性を持ち、それぞれ独立した存在であることが求められる。
- (b) 「移動物」と「移動先」は物理的な概念領域に属する必要がある。
- (c) プラスの価値付与が伴う動詞は、[V1-詰める] の V1 として許容されにくい。
- (d) <着点>、<容器>のイメージ・スキーマを喚起する V1 が求められる。
- (e) <満/空>のイメージ・スキーマが喚起される文脈に矛盾する動詞が [V1-込む] の V1

として許容されにくい。

また、[V1-込む] および [V1-詰める] の拡張義はいずれも <特性尺度> のイメージ・スキーマを喚起するため、類似した意味を共有していることが確認された。しかし、それぞれの意味形成には「濃密」と「限界」という異なる性質が関与している。このため、同じ V1 が生起する場合でも、いずれか一方でのみ用いられる文脈が観察される。さらに、異なる V1 と結合する際には、V1 自体の意味的特徴が結合の偏りをもたらす場合があること、また使用される文脈によって結合の容認度が左右される場合があることも明らかになった。[V1-込む/詰める] の拡張義の使用には、以下のような制約が存在することが示された。

- ・[V1-込む] の拡張義 I は V1 が「量的変化」を実現できる動詞であることを前提として活性化される。また、この場合、[E1 を十分に行う] ことによって生じる「質的変化」には、「目的語自身の存在すべき状態の内部での状態変化」や、「動作主の技能や知識の上達という抽象的な領域への到達」といった条件を満たすことが必要である。
- ・[V1-込む] の拡張義 II を活性化させるには、E1 が表す状態がその領域の内部へと深化しつつも、別の状態へ変化することを前提としないことが求められる。
- ・[V1-詰める] の拡張義 II を活性化させるためには、[ある状態の限界まで E1 をする] ことで、動作主や目的語が本来の存在すべき状態の限界に達し、結果として異なる状態に変化することが前提となる必要がある。

第 6 章では、「V1+入れる/込む/詰める」の「創造性」について論じた。辞書やデータベースには掲載されていないものの、実際の日本語話者の談話場面で使用されている [V1-入れる/込む/詰める] の用例に注目し、その意味の不整合性が使用文脈によってどのように解消されるのかを分析した。分析の結果、[V1-入れる/込む/詰める] の動的な意味形成が、主に以下の 3 つの不整合性の解消によって促進されることが明らかになった。

① 「ランドマーク (LM) の性質の不整合性の解消」

- (a) <着点> と <容器> のイメージ・スキーマの有無
- (b) <境界線> の有無

② 「<容器> の <内部> の有り様の不整合性の解消」

- (a) <容器>の機能的側面の顕在化の有無
 - (b) <満/空>イメージ・スキーマの顕在化の有無
- ③「<特性尺度>の不整合性の解消」
- (a) 「量的変化」および「状態変化」の有無
 - (b) <中心/周辺>のイメージ・スキーマの有無

以上の分析から、具体的な使用文脈を適切に設定すれば、従来は容認されない語例は容認されやすくなることが確認された。これにより、[V1-入れる/込む/詰める] の容認性が段階的なものであることや、複合動詞の意味形成と言語使用の創造性を反映したカテゴリー化的動的な側面が示された。

以上、本論文は、「内部移動事象」に関わるイメージ・スキーマのネットワークを共通基盤とし、日本語の語彙的複合動詞「V1+入れる/込む/詰める」の多義性、類義性、創造性に関する諸課題を包括的に考察した。

最後に、今後の課題として、以下の2点を挙げたい。

①調査人数の拡大による客観性の向上

本研究における言語調査は、参加した日本語母語話者の人数が限られていたため、調査結果の普遍性についてはさらなる検証が必要である。今後は、より多くの母語話者を対象にした調査を実施し、容認性判断のデータを精緻化することで、研究結果の客観性を高める必要がある。

②日本語複合動詞と中国語複合動詞の対照研究

内部移動を表す日本語複合動詞に対応する中国語複合動詞を考察対象とし、中国語話者における内部移動事象の認知の特性を明らかにすることも重要な課題である。日本語と中国語における内部移動事象の言語的表現と認知的差異を探ることで、より普遍的な認知メカニズムの解明につながると考えられる。

参考文献

- 石井正彦 (1983)「現代語複合動詞の語構造分析--<動作>・<変化>の観点から」『国語学研究』23.
- 伊藤健人 (2013)「第5章 イメージ・スキーマ」森雄一・高橋英光 (編) 『認知言語学 基礎から最前線へ』 103-128、くろしお出版。
- 大堀壽夫 (2001)「構文理論: その背景と広がり」『英語青年』147-9、526-530、研究社。
- 小熊猛 (2019)「捉え方/解釈・視点」辻幸夫 (編)(2019)『認知言語学大辞典』281-291、研究社。
- 小野尚之 (2005)『生成語彙意味論』くろしお出版。
- 甲斐朋子 (1998)「複合動詞『～こむ』の分類とその用法」『国文研究』43、98-112. 熊本女子大学国文談話会。
- 甲斐朋子 (2000)「複合動詞『～こむ』の程度深化の用法をめぐって一方向性添加の用法と一箇所集中の用法からの派生ー」『国文研究』45、52-68、熊本県立大学日本語日本文学会。
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房。
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版。
- 影山太郎・由本陽子 (1997)『語形成と概念構造』研究社。
- 影山太郎 (1999)『形態論と意味』くろしお出版。
- 影山太郎 (編)(2001)『日英対照—動詞の意味と構文』大修館書店。
- 影山太郎 (2013)『複合動詞研究の最先端: 謎の解明に向けて』ひつじ書房。
- 影山太郎 (2021)『点と線の言語学: 言語類型から見えた日本語の本質』くろしお出版。
- 河上誓作 (編)(1996)『認知言語学の基礎』研究社。
- 川野靖子 (2009) 「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否 を決定する意味階層の存在ー」『日本語の研究』5-4、47-62.
- 川野靖子 (2012)「現代日本語の動詞「詰める」、「覆う」の分析—格体制の交替の観点からー」『埼玉大学紀要(教養学部)』48-2、33-43.
- 岸本秀樹 (2001)「壁塗り構文」影山太郎 (編)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。
- 岸本秀樹 (2011)「壁塗り構文と視点の転換」影山太郎・沈力 (編)『日中理論言語学の進展 望1 統語構造』くろしお出版。
- 金光成 (2010)「複合動詞の意味拡張とその認知的動機づけ: 「V+こむ」を事例に」『言語科

- 学論集』16、25-42.
- 栗田奈美 (2018)『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析』春風社.
- 国広哲弥 (1982)『意味論の方法』大修館書店.
- 国広哲弥 (1994)「認知的多義—現象素の提唱」『言語研究』106、23-43.
- 史春花 (2014)「日本語における促音形/撥音形複合動詞の諸相—コンストラクション形態論からのアプローチー」神戸大学人文学研究科博士学位論文.
- 瀬戸賢一 (1995)『空間のレトリック』海鳴社.
- 瀬戸賢一 (2001)「語彙的メトニミーのパターン」『大阪市立大学大学院文学研究科紀要 人文研究』53-5、105-116.
- 瀬戸賢一 (編) (2007)『英語多義ネットワーク辞典』小学館.
- 田中茂範 (1990)『認知意味論—英語動詞の多義の構造』三友社.
- 田中茂範・松本曜 (1997)『空間と移動の表現』研究社.
- 陳奕廷 (2015)「日本語の語彙的複合動詞の形成メカニズムについて—中国語との比較対照と合わせて—」神戸大学博士学位論文.
- 陳奕廷 (2016)「コンストラクションとしての日本語の語彙的複合動詞」影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム』7、125-156.
- 陳奕廷・松本曜 (2018)『日本語語彙的複合動詞の意味と体型—コンストラクション形態論とフレーム意味論』ひつじ書房.
- 辻幸夫 (編) (2002)『認知言語学キーワード辞典』朝倉書店.
- 坪井栄治郎・早瀬尚子 (2020)『認知文法と構文文法 (最新英語学・言語学シリーズ 13 認知言語学(1))』東京: 開拓社.
- 篠原俊吾 (2019)「イメージ・スキーマ」辻幸夫 (編) (2019)『認知言語学大辞典』292-301、研究社.
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味II』東京: くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1978)「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』7、1-24.
- 出水孝典 (2018)『動詞の意味を分解する—様態・結果・状態の語彙意味論』開拓社.
- 鍋島弘治朗 (2002)「メタファーと意味の構造性: プライマリー・メタファーおよびイメージ・スキーマとの関連から」『認知言語学論考』2、25-109.
- 鍋島弘治朗 (2003)「認知言語学におけるイメージスキーマの先行研究」『認知言語学会論文

集』3、334-338.

野田大志 (2011)『現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチー』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.

野村雅昭・石井正彦 (1987) 複合動詞資料集、科研費特定研究 (1) 言語データの収集と処理の研究.

早瀬尚子・堀田優子 (2005)『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社.

姫野昌子 (1978)「複合動詞「～こむ」および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5、47-70.

姫野昌子 (1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

姫野昌子 (2023)『日本語複合動詞活用辞典』研究社.

深田智 (2003)「イメージ・スキーマを介した言語意味論へのアプローチ」『認知言語学会論文集』3、343-346.

深田智 (2008)「遂行の Here と There--その発展と認知的基盤」『サピエンチア』聖トマス大学論叢/聖トマス大学論叢編集委員会 (42)、197-213.

深田智 (2020)「第7章 イメージ・スキーマ」池上嘉彦・山梨正明 (編)『認知言語学』139-167、ひつじ書房.

松田文子 (2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』ひつじ書房.

松本曜 (1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114、37-83.

松本曜 (編) (2003)『認知意味論』大修館書店.

松本曜 (2009a)「複合動詞『～込む』『～去る』『～出す』と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹 (編)『語彙の意味と文法』、175-194. くろしお出版.

松本曜 (2009b)「多義語における中心的意味とその典型性：概念的中心性と機能的中心性」『*Sophia linguistica*』57、89-99. 上智大学国際言語情報研究所.

松本曜 (2011)「主語一致の原則と主体的移動を伴う事象を表す複合動詞」『国立国語研究所 (NINJAL) 共同研究発表会：日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』、大阪.

松本曜 (2017)『移動表現の類型論』くろしお出版.

糸山洋介 (2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明・辻幸夫・西村義

- 樹・坪井栄治郎 (編)『認知言語学論考』1、29-58、ひつじ書房.
- 枡山洋介 (2010)『認知言語学入門』研究社.
- 枡山洋介 (2019)「多義語分析の課題と方法」プラシャンと・パルデシ・枡山洋介・砂川有里子・今井真悟・今村泰也 (編)『多義語分析の新展開と日本語教育への応用』32-50、開拓社.
- 枡山洋介 (2020)『実例で学ぶ認知意味論』研究社.
- 枡山洋介 (2021)『[例解] 日本語の多義語研究: 認知言語学の視点から』大修館書店.
- 枡山洋介・深田智 (2003)「意味の拡張」松本曜 (編)『シリーズ認知言語学入門 3 認知意味論』73-134、大修館書店.
- 森田良行 (1979)『基礎日本語—意味と使い方』(角川小事典 7)、角川書店.
- 森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店.
- 森田良行 (2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版.
- 山口昌也 (2013)「複合動詞『～込む』と前項動詞の格関係—「複合動詞用例データベース」を用いた分析—」影山太郎 (編)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』185-212、ひつじ書房.
- 山梨正明 (1995)『認知文法論』東京:ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000)『認知言語学原理』くろしお出版.
- 山梨正明 (2001)「認知能力の反映としての言語—ユニフィケーションの視点」『日本認知言語学会論文集』1、186-200.
- 山梨正明 (2012)『認知意味論研究』研究社.
- 由本陽子 (1996)「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編)『言語と文化の諸相』105-118、英宝社.
- 由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統合—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』ひつじ書房.
- 由本陽子 (2008)「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」『レキシコンフォーラム』4、1-30、ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013)「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」影山太郎 (編)『複合動詞研究の最前線—謎の解明に向けて—』109-142、ひつじ書房.
- Barlow, Michael & Suzanne Kemmer (2000) *Usage-Based Models of Language*. CSLI Publication.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.

- Booij, Geert (2013) "Morphology in Construction Grammar" In Thomas Hoffmann & Graeme Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 255-273. Oxford: Oxford University Press.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Bybee, Joan L. (1995) "Regular morphology and the lexicon". *Language and cognitive processes*. 10(5), 425-455.
- Bybee, Joan L. (2006a) "From usage to grammar: The mind's response to repetition". *Language*. 82(4), 711-733.
- Bybee, Joan L. (2006b) *Frequency of use and the organization of language*. Oxford University Press.
- Bybee, Joan L. (2008) "Usage-based grammar and second language acquisition". Peter Robinson & Nick C. Ellis (eds.) *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. 216-236. NY and London: Routledge.
- Bybee, Joan L. (2010) *Language, Usage and Cognition*. Cambridge University Press.
- Clausner, Timothy, C. & William Croft (1999) "Domains and Image Schemas". *Cognitive Linguistics* 10 (1), 1-31.
- Dewell, Robert B. (2005) "Dynamic patterns of CONTAINMENT" In Beate Hampe & Joseph E. Grady (eds.). *From perception to meaning: Image schemas in cognitive linguistics*. 369-394. Berlin: Mouton de Gruter.
- Evans, Vyvyan & Melanie Green (2006) *Cognitive Linguistics. An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fillmore, Charles J. (1982) "Frame semantics". In *Linguistics in the Morning Calm*. 111-37. Seoul, South Korea: Han-shin Publishing Co.
- Gibbs, Raymond. (2005) "The psychological status of image schema." In Beate Hampe and Joseph E. Grady (eds.), *From Perception to Meaning*. 113-136. Berlin: Mouton de Gruter.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Iwata, Seiji (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam /Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press (池上嘉彦、河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論—言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店).
- Lakoff, George (1993) "The contemporary theory of metaphor". In Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and thought*. 2nd Edition, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George (1990) "The Invariance hypothesis: Is abstract reason based on image schemas?" *Cognitive Linguistics* 1, 39-74. (杉本孝司 (訳) (2000) 「不变性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか?」 坂原茂編『認知言語学の発展』 1-59、ひつじ書房.
- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By* (渡辺昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店).
- Lakoff, George & Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Vol I: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1988) "A usage-based model", In: Brygida Rudzka-Ostyned. (ed.) *Topics in cognitive linguistics*. 127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter. Berlin and New York.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. vol. II : *Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) "A dynamic usage-based model." In: Michael Barlow et al. (eds.) *Usage-based models of language*. 1-65. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) (2011) 『認知文法論序説』 研究社).
- Langacker, Ronald W. (2006) "Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Arche-types." In Canakis, Costas and Bert Cornillie (eds.). *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. 17-40. Berlin: Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. (2012) "Interactive Cognition: Toward a Unified Account of Structure, Processing, and Discourse," *International Journal of Cognitive Linguistics*. 3 (2), 95-125.
- Langacker, Ronald W. (2016) "Toward an Integrated View of Structure, Processing, and Discourse". *Studies in Lexicogrammar: Theory and Applications*. ed. by Grzegorz Drozd. 23-53. John Benjamins. Amsterdam/ Philadelphia.
- Mandler, Jean M. (1992) "How to build a baby: II. Conceptual primitives". *Psychological Review*. 99, 587-604.
- Matsumoto, Yo. (1996) "Subjective motion and English and Japanese verbs". *Cognitive Linguistics* 7, 183-226.
- Matsumoto, Yo (2011) "Compound verbs in Japanese: Types and constraints". Presentation given on November 2nd. 2011. at the Faculty of Oriental Studies, University of Oxford.
- Matsumoto, Yo (2012) "A constructional account of Verb-Verb compound verbs in Japanese". Book of Abstract of *7th International Conference on Construction Grammar (ICCG7)*: 117-118.
- Petruck, Miriam (1996) "Frame Semantics". In Lef Verschueren, Jan-Ola Östman, Jan Blommaer, and Chris Bulcaen (eds.) *Handbook of Pragmatics*. Philadelphia: John Benjamins.
- Pinker, Steven. (1989). *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge. MIT Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka (2008) "Lexicalized Meaning and the Internal Temporal Structure of Events", Susan Rothstein (ed.) *In Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*, 13-42. Amsterdam: John Benjamins.
- Rosch, Eleanor (1973) "On the internal structure of perceptual and semantic categories". In Timothy E. Moore (Ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*. New York: Academic Press. 111-144.
- Rosch, Eleanor (1975) "Cognitive representations of semantic categories". *Journal of Experimental Psychology: General*. 104, 192-233.
- Talmy, Leonard. (2000). *Towards a cognitive semantics, vol. 2. Typology and process in concept structuring*. Cambridge. MA: MIT Press.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus: How Language Is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press. (西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳)(2017) 『メ

ンタル・コーパスー母語話者の頭には何があるのかー』 くろしお出版.)

Tomasello, Michael (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition.* Harvard University Press.

Traugott, Elizabeth Closs (1988) "Pragmatic strengthening and grammaticalization." *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 14, 406-416 .

Tyler, Andrea (2012) *Cognitive linguistics and second language learning: Theoretical basics and experimental evidence.* (中村芳久 (監訳) (2023) 『認知言語学を英語教育に応用する: 応用認知言語学の方法』 開拓社.)

Tyler, Andrea & Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition.* Cambridge: Cambridge University Press. (国広哲弥 (監訳)・木村哲也 (訳) (2005) 『英語前置詞の意味論』 東京: 研究社.)

Vandeloise, Claude (1991) *Spatial prepositions: A case study from French.* University of Chicago Press.

Vandeloise, Claude (1994) "Methodology and analyses of the preposition in". *Cognitive Linguistics*, 5(2), 157-184.

辞典:

大島正健 (1934) 『国語の語根とその分類』

『角川古語大辞典 (ジャパンナレッジ版)』

北原保雄 (編) (2004) 『小学館 全文全訳古語辞典 (ジャパンナレッジ版)』

姫野昌子 (2023) 『日本語複合動詞活用辞典』 研究社.

用例出典:

国立国語研究所 『複合動詞レキシコン』 (<https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>)

Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)

(<https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php>)

国立国語研究所 『基本動詞ハンドブック』 (<https://verbhandbook.ninjal.ac.jp>)

NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) (<https://nlb.ninjal.ac.jp/>)

付録資料

付録資料 1

複合動詞の結合制約と使用実態に関する言語調査

「落ちる」、「流す」、「追う」といった動詞は「単純動詞」と呼ばれるのに対し、「落ち込む」、「流し入れる」、「追い詰める」のように、2つの動詞が結びついたものは「複合動詞」と呼ばれます。また、このうち、前に位置する動詞（落ちる、流す、追う）は「前項動詞」、後ろに位置する動詞（～込む、～入れる、～詰める、）は「後項動詞」と呼ばれます。

「～込む」、「～入れる」、「～詰める」、が後項動詞として用いられる場合、さまざまな前項動詞と結合して複合動詞が形成されます。しかし、これらの動詞の前項にどのような動詞が許容され、どのような動詞が許容されないのかについては、日本語母語話者の判断にばらつきが見られます。そこで、こうした複合動詞の結合制約と使用実態をより明確に把握するために、本調査を実施いたします。

本調査で記入いただいた内容は、博士論文執筆のみに使用し、その他の目的には一切使用いたしません。また、調査結果の公表に際して、個人情報は匿名化し、個人が特定されないよう適切に処理いたします。

ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

なお、調査内容に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程3年

氏名：蘇曉笛

メール：u701617e@ecs.osaka-u.ac.jp

氏名 :

メールアドレス :

以下の複合動詞について、後項動詞「～込む」、「～入れる」、「～詰める」と前項動詞との組み合わせが容認されるか否かを、あなたの語感に基づいて判断してください。

容認度は以下の4段階で評定してください。

0点: 容認不可能 (意味が不明で、使用可能な文脈が想定されない)

1点: 強く違和感を感じる。(非常に限られた文脈でなければ容認不可能)

2点: 軽く違和感を感じる。(適切な使用文脈があれば容認可能)

3点: 容認可能 (使用される文脈がすぐに想像できる)

まず、判断された容認度の点数を記入してください。

1点、2点、3点と判断された場合は、提示された複合動詞を使用した例文を最低1例作成してください。

(※使用される文脈が多く想定される場合は、例文を複数ご提示いただけます。)

なお、0点と判断された場合、例文の作成は不要です。

(※複合動詞の表す意味とニュアンスが十分に伝わるように、例文をできる限り詳しく記述してください。)

「V1+込む」:

1. 迎え込む (むかえこむ)

容認度点数 :

例文 :

2. 飾り込む (かざりこむ)

容認度点数 :

例文：

3. 離れ込む（はなれこむ）

容認度点数：

例文：

4. 溢れ込む（こぼれこむ）

容認度点数：

例文：

5. 数え込む（かぞえこむ）

容認度点数：

例文：

6. 移し込む（うつしこむ）

容認度点数：

例文：

7. 導き込む（みちびきこむ）

容認度点数：

例文：

8. 広がり込む（ひろがりこむ）

容認度点数：

例文：

9. 通い込む（かよいこむ）

容認度点数：

例文：

10. 登り込む（のぼりこむ）

容認度点数：

例文：

11. 疲れ込む（つかれこむ）

容認度点数：

例文：

12. 蒸し込む (むしこむ)

容認度点数：

例文：

13. 言い込む (いいこむ)

容認度点数：

例文：

14. 浮かび込む (うかびこむ)

容認度点数：

例文：

15. 焦げ込む (こげこむ)

容認度点数：

例文：

16. 語り込む (かたりこむ)

容認度点数：

例文：

17. 論じ込む (ろんじこむ)

容認度点数：

例文：

18. 悩み込む (なやみこむ)

容認度点数：

例文：

19. 働き込む (はたらきこむ)

容認度点数：

例文：

20. 驚き込む (おどろきこむ)

容認度点数 :

例文 :

21. 湧き込む (わきこむ)

容認度点数 :

例文 :

22. 喜び込む (よろこびこむ)

容認度点数 :

例文 :

23. 焦り込む (あせりこむ)

容認度点数 :

例文 :

24. 感じ込む (かんじこむ)

容認度点数 :

例文 :

25. 冷め込む (さめこむ)

容認度点数 :

例文 :

26. 疑い込む (うたがいこむ)

容認度点数 :

例文 :

「V1+詰める」:

1. 書き詰める (かきつめる)

容認度点数 :

例文 :

2. 迎え詰める (むかえつめる)

容認度点数 :

例文 :

3. 運び詰める (はこびつめる)

容認度点数 :

例文 :

4. 注ぎ詰める (そそぎつめる)

容認度点数 :

例文 :

5. 吸い詰める (すいつけめる)

容認度点数 :

例文 :

6. 移し詰める (うつしつめる)

容認度点数 :

例文 :

7. 塗り詰める(ぬりつめる)

容認度点数 :

例文 :

8. やり詰める (やりつけめる)

容認度点数 :

例文 :

9. 走り詰める (はしりつけめる)

容認度点数 :

例文 :

10. 論じ詰める (ろんじつけめる)

容認度点数 :

例文：

11. 働き詰める（はたらきつめる）

容認度点数：

例文：

12. 蒸し詰める（むしつめる）

容認度点数：

例文：

13. 悩み詰める（なやみつめる）

容認度点数：

例文：

14. 揉み詰める（もみつめる）

容認度点数：

例文：

15. 考え詰める（かんがえつめる）

容認度点数：

例文：

16. 使い詰める（つかいつめる）

容認度点数：

例文：

17. 投げ詰める（なげつめる）

容認度点数：

例文：

18. 信じ詰める（しんじつめる）

容認度点数：

例文：

19. 下り詰める（くだりつめる）

容認度点数 :

例文 :

20. 潜り詰める (もぐりつめる)

容認度点数 :

例文 :

「V1+入れる」:

1. 飾り入れる (かざりいれる)

容認度点数 :

例文 :

2. 敷き入れる (しきいれる)

容認度点数 :

例文 :

3. 貼り入れる (はりいれる)

容認度点数 :

例文 :

4. 塗り入れる (ぬりいれる)

容認度点数 :

例文 :

5. 折り入れる (おりいれる)

容認度点数 :

例文 :

6. 送り入れる (おくりいれる)

容認度点数 :

例文 :

7. 拭き入れる (ふきいれる)

容認度点数：

例文：

8. 掛け入れる（かけいれる）

容認度点数：

例文：

9. 置き入れる（おきいれる）

容認度点数：

例文：

ご協力いただき、誠にありがとうございました！

付録資料 2

言語調査結果一覧

容認度の 4 段階:

0 点: 容認不可能 (意味が不明で、使用可能な文脈が想定されない)

1 点: 強く違和感を感じる。(非常に限られた文脈でなければ容認不可能)

2 点: 軽く違和感を感じる。(適切な使用文脈があれば容認可能)

3 点: 容認可能 (使用される文脈がすぐに想像できる)

※この表では、「1 点」、「2 点」、「3 点」と判定された項目のみを表示している。
「0 点」と判定された項目は非表示となっている。

1. 迎え込む (むかえこむ) (全員 0 点と判定された語例である)		
2. 飾り込む (かざりこむ)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)多くの壁掛け時計によって飾り込まれている壁。 (2)細かい刺繡で飾り込まれた美しいハンカチ。
②	1	(3)[服装]そんなに飾りこんでどうしたの? パーティーにでも行くの?
③	3	(4)今日は特別な日なので、派手なドレスとアクセサリーで飾り込んだ。 (5)この部屋でパーティーがあるから、飾り込んである。
⑥	2	(6)部屋をいっぱいの電飾で飾りこんだ (7)クリスマスツリーをしっかりと飾りこんだ。
⑧	1	(8)あのショッピングモールのクリスマスのデコレーションは派手だね、あんなに飾り込まなくたっていいのに。
⑩	2	(9)今年は、盛大にクリスマスを祝うために、クリスマスツリーを飾り込んだ。
3. 離れ込む (はなれこむ) (全員 0 点と判定された語例である)		
4. 溢れ込む (こぼれこむ)		

回答者	容認度	例文
①	1	(1)雨漏りの水がコップから枕元へと溢れ込んだ。
③	1	(2)浴槽の水が溢れ込んだ結果、床が濡れてしまった。
5. 数え込む（かぞえこむ）		
作成者	容認度	例文
③	1	(1)計算が合っているか、何度も数え込んだ。
⑥	1	(2)彼は、帳簿上の支出と歳入の不一致に頭を悩ませながら、帳簿上の数字を何度も数えこんだ。
⑧	2	(3)そんなに一生懸命小銭を数え込んでどうしたの？(小銭を数えている人物が、小銭を落とした後に数を確認したり、非常に貧乏であるような状態が考えられる)
⑩	1	(4)彼は、盗んだ大量の札束を一心不乱に数え込む。
6. 移し込む（うつしこむ）		
作成者	容認度	例文
①	1	(1)この概念を当の領域へと移し込まなければならない。積荷をトラックへ移し込む。
③	3	(2)A の容器にはもう収まりきらないから、もっと大きい B の容器に移し込んだ方がいいと思う。 (3)このデータは重要だから、別の USB にも移し込んでおこうと思う。
④	1	(4)ポットから水筒にコーヒーを移し込む。
⑧	2	(5)彼は師匠のやり方を自身に移し込み、完成の域に達している。
⑩	2	(6)私は、液体を別の容器に保存するためにこぼさないように移し込む。
7. 導き込む（みちびきこむ）		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)川から街へ導き込まれた水流。 (2)若者を非道徳的な行為へ導き込むことは許されない。
8. 広がり込む（ひろがりこむ）(全員 0 点と判定された語例である)		

9. 通い込む (かよいこむ)		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)見ろ、一ヶ月のあいだみっちりと通い込んですっかり常連気取りだ。
②	1	(2)近所のケーキ屋さんに通いこんで全商品制覇した。
③	2	(3)ダイエットのため、近くのジムに通い込んだものの、あまり効果がなかった。
⑥	2	(4)彼は、お気に入りのアイドルに認知してもらうために、その劇場に通いこんだ。 (5)彼女は、日本語を習得するために、躍起になってその日本語教室に通いこんだ。
⑧	2	(6)彼は店に通い込み、お気に入りになろうと必死だ。
⑩	1	(7)私は、素敵な雰囲気のバーに通い込み、新しい彼女と出会った。
10. 登り込む (のぼりこむ)		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)息が少しも乱れないところを見るに、確かに昔から登り込んでいる様子だ。 (2)それじゃあ2年生、登り込み開始！
③	1	(3)その山には何度も登り込んだ。
⑧	1	(4)もうあの山には登らないのかい、あんなに登り込んでいたのに。
11. 疲れ込む (つかれこむ)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)どっと疲れ込んで、床にへなへなと倒れ込んだ。
③	2	(2)毎日論文ばかりしていて、疲れ込んでしまった。
⑥	2	(3)どっと疲れこんでしまって、その日はベッドに入るや否や、途端に眠りに落ちた。
⑦	2	(4)連日の残業で疲れ込んだ私は、週末は何もせずに休むことにした。

⑩	3	(5)私は日々の残業で、毎晩疲れ込んだ。
12. 蒸し込む（むしこむ）		
回答者	容認度	例文
③	1	(1)お肉を蒸し込みすぎて、歯ごたえがなくなってしまった。
⑤	1	(2)最近は梅雨で、空気が蒸し込んできた。
13. 言い込む（いいこむ）		
回答者	容認度	例文
③	3	(1)無理なことであると分かっていながらも、何度も何度も言い込んで、やってもらった。
⑤	2	(2)文句を言われたが、反論して言い込めてやった。
⑧	1	(3)クレームを言い込んで怒鳴ってくる人が怖い。
⑨	2	(4)騒音がうるさくて、隣人に文句を言い込みに行った。
14. 浮かび込む（うかびこむ）(全員0点と判定された語例である)		
15. 焦げ込む（こげこむ）(全員0点と判定された語例である)		
16. 語り込む（かたりこむ）		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)閉店時間まで机を挟んで語り込んだ。
②	1	(2)西田幾多郎の哲学について田中さんとすっかり語りこんでしまった。
③	2	(3)その議題に語り込んでしまい、気づけば夜の12時を回っていた。
④	3	(4)夜遅くまで、音楽について語り込む。
⑤	3	(5)彼女とは初対面だったが、気が合って夜まで語り込んでしまった。
⑥	1	(6)久しぶりに再開した彼女たちは、幼い頃の思い出を語りこむあまり、店員に話しかけられるまで、閉店時刻を過ぎていることに気づかなかった。
⑦	2	(7)久々に会った友人と、夜遅くまで昔の思い出について語り込んだ。

⑧	2	(8)授業後に語り込んでしまい、帰のがすっかり遅くなった。
17. 論じ込む (ろんじこむ)		
回答者	容認度	例文
③	1	(1)論じ込んだ結果、その人は納得してくれるようにになった。
18. 悩み込む (なやみこむ)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)かなり深刻に悩み込まれたようですね。
②	1	(2)ほら、そんな難しいこと聞くから、彼悩みこんじゃったよ。
③	3	(3)彼女はどうすればよいかわからず、悩み込んでしまった。 (4)人間関係にそんなに悩み込まなくともいいよ。
④	3	(5)仕事の課題について悩み込む。 (6)来年の受験について悩み込む。
⑤	2	(7)論文のテーマが決まらず、すっかり悩み込んでしまった。
⑥	3	(8)私は、悩みこんだ末に、次のような結論を出した。 (9)悩みこむあまり、体を壊してしまった。 (10)一度なにかに悩みこむと、他のことには一切手がつかなくなる。
⑦	2	(11)彼は仕事での失敗に悩み込んで、元気を失ってしまった。
⑧	3	(12)悩み込まずに気楽にいきましょう。 (13)彼は受験校を決められず悩み込んでいる。
⑨	1	(14)私の相談に彼女は悩み込んでしまった。
⑩	3	(15)私は、何も見えない将来について、一人で孤独に深く悩み込む。
19. 働き込む (はたらきこむ)		
回答者	容認度	例文
③	1	(1)働き込むのは、身体にも心にも良くないだろう。
⑤	1	(2)お父さんはこここのところ働き込みで、全く家に帰ってこない。
⑩	1	(3)私は、日々、家族のために、働き込む。
20. 驚き込む (おどろきこむ) (全員 0 点と判定された語例である)		

21. 湧き込む (わきこむ)		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)小さな支流へと湧き込む清流。
⑩	1	(2)私は、胸の奥底に怒りが湧き込んだが、悟られないように隠した。
22. 喜び込む (よろこびこむ) (全員 0 点と判定された語例である)		
23. 焦り込む (あせりこむ)		
回答者	容認度	例文
③	1	(1)焦り込んでも解決しないから、ゆっくり着実に進めよう。
⑥	1	(2)1週間後の締切を前に焦りこむあまり、彼は食事も風呂も忘れてしまったようだった。
⑩	1	(3)忘れていた課題の〆切が迫っていることに気づき、どのように対応すべきか焦り込み、白紙のまま慌てて提出した。
24. 感じ込む (かんじこむ)		
回答者	容認度	例文
⑤	1	(1)その映画はすごく良くて、すっかり感じ込んでしまった。
⑧	2	(2)彼はパフォーマンス後の達成感に深く感じ込んでいるようだった。
25. 冷め込む (さめこむ)		
回答者	容認度	例文
⑤	1	(1)もう冬になって冷め込んできた。
⑥	3	(2)彼と彼女の冷めこんだ関係は、ついに破局を迎えた。 (3)あの二人の関係性は、冷めこむ一方だ。
26. 疑い込む (うたがいこむ)		
回答者	容認度	例文
⑤	3	(1)祖父は悪質な Youtuber の影響で、ワクチンは害があると疑い込んでしまっている。
⑧	3	(2)彼女のことを浮気していると疑い込んでいるけど、もっと冷静になろうよ。

⑩	2	(3)私は、部下である彼のやる気と成果物のギャップに、私自身の採用に至った判断を疑い込む。
27. 書き詰める（かきつめる）		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)原稿用紙いっぱいに書き詰められた言葉たち。
②	2	(2)色紙いっぱいにメッセージが書き詰められている。 (3)紙全体に小さな文字で書き詰められている。
③	3	(4)私が思っていることを原稿用紙いっぱいに書き詰めた。
④	3	(5)紙一面に日記を書き詰める。 (6)朝から夜まで小説を書き詰める。
⑤	1	(7)論文の提出あと少し。今日のうちに書き詰めておこう。
⑥	3	(8)彼は、どっと溢れ出した思いをその手紙に書き詰めた。 (9)書斎にこもって小説を書き詰める彼の姿には、尊敬の念を抱くばかりだ。
⑧	2	(10)枠からはみ出さないように、字を小さくして書き詰めた。
⑨	3	(11)彼は引っ越し前、別れを惜しんで今までの想いを全て手紙に書き詰めた
28. 迎え詰める（むかえつめる）（全員0点と判定された語例である）		
29. 運び詰める（はこびつめる）		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)次から次へと運び詰められるせいで一向に引っ越し作業が終わらない。
③	2	(2)いらなくなつた服を整理して、段ボールに詰めた後、全てリサイクルショップに運び詰めた。
⑧	2	(3)引越しのトラックに荷物が運び詰まれているのを見て、この家を離れることを実感した。
30. 注ぎ詰める（そそぎつめる）		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)杯いっぱいに注ぎ詰められた酒をこぼさないように口へ運ぶ。

⑧	2	(2)このジュースを瓶の口ギリギリまで注ぎ詰めてください。
⑩	1	(3)私は、ドレッシング容器に詰め替え用ドレッシングをぎりぎりまで注ぎ詰める。
31. 吸い詰める (すいつめる) (全員 0 点と判定された語例である)		
32. 移し詰める (うつしつめる)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)数多くの食材をおせちの箱へ移し詰めていく。
③	2	(2)観葉植物が大きくなってきたので、新しく購入した大きな鉢に土を移し詰めて、移動させた。
⑧	3	(3)本棚の本を、段ボールいいっぱいに移し詰めた。
33. 塗り詰める(ぬりつめる)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)隅々まで漆が塗り詰められた椀。
③	3	(2)壁いいっぱいにペンキで塗り詰めた。
⑥	1	(3)ボードの端から端までを、白いインクでしっかりと塗り詰めた。
⑩	2	(4)私は、キャンパスを一色に隙間が無いように塗り詰める。
34. やり詰める (やりつめる)		
回答者	容認度	例文
②	2	(1)彼はこのゲームをやり詰めて、頂点を極めた。
③	3	(2)最後まで諦めずにやり詰めたら、できるかもしれない。
④	2	(3)失敗をした仲間をやり詰める。
⑦	2	(4)試験前に参考書を何冊も開いてやり詰めた結果、体調を崩してしまった。
⑧	1	(5)ゲームを夜更かししてやり詰めてしまい体調が悪い。
35. 走り詰める (はしりつめる)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)体力の限界を迎えるまで走り詰めた。
⑨	1	(2)彼は毎日走り詰めた結果、マラソン大会で良い順位をとった。

36. 論じ詰める (ろんじつめる)		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)納得がいくまでとことん論じ詰めようじゃないか。
④	3	(2)異なる意見の人を鋭く論じ詰める。 (3)十分に論じ詰めている文章だ。
37. 働き詰める (はたらきつめる)		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)夜まで働き詰めで休む暇がない。
②	2/3	(2)働き詰めて倒れないように、ちゃんと食べて睡眠とらなきやだめだよ。 (3)こここのところ働き詰め（はたらきづめ）で、ろくに休んでいない。
④	3	(4)朝から夜まで働き詰める。 (5)年末も働き詰めだ。
⑤	3	(6)父はこのところ働き詰めで、毎晩遅くまで会社にいる。
⑥	2	(7)働きつめるあまり、彼女は体を壊してしまった。
⑦	3	(8)彼は年末の忙しい時期に働き詰めて、体調を崩してしまった。
⑧	3	(9)この頃休みが取れず働き詰めているせいで疲れてきた。
⑨	1	(10)働き詰めの毎日
⑩	3	(11)私は、借金に追われて、日々、働き詰め、とうとう体を壊してしまった。
38. 蒸し詰める (むしつめる)		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)この人参はしっかりと蒸し詰められていたのでずいぶん柔らかくなっているようだ。
③	2	(2)野菜を蒸し詰めたら、ほくほくになった。
39. 悩み詰める (なやみつめる)		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)一人で悩み詰めるよりも誰かに相談したほうがいい。

③	2	(2)その問題は、悩み詰めても、すぐに解決できるものではない。
⑤	1	(3)論文のテーマが決まらず悩み詰めている。
⑥	2	(4)悩み詰めた結果、彼女はその仕事をやめてしまった。
⑧	1	(5)そうやってどうにもならないことをネガティブに連日悩み詰めていると、はげるよ。
⑩	1	(6)私は、彼の傍若無人な振る舞いに、どのように注意すればよいのか、悩み詰める。

40. 揉み詰める（もみつめる）（全員0点と判定された語例である）

41. 考え詰める（かんがえつめる）

回答者	容認度	例文
①	1	(1)過剰なほど考え詰めることではじめて真理へと近づくことができる。
②	2	(2)自分は何をすべきか、何ができるのか、考えて考えて、考え詰めてようやく答えにたどり着いた。
③	3	(3)考え詰めた結果、人はなぜ生きるのかという問い合わせに行き着いた。
④	2	(4)結論に至るまでに十分考え詰めた
⑤	3	(5)論文をよくするためのアイデアを考え詰めている。
⑥	1	(6)考え詰めるあまり、彼は最後まで答えを出すことができなかつた。
⑧	2	(7)この問題点について考え詰めているが、煮詰まっているからか良い解決策が浮かばない。
⑨	2	(8)将来のプランについて考え詰めたが、良い案が思いつかない。
⑩	3	(9)私は、この問い合わせひたすらに考え詰めたが、答えが出なかつた。

42. 使い詰める（つかいつめる）

回答者	容認度	例文
①	1	(1)最後まで使い詰められた歯磨き粉のチューブ。
③	3	(2)ずっと使い詰めていたが、ボロボロになってきたので、新しく買い替えないといけない。

⑤	1	(3)今月はお給料が少なくて、家計が苦しいので、食費を使い詰めている。
⑥	2	(4)私は、歯磨き粉はしっかりと最後まで使い詰めるタイプだ。
43. 投げ詰める（なげつめる）		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)あの高校のピッチャー、あんなに投げ詰めていたんじや将来に影響するよ。
44. 信じ詰める（しんじつめる）（全員0点と判定された語例である）		
45. 下り詰める（くだりつめる）（全員0点と判定された語例である）		
46. 潜り詰める（もぐりつめる）		
回答者	容認度	例文
⑧	1	(1)何日も潜り詰めていて、これは初心者にはしんどい。(水中に潜ることを仕事としているなら使えそうかも?)
47. 飾り入れる（かざりいれる）		
回答者	容認度	例文
①	1	(1)最後にオーナメントを飾り入れて、ツリーの完成だ。
③	2	(2)この部屋が華やかになるように、お花などで飾り入れたが、少しやりすぎてしまったのか、あまり好評ではなかった。
⑩	2	(3)私は、新年を迎えるために正月飾りを丁寧に飾り入れる。
48. 敷き入れる（しきいれる）		
回答者	容認度	例文
①	2	(1)ふと思い立って自室にカーペットを敷き入れた。
②	2	(2)〔電車〕▲▲駅○○線ホーム移設にあたって、新設されたホームにレールを敷き入れる作業が行われた。
③	2	(3)シーツを敷き入れてから、毛布を敷いた。
⑧	3	(4)新しいカーペットはもう部屋に敷き入れてあるのですか？
49. 貼り入れる（はりいれる）		
回答者	容認度	例文
⑥	3	(1)選挙ボードにポスターを貼り入れる。大きな模造紙に各自メモ

		を貼り入れて、論点を整理してください。
50. 塗り入れる (ぬりいれる)		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)刻銘の塗り入れの工程がまだ終わっていない。
③	2	(2)色ペンを使って隅々にまで塗り入れた結果、とてもカラフルになった。
⑦	3	(3)職人は丁寧に色を塗り入れて、作品を完成させた。
⑧	3	(4)乾燥を防ぐためにクリームを肌に塗り入れましょう。 (5)鶏肉に満遍なくクリームを塗り入れてから揚げましょう。
⑩	3	(6)私は、白いキャンバスに、まずは鮮やかな赤色を塗り入れる。
51. 折り入れる (おりいれる)		
回答者	容認度	例文
③	2	(1)この箱に紙を折り入れてください。
④	2	(2)チラシを新聞に折り入れる。
⑤	3	(3) (折り紙をするときに) ここの端を中心に折り入れてください。
⑦	1	(4)書類を封筒に入る前に、丁寧に三つ折りにして折り入れた。
⑧	2	(5)(折り紙の指示などで)この部分を先程作ったくぼみに折り入れましょう。
52. 送り入れる (おくりいれる)		
回答者	容認度	例文
③	3	(1)子どもを海外の学校に送り入れた。
⑧	2	(2)誤って違う口座に会費を送り入れてしまった。
⑩	1	(3)私は、信用できる後輩を、私が紹介した現場仕事に送り入れる。
53. 拭き入れる (ふきいれる)		
回答者	容認度	例文
⑧	1	(1)床を雑巾掛けしたが、ほこりは隅っこに拭き入れてしまった。
54. 掛け入れる (かけいれる)		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)クローゼットへコートを掛け入れる。

⑧	1	(2)ドアの隙間から上着を壁のフックに掛け入れた。 (3)振り子を壙の向こうに掛け入れてください。
55. 置き入れる (おきいれる)		
回答者	容認度	例文
①	3	(1)押入れに置き入れられ、そのまま忘れられたゲーム機。
⑧	2	(2)懐中電灯を窓から入れて、棚の上に置き入れる。

謝辞

博士論文を執筆するに当たり、多くの方々の温かいご支援とご指導を賜りました。言うまでもなく、本稿のいかなる不備や不足も、すべて筆者の責任です。

まず、主指導教員である井元秀剛教授、副指導教員の早瀬尚子教授、田村幸誠教授、副査を務めてくださった小葉哲哉准教授には、かけがえのないご指導や励ましを賜りました。大学院に入ってから、言語学の奥深さを教えていただくとともに、研究者としての姿勢や考え方を学ぶ貴重な機会をいただきました。本研究は先生方のご指導とご支援があってからこそ成り立つものであり、ここに心よりお礼申し上げます。

次に、大阪認知言語学研究会の皆様には、研究発表の機会をいただき、活発な議論を通じて多くの学びを得ることができました。さらに、由本陽子先生主催の読書会においては、複合動詞に関する理解を深める貴重な場を提供していただきましたことに感謝申し上げます。

井元ゼミでの議論では、多くの示唆をいただきました。特に、久保修三さんには研究の進め方について親身にアドバイスをいただき、精神的な支えとなっていましたことに感謝しております。また、陳紫薇さん、梶原久梨子さんには、研究に関する具体的な助言をいただき、深く感謝申し上げます。

本論文執筆にあたり、友人の周氷竹さん、孫聰雨さん、王藝璇さん、王澄鴿さん、王鈺さん、竹森ありさん、うおんじんさんをはじめとする多くの友人たちが、共に励まし合いながら力を尽くしてくださいました。特に周氷竹さんには、日本留学の7年間、楽しい時も辛い時も共に歩み、数え切れない思い出を一緒に作っていただきました。その絆は私の人生において特別なものであり、心より感謝申し上げます。博論の最後の執筆期間には、院生室で陳凱歓さん、李恒聰さんとともに学び、互いに助け合うことで研究を進めることができました。そして、日々の生活では、RKSさんから多大な支援をいただきました。いつもそばに寄り添い、美味しい料理を通じて心の安らぎと力をいただきました。彼の存在が私にとって大きな支えとなり、この研究を最後までやり遂げる力を与えてくれました。

最後に、これまで私の選ぶ道を温かく見守り、支えてくれた家族と、多くの友人たちに心からの感謝を捧げます。皆様への感謝を胸に、これから的人生を歩んでまいります。